

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

韓国人日本語学習者による句末イントネーションの  
生成と知覚

金 瑜眞

2017 年度

## 目 次

<b>第1章 序論</b> . . . . .	1
1.1 研究の背景と目的 . . . . .	1
1.2 本論文の構成と各章の概要 . . . . .	4
<b>第2章 先行研究と本研究の位置づけ</b> . . . . .	9
2.1 イントネーション研究と本研究の研究対象 . . . . .	9
2.2 日本語の句末イントネーション . . . . .	12
2.2.1 自然下降調 . . . . .	13
2.2.2 上昇調 . . . . .	14
2.2.3 上昇下降調 . . . . .	18
2.2.4 顕著な下降調 . . . . .	19
2.2.5 平らな引き伸ばし調 . . . . .	20
2.3 韓国語の句末イントネーション . . . . .	21
2.3.1 下降調と平らな音調 . . . . .	23
2.3.2 上昇調 . . . . .	24
2.3.3 上昇下降調 . . . . .	25
2.4 日本語と韓国語の句末イントネーションの対照と韓国人日本語学習者の句末イントネーション研究 . . . . .	26
2.4.1 自然下降調 . . . . .	26
2.4.2 顕著な下降調 . . . . .	26
2.4.3 平らな引き伸ばし調 . . . . .	27
2.4.4 上昇調 . . . . .	28
2.4.5 上昇下降調 . . . . .	29
2.5 句末イントネーションに対する母語話者評価 . . . . .	31
2.6 第二言語の音声習得における生成と知覚 . . . . .	34
2.7 日本語音声教育の現状 . . . . .	36
2.8 まとめと本研究の課題 . . . . .	39

<b>第3章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの生成【研究1】</b>	<b>44</b>
3.1 背景と目的	44
3.2 方法	46
3.2.1 調査協力者	46
3.2.2 発話データの収集	46
3.2.3 句末イントネーションの判定と類型の再考	50
3.3 結果	53
3.3.1 判定の一致度検定	53
3.3.2 母語の影響	54
3.3.3 日本語母語話者との相違	55
3.3.4 発話場面による影響	56
3.3.5 文法形式別の句末イントネーション出現数	58
3.3.5.1 昇降調	61
3.3.5.2 ゆすり調	62
3.3.5.3 連続的上昇調	63
3.3.5.4 段状上昇調	64
3.3.5.5 自然下降調	65
3.3.5.6 弱伸ばし下降調	66
3.3.5.7 平らな引き伸ばし調	68
3.4 考察	69
3.5 まとめ	80
<b>第4章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの知覚【研究2】</b>	<b>83</b>
4.1 背景と目的	83
4.2 方法	86
4.2.1 調査協力者	86
4.2.2 評価音声	87
4.2.3 評価刺激の作成と調査手順	88
4.3 結果	92
4.3.1 信頼性の検討	92

4.3.2 句末イントネーションの自然さに対する評価	92
4.3.3 フォローアップインタビュー	96
4.4 考察	100
4.5 まとめ	107

## 第5章 韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価【研究3】

5.1 背景と目的	112
5.2 方法	117
5.2.1 調査協力者	117
5.2.2 評価音声	117
5.2.2.1 調査1 助詞の拍数・文法形式・発話場面によるNS評価	117
5.2.2.2 調査2 持続時間とピッチの変化による評価の相違	120
5.2.3 評価刺激の作成	124
5.2.4 調査手順	125
5.3 結果	126
5.3.1 信頼性の検討	126
5.3.2 調査1 助詞の拍数・文法形式・発話場面によるNS評価	127
5.3.2.1 イントネーションの種類によるNS評価	128
5.3.2.2 助詞の拍数と文法形式によるNS評価	129
5.3.2.3 発話場面の相違によるNS評価	132
5.3.3 調査2 持続時間とピッチの変化によるNS評価	133
5.3.3.1 イントネーションの種類によるNS評価	134
5.3.3.2 持続時間の変化によるNS評価	136
5.3.3.3 ピッチの変化によるNS評価	139
5.4 考察	142
5.5 まとめ	148

## 第6章 結論

6.1 検討課題の振り返りと結果のまとめ	151
----------------------	-----

6.1.1 KLにおける句末イントネーションの生成	151
6.1.2 KLにおける句末イントネーションの知覚	154
6.1.3 KLの句末イントネーションに対するNSの評価	156
6.2 日本語教育への示唆	159
6.3 今後の課題	164
参考文献	166
各章と既発表論文および学会発表との関係	173
資料	174

## 図表一覧

### 第1章 序論

図 1-1 本論文の構成	5
--------------	---

### 第2章 先行研究と本研究の位置づけ

図 2-1 韓国語（ソウル方言）における韻律構造（Jun 2000）	10
図 2-2 郡（2003）の文末イントネーション	13
表 2-1 日本語における句末イントネーション（郡 2012 の表を筆者が修正・加筆）	13
図 2-3 X-JToBI の H%（五十嵐他 2006）	15
図 2-4 X-JToBI の LH%（五十嵐他 2006）	16
図 2-5 X-JToBI の H%の引き延ばし（五十嵐他 2006）	16
図 2-6 Jun 2000 の句末イントネーション	21
表 2-2 韓国語における句末イントネーション	23
図 2-7 X-JToBI の HL%（五十嵐他 2006）	30
図 2-8 北野（2017b）における「上昇下降調」	34
表 2-3 主要な先行研究と本研究の分類案	40

### 第3章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの生成【研究1】

表 3-1 KL10 名の性別・年齢・学習歴	46
図 3-1 場面①におけるロールカード	48
図 3-2 場面②におけるロールカード	49
図 3-3 「昇降調」	52
図 3-4 「ゆすり調」	52
図 3-5 「連続的上昇調」	52
図 3-6 「段状上昇調」	52
図 3-7 「遅れ上昇調」	52
図 3-8 「自然下降調」	52
図 3-9 「弱伸ばし下降調」	52
図 3-10 「平らな引き伸ばし調」	52

表 3-2 KL の発話時間・発話文数（日本語）	53
表 3-3 KL の発話時間・発話文数（韓国語）	53
表 3-4 NS の発話時間・発話文数（日本語）	53
表 3-5 場面①における KL の日韓両言語句末イントネーションの類型別出現数	54
表 3-6 場面②における KL の日韓両言語句末イントネーションの類型別出現数	55
表 3-7 場面①における KL・NS の句末イントネーションの類型別出現数	56
表 3-8 場面②における KL・NS の句末イントネーションの類型別出現数	56
表 3-9 日本語における KL の句末イントネーションの類型別出現数	57
表 3-10 日本語における NS の句末イントネーションの類型別出現数	57
表 3-11 韓国語における KL の句末イントネーションの類型別出現数	58
表 3-12 場面①における KL・NS の文法形式別句末イントネーションの出現数	59
表 3-13 場面②における KL・NS の文法形式別句末イントネーションの出現数	60
表 3-14 KL・NS の「昇降調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	61
表 3-15 KL・NS の「昇降調」における文法形式別の出現数(%)（場面②）	62
表 3-16 KL・NS の「ゆすり調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	63
表 3-17 KL・NS の「連続的上昇調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	64
表 3-18 KL・NS の「連続的上昇調」における文法形式別の出現数(%)（場面②）	64
表 3-19 KL・NS の「段状上昇調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	65
表 3-20 KL・NS の「段状上昇調」における文法形式別の出現数(%)（場面②）	65
表 3-21 KL・NS の「自然下降調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	66
表 3-22 KL・NS の「自然下降調」における文法形式別の出現数(%)（場面②）	66
表 3-23 KL・NS の「弱伸ばし下降調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	67
表 3-24 KL・NS の「弱伸ばし下降調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	67
表 3-25 KL・NS の「平らな引き伸ばし調」における文法形式別の出現数(%)（場面①）	68
表 3-26 KL・NS の「平らな引き伸ばし調」における文法形式別の出現数(%)（場面②）	69

#### 第 4 章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの知覚【研究 2】

図 4-1 「昇降調」	88
-------------	----

図 4-2 「ゆすり調」	88
図 4-3 「連続的上昇調」	88
図 4-4 「自然下降調」	88
図 4-5 調査協力者への教示及び調査に用いた画面	91
表 4-1 KL・NS の類型別評価平均値と標準偏差	92
表 4-2 イントネーションの下位検定における有意確率	93
表 4-3 母語の下位検定における有意確率	94
図 4-6 KL と NS の評価得点の平均値の比較	94
表 4-4 KL のイントネーションの類型別コメント例	97
表 4-5 NS のイントネーションの類型別コメント例	98

## 第 5 章 韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価【研究 3】

図 5-1 昇降調(図 4-1 再掲)	115
図 5-2 ゆすり調(図 4-2 再掲)	115
図 5-3 調査 1 における場面①の実験文	119
図 5-4 調査 1 における場面②の実験文	119
図 5-5 調査 2 の「昇降調」の持続時間を操作した合成音声(「が」の部分)	122
図 5-6 調査 2 の「昇降調」のピッチを操作した合成音声(「が」の部分)	122
図 5-7 調査 2 の「ゆすり調」の持続時間を操作した合成音声(「が」の部分)	123
図 5-8 調査 2 の「ゆすり調」のピッチを操作した合成音声(「が」の部分)	123
図 5-9 調査 2 の実験文	124
図 5-10 調査に使用した回答シートの例(調査 1 場面①)	126
表 5-1 イントネーションの類型の下位検定における有意確率	128
図 5-11 イントネーションの類型による NS の評価得点の平均値の比較	129
表 5-2 調査 1 における NS の評価得点の平均値・標準偏差	129
表 5-3 文法形式の下位検定における有意確率(場面①指導教員)	131
表 5-4 文法形式の下位検定における有意確率(場面②友人)	131
図 5-12 文法形式による NS の評価得点の平均値の比較	132
表 5-5 発話場面の下位検定における有意確率	133
図 5-13 発話場面による NS の評価得点の平均値の比較	133



表 5-6	イントネーションの類型の下位検定における有意確率	135
図 5-14	イントネーションの類型による NS の評価得点の平均値	135
表 5-7	調査 2 における NS の評価得点の平均値・標準偏差	136
表 5-8	持続時間の下位検定における有意確率	138
図 5-15	持続時間による NS の評価得点の平均値（昇降調）	139
図 5-16	持続時間による NS の評価得点の平均値（ゆすり調）	139
表 5-9	ピッチの下位検定における有意確率	141
図 5-17	ピッチによる NS の評価得点の平均値（昇降調）	142
図 5-18	ピッチによる NS の評価得点の平均値（ゆすり調）	142
図 5-19	「昇降調」の出現箇所（佐々木（原）2004:166）	143

## 第 6 章 結論

<b>【資料 1】</b>	<b>第 3 章の調査で用いた韓国語のロールカード（場面①）</b>	174
<b>【資料 2】</b>	<b>第 3 章の調査で用いた韓国語のロールカード（場面②）</b>	174
<b>【資料 3】</b>	<b>第 3 章の調査協力者別の類型別数と平均(M)および標準偏差(SD)</b>	
資料 3-1	KL 場面①日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差	175
資料 3-2	KL 場面①韓国語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差	175
資料 3-3	KL 場面②日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差	176
資料 3-4	KL 場面②韓国語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差	176
資料 3-5	NS 場面①日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差	177
資料 3-6	NS 場面②日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差	177

## 第1章 序論

第1章では、まず本論文の背景と目的を述べ、次に各章の概要および本論文の構成を述べる。

### 1.1 研究の背景と目的

イントネーションは、話者が発話意図を伝達する上で談話・文法的に重要な機能を果たす音声上の特徴である。日本語教育においても、疑問文と平叙文の区別や、文末の上昇や下降により発話意図が明確に区別される「そうですか」のような表現を中心に指導が行われてきた。さらに、「「へ」の字型」(中川 2001)や「ヤマ」(松崎 2001)などの概念を使い、文や句全体にかかるイントネーションに焦点を当てた実践研究や教材の開発も行われている。

一方で、イントネーションの誤用は、発話全体に出現するため母語話者にも気づかれやすいものの、大学(だいがく)を退学(たいがく)で発音するように意味が完全に変わってしまい、全く通じない誤りではないことから、誤用が見られても聞き返されない可能性が高い。そのため、通じたように見えても、聞き返されず何度も誤用が繰り返される場合、「発話者の能力や人格の評価にまで影を落としかねない(土岐 1989:113)」重い誤りになり得る。韓国人日本語学習者の発音においては、「句末上昇調」(大坪監修 1987)や「昇降調」(関光準 1989)が「学校へ「え↓行こうと「お↓」のよう(松崎 1999:30)」に現れ、「失礼な感じを与える」「聞いていて疲れる」(李恵蓮 2004:11)など感情的な否定的評価につながる事が報告されている。

韓国人日本語学習者の句末イントネーションの習得においては、これまで生成を中心に議論が行われてきた。先行研究では、学習者の日本語と韓国語に出現するイントネーションの類型が類似することから、目標言語における句末イントネーションの出現には母語の影響(李恵蓮 1999)が指摘されてきた。しかし、イントネーションの類型については再考の余地がある。李恵蓮(1999)は、ピッチの上下変化により、「上昇下降調」「上昇調」「長呼調<sup>1)</sup>」の3分類を行うが、日本語の韻律ラベリング方式である X-JToBI(五十嵐他 2006)や韓国語の K-ToBI(Jun 2000)では、上昇や下降だけでなく、ピッチ変化が生じるタイミングや上昇の仕方により上昇下降調や上昇調が細かく区別さ

---

<sup>1)</sup> 李恵蓮(1999)は「長呼調」について「ピッチの上下変化がなく、平らに延ばすもの(李恵蓮 1999:77)」と定義している。

れる。中間言語が母語と目標言語から影響を受けることを考慮すれば、既存の3分類は十分とは言えない。したがって、類型の再考を行った上で、学習者の母語と目標言語、さらに母語話者の日本語を対照することで、学習者の句末イントネーション生成における母語の影響の再検討が可能になると考えられる。

生成におけるもう一つの課題は、分析対象の発話データの性質が結果に影響を与えた可能性である。これまでの先行研究は読み上げ音声（李惠蓮 1999、崔泰根 2005）や発話内容を事前に暗記させた音声（北野 2015）、来日後の感想に対する自発音声（禹昭娟 2014）などの発話データを分析対象としている。しかしながら、イントネーションが発話意図を示す機能を持つことを考えると、発話意図や場面に対し特に教示を与えていない読み上げや暗記音声は、話者により捉える発話意図や場面が統一されない可能性や、棒読みになる可能性がある。ハン・オ（1999）は、韓国語の随筆の読み上げ音声とラジオの対話音声に見られた句末イントネーションの類型を対照した結果、対話音声より読み上げ音声の類型が単調であったと指摘するが、読み上げ音声は棒読みのような音声であった場合、出現する類型も限定的になりやすいと考えられる。また、自発音声であっても、話者の発話意図により出現する類型に相違が見られるのは明らかであるため、生成において幅広く特徴を捉えるには、話者の発話意図が明確に示されるような教示を与え、発話場面に差異を設けた自発音声データを分析材料として検討する必要がある。

さらに、各発話場面における句末イントネーションがどのような文法形式に出現するかを検討し、その実態を母語話者と比較することにより、学習者の句末イントネーションの生成における特徴をより幅広く捉えることが可能になると考えられる。李惠蓮（2001）は、韓国語学習者の句末イントネーションが「接続助詞に一番多く現れ（李惠蓮 2001:236）」、特に接続助詞の「て形」「から」などにおいて出現数が多いと指摘している。しかし、句末イントネーションの類型別の検討は行われていない。一方、学習者の句末イントネーションは「特定の助詞との共起は見られなかった（北野 2017a:39）」との報告もあり、研究により異なる見解が得られている。さらに、北野（2017a; 2017b）においても、「上昇したままの「上昇調」、またはいったんピッチが上昇した後に下降に転ずる「上昇下降調」（北野 2017b:22）」の2つの類型について指摘しながらも、分析においてはその「いずれかを示していること（北野 2017b:22）」とし、句末イントネーションを類型別に示していないことから、どの類型がどの文法形式に出現したかについては、十分に明らかにされていない。

一方、句末イントネーションをめぐる学習者の知覚については、まだ十分な研究が行われていない。正しく発音する能力は「自分自身の発音を聞いた時に基準どおりに発音ができているかどうか自分で聴覚的に判定できる（小河原 1997:90）」自己モニター能力が重要であるとの指摘がある。したがって、生成との関係を考慮すれば、イントネーションを聞き自然かどうか評価できる能力は、句末イントネーションの発音にも影響を及ぼす可能性がある。しかし、これまでの研究において、文末イントネーション（李宝瓊 2007、田渕 2008、福岡 2012）については、学習者が音声を聞き、実験文の発話意図を区別することが困難であることが指摘されているが、句末イントネーションに対しては、韓国人日本語教師の評価（北野 2016）に関する研究は一部あるものの、学習者の知覚について焦点を当てた研究は見られない。それは、句末より文末が、疑問や平叙のような文のモダリティーに大きく影響するためであろう。しかし、句末イントネーションが「だらしなく聞こえる」（李恵蓮 2004）などの話者の印象を左右する評価を受けることを考えると、どのような種類の句末イントネーションがどのような印象を与え、さらには日本語として許容され難い類型は何かに対し、学習者自身が各類型を聞き、正しく評価できる必要がある。本研究では、こうした句末イントネーションを聞き、評価する能力を知覚とする。したがって、句末イントネーションに対する学習者の知覚を調査することで、日本語の句末イントネーションをめぐる韓国人学習者の習得における実態を、生成と知覚の両面から明らかにすることが可能になると考えられる。

さらに、学習者の句末イントネーションを日本語母語話者がどのように評価するかについても、再検討の必要がある。李恵蓮（2002）は「上昇下降調<sup>2</sup>」について母語話者評価を求めた結果、不自然だとの評価が得られ、なお「上昇下降調」が1拍助詞の「て形」で2拍助詞の「から」より不自然だと評価されたために、拍数の相違が評価に影響したとしている。しかし、上述のように、韓国人学習者の「上昇下降調」は、ピッチ変化が生じるタイミングにより、ピッチが急激に上昇下降する「HL」と上昇のタイミングが遅れて生じた後上昇下降する「LHL」に細分化される可能性がある（金瑜眞 2013）。

「HL」と「LHL」は異なる韻律的特徴を持つことから、2つの類型は母語話者評価において相違が見られると推測される。また、「HL」と「LHL」を区別する重要な部分が上

---

<sup>2</sup> 李恵蓮（2002）は、「上昇下降調」について、「ピッチが上がってから下がる（李恵蓮 2002:48）」と指摘しているが、ピッチが生じるタイミングについては言及していない。

昇のタイミングであることを考えると、「LHL」の上昇が開始する以前の部分におけるピッチと持続時間の変化と「HL」の類型全体のピッチと持続時間の変化が評価にどのように影響するかについて明らかにする必要がある。さらに、「HL」（金瑜眞 2013）と韻律的に類似する日本語母語話者の「昇降調」は、母語話者の日本語で「て形」において出現が報告されている（佐々木（原）2004）。そのため、「て形」に「HL」が見られた際、不自然だと評価されるとは考え難い。したがって、母語話者評価については、類型、助詞の拍数、持続時間とピッチの変化からの影響と、学習者の生成に示された発話場面や文法形式などの結果を踏まえ、検討を行う必要がある。学習者の生成において示された傾向が、母語話者にどのように評価されるかを明らかにすることで、日本語音声教育において優先的に指導が必要な項目を明らかにすることが可能になると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、韓国人日本語学習者の句末イントネーションにおける学習者の生成と知覚、および韓国人学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価の実態を明らかにすることを目的とする。具体的には以下の通りである。

1. 韓国語と日本語の先行研究を参考に、韓国人学習者の句末イントネーション類型の分類を見直す。その上で、発話場面の異なる2つの自発音声データを材料に、韓国人学習者の韓国語と日本語、日本語母語話者の日本語に見られた句末イントネーションの類型の対照と、各類型の文法形式別の出現数を検討し、韓国人学習者の句末イントネーション生成の実態を明らかにする。
2. 韓国人学習者に句末イントネーションに対する評価を求めるとともに、評価基準についてフォローアップインタビューを行う。習得の目安として日本語母語話者にも同調査を行い、韓国人学習者の評価と比較することで、韓国人学習者の句末イントネーション知覚の実態を明らかにする。
3. 韓国人学習者の句末イントネーションに対する日本語母語話者の評価について、イントネーションの類型、助詞の拍数、発話場面、文法形式、ピッチと持続時間の変化の各要因の評価への影響を検討し、母語話者評価の実態を明らかにする。

## 1.2 本論文の構成と各章の概要

本論文は、以下の6つの章によって構成される（図1-1）。

### 第1章 序論

- 第 2 章 先行研究と本研究の位置づけ
- 第 3 章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの生成【研究 1】
- 第 4 章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの知覚【研究 2】
- 第 5 章 韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価【研究 3】
- 第 6 章 結論

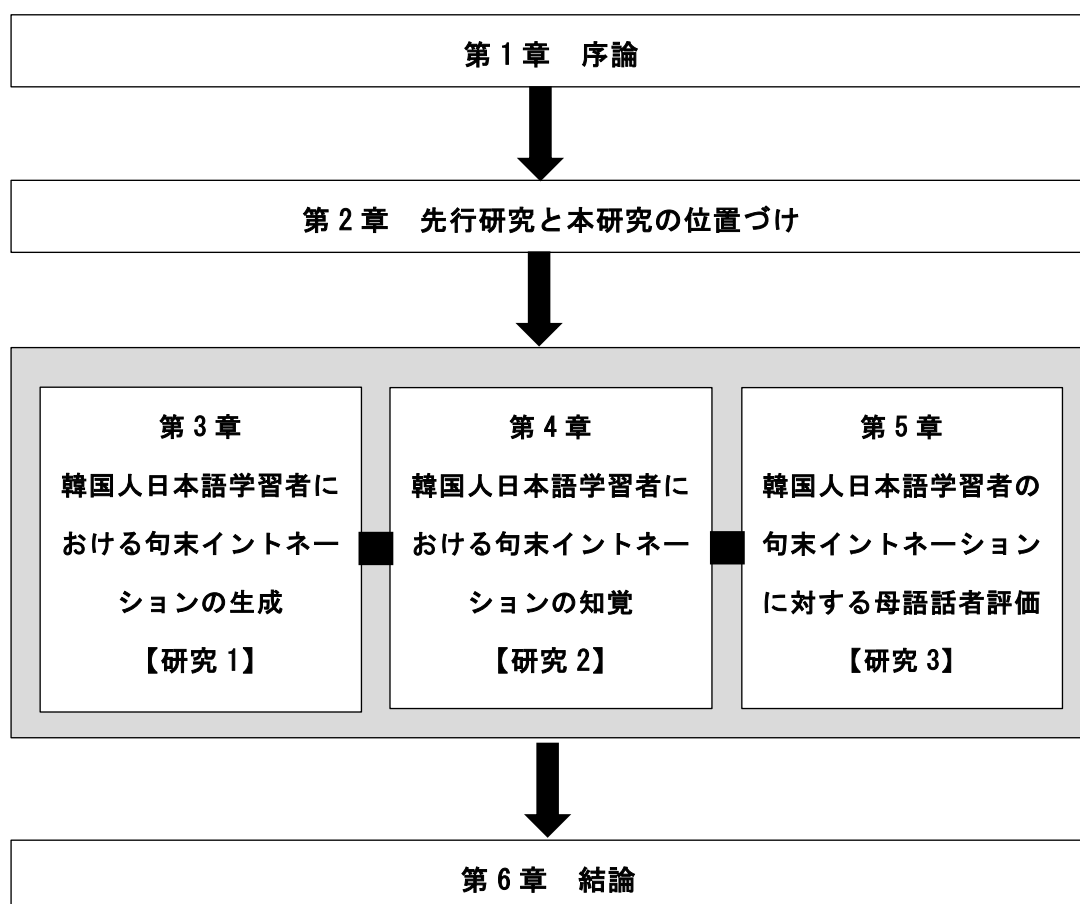


図 1-1 本論文の構成

第 1 章では、本研究の背景と目的について述べ、各章の構成を明らかにする。

第 2 章では、これまでの先行研究を概観し、韓国人学習者の句末イントネーションをめぐる課題と本研究の位置付けを述べるとともに、日本語と韓国語、韓国人学習者の日本語における先行研究を踏まえ、韓国人学習者の句末イントネーションの類型における新たな分類案を提案する。

第3章では、第2章の分類案をもとに、韓国人学習者の母語である韓国語と目標言語の日本語という2つの言語、また「友人を説得する」「上司に説明する」という2つの発話場面における発話データに見られた句末イントネーションの対照を行い、韓国人学習者の句末イントネーションの生成について、母語の影響と発話場面による影響を検討する。韓国人学習者が発話した韓国語と日本語を対照した結果、両言語間で出現数が類似した類型も見られたが、両言語間で出現数に有意な相違が見られる類型も確認された。したがって、これまで両言語間で句末イントネーションの類型がほとんど一致したために、学習者の日本語に母語の影響が見られるという先行研究とは異なる結果が示された。さらに、韓国人学習者の日本語における2つの場面の発話データを対照した結果、場面において類型別の出現数に有意な相違が確認された。さらに、韓国人学習者の句末イントネーション生成の実態をより詳細に知るため、母語話者の発話データとも比較を行った。その結果、韓国人学習者が発話した2つの発話場面の間に見られた類型の相違の傾向は、母語話者が使用する類型と相違が見られた。なお、学習者は、発話場面の相違にも関わらず、2つの発話場面において、1つの類型を多用している傾向も示された。さらに、句末イントネーションが出現した文法形式を検討した結果、学習者と母語話者の傾向に相違が示された。特に「昇降調」<sup>3</sup>において、母語話者は「けど」「し」などの接続助詞を中心に出現する傾向が見られたが、学習者は、接続助詞だけでなく、「は」「が」などのとりたて助詞や格助詞においても「昇降調」を多用していた。こうした結果から、韓国人学習者は、発話場面により出現する類型は異なるが、その傾向は母語話者とも異なっており、十分に発話場面を考慮した句末イントネーションの生成が行われておらず、出現する文法形式についても母語話者と相違が見られるという結果が示された。

第4章では、第3章で学習者の日本語に頻出した4種の句末イントネーション（「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」）に対する自然さの評価と、評価基準におけるフォローアップインタビューを通して、句末イントネーションに対する韓国人学習者の知覚について検討する。なお、韓国人学習者の知覚における特徴をより詳細に知るため、母語話者にも同調査を実施した。その結果、韓国人学習者は、「連続的上昇調」と「自然下降調」においては、母語話者の評価得点と有意差が見られず、評価傾向が類似するという結果が見られた。しかし、「昇降調」においては、日本語母語話者は自

---

<sup>3</sup> 「昇降調」はピッチが急激に上昇した後下降する類型である。その他、各類型の詳細については、3.2.3で述べる。

然だと評価しているが、学習者は母語話者より評価得点が低いという結果が示された。

「ゆすり調」については、母語話者が不自然だと評価しているが、学習者の評価得点は母語話者より高いという結果が示された。また、フォローアップインタビューに見られた句末イントネーションの自然さに対する評価基準について分析した結果、母語話者は、韻律的特徴やイントネーションが使用された発話場面を考慮して評価を行っているのに対し、韓国人学習者は、韻律的特徴とともに「韓国人らしさ」「日本人らしさ」などを評価基準とし、評価において発話場面を十分に考慮していない可能性が示唆された。

第5章では、先行研究において「上昇下降調」として1つの類型に分類された可能性のある「昇降調」「ゆすり調」に注目し、母語話者評価について調査する。まず、助詞の拍数、出現する文法形式、発話場面の改まり度により句末イントネーションに対する母語話者評価に影響を及ぼすかについて検討を行う。その結果、助詞の拍数については、李恵蓮(2002)で指摘した「て形」「から」間の評価得点の相違は「昇降調」「ゆすり調」ともに確認されなかった。したがって、拍数が母語話者評価に影響しているとは考え難いと言える。また、出現する文法形式についても「昇降調」と「ゆすり調」に共通する結果が示され、格助詞や接続助詞より名詞において句末イントネーションが出現した場合、低く評価する傾向が確認された。特に、名詞に「ゆすり調」が出現する場合は、母語話者に最も低く評価された。したがって、母語話者は「ゆすり調」を場面によらず日本語から逸脱している類型として捉えており、さらに名詞において「ゆすり調」が見られる場合は、格助詞や接続助詞より厳しく評価されることから、日本語音声教育において優先的に指導が必要な項目であると考えられる。発話場面の改まり度については、「昇降調」は発話場面により評価得点に有意な相違が示され、目上の発話相手との会話場面に比べ友人との会話場面において評価得点が高い結果が示された。しかし、「ゆすり調」については、場面の相違による評価得点の有意差があまり示されず、目上の発話相手と友人との会話場面においてともに低く評価された。次に、「昇降調」と「ゆすり調」のピッチと持続時間の変化が、母語話者評価への影響を及ぼすかに対し検討を行う。その結果、「昇降調」「ゆすり調」ともに、ピッチの変化については評価得点にほとんど影響が見られなかったが、持続時間が長くなるにつれ、評価得点が有意に低くなる傾向が示された。しかし、「昇降調」に比べ「ゆすり調」のほうが、持続時間の変化により有意差が見られた項目が多く、持続時間が長くなるにつれ、著しく評価得点が低くなることが示された。一方、持続時間が短くなるほど、「昇降調」との評価得点の差が小さくなる傾向



が示された。したがって、音声指導の際には、「ゆすり調」の上昇が開始する以前の低いピッチが続く区間において、ピッチの上下変化より、持続時間のほうに注意させ、できるだけ持続時間を短く制御することを学習者に意識させる必要があると考えられる。

第 6 章では、本研究を通して明らかになった内容を整理し、得られた知見を踏まえ、日本語音声教育への示唆と今後の課題を述べる。

## 第2章 先行研究と本研究の位置づけ

第2章では、先行研究を概観し、韓国人学習者の句末イントネーションをめぐる課題を明らかにする。2.1では、イントネーション研究におけるこれまでの議論と本研究の研究対象を述べる。2.2では、日本語の句末イントネーションについて、2.3では、韓国語の句末イントネーションにおける先行研究を概観する。2.4では、両言語の句末イントネーションにおける記述を対照し、学習者の中間言語をめぐるこれまでの議論とともに必要な分類について述べる。2.5では、韓国人学習者の句末イントネーションをめぐる母語話者評価研究を概観し、検討が必要な課題について述べる。2.6では、日本語学習者の発音習得における生成と知覚の問題について先行研究を概観する。2.7では、市販されている音声教材を中心に、日本語音声教育の現状について概観する。最後に2.8では、2章のまとめと本研究の課題を述べる。

### 2.1 イントネーション研究と本研究の研究対象

イントネーションとは、文において高低、長短、強弱における変化から話者の発話意図を示す機能を持つ言語の特徴である。中でも高低の変化に焦点が置かれることが多いが、文をベースにしている点で語を単位とした高さの変化であるアクセントとは区別される。イントネーションの記述は言語学の発展とともに変化してきたが、現在のところ最も影響力のある理論は、音の高低を示す基本周波数（F0）を元にし、「高さの動きをH（高）とL（低）の2種類の「トーン」（tone）の組み合わせで表そうとする」（郡2011:343）AM理論（Autosegmental and Metrical theory of intonation, Pierrehumbert 1980）である。AM理論に基づく韻律のラベリング方式にToBIがある。英語版のToBI（Tone and Break Indices, Silverman et al. 1992）をはじめ、韓国語版のK-ToBI（Jun 2000）と日本語版のX-JToBI（五十嵐他 2006）などがある。ToBIは、同一の理論に基づいたラベリング方式という点で、異なる言語間のToBIを比較することで言語間のイントネーションを対照することが、ある程度可能となると言える。

一方、イントネーションの研究におけるもう一つの重要な観点は出現する位置である。例えば、文末に見られるイントネーションは、ピッチの上昇や下降により、その文のモダリティを決定することから、韻律的特徴や発話機能などにより類型化が進み、多くの先行研究が行われてきた。しかし、音声学的に見れば、イントネーションが出現す

る位置は、文末の場合も文節末の場合も、イントネーション句の終端として捉えられる。日本語におけるイントネーション句の定義は「ピッチレンジのリセット（五十嵐他 2006:348）」を基準とされるが、その詳細については、本節の後半で述べることにする。

日本語教育において、学習者のイントネーション問題を取り上げる場合、用いられる「句末」とは、文末と対照的な意味での文節末、つまり、助詞などにおいて文の途中でイントネーションが見られる場合を指すことが多い。轟木・山下（2009）は、日本語教師に音声項目の指導における重要度を調査する上で、句末イントネーションの特徴として「常に語尾が上がる（轟木・山下 2009:46）」ことを例として挙げている。松崎（1999）も、韓国人学習者の句末イントネーションにおける問題として、「句末に観察される「学校へ「え↓行こう「お↓」のような「ゆすり音調」的伸ばし下げ等の問題が指摘（松崎 1999:30）」されるとし、文末ではなく、文節末に出現する特徴を挙げている。したがって、本研究の句末イントネーションにおける「句末」も、音声学的にはイントネーション句となるが、主な分析対象は、文節末に現れるイントネーションとする。しかし、厳密には、学習者のイントネーションの場合、「文を区切ったときに意味が通じる最小の単位（鈴木 2015:30）」（例:京都で／雪が／降るのは／めずらしいことでは／ありません）である文節末の区切りに対応せず「京都／で／」のように見られる可能性もある。したがって、韓国人学習者のイントネーションを分析対象とする本研究においては、「文節末イントネーション」より、音声学的な意味での「句末イントネーション」が学習者のイントネーションを取り上げる上で相応しいと考えられる。

以下、学習者の母語である韓国語と目標言語である日本語におけるイントネーション句について、先行研究を概観する。

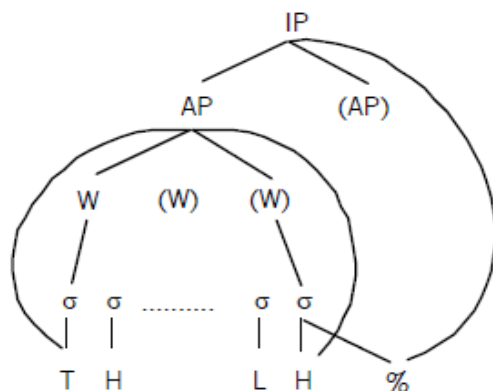


図 2-1 韓国語（ソウル方言）における韻律構造（Jun 2000）

Jun (2000) は、韓国語の韻律構造のモデル (図 2-1) を示している。図 2-1 における IP はイントネーション句 (Intonation Phrase)、AP はアクセント句 (Accentual Phrase)、W は音韻語<sup>4</sup> (Phonological word)、σ は音節 (Syllable) を示す。H (High) と L (Low) は、音の高低を示し、%は境界音調 (Boundary tone) を示す。K-ToBI における句末イントネーションは、イントネーション句の境界に生じる境界音調 (boundary tone) と言われる。韻律構造における最上位の階層がイントネーション句であり、イントネーション句は 1 つ以上のアクセント句から成る。アクセント句は、THLH という一定のパターンを持ち、1 つ以上の音韻語から成る。Jun (2000) はアクセント句頭の T は、有気音 (Aspirated) や緊張 (Tense) を伴う子音の場合、H になる可能性を持つ音節であり、それ以外は L となることを指摘している。

X-JToBI における日本語の韻律構造においても、イントネーション句は「アクセント句よりも階層的に上位の単位 (五十嵐他 2006:348)」として定義されている。したがって、アクセント句<sup>5</sup>の上位として、韓国語と日本語ともにイントネーション句の存在を認定している。しかし、X-JToBI では、イントネーション句の終端に生じるイントネーション中、上昇下降調 (HL%) や上昇調 (H%) はイントネーション句の特徴であるが、下降調「L%」はイントネーション句の下位の「アクセント句の終端に所属する」(五十嵐他 2006:348) としている。したがって、厳密には下降調「L%」を除けば、K-ToBI と X-JToBI はともに、句末イントネーションがイントネーション句の終端に出現している。しかし、下降調「L%」は、母語話者に典型的な類型であり、学習者のイントネーション習得の現状を知る上で重要な指標であることから、本稿では下降調「L%」も分析対象とする必要があると考える。

さらに、両言語のイントネーション句の判定基準は、ピッチの立て直し (五十嵐他 2006) やポーズの後続 (Jun 1993) など、微妙に定義が異なる。日本語のイントネーシ

---

<sup>4</sup> Jun (2000) の韻律構造における音韻語は「形態論的単位ではなく音韻論的単位である。2 つの形態論的な語が実際の発話では 1 つの語として発話されたり、また 1 つの形態論的な語が実際の発話では 2 つの語として発話されたりする場合があります、韻律の単位として音韻語を設定する必要がある (関 2007:25)」ことから、形態論的な語とは別に音韻論的語を設定している。

<sup>5</sup> X-JToBI は日本語のアクセント句について「アクセント句の冒頭が相対的に低いピッチ (「%L」) で始まった後すぐに上昇し (「H-」) ,アクセント核があればそこで下降し (「H\*+L」) 、最後もまた低く終わる (「L%」) (五十嵐他 2006:348)」と定義する。

ョン句は「ピッチレンジがリセットされる」(五十嵐他 2006:348)特徴があるのに対し、韓国語ではピッチレンジがリセットされてもイントネーション句として判定できないケースが報告されている (Kong 2010)。一方、韓国語のイントネーション句はポーズが後続する (Jun 1993) 特徴を持つ。本研究では、言語間の対照を行うことから、日韓両言語においてイントネーション句の条件を満たせるよう、ピッチレンジがリセットされ、さらにポーズが後続する句を分析対象とする。ポーズの認定は、X-JToBI を参照し 200ms 以上とし、言いよどみや子音の閉鎖区間などによる単語の内部の無音区間は、句の境界と見なさない。また、「ね」「さ」「よ」のような終助詞や「です」「ます」の文末形式についても、特定のイントネーションと共起しやすいため、研究対象から除外する。

## 2.2 日本語の句末イントネーション

日本語の句末イントネーションについて最も網羅的に論じているのは、郡 (2003 ; 2012) である。郡 (2003 ; 2012) は、吉沢 (1960)、宮地 (1963)、川上 (1963)、上村 (1989) などを整理し、日本語における文末イントネーションとして 5 つの型 (図 2-2) を呈示している。郡 (2003) が指摘するように、「文末に現れる音調が文節末にも用いられうる (郡 2003:124)」ため、文末イントネーションも句末イントネーションの類型として検討の対象に含める必要がある。一方、大規模コーパスデータ『日本語話し言葉コーパス』(前川 2004) に付与された韻律ラベリング方式である X-JToBI には、句末イントネーションとして 5 つの型 (L%、H%、LH%、HL%、HLH%) が認められている。

表 2-1<sup>6</sup> は、郡 (2012) の表を筆者が省略・修正し、X-JToBI、土岐・村田 (1989)、郡 (2014) の記述を追記したものである。次節からは、表 2-1 をもとに、日本語の句末イントネーションをめぐる研究においてどのような議論が行われてきたかをイントネーションの類型ごとに整理し、概観する。

---

<sup>6</sup> 上村 (1989) は、のぼり音調に 2 つの変種があるとしている。一つは、「末尾の音節をみじかくたかく発音する型」であり、「末尾音節をややながい持続を持たせて上昇的に発音する型」としている。①②の番号は筆者が付したものである。この区別は郡 (2012) の表では反映されていないが、この二つは音声的特徴を異にすることから、本稿ではそれぞれを記述した。

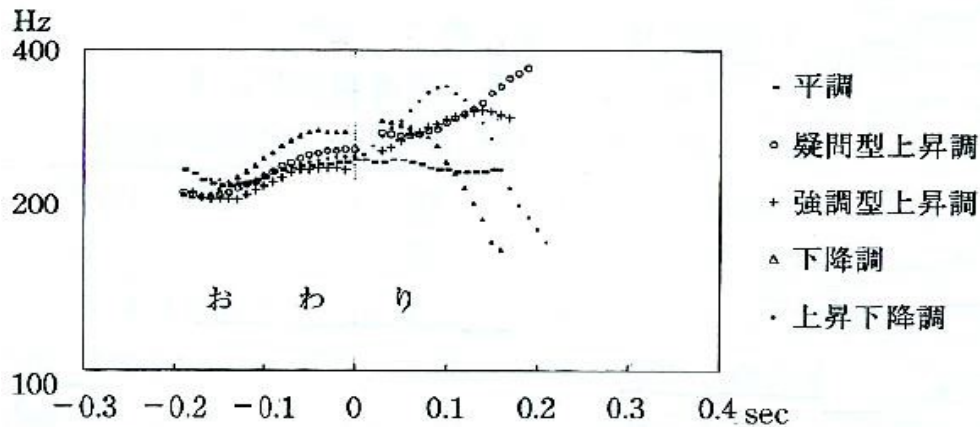


図 2-2 郡 (2003) の文末イントネーション

表 2-1 日本語における句末イントネーション (郡 2012 の表を筆者が修正・加筆)

吉沢 (1960)	宮地 (1963)	川上 (1963)	上村 (1989)	郡 (2003)	X-JToBI	土岐・村田 (1989)	
平調	(意図表現イントネーションの) 下降調		基本音調	平調	L%	長平	
						短平	
						弱平	
昇調 1	(意図表現イントネーションの) 上昇調	普通の上昇調 (↑)	のぼり音調①	疑問型 上昇調	H%	短昇	
		反問の上昇調 (↗)	のぼり音調②			LH%	長昇
		つりあげ調					
昇調 2	([文末以外も含む卓立イントネーションの] 高調)	強めの上昇調	つよめ音調	強調型 上昇調	H%		
		浮き上がり調					
		昇降調 (川上 1956)		上昇下降調	HL%		
降調			くだり音調	顕著な 下降調	L%	長降	
			ひきのばし音調	平坦調 (郡 2014)			

### 2.2.1 自然下降調

X-JToBI では、句末に H%、LH%、HL%、HLH%が「生じていなければ (すなわち下降調であれば)、アクセント句末にラベル「L%」を付与する」(五十嵐他 2006:354)

7. この方式では、自然下降調と下降幅が大きい意図的な下降調が区別されず、下降が生じれば同一のイントネーションと見なすことになるが、土岐（1998）は、アクセントのみの下降とイントネーションによる下降を比較し、イントネーションによる下降でピッチの落差が大きく実現されたとしている。また郡（2003）は、文末より文節末の下降が小さいという結果を示したが、これらは下降が著しく生じる意図的な下降調と下降幅が小さい文節末のイントネーションが区別されるべきであることを示すものと考えられる。

自然下降のみが見られるイントネーションの名称については、再考の余地がある。「平坦調」（吉沢 1960、郡 2003）という名称は下降が生じない平坦なイントネーションと区別されにくく（郡（2014）では異なる意味で「平坦調」<sup>8</sup>の名称を用いている）、「下降調」（宮地 1963）は顕著な下降を持つイントネーションとの区別が難しい。また、「基本音調」（上村 1989）や「無音調」（郡 2014）は名称だけでどのようなイントネーションか推測が難しい。したがって、本稿では、自然下降のみが見られる句末イントネーションを「自然下降調」と呼ぶこととする。

土岐・村田（1989）は、長さや強さを加えた「長平」、「短平」、「弱平」を分類しているが、別売テープの音声を確認すると、実際のイントネーションと名称の間に隔たりがある。長く平らになる「長平」（例：A:これから？ B:ええ、これから<sub>9</sub>。）は下降せず延伸するイントネーションのような名称であるが、実際の音声は延伸のない自然下降調に近い。短く平らになる「短平」（例：A:はたらく？ B:うん、はたらく<sub>9</sub>。）も話速は速いが、自然下降調である。長く平らでだんだん弱くなる「弱平」（例：A:あの一、いま、じかんは…。 B: すいません、わたしとけいは…。）は、2.2.5 で述べる「ひきのぼし音調」の一種が弱さを伴うものと考えられる。

## 2.2.2 上昇調

---

<sup>7</sup> X-JToBI は句末イントネーションのラベルとは別に、附加的なイントネーションの特徴について浮き上がり調やつり上げ調（川上 1963）、半疑問調などをプロミネンス層や注釈層で記述する。L%についても自然下降調を認めていないというより、大規模データを処理するため簡素化されたラベリング方式を採用した可能性がある。

<sup>8</sup> 郡（2014）は、平坦調を強調型上昇調の一種としたが、本稿ではその音声的特徴を重視しひきのぼし音調（上村 1989）と同一のイントネーションとして扱い、表 2-1 に示した。

<sup>9</sup> 以下、下線の部分は、イントネーションが生じた箇所を示す。

上昇調の分類は、二つのイントネーションを独立した類型として認定する説が多い（吉沢 1960、上村 1989、川上 1963、郡 2003、2014）が、最も網羅的に論じた郡（2003；2014）の説を中心に見ると、一つは「連続的にどんどん高くなる（郡 2014:89）」「疑問型上昇調」（例：ノ' ンノダ）であり、もう一つは、強めを伴うアクセントの上昇で「音を伸ばしてもそのままほぼ同じ高さを保つ（郡 2003:114）」「強調型上昇調」（例：イヤ' デ↑ス）である。「疑問型」と「強調型」は韻律的に区別が難しいとする立場もあるが（宮地 1963）、本稿は「聴覚的に判定できる（郡 2012:16）」と見なす。さらに、次末拍で「文の最後から二番目の拍において既に殆ど上昇が完了し、あとはほぼ平らなまま」（例：ソーナンデ『スネ』（川上 1963:25）の「浮き上がり調」も認められているが、郡の「強調型上昇調」と「上昇形状そのものの差ではない」（郡 2012:93）とする立場に同意し、ある程度上昇した後同じ高さを保つ点から、「強調型」の変種と考える。

一方、X-JToBI は、上昇調を 2 分し、「H%」を「単純な上昇調（五十嵐他 2006:354）」、LH%を「上昇が始まる前に一定期間低いピッチが持続されるタイプの上昇調（五十嵐他 2006:354）」と定義する。ピッチ曲線から X-JToBI と郡の対応を考えると、「H%」は連続的上昇が持続時間とともに高くなることから、郡の「疑問型上昇調」と同じと捉えられる（図 2-3、五十嵐他 2006:387）。しかし「H%」は「強調型上昇調」も含む可能性がある。句末に「H%」が生じた後引き延ばしが見られる例では、連続的上昇ではなく、ある程度上昇が生じてから一定の高さを保つピッチ曲線が確認できる（図 2-4、五十嵐他 2006:395）。さらに「LH%」では、母音の延伸とともに上昇も高くなることが確認でき、郡の「疑問型上昇調」に対応していると言える（図 2-5、五十嵐他 2006:391）。

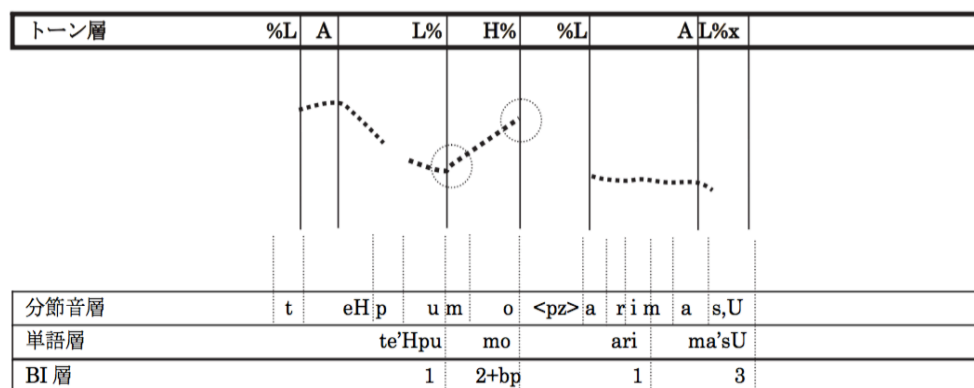


図2-3 X-JToBIのH%（五十嵐他2006）



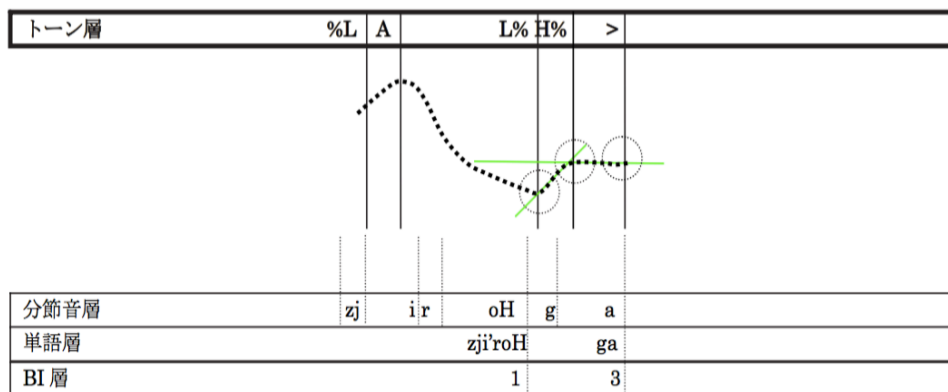


図2-4 X-JToBIのH%の引き延ばし (五十嵐他2006)

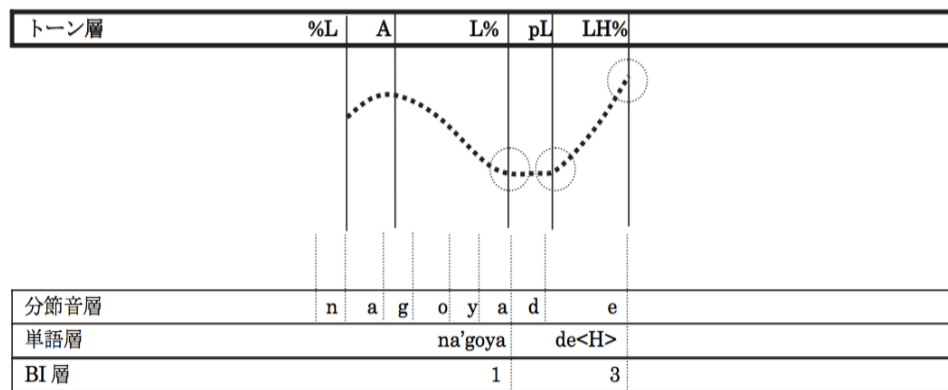


図2-5 X-JToBIのLH% (五十嵐他2006)

つまり、郡 (2003) の「疑問型上昇調」は、その上昇が生じるタイミングにより「H%」と「LH%」にさらに分けられる可能性がある。郡も「上昇開始が早い場合は末尾音節全体の高さの動きが／のような形状になり、遅い場合は\_\_／のようになる (郡 2014:89)」とタイミングの違いを指摘するが、類型の区別はしていない。本稿は、この分類が学習者の知覚や日本語母語話者の評価に影響する可能性を考慮し、「強調型」と「疑問型」の区別に加え、聴覚印象的に隔たりがある「H%」と「LH%」を区別する必要があると考える。

その他、土岐・村田 (1989) は、長さの対立に基づき、長く上昇する「長昇」(例:あります。どうぞ。そこにあるでしょう。)と短く上昇する「短昇」(例:A:いっしょにいく? B:うん、いくよ。)を認める。しかし別売テープでは、「長昇」に著しい延伸は感じられ

ず、短昇も全体的に話速が速いため短く聞こえる。「長昇」「短昇」とともに上昇にタイミングの遅れのない連続的な上昇であり、郡の「疑問型上昇調」、X-JToBIの「H%」に当たると考える。

上村(1989)も長さに注目し、のぼり音調の変種として「みじかくたかく発音する型(上村 1989:209)」と「ややながい持続を持たせて上昇的に発音する型(上村 1989:209)」を認め、前者は好意的な働きかけや親愛の情を示し、後者は疑念が控えめに表現されるという。さらに、変種のどちらかは示していないが、上昇調は「とがめたての感情をふくませながらききかえす(上村 1989:208)」表現機能があるとする。長い持続を持つ変種が疑念の表現であると考え、と「とがめたてからの聴き返し」も、持続で示されうると考えられる。

疑念の聞き返しは、川上(1963)<sup>10</sup>の「反問の上昇調」が「納得しかねて反問してくる(川上 1963:37)」ことと機能的に同一だが、川上は、「反問の上昇はかなり間延びのしたものであっても差し支えない(川上 1963:37)」と延伸が現れる場合もあり、「一段下がったところから発して上昇する(川上 1963:41)」とも指摘する。この最初の下降は、「いったんひくい調子にさげてからつぎに上昇調(上村 1989:209)」(例:いくう▽たかいい▽)が付く「くだりのぼり音調」とも類似する特徴と考える。つまり、聞き手への不信や不満の念は、最初の下降とイントネーション全体の延伸でより大きく表現されそうである。郡は、くだりのぼり音調は急下降調<sup>11</sup>と疑問型上昇調に分けられ「ひとつの音調と見る必要はない(郡 2014:94)」とするが、本稿は不信や不満の問い返しという一つの機能を担うと見なし、独立した類型として考える。郡は、同じく問い返しの機能を持つ上昇下降調と疑問型上昇調の複合イントネーションも「分けることが容易(郡 2014:94)」とするが、同一イントネーションと考えられる X-JToBIのHLH%が認められており、最初の上昇が、上村(1989)のくだりのぼり音調とは異なることから、本稿も独立した類型と捉える。

こうした親愛の情や反問を示す文末ののぼり音調は、場面や話し手聞き手の関係によ

<sup>10</sup> 川上(1963)は、上昇調の一種として「des, mas と一音節に発音し、その e や a の終りごろから急に上昇しつつ s に移る(川上 1963:26)」「つり上げ調」についても指摘しているが、女性アナウンサーに主に見られるとされ、話者が限定的なイントネーションだと判断し、本稿では扱わないことにする。

<sup>11</sup> 郡(2014)では、「顕著な下降調」(郡 2003)について、「これまで「顕著な下降調」と呼んできたが、今後は「急下降調」とし、記号↓で示す(郡 2014:92)」とし、名称を改めている。

っては「なれなれしさ、こびた態度、相手をこどもあつかいにする態度(上村 1989:209)」と捉えられ、使い方を誤ると聞き手に否定的な印象を与える。

一方、文節末での「疑問型上昇調」は「口調をやわらげる働き(川上 1963:31)」があるとされ、「大人が子供に向<sup>ママ</sup>つてお伽噺でもきかせる時(神保 1935:214)」などに用いられるとの指摘がある。これは井上(1994)が指摘している NHK ラジオのいわゆる「村岡花子調」や「先生口調・教師口調」が持つ「文節末が上がりっぱなし(井上 1994:5)」の特徴と同一と考える。一方、この村岡花子調については「文節の終わりに声がピンと高められる…中略…ここで文が切れるんではありませんよ。まだ続くんですよ(金田一 1951:50)」との指摘があるが、のぼり音調が文節末で文の不完結性の表示機能(例:大勢への演説、説明)(例:わたしがあゝいぜんにい<sup>ママ</sup>おはなしをお<sup>ママ</sup>...) (上村 1989)を有するとの指摘と同一の指摘であろう。このように、上昇調は、出現場所が文節末か文末かで聞き手に与える印象は異なり、文節末に現れる場合も口調の和らげと同時に不完結性を示す。さらに、文節末で「疑問型上昇調」の後「わずかのポーズをおいたあと文章を続ける(井上 1997:161)」使い方は、社会言語学的には「擬似疑問イントネーション」(井上 1997)などと言われ、郡(2003)は、このイントネーションが聞き手に相槌や返事を求め判断を委ねたり、断定を避けたりすることで否定的なイメージに繋がると述べている。文節末の「強調型上昇調」は、「現在よく聞かれる(郡 2003:124)」型で、疑問型のように聞き手に与える印象に関する言及は少ない。

### 2.2.3 上昇下降調

高さの変化において上昇後下降が見られるイントネーションについては、次のような指摘がある。川上は「一旦卓立させ次いでその後部を下降させる(川上 1956:7)」「昇降調」を、郡は「強調型上昇の直後に顕著な下降が続く(郡 2003:116)」「上昇下降調」を、X-JToBI は「ピッチが上昇したのち下降する(五十嵐他 2006:354)」と HL%を認定している。この点、二つのイントネーションの複合にも見えるが、本稿は「機能はその両者の複合ではないので、ひとつの音調の型と見なす(郡 2003:116)」という考え方に同意し、一つの類型として認める。最終拍のアクセントとしての高低の問題も重要な議論になっている。郡は、平板型や尾高型のような「アクセント下降がある場合には確実に使えるが、アクセント下降がない場合には使いにくい(郡 2014:98)」とした上で、この傾向を確認するため聴取実験を行っている。その結果、調査協力者からアクセント下

降のない「まもる(人名)」、「なるほど」でも上昇下降調は聞かれるとの内省が得られたが、「なるほど」の心からの納得感については、上昇量が大きめの上昇下降調の場合、肯定的判断は多くなかったとしている。これは頭高型や中高型のアクセントの語の最終拍でも上昇下降調は現れうるが、「なるほど」が持つ表現機能を、上昇下降調では十分に表現しきれないための結果と考える。

一方、上昇下降調が文節末に生じる場合、否定的評価に対する指摘が多い。川上(1956)は「東京人の耳には幾分異様にひびく音調(川上 1956:8)」(例:イントネーションモ一、ヤハリ一、コエノ一、…)とし、郡も、多用すれば「尻上がりイントネーション」となり「聞き手の注目を引きつけ、訴えかける意図(郡 2003:116)」と指摘している。「尻上がりイントネーション」は社会言語学的な用語であるが、『昇降調』の名称を併用すれば、わかりやすくなる(井上 1994:5)の記述から郡の上昇下降調と音声的に同じイントネーションと考える。表現機能について、郡は、「認識要求に加え相手から反応を引き出そうとする言い方(郡 2014:98)」であるとするが、上村は「相手へのはたらきかけ性にとぼしく、はなしの内容をはなし自身が自分で確認しながら、あるいは納得しながらはなすときにおおくあらわれる(上村 1989:216)」とし、聞き手に対する反応要求や働きかけについては見解が分かれている。

#### 2.2.4 顕著な下降調

高低差が大きく急な下降を有するイントネーションは、一つの独立した類型として認定されている。吉沢は「一層際立って下降している文末音調」(吉沢 1960:257)(例:ソナコトアリマセンヨ)として「降調」を認め、上村でも「最後の1音節の中での急速なピッチの下降(上村 1989:210)」(例:いくう、いくかあ)が見られる「くだり音調」を認定している。上村は「くだり音調」には「音声のつよさ(intensity)の減少」があるとするが、これは土岐・村田(1989)の「長降」における「文末が弱い」との指摘とも共通する。土岐・村田(1989)は「長降」を「長く降りる」イントネーションとするが、郡(2003)も「顕著な下降調」を「文末母音も延びる(郡 2003:115)」としている。つまり、このイントネーションには著しい急な下降とともに、強さの減少や母音の延伸が見られる。「顕著な下降調」における表現機能は、「聞き手に対して不満の態度・感情(吉沢 1960:257)」や「納得(郡 2014:91)」を表す。

一方、急な下降を有するイントネーションも最終拍のアクセントの高低が重要な議論

になっている。郡（2003）は「顕著な下降調」が現れるのは「アクセントが平板型か尾高型であって、文末拍がもともと高い場合のみ（郡 2003:115）」とする。しかし、松崎・河野（2010）の例では、文末詞が低く付くと独り言的な感じ（例:「い<sup>̄</sup>い<sup>̄</sup>ね<sup>↘</sup>」）になり、高く付くと働きかけが少しある感じ（例:「い<sup>̄</sup>い<sup>̄</sup>ね<sup>↘</sup>」）になる。これは、轟木（2008）が下降調の分類に順接（前接のアクセント型に従ってそのまま接続）と高調（前接の語句の最終拍が高い拍はそのまま、低い拍では高く接続）を区別したのと同様の指摘と考える。松崎・河野（2010）と轟木（2008）は終助詞の例ではあるが、それでも「い<sup>̄</sup>い<sup>̄</sup>ね<sup>↘</sup>」のように「低」からの更なる下降も可能と考えられる。さらに、郡（2014）は、下降調は頭高型や中高型には現れないため上昇下降調が現れる環境と相補分布を成すとしたが、聴取実験の結果、アクセント下降がない場合も上昇下降調が見られたとし、以下のように述べている。

上昇下降調と急下降調はアクセント下降の有無に関して相補分布をしているわけではないが、入れ替えると同じ発話意図の表現ではなくなるというような対立する関係ではないことがわかる。入れ替えることで変わるのは、呼びかけについては懸命さの程度、納得感についてはその程度である。したがってこの2音調はひとつの音韻論的音調の変種だと考えるのが妥当と思われる（郡 2014:106）

これは音韻論的解釈になるが、本稿は二つのイントネーションの違いが、母語話者の評価や学習者の知覚に影響する可能性を考慮し、それぞれを独立させて扱う。

### 2.2.5 平らな引き伸ばし調

直前の音節と音を同一の高さと強さで、引き伸ばす「ひきのばし音調」（上村 1989）（例: わたくしがあー、いぜんー…）について指摘がある。上村は、音声的・機能的に「えー」「えーと」などのフィラーと類似するとし「高年の世代におおい（上村 1989:217）」と指摘している。郡も「平坦な高さのまま、母音をやや強く、長く伸ばす」イントネーションの存在を認め、「平坦調」と名付けているが、文末に現れ、「『確実な認識の要求』という強調型上昇調の中核的な働き（郡 2014:96）」（例:いらっしゃいませ→、どうぞ→…）を行うことに注目し、強調型上昇調の一種と見ている。

一方、X-JT<sub>o</sub>BIのように、類型としては認めず、エクステンダー（>）という記号を

付与する方式もある。しかし、エクステンダーは、句末イントネーション中 L%と H% のみに付与されており、ピッチの上下変化が見られない場合の説明は困難である。強調型上昇調の一種としての見方も、文節末に「平坦調」(郡 2014) が出現する場合「確実な認識の要求」とは考えにくいいため、本稿は平らな引き伸ばし調を一つの独立したイントネーションとして認定する。

### 2.3 韓国語の句末イントネーション

韓国語の句末イントネーションを最も網羅的に論じた研究は、Jun (1993;2000) とイホヨン (1999) である。Jun は、ToBI の韓国語版である K-ToBI (Beckman and Jun 1996、Jun 2000) から句末イントネーションの 9 つの類型 (L%、H%、LH%、HL%、LHL%、HLH%、HLHL%、LHLH%、LHLHL%) を呈示している (図 2-6)<sup>12</sup>。イホヨンは、9 つの類型 (H%、M%、L%、HL%、ML%、LH%、LM%、LHL%、HLH%) を示すが、このうち「M%」、「ML%」、「LM%」は Jun (2000) には見られない。これは、Jun は H と L を基調とし「M%」は認めないが、イホヨンは「M%」を認定しているためである。

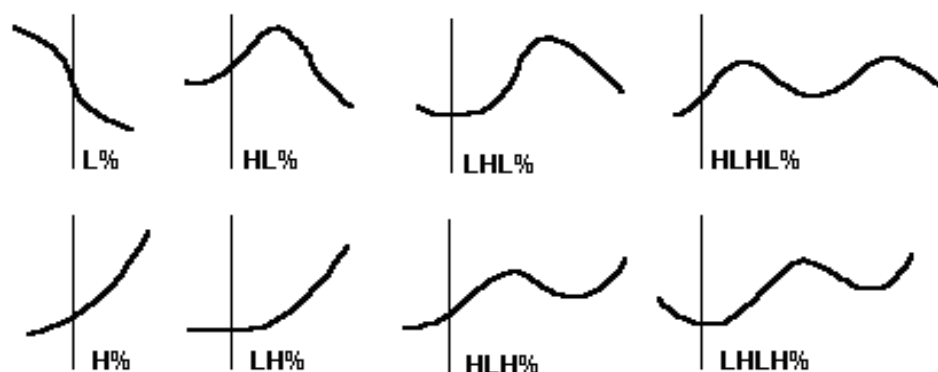


図2-6 K-ToBI の句末イントネーション(Jun 2000)

イホヨンは、「HL%と ML%、LM%と LH%、それから H%と M%と L%が機能的に対立するため…中略…H と L だけでは不十分で M をさらに設定すべき」(イホヨン

<sup>12</sup> Jun (2000) では、LHLHL%を図から省略している。

1999:36、本論筆者訳)<sup>13</sup>とする。「M%」は、チョンミョンスク(2002)、チョミンハ(2011)も認定するが、「ML%」や「LM%」は認めず、単一のイントネーションとしての「M%」を認定し、両研究ともに「M%」は先行音節と比べ上昇・下降せず平らに持続するイントネーションとしている。「M%」の認定については研究者により主張が分かれるが、本稿は学習者のイントネーションにどのように記述すべき特徴であるかを中心に概観したい。

なお、チョミンハ(2011)<sup>14</sup>は、長さを類型の分類基準として用いており、「L%」に長音化が生じた「L%:」、「M%」に長音化が生じた「M%:」、「HL%」に長音化が生じた「HL%:」を認めている。しかし、チョミンハ(2011)は、長音化を判断する物理的な基準は述べておらず、「L%」「M%」「HL%」と長音化のみがことなる「L%:」「M%:」「HL%:」を区別して判定する上で、判定基準を設定することが難しく、恣意的になる可能性が高い。このことから、本研究では、このうち「L%:」「HL%:」を議論の対象に含めない。しかし、「M%:」については、ピッチの上下変化が見られない「M%」を認めない場合、長音化が見られる「M%:」のみを1つの独立した類型として認めることができるため、議論に含めることとする。以上から、表 2-2<sup>15</sup>に Jun(2000)、イホヨン(1999)、チョンミョンスク(2002)<sup>16</sup>、チョミンハ(2011)の記述の対応を示す。次節からは表 2-2を参照しながら韓国語の句末イントネーションを整理・概観する。

---

<sup>13</sup> イホヨン(1999)、チョンミョンスク(2002)、チョミンハ(2011)等、以下に取り上げる韓国語で記述された文献における直接引用は、全て筆者が翻訳したものである。

<sup>14</sup> チョミンハ(2011)の類型における「:」は、長音化を示すものである。

<sup>15</sup> イホヨンは、Junとの対応を示している(イホヨン 1999:37 表 3)。したがって、表 2-2におけるイホヨン(1999)の分類の右( )にはその対応を記入した。

<sup>16</sup> チョンミョンスク(2002)では、K-ToBIの9つの類型と「M%」の他に、「H-L%」、「H-LH%」、「L-HL%」も認めているが、一般的な発話では見られないニュース番組における特殊の類型であるとしているため、本稿では議論の対象に含めない。

表 2-2 韓国語における句末イントネーション

K-ToBI (Jun 2000)	イホヨン (1999)	チョンミョンスク (2002)	チョミンハ (2011)
L%	Low Level (L%)	L%	L%
			L%:
H%	High Level (H%)	H%	H%
	Mid Level (M%)	M%	M%
			M%:
LH%	Full Rise (LH%)	LH%	LH%
	Low Rise (LM%)		
HL%	High Fall (HL%)	HL%	HL%
	Low Fall (ML%)		HL%:
LHL%	Rise-Fall (LHL%)		
HLH%	Fall-Rise (HLH%)	HLH%	HLH%
HLHL%		HLHL%	
LHLH%		LHLH%	
LHLHL%		LHLHL%	

### 2.3.1 下降調と平らな音調

韓国語における下降調は一つの独立した類型として認定されている。Jun は「L%」を認め、「a gently falling boundary tone (緩やかな下降調) (Jun2000:156、() は本論筆者訳)」とし、イホヨン (1999) は「Low level」を挙げ、「音響的には下降調で実現するが、下降よりは最終点の高さがより明確に認知される (イホヨン 1999:29、本論筆者訳)」とし、次末音節より低くなるとする。これらの指摘は、Jun の「L%」とイホヨン (1999) の「Low level」ともに、イントネーション内に著しい下降が生じるようなものではなく、自然下降調に近いものと考えられる。「This tone is the most common in stating facts, and in declaratives in reading (このトーンは事実の様子や読み上げで平叙文に最も一般的に見られる) (Jun 2000:156、() は本論筆者訳)」という指摘からも、平叙文の文末においてデフォルトの類型と考えられる。なお、Jun (2000) の「L%」は下降調だけでなく「a level ending (平らな文末) (Jun 2000:156、() は本論筆者訳)」イントネーションも含む。

チョンミョンスク (2002) とチョミンハ (2011) は、K-ToBI を基本とした分類を行い Jun (2000) の定義に従っているものの、平らなイントネーションは別として「M%」



を認定し「最終音節の音の高さが上昇・下降せず平行に一定時間持続する類型（チョンミョンスク 2002:181、本論筆者訳）」や「最終音節の音の高さが先行音節に比べ上昇・下降せず平らに持続する類型（チョミンハ 2011:56、本論筆者訳）」と捉えている。さらに、チョミンハ（2011）は「M%」の母音延伸が見られる「M%:」を認め、非断定性を示すとしているが、この点、「M%」は母音延伸を含まないと見ており、チョンミョンスク（2002）と違う点と考えられる。このように、韓国語の下降調は、その下降の高低差が大きい著しい下降調ではなく緩やかな自然下降調であるが、その分類方法によっては平らなイントネーションを含む場合もある。

### 2.3.2 上昇調

上昇調は複数の類型が認定されている。Jun（2000）は、「H%」、「LH%」、「HLH%」、「LHLH%」を認めるが、「LHLH%」は出現が稀なため、本稿は「H%」、「LH%」、「HLH%」を中心に議論する。Jun（2000）は「LH%」について「by comparison to H%, This is a sharper later rise（「H%」に比べ急な上昇が遅れる）（Jun 2000:149、（）は本論筆者訳）」ため、「H%」は最終音節前ですでに上昇が始まり、「LH%」は最終音節で急激に上昇が始まるとし、上昇のタイミングの違いを指摘している。イホヨン（1999）も、「High Level」と「Full Rise」を区別するが、こちらは長さで上昇の急激さに注目している。イホヨン（1999）は、「High Level」は、「Full Rise」に比べ短く実現され、基本周波数の上昇が急激に生じる（イホヨン 1999:29、本論筆者訳）」としており、ピッチの上昇が急だとしている。しかし、上昇が急激でもタイミングが遅れて生じれば、聴覚印象的に区別できるように思われる。また、「High Level」の聴覚印象において「上昇はあまり知覚されない（イホヨン 1999:29、本論筆者訳）」としており、卓立の上昇と捉えていると考えられる。

なお、イホヨン（1999）は「Mid Level」も次末音節より高く上昇調として発音されるが「High Level」に比べると低い（イホヨン 1999:29、本論筆者訳）」としている。「Low Rise」も上昇調に認定するが、「Mid Level」と同じく「Full Rise」に比べピッチの最高値が低く、上昇の傾きも緩やかであるとしている。この高さの相対的な度合いによる分類は、Jun（2000）とは異なる。さらに、Jun（2000）は「HLH%」を認め、「a falling-rising boundary tone（下降上昇調）（Jun 2000:157、（）は本論筆者訳）」とし、「HL%」と「H%」の複合イントネーションであると述べている。イホヨン（1999）は「Fall-Rise」

が「HLH%」に対応するとするが、「Fall-Rise」は「少し低くなってから音域の最も高い高さで終わる(イホヨン 2008:224)」という指摘から、下降した後上昇するのに対し、「HLH%」(Jun 2000)は、図 2-6 のピッチ曲線からして、最初の上昇が見られてから下降した後、再び上昇がみられる点で、違いがある。本稿では、Jun (2000) のピッチ曲線を優先し、「上昇下降上昇調」とする。

### 2.3.3 上昇下降調

韓国語における上昇下降調は複数の類型が認定されている。Jun (2000) は「HL%」、「LHL%」、「HLHL%」、「LHLHL%」を認めるが、「HLHL%」、「LHLHL%」は出現が稀なため、本稿では「HL%」と「LHL%」を中心に議論する。Jun (2000) は、「HL%」と「LHL%」の間には上昇のタイミングが異なるとし、「HL%」は「A falling boundary tone that rises to a peak before the last syllable, and then falls during the last syllable (最終音節の前でピークへ上昇し、最終音節内で下降する) (Jun 2000:156、() は本論筆者訳)」のに対し、「LHL%」は「unlike HL%, rises within the IP-final syllable (「HL%」とは異なり、最終音節内で上昇する) (Jun 2000:157、() は本論筆者訳)」と述べている。厳密には、Jun (2000) は「HL%」を下降調としているが、図 2-6 (p.18) の「HL%」のモデルでも確認出来るように、最終音節内で上昇が全く見られない訳ではなく次末音節から上昇が始まっており、最終音節内でも上昇が続いている。このため、本稿は上昇下降調として扱う。

一方、イホヨン (1999) は、「High Fall」と「Rise-Fall」を認め、最初の部分における下降を区別の手がかりとしている。「Rise-Fall」は「少し下降した後上昇する特徴を持っている。こうした始めの部分における基本周波数の減少傾向は「High Fall」には見られない(イホヨン 1999:31、本論筆者訳)」とするが、最初の上昇は持続時間が短く上昇幅もわずかであるため、音声的・音韻的区別に意味のある特徴とは考えにくい。

最初の上昇が見られないとしても、Jun (2000) の指摘通り上昇のタイミングが遅れば異なるイントネーションとして知覚されそうである。また、「High Fall は Rise-Fall より短く実現され、基本周波数の下降が急激に生じる(イホヨン 1999:31、本論筆者訳)」と述べ、長さや下降の急激さでも区別している。さらに、イホヨン(1999)は「Low Fall」も認め、「High Fall に比べずっと低い基本周波数で始まりずっと低い基本周波数で終わり、基本周波数の下降の傾きも緩やかである(イホヨン 1999:30、本論筆者訳)」とす

るが、「Low Fall」は Jun (2000) では認定されない。

## 2.4 日本語と韓国語の句末イントネーションの対照と韓国人日本語学習者の句末イントネーション研究

### 2.4.1 自然下降調

日本語において自然下降調は一つの類型として確立されている。一方、韓国語でも緩やかな下降調が認められ、自然下降調に近いイントネーションであると考えられるため、両言語の違いはほとんどないとする。文中に見られる自然下降調の機能については、日本語において「話し手がある事柄を「普通の」態度、特に表情をつけずに表明するときの音調であり、neutral、unmarked であること (佐々木 (原) 2004:156)」とされており、韓国語でも「公式的な言い方 (放送ニュース朗読、講演、大衆演説等) で主に使用 (イホヨン 2008:244、本論筆者訳)」されるとの指摘から、特定の機能を持つよりもニュートラルな発話において使われる可能性が高い。したがって、自然下降調は、韻律的特徴だけでなく、技能的にも両言語間で類似していると言える。

学習者の中間言語では、K-ToBI の「L%」を類型分類に採用した禹昭娟 (2014) に指摘があるのみで、他ではあまり検討されていない。その理由は「end focus」(李惠蓮 1999)、「韓国語的イントネーション」(崔泰根 2005)、「特徴的な句末の伸ばし下げイントネーション」(金瑜眞 2013) など、聴覚印象において際立つイントネーションに焦点が置かれ、著しい上昇や下降、延伸などを含む類型を中心に議論が行われてきたためであろう。しかし、今後は、上昇下降調や上昇調のような際立つ聴覚印象を持つ類型が句末イントネーション全体の中でどの程度の割合で見られるかを確認し、学習者の生成と知覚における習得状況の調査に役立てるためにも、自然下降調を学習者の類型として含めることが望ましい。また、学習者の知覚と母語話者評価の面で考えると、自然下降調は日本語・韓国語で類似する類型であり、日本語母語話者の発話において典型的なイントネーションでもあるため、学習者の音声に現れても厳しく評価されるものではないと考える。

### 2.4.2 顕著な下降調

日本語に見られる「顕著な下降調」(郡 2003) は、これまで中間言語研究では取り上げられなかったが、著しい下降とともに音圧も弱くなるため、母語話者から押しが強いなどの評価をされる可能性は低い。一方、韓国語にはこの類型について指摘が見られな

いため、学習初期より学習者がある程度日本語のイントネーションを習得してから出現する可能性もある。

しかし、この類型が文節末に出現する状況を考えれば、「聞き手に対して不満の態度・感情」(吉沢 1960:257)や「納得」(郡 2014:91)の発話意図を持つとは考えにくい。むしろ、急激な下降はあまり見られず、長く平らでだんだん弱くなる「弱平」(土岐・村田 1989)に類似しており、付随して下降が見られるような類型の場合、目標言語の発話に対する学習者の自信の欠如などから出現する可能性があると考えられる。この点から、まず「顕著な下降調」を学習者の類型として含めた上で、発話データの調査を通して生成の面から、イントネーションの韻律的特徴について検討することが必要であると考えられる。

#### 2.4.3 平らな引き伸ばし調

ピッチの変化がなく、平らで、延伸を含むイントネーションは、日本語では「ひきのばし音調」(上村 1989)、「平坦調」(郡 2014)、韓国語では「M%」が長音化した「M%:」(チョミンハ 2011)がある。文中に見られる場合の機能としては、日本語でフィラーに出現することが多いことから、「言い淀み」から立ち直るまでの時間を稼ぐにしろ、次に言うべき言葉を捜すにしろ、発話を継続するための努力を(頭の中で)していることを聞き手に示(佐々木(原) 2004:169)」することが報告されている。韓国語でも「M%:」が話者が「伝えようとする内容に対する戸惑い(チョミンハ 2008:111、本論筆者訳)を示すとされており、両言語ともに、話者が次の発話までの準備に時間がかかっていることを、平らで延伸を含むこの類型を使用し示していると言える。

中間言語研究でも「長呼調」(李惠蓮 1999;2002)、「平板調」(崔泰根 2005)、「M」(金瑜眞 2013)など、すでに指摘がある。一方、このイントネーションの名称は再考の必要がある。「ひきのばし音調」や「長呼調」ではピッチの変化がほとんどないことが認識されにくく、「平坦調」(郡 2014)、「平板調」(崔泰根 2005)、「M」(金瑜眞 2013)では、母音延伸の特徴が認識されにくい。本稿は二つの特徴を取り上げ「平らな引き伸ばし調」としたい。学習者の知覚や母語話者評価の面で考えると、「平らな引き伸ばし調」は、日本語と韓国語で同様に現れ、母音の延伸は際立つ特徴ではあるもののピッチ変化はほとんどない。このため、多用しなければ低い評価は受けないと推察される。実際、「長呼調」(李惠蓮 1999;2002)における母語話者評価を検討した李惠蓮(2002)で

も、「長呼調」が「上昇調」や「上昇下降調」に比べそれほど不自然とは評価されなかったという結果が示されている。

#### 2.4.4 上昇調

上昇調は、両言語で分類に相違がある。日本語では大別して二つの分類があり、連続的上昇をする「疑問型上昇調」(郡 2003)と、強めを伴った上昇後その後同じ高さを維持する「強調型上昇調」(郡 2003)が認められる。さらに「疑問型上昇調」は、上昇の前に一定のピッチが持続するか否かにより、「H%」と「LH%」に区別される可能性がある。一方、韓国語では、上昇のタイミングのずれにより「H%」と「LH%」に区別され、他に上昇の急激さや度合いも分類基準となっている。両言語で共通するラベリング方式である ToBI の「H%」と「LH%」については、一定のピッチが持続した後の上昇は、上昇のタイミングが遅れるとの記述と同質のものと考えられる。「強調型上昇調」は、韓国語で上昇後一定のピッチの持続や強めの伴うという特徴については指摘がないが、上昇の度合いが高くない点ではイホヨン(1999)の「Mid Level」と類似する可能性がある。

一方、文中に現れる際の機能面について、日本語の「疑問型上昇調」は「断定を下げ、聞き手に判断を委ねる(郡 2003:126)」とともに、「文の不完結性の表示機能」(上村 1989)を持つとの指摘がある。したがって、日本語においてこの類型は、発話の内容に対し自信が無いという話者の態度や発話がまだ終わってないことを示す。一方、韓国語では、継起の「て形」の意味を持つ「-ko」(고)に「H%」が出現しやすく、「H% not only signals continuity but hierarchical relationship between the intention underlying the current utterance and the subsequent one (H%は単に継続を示すだけでなく、現在の発話のもとにある目的と後続の発話の間の階層的な関係を示す)(Park 2003:130、()は本論筆者訳)」との指摘がある(Park2003)。したがって、発話の継続を示すという点で両言語の機能は類似していると言える。しかし、日本語の「疑問型上昇調」は「子供に向<sup>ママ</sup>つてお伽噺(新保 1935:214)」、「先生口調」(井上 1994:8)のように、類型を使用する話者や場面が限定的である可能性も残る。他方、日本語のもう一つの上昇調である「強調型上昇調」も同様に、「非完結性を示し、文が続くことを聞き手に知らせ(佐々木(原) 2004:161)」るが、その出現場面においては、改まり度が高い場面において出現する可能性がある。佐々木(原)(2004)は、「いわゆる「尻上がり」イントネーション

(昇降調)がフォーマルな場面での使用を制限され、これを避けたいという心理が働いたため、その代替形式として強調を使用したという事情がある(佐々木(原)2004:161)」と述べている。佐々木(原)(2004)は「強調」が「つよめ音調」(上村1989)に対応するとしていることから、「強調型上昇調」(郡2003)とも同じ類型だと言える。以上から、日本語と韓国語ともに発話が継続することを示す際、上昇調類の類型を用いる可能性が高いが、日本語においては出現に発話場面の改まり度が関与している可能性がある。

学習者の中間言語においては、「上昇調」(李恵蓮1999、崔泰根2005)、「H%」(金瑜眞2013;2014、禹昭娟2014)、「LH%」(金瑜眞2014、禹昭娟2014)が認められ、K-ToBIの分類を採用した禹昭娟と金瑜眞は「H%」と「LH%」を区別している。学習者の知覚と母語話者評価の面から考えると、上昇調は「H%」「LH%」など概ね日本語・韓国語で共通し、上昇調が学習者の音声に出現しても、韻律的特徴から低い評価を受けるとは考え難い。イホヨン(1999)における「High Level」より上昇幅の小さい「Mid Level」が転移するにしてもピッチ幅が小さいことから、厳しく評価されないと考える。

それより、イントネーションが持つ表現機能を適切に運用できるかが課題となる。使用場面や相手を誤ると、「馴れ馴れしい」や「子ども扱い」など、感情的に誤解を招くマイナス評価を受けたり、擬似疑問イントネーションに捉えられ自信が無いように思われたりする恐れがある。同じく、両言語で共通する「HLH%」も、音声的な要因より、疑念の問い返しという表現機能から適切な運用が課題となりうる。「HLH%」は、他の類型に比べ頻出しないため、これまでの中間言語研究では取り上げられてこなかったが、「LH%」と機能的に類似するため、今後検討する必要がある。しかし、一方で、「LH%」や「HLH%」は文末でも疑念など特定の発話意図を持って出現する分、句末において頻出する型ではないと考えられる。「H%」と区別する必要があるが、学習者の音声においてどのくらい出現するかは、学習者の発話データからさらに検討が必要であると考えられる。

#### 2.4.5 上昇下降調

上昇下降調は、日本語・韓国語で分類基準の相違が見られる。日本語の上昇下降調は一つの類型として認められるが、X-JToBIの「HL%」のピッチ曲線(図2-7、五十嵐他2006:369)を確認すると、K-ToBIの「HL%」と同一の類型であると考えられる。韓国語の上昇下降調は「HL%」と「LHL%」に分類されることが確認出来たが、上昇のタイ

ミングのずれにより区別され、上昇の急激さや度合いも分類基準となっている。

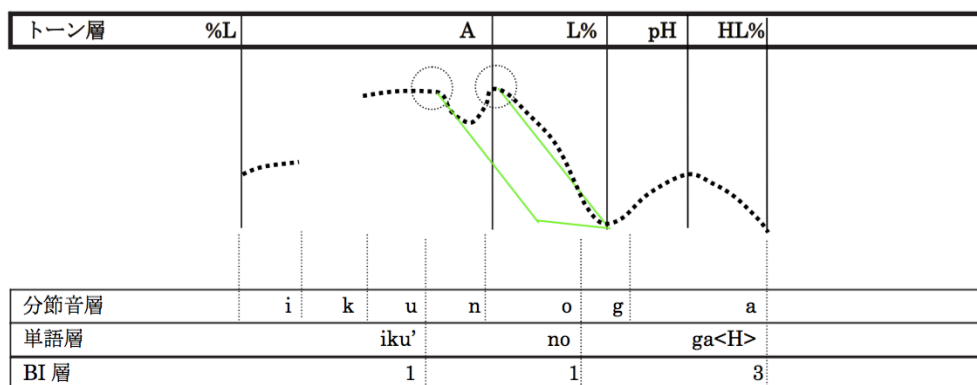


図2-7 X-JToBIのHL% (五十嵐他 2006)

一方、文中に現れる際の機能面について、日本語の「HL%」は「間投助詞の「ねえ、さあ、よお」のように、構文上の大きな切れ目を表示することで非完結性を示し、話順を保持する(佐々木(原)2004:165)」機能を持つことが指摘されている。韓国語においてもHL%は「signal continuation of the turn by the current speaker (現在の話者のターンが継続することを示す)(Park2003:215、()は本論筆者訳)」機能を持つことが指摘されており、話者がターンを保持するための手段として両言語でともに「HL%」が使用されると言える。しかし、日本語で「HL%」は、「軽薄」「甘えた」「幼い」(井上1997)などの印象を与え、発話場面の改まり度を考慮せず多用する場合、非難を受ける可能性があるが、韓国語では「HL%」の使用において場面の改まり度に関する指摘は管見の限り見られない。一方、韓国語の「LHL%」は、「the use of LHL% is based largely on the degree of intimacy speakers feel toward each other (LHL%の使用は話者間でお互いに親密さを感じている程度に大きく起因される)(Park2003:250、()は本論筆者訳)」とされ、「a special emphasis to the main points of the story (話の重要なポイントを特に強調)(Park2003:272、()は本論筆者訳)」する機能を持つことが指摘されている。日本語の「HL%」についても、「相手に念を押す感じ(井上1994:11)」であることが報告されていることを考えると、親密な話者間のインフォーマルな会話において念を押しながら自分の発話を強調する場合、日本語では「HL%」が、韓国語では「LHL%」が使用されると言える。

中間言語研究においては、「上昇下降調」(李惠蓮 1999)<sup>17</sup>、「昇降調」(崔泰根 2005)では「HL%」と「LHL%」を区別していないが、K-ToBI を参考にした金瑜眞(2013;2014)や禹昭娟(2014)<sup>18</sup>では区別される。上昇のタイミングが遅れる「LHL%」は母語転移により生じる可能性が高いが、母語話者評価の面から考えると、日本語に現れず日本語らしくないため、低く評価されると考えられる。一方、「HL%」は母語話者にも見られるイントネーションであり日本語らしいと思われるため、否定的な評価を受ける可能性は低い。「High Fall」(イホヨン 1999)より下降が小さい「Low Fall」(イホヨン 1999)が現れるとしても、ピッチ幅が小さいことから、低く評価されないと考えられる。ただし、「HL%」は本来、日本語母語話者が使用する場合も「甘え」「幼さ」(井上 1994)と結びつくとの指摘から、イントネーションそのものが与える不自然さはないが、発話者が意図しない印象を与えてしまう可能性がある。

## 2.5 句末イントネーションに対する母語話者評価

韓国人日本語学習者の句末イントネーションをめぐっては、これまで誤用であるとの見方が強かったことから、日本語教師による母語話者評価を中心として母語話者評価研究が行われてきた。

李惠蓮(2002;2004)は、日本語教育経験を持つ日本語教育を専門とする日本語母語話者の大学院生を対象に、韓国人日本語学習者1名の自発音声(自己紹介)を聞かせ、単音、特殊拍、アクセント、プロミネンス、ポーズなどとともに、句末イントネーションに対し4段階評価(直す必要がある1-直す必要がない4)を求めている。その結果、単音や特殊拍などに比べ、句末イントネーションに対する評価得点が最も低く(母語話者15名の平均値1.6点)、フォローアップインタビューからも、句末イントネーションに関する指摘が最も多かったと報告している。さらに、「句末の上がり方が変である。

(1拍の助詞の中での上がり下がりはとても変である:「から」・「ので」のような2拍の助詞より「て」のような1拍の助詞の方が不自然に聞こえる)(李惠蓮 2002:104)」「上手だけれど、句末の尻上がりイントネーションで聞いてつかれる(李惠蓮 2002:105)」

---

<sup>17</sup> 李惠蓮(1999)の上昇下降調については、上昇後下降するとのみ指摘されており、イントネーションの実態がHL%に近いものであるか、LHL%に近いものであるかは現時点では把握出来ない。

<sup>18</sup> 禹昭娟(2014)と金瑜眞(2014)では、K-ToBIにしたがった分類を行っており、イントネーションの定義は述べていない。



「語尾のゆすりが多い。(授業中の質問応答の場面で使うとムツとくる) 学会などの場面では、落ち着いていない印象を与える (李惠蓮 2002:105)」などのコメントが見られたことから、韓国人学習者の句末イントネーションが「聞き手に対し感情的に悪い印象を与え (李惠蓮 2002:105)」るとし、「場面による許容度の差異が窺われる (李惠蓮 2002:105)」と述べている。しかし、李惠蓮 (2002) は句末イントネーションについて3つの類型(「上昇下降調」「上昇調」「長呼調」)の存在を指摘しながらも、上記のような母語話者の印象や場面による評価の相違と句末イントネーションの類型との関係については検討していない。音声教育における具体的な示唆を得るためには、類型の相違を考慮した母語話者評価について追試を行う必要があると考えられる。

さらに、李惠蓮 (2002) はフォローアップインタビューから、「助詞の拍による評価の差異があるという指摘 (李惠蓮 2002:116)」を受け、1拍助詞の「て形」と2拍助詞の「から」を含めた「仕事があつて、遅れました」「仕事があつたから、遅れました」の2文を実験文とし、「て形」「から」に句末イントネーションが見られた音声に対する母語話者に6段階評定を求めている(不自然1-自然6)。その結果、「ピッチが上がってから下がる (李惠蓮 2002:48)」「上昇下降調」において、「て形」(母語話者60名の平均値1.83点)の評価得点に比べ「から」(母語話者60名の平均値4.23点)の評価得点が高いという結果が見られたことを報告している。

しかし、日本語母語話者の「昇降調」の出現箇所について指摘した佐々木(原)(2004)によると、「接続助詞、用言の連用形(特に「て形」に多く見られる)(佐々木(原)2004:166)」とされている。佐々木(原)(2004)は「昇降調」の韻律的特徴について、郡(1997)も「文末イントネーションの一つとして「上昇下降調(強調上昇+下降調)」を挙げている(佐々木(原)2004:124)」とし、「昇降調」を郡(1997)の「上昇下降調」に対応するものとして指摘している。郡(1997;2003)の「上昇下降調」は、X-JToBI(五十嵐他2006)においては、HL%に対応する類型であると言えることから、したがって、HL%が「て形」において出現することが、日本語母語話者に不自然なものとして評価される可能性は低いと言える。K-JToBI(Jun2000)や金瑜眞(2013;2014)や禹昭娟(2014)において上昇が生じるタイミングによりHL%とLHL%を区別していることを考慮すれば、李惠蓮(2002)の「上昇下降調」がHL%だけでなく、ピッチの上昇が生じるLHL%(Jun2000)を含んでいる可能性もある。この場合、助詞の拍数の問題よりも、日本語のイントネーション体系には見られないLHL%が「て形」において見られたことから母

話話者に不自然だと評価された可能性があると考えられる。したがって、HL%とLHL%の類型が持つ韻律的特徴の相違とイントネーションが出現する「て形」や「から」などにおける文法形式との関係が母語話者評価にどのように見られるかについて、再検討が必要であると考えられる。

一方、句末イントネーションにおけるピッチと持続時間の変化についても検討を行う余地がある。北野（2016）は、韓国人学習者の句末イントネーションに対し、日本語母語話者の日本語教師5名に評価を依頼し、「教師としての観点から矯正指導をすべきだと考える部分（北野 2016:8）」に対し指摘するよう求めている。その結果、矯正指導をすべきだと評価された例について、ピッチの上昇率と引き延ばし持続時間の間に相関関係が見られたことから、「ピッチの上昇率が高くても引き延ばし持続時間が短い場合や、反対に引き延ばし持続時間が長くてもピッチの上昇率が低ければ、語尾上げ現象と判定されにくいということが明らかになった（北野 2016:15）」としている。この指摘は、イントネーションにおけるピッチの上昇と持続時間の延伸がともに生じた場合、母語話者に厳しく評価される可能性があるという韻律的特徴を示したという点で、重要な指摘であると考えられる。

しかし、北野（2016;2017b）では、分析対象について「上昇したままの「上昇調」、またはいったんピッチが上昇した後に下降に転ずる「上昇下降調」のいずれかを示していること（北野 2017b:22）」としており、結果を類型ごとに整理することが困難であると考えられる。また、北野（2017b）で示している「上昇下降調」のピッチ曲線（図2-8）を見ると、X-JToBI（五十嵐他 2006）とK-ToBI（Jun 2000）のHL%に対応する類型であると考えられる。したがって、日本語のイントネーション類型の体系に含まれていないため、母語話者に厳しく評価される可能性が高いLHL%（Jun 2000）におけるピッチと持続時間の変化が母語話者評価にどのように現れるかについても、HL%に対する評価とともに、検討を行う必要があると考えられる。特に、LHL%については、上昇が生じる前の低いピッチが持続する部分があり、上昇が遅れて生じるという点がHL%との相違点であることを考慮すれば、ピッチが持続する部分のピッチの高さや持続時間の長さが評価にどのように影響を与えるかに焦点を当てた母語話者評価調査が求められると考えられる。

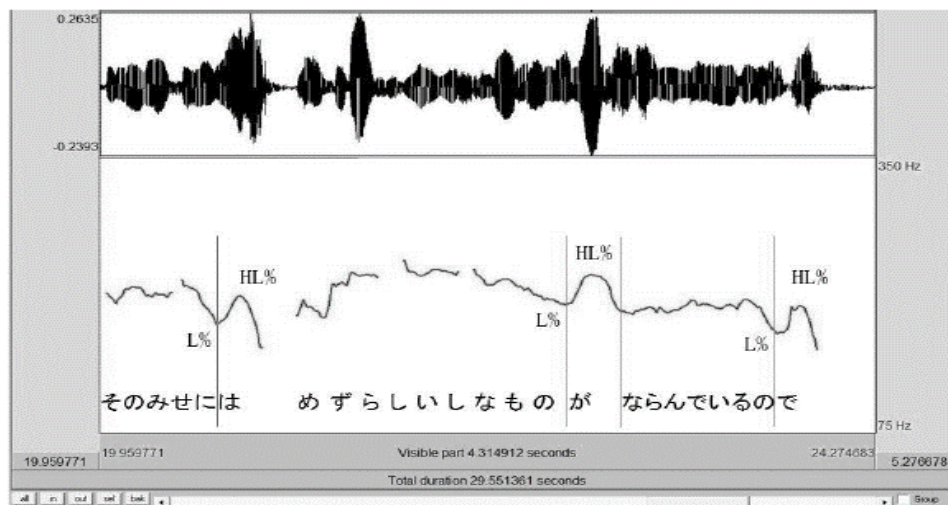


図2-8 北野（2017b）における「上昇下降調」

## 2.6 第二言語の音声習得における生成と知覚

第二言語における音声の習得については、モデル発音や他人の発音、または学習者自身の発音をどのように聞き取るのかに対する「知覚」の問題と、学習者がどのような発音をするのかに対する「生成」の問題が重要な議論の対象とされてきた。

イントネーションにおいては、イントネーションの機能が発話意図を示すことと密接に関係することから、個々の発話意図を正確に知覚・生成することができるかについての議論が中心とされてきた。特に、これまでのイントネーションをめぐる知覚の研究は、イントネーションにより発話意図が明確に区別される文を調査対象とした研究が多く行われてきた（「まゆみが？」「メモが？」李宝瓊 2007、「合わないの」甲斐・田淵 2003、「そうですか」李範錫 2009）。また、統語的あいまい文を用いた調査（「奈良で倒れた幼児を運んだ」ミングァンジュン 2004、「宏が心配して話している弟を見つめました」江田他 2009）や、フォーカス発話と中立発話における学習者音声の実現を調査した研究（宇都木 2004<sup>19</sup>）など、文の構造や焦点とイントネーションの関係に着目した学習者の

<sup>19</sup> 以下は、宇都木（2004:98）における、中立発話、前部フォーカス（あまい）、後部フォーカス（料理）の発話調査に用いた実験文である（下線は宇都木による）。

A: それは何ですか？

B: あまい料理です。

A: え、どんな料理ですか？/あまい何ですか？

B: あまい料理です。

音声の実態について検討が行われてきた。しかし、句末イントネーションについては、「疑問」や「平叙」のように明確な発話意図により区別されず、統語的あいまい文のように統語的に別の意味を持つとは言えないことから、句末イントネーションをめぐる学習者の知覚を調査した研究はほとんどなされていない。一方、北野（2016）は、韓国語学習者の句末イントネーションについて、韓国語教師に「矯正指導をすべきだと考える部分（北野 2016:8）」に対し指摘するよう求めている。その結果、日本人教師より韓国語教師のほうが指導が必要だと指摘した部分が多かったことから、韓国語教師に比べ日本人教師のほうが「語尾上げ現象の判定基準が緩いか、あるいは知覚していてもこの程度であれば矯正の必要なしと判断している傾向がうかがわれる（北野 2016:11）」としている。韓国語教師は上級韓国語学習者として捉えることができるのであれば、習得が進んだ場合、韓国語学習者でも句末イントネーションに対し日本語として不自然であるものとして知覚できる能力を習得する可能性があり、さらには日本人が自然だと評価するものまで過剰に不自然だと捉える可能性がある。しかし、北野（2016）における句末イントネーションは「上昇下降調」と「上昇調」を区別していないことから、学習者が各類型に対し十分に知覚できているか、類型の相違に焦点を当て、学習者の知覚について検討を行う必要があると考えられる。

一方、学習者の音声習得においては、自分の発音に対し自己モニターを行っている学習者は発音能力が高い（小河原 1997、スィリポンパイブーン 2008）という報告がある。小河原（1997）は、単音（ごーじゃ、ぞーじょ、つーちゅ）・アクセント（平板型—頭高型、中高型—平板型）・イントネーション（そうですね、そうですか：短い上昇、長く伸ばした上昇及び下降）・プロミネンス（明日 試験なんです。 なぜ で 休んだんです）について「同定」<sup>20</sup>「再認」<sup>21</sup>「モデル—自己同定」<sup>22</sup>「自己再認」を求めた結果、「自分自身の発音が意図したとおりの音声として実現されているかどうか認識する能力（小河原 1997:84）である「自己再認」と「発音」の間に、発音が良い上位群の被験者において、有意な相関が見られたとしている。スィリポンパイブーン（2008）もアクセントの

---

<sup>20</sup> 「同定」について、「教師の繰り返すモデル発音と同じかどうか判定する能力（小河原 1997:84）」としている。

<sup>21</sup> 「再認」について、「教師の繰り返すモデル発音は何を発音しているのか認識する能力（小河原 1997:84）」としている。

<sup>22</sup> 「モデル—自己同定」について「教師の繰り返すモデル発音を模倣した自分自身の発音と教師のモデル発音と同じかどうか判定する能力（小河原 1997:84）」としている。

正用率とアクセント学習ストラテジーについて重回帰分析を行った結果、「自己モニター型ストラテジー」からのみ、「アクセントの正用率」への正の有意な偏回帰係数（スィリポンパイブーン 2008:22）」が見られ、自己モニターストラテジーの運用がアクセントの習得に有効であるとしている。

しかし、呉他（2016）は、アクセントと拍の長さの習得と自己モニター型ストラテジーの間に相関がほぼ見られなかったことを指摘する。呉他（2016）は、先行研究と異なる結果となった理由として、「音声教育の効果が、学習ストラテジーの使用以上に、学習者に強い影響を与えている（呉他 2016:12）」ことを挙げ、小河原（1997）とスィリポンパイブーン（2008）より、呉他（2016）の調査対象であった「学習者の発音習得の到達レベルのほうが、これらの学生よりも高かった（呉他 2016:12）」としている。また、「学習ビリーフが消極的に作用した（呉他 2016:13）」ことを挙げている。呉他（2016）は、調査対象だった中国人学習者が教師や教科書に依存する傾向があり、あまり積極的に発音学習ストラテジーを使用しなかった可能性を指摘している。

このように、自分の発音に対し正誤判定できるようになるという自己モニターストラテジーは、発音学習に成功した学習者が使用していることから、効率的な発音学習を行うための一つの学習ストラテジーとして報告されてきた。しかし、学習者のビリーフや音声教育の有無によっては、自己モニターと発音能力の間に相関が見られない可能性も指摘されている。本研究の句末イントネーションは、単音やアクセントのように、正誤の判定を行うことは簡単ではないため、学習者自身の発音を用いて自己モニター能力を調査することは難しい。そのため、まず、モデル発音を評価できるかという観点から、他の学習者の発音を聞き、自然かどうかを評価する能力を調査することで、学習者の知覚の実態を明らかにする必要があると考える。

## 2.7 日本語音声教育の現状

日本語教育の現場における音声教育は、指導の必要性や重要性については認識されているものの、時間の制約や教師の指導に対する自信の無さなどにより、指導を敬遠する声が多いことが示されている。谷口（1991）は、日本語教師 158 名に音声教育の実態について質問紙調査を行った結果、「音声教育のための特別な時間は設けられておらず、計画もあまり無い。現場での指導は教師個人の技量や裁量に任されている（谷口 1991:22）」と報告し、音声教育において教師の負担が大きい現状を指摘している。串田

他（1995）も、中国人日本語教師 40 名に音声教育の実態における質問紙調査を行っている。その結果、「音声教育は重要だと思うが、難しい（串田他 1995:40）」「効果的な教え方がわからない（串田他 1995:40）」「自然な日本語を学習するための教材が少なく、あって古い（串田他 1995:40）」などの回答が得られ「教師の知識不足や教材の不足が、より効果的な音声教育を行う上での障害になっている（串田他 1995:40）」と指摘している。

こうした日本語教育における音声教育の厳しい現状は、近年の調査でも指摘されている。阿部他（2016）では、日本語母語話者の日本語教師 84 名を対象に、音声教育に対する教師の考え方について質問紙調査を行った結果、「自分自身の教え方や発音に自信がないことからくる指導の難しさ（阿部他 2016:283-284）」を感じることや、「気になる発音などに注目した非体系的な指導を行っている（阿部他 2016:284）」という傾向が見られたという結果が示されている。こうした報告から、教師の音声教育に対する自信の無さから来る指導に対する不安は現在でも解消されておらず、誤用が見られた際に注意する程度の一時的な指導が多く、音声教育のために時間を設けたり、カリキュラムやシラバスに指導項目を反映したりするといった積極的な指導は今日に至っても十分に行われているとは言い難い現状が続いていると言える。

こうした現状を打破するために、日本語教育における音声教育教材の開発が進められてきた。音声学的な知識を学習者に提供するとともに発音練習の課題を提示した教材である『発音・聴解』（土岐・村田 1989）や、『日本語の発音教室:理論と練習』（田中・窪菌 1999）が発行されている。また、調音時の身体の緊張と弛緩に注目し、身振りを使った音声指導法である VT（ベルボ・トナル）法（Verbo-Tonal Method）の要素を取り入れた『日本語の発音指導:VT 法の理論と実際』（クロード他 1990）、『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』（戸田 2004）などの教材も発行されている。これらの教材では「身体リズム運動やわらべうたリズムなどを用い、身体全体の筋肉の緊張や弛緩を利用した発話練習と発音矯正を行う（小河原 2009:37）」指導法や練習法が紹介されている。

さらに、韻律の指導に焦点を当てた『1 日 10 分の発音練習』（河野他 2004）、『初級文型でできるにほんご発音アクティビティ』（中川・中村 2010）、『にほんご話し方トレーニング』（中川他 2015）などが発行され、これらの教材では、ピッチが一度上昇し、句末に向けて下降していく特徴を取り上げ、「へ」の字（中川・中村 2010、中川他 2015）

や「ヤマ」(河野他 2004) の概念を取り入れ、声の高さを視覚的に表すピッチ曲線を教材に示している。河野他 (2004) は、「ヤマ」について「アクセントより大きな「音調のひとかたまり」で、詳しく言うと句頭のピッチ上昇から次の立て直しに至るまで(河野他 2004:iv) と定義している。中川他 (2015) も「「へ」の字」について、「声が低いところから始まり、高くなってだんだん下が(中川他 2015:76)」ると、述べており、河野他 (2004) の「ヤマ」と同様に、イントネーション句頭でピッチが上昇した後、句末にかけて下降していくことに注目したことを、音声指導に応用していると言える。また、中川他 (2015) は「意味のまとまり(句)を切らずに発音し、次の意味のまとまりとの間に句切りを入れ(中川他 2015:76)」ることで、「聞き手にわかりやすい発音(中川他 2015:76)」になるとしている。これらの音声教材は、統語的な切れ目を学習者が意識することにより、聞き手にとって分かりやすさと、句全体のイントネーションに対する自然さを意識することを指摘している点で、教育的な意義が大きいと考えられる。なお、声の高さは視認できず、これまで学習者が意識することは困難であったが、その声の高さをピッチ曲線として視覚化し、教材に示した点においても、日本語音声教育において大きな進歩であると考えられる。

近年では、科学技術の進歩に伴い、学習者自身が自律学習を行う試みが行われている。特に、アクセントや韻律においては、OJAD (Online Japanese Accent Dictionary) (峯松他 2013) のように、語のアクセントを Web 上のアクセント辞典を使い、簡単に調べることが可能になり、「読み上げ韻律チューターズズキクン」(峯松他 2013)、「ProsodyTuner2015」(松崎 2015) などの使用者が任意で入力した文のプロソディーを音声やピッチ曲線を視覚化して提供してくれる Web 上やコンピューターを利用した教材も積極的に開発されている。

このように、音声教育においては、時間の制約や発音指導に対する教師の自信の無さなどにより、積極的な発音指導を行うことが難しいという現状があった。近年においては、音声の視覚化を通して、多様な教材の開発や Web 上の自律学習用の教材の開発も進んでいる。しかし、本研究の分析対象である句末イントネーションの場合、教師が句末イントネーションを指導において重要だと認識しているにも関わらず、教育現場においては教師の裁量による単発的な指摘や訂正が行われている程度で、現状としては発音教材にもあまり取り扱われていない。轟木・山下 (2009) は音声指導に対する日本語教師の意識について質問紙調査を行った結果、句末や文末のイントネーション(例:常に

語尾が上がる、疑問文なのに上昇しないなど) に対し、「学習者の不自然な発音に気づいた場合も指摘や指導をおこなうこともあり、重要度の認識も高い(轟木・山下 2009: 49)」結果が得られたことを報告している。李恵蓮(2004)も、日本語教授経験がある日本語母語話者の大学院生に、韓国人日本語学習者の音声を聴かせ、自由記述を求めたところ、単音・特殊拍・アクセント・プロミネンス・ポーズ・イントネーション・句末イントネーションの7項目中、句末イントネーションに関する指摘が最も多かったことを指摘している。轟木・山下(2009)と李恵蓮(2004)の調査結果は、句末や文末イントネーションが、教師にとって指摘されやすく、指導が求められる誤用として認識される特徴であることを示唆すると考えられる。

文末のイントネーションについては、文末が上昇したり下降したりすることにより、疑問か平叙かの文のモダリティが決まる。このため、イントネーションの指導においては、「へ」の字や「ヤマ」の概念を用いた句全体のイントネーションに対する指導とともに、音声教育教材のみならず、初級の総合教材にも文末のイントネーションを表す矢印を併用する記述が見られることが多い。しかし、句末イントネーションについては、文のモダリティに影響を与えないことから、あまり注目されてこなかった。さらに、教師用の指導書においては、句末イントネーションを積極的に指導しないほうが望ましいとの指摘も見られる。国際交流基金(2009)の『音声を教える』は、学習者が「自分でそのように発音しようとする」と、文節末がすべて疑問文のように聞こえてしまったりして不自然になる可能性(国際交流基金 2009:126)」があると指摘しており、「日本人にはこのように発音する人もいる」ということを説明してもいいかもしれませんが、そのようなイントネーションで発音させる必要は特にない(国際交流基金 2009:126)」としている。確かに、句末イントネーションを積極的に教えるかについては議論の余地があるが、学習者が生の日本語に触れ、インプットを受け、日本語を習得していくことを考えると、こうした消極的な指導方針では問題があるように考えられる。

## 2.8 まとめと本研究の課題

本章では、対照分析の観点から韓国人学習者の句末イントネーションをめぐる類型の分類と学習者の中間言語研究に残された課題について述べた。日本語および韓国語の先行研究の異同を中心に議論を行った結果、従来の学習者の句末イントネーションにおける分類では、十分に学習者の句末イントネーションの実態を捉えることができないと考



えられる。そこで本章の論考を踏まえ、韓国人日本語学習者の句末イントネーションについて、日本語の主要な先行研究である郡（2003）と X-JToBI、韓国語の主要な先行研究である K-ToBI、学習者の句末イントネーションの主要な先行研究である李恵蓮（1999）との対応を示すとともに、表 2-3 の分類案を提案する。

表 2-3 句末イントネーションにおける主要な先行研究と本研究の分類案

郡 (2003)	X-JToBI (五十嵐 2006)	K-ToBI (Jun2000)	本研究の 分類案	李恵蓮 (1999)
上昇 下降調	HL%	HL%	昇降調	上昇 下降調
		LHL%	ゆすり調	
疑問型 上昇調	H%	H%	連続的上昇調 (郡 2003 の疑問型上昇調)	上昇調
	LH%	LH%	遅れ上昇調	
強調型 上昇調	H%		段状上昇調 (郡 2003 の強調型上昇調)	
上昇下降調+ 疑問型上昇調 (郡 2014)	HLH%	HLH%	上昇下降上昇調	
平坦調 (郡 2014)	エクステンダー (>)	M:% (チョミンハ 2011)	平らな 引き伸ばし調	長呼調
顕著な下降調	L%		弱伸ばし下降調	
平調	L%	L%	自然下降調	

李恵蓮（1999）は「上昇下降調」「上昇調」「長呼調」の 3 分類を行なった上で、学習者の日本語と韓国語に見られた類型が一致したことから、「母語の影響」を指摘している。本研究では、学習者の生成において母語の影響を再検討することから、李恵蓮（1999）との対応を考えることは重要であると考え。従来の分類との相違は大きく、以下の 4 点である。

第一に、李恵蓮（1999）の「上昇下降調」については、ピッチが上昇下降するという特徴についての指摘はあるが、上昇が生じるタイミングに注目した分類はなされていない。本研究では、K-ToBI（Jun 2000）と X-JToBI（五十嵐他 2006）の分類を参考に、急激に上昇した後下降する「HL%」（K-ToBI と X-ToBI に共通）と上昇のタイミングが

遅れて上昇した後下降する「LHL%」(K-ToBI)に2分する。しかし、イントネーションの名称については、類型全体の統一性や、高(H)低(L)のみより、イントネーションの特徴をより明確に示すことができる名称にする必要があると考えられる。したがって、本研究では、「HL%」を急激なピッチの上昇下降が早く生じる特徴から「昇降調」とし、「LHL%」を上昇のタイミングが遅れて生じた後下降するため、聴覚印象から波打つ感じに聞こえることから「ゆすり調」とする。

第二に、李恵蓮(1999)の「上昇調」については、上昇の仕方や上昇が生じるタイミングに関する詳細は明らかにされていない。本研究では、まず、郡(2003)に従い、「連続的にどんどん高くなる(郡 2014:89)」「疑問型上昇調」と強めを伴うアクセント的上昇で「音を伸ばしてもそのままほぼ同じ高さを保つ(郡 2003:114)」「強調型上昇調」を分ける。しかし、上昇調の名称については、「疑問型上昇調」(郡 2003)よりその韻律的特徴を捉えた「連続的上昇調」(郡 2014)のほうが類型の特徴を示す上で相応しいと考えられる。「疑問型上昇調」(郡 2003)は、「(わかった?)」のように真偽の判定を求める質問文に典型的に使われる音調(郡 2014:89)であるが、文末と対比する意味として句末に出現する場合、疑問の意図を示さず、文節末で文の不完結性の表示機能(上村 1989)を示す場合もある。また、上昇調以外の類型においてはその韻律的特徴に焦点を当てた名称を採用していることから、類型全体の統一性を考える上で、本研究では「連続的上昇調」(郡 2014)とする。また、「強調型上昇調」(郡 2003)についても、類型の名称から韻律的特徴、特にピッチ変化における特徴を捉えることが難しいことから、ピッチの変化が「直前に比べて一段高く平ら(郡 2014:90)」であることから「段状上昇調」(郡 2014)とする。さらに、K-ToBIとX-JToBIの分類に倣い、上昇のタイミングが遅れて生じる「LH%」(K-ToBIとX-ToBIに共通)とピッチの上昇下降が生じてから再度高く上昇する「HLH%」(K-ToBIとX-ToBIに共通)を分ける。また、類型の名称については、統一性を考え、「LH%」を上昇のタイミングが遅れて生じることから「遅れ上昇調」とする。「HLH%」<sup>23</sup>(K-ToBIとX-ToBIに共通)は、上昇下降が生じた後再

---

<sup>23</sup>「HLH%」については、日本語と韓国語ともに、イントネーションにおいては最初の部分の上昇について見解が分かれている。はじめの部分の上昇に対する指摘がなく、すぐに下降した後上昇するという「くだりのぼり音調」(上村 1989、イホヨン 2008)と最初の部分が上昇し、さらに下降した再び上昇する「HLH%」(K-ToBI、X-JToBI)である。本稿では、K-ToBI(Jun2000)のピッチ曲線を優先し、類型の名称を「上昇下降上昇調」とするが、第3章の発話データの分析を通して、2つの類型を独立した類型として扱うかを検討する。

度高く上昇することから「上昇下降上昇調」とする。

第三に、李恵蓮（1999）の「長呼調」については、ピッチの変化がなく、母音の延伸が見られるという韻律的特徴を持つため、一つの独立した類型として認める必要があると考えられる。また、この類型は、韓国語において「M%:」（チョミンハ 2011）、日本語で「平坦調」（郡 2014）が見られ、両言語間で共通する類型であると言える。一方、2.4.3で述べたように、従来の名称ではイントネーションの韻律的特徴を連想し難いことから、「平らな引き伸ばし調」と名称を改める。

第四に、李恵蓮（1999）では区別されなかった、二つの類型を分類案に含めた。まず、「弱伸ばし下降調」を類型として含める。「弱伸ばし下降調」は、「顕著な下降調」（郡 2003）に対応するが、ピッチの急な下降とともに、音圧の弱化と母音の延伸を伴うことから、名称にその特徴を含める。もう一つは、自然下降のみが生じている「自然下降調」を類型として含める。「自然下降調」は K-ToBI と X-JToBI の「L%」に対応するが、K-ToBI と X-JToBI では自然下降か意図的な下降であるかが区別されない。また「平調」（郡 2003）とも韻律的には同一であるが、名称から「平らな引き伸ばし調」と混乱を招く恐れがあることから、本研究では、ピッチの自然下降のみが見られるイントネーションを「自然下降調」とし、一つの独立した類型として類型案に含めた。

本研究の分類案は、韓国語と日本語の先行研究に指摘されてきた類型を基盤としたものであるため、母語とも目標言語とも異なる中間言語（Selinker 1972）的な特徴を持つ型が出現する可能性も否めない。この点については、第 3 章において学習者の発話データから、中間言語の観点からも類型の追加を検討する必要があると考えられることから、韓国人日本語学習者の発話データを踏まえ、第 3 章で論じる。

加えて、本研究における「句末イントネーション」の定義を述べる。本研究における「句」は、イントネーション句を指し、句の境界において「ピッチレンジのリセット（五十嵐他 2006:348）」とともに、さらにポーズ（200ms）が後続する句を指す。その句の最終拍において、表 2-3 に示したイントネーションの類型が見られる場合、「句末イントネーション」とする。一方、イントネーション句は音声学的な概念であるため、厳密には文末イントネーションも含むことになるが、本研究では、「句末に観察される「学校へ「え↓行こう「お↓」のような「ゆすり音調」的伸ばし下げ等の問題（松崎 1999:30）」に焦点を当て取り上げるべく、「です」「ます」などの文末形式や終助詞「ね」「さ」「よ」のような終助詞は、特定のイントネーションと共起しやすいことから、研究対象から除

外する。この点、文末に対比する意味として、文節末イントネーションという名称も可能であるが、学習者の場合、意味の区切りである文節とイントネーション句の区切りが必ずしも一致するとは言えず、さらに細かい区切りが見られる可能性も存在する。したがって、学習者のイントネーション生成をより厳密に記述するためには、音声学的概念である「句末イントネーション」を取り上げることがより相応しいと考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、韓国人日本語学習者の句末イントネーションを分析対象とし、表 2-3 に示した学習者の句末イントネーションの分類案をもとに、学習者の生成と知覚の実態を明らかにする。また、学習者の句末イントネーションを日本語母語話者がどのように評価するかについて、その実態を明らかにする。

## 第3章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの生成【研究1】

第3章では、韓国人日本語学習者の句末イントネーションの類型について再考を行った新しい分類案に基づき、学習者の発話に見られた句末イントネーションを分類し、母語の影響と発話場面の相違、各類型の文法形式による出現傾向に焦点を当て、韓国人学習者の句末イントネーションの生成におけるその特徴を明らかにする。

### 3.1 背景と目的

韓国人日本語学習者の発音においては、句末を上昇または上昇下降させるイントネーションがよく見られることが指摘され、学習者の日本語と韓国語に出現する型が類似することから、母語の影響（李惠蓮1999）が指摘されてきた。しかし、その類型については再考の余地がある。李惠蓮（1999）は、ピッチの上下変化により、上昇下降調、上昇調、長呼調の3分類を行うが、日本語のX-JToBI（五十嵐他2006）や郡（2003）、韓国語のK-ToBI（Jun2000）では、上昇や下降だけでなく、ピッチ変化が生じるタイミングや上昇の仕方により上昇下降調や上昇調が細かく区別されており、既存の3分類では十分と言えない。崔泰根（2005）も3分類（「昇降調」「上昇調」「平板調」）を行っているが、類型の名称が異なるだけで、タイミングや上昇の仕方については考慮されていない。したがって、類型の再考を行った上で、学習者の母語と目標言語、さらに母語話者の日本語を対照することで、学習者の句末イントネーション生成における母語転移の再検討が可能になると考えられる。

また、分析対象の発話データの性質が結果に影響を与えた可能性もある。先行研究においては読み上げ音声をデータとしているが（李惠蓮1999、崔泰根2005）、イントネーションは発話意図を示す機能を持つことから、読み上げ音声より自発音声の方が、より多様な類型が出現する可能性がある。したがって、自発音声を材料とし、学習者の句末イントネーションの生成を検討することが求められる。さらに、発話意図により出現するイントネーションに相違が見られるのは明らかであるため、幅広く学習者の句末イントネーションにおける特徴を捉えるには、発話場面の相違にも焦点を当てる必要がある。一例として、日本語母語話者の「昇降調」について、佐々木（原）（2004）は、「非常に改まった場面では、当該イントネーションが嫌われていることを知る者は使わないように気を付ける（佐々木（原）2004:90）」とし、改まった場面において「昇降調」が出現

しにくいことが指摘している。これは、「昇降調」が「甘え」「幼さ」(井上 1994) という聴覚印象を与える可能性があるとの指摘ともに通じるものと考えられる。一方、佐々木(原)(2004)は、「いわゆる「尻上がり」イントネーション(昇降調)がフォーマルな場面での使用を制限され、これを避けたいという心理が働いたため、その代替形式として強調を使用したという事情がある(佐々木(原) 2004:161)」とし、フォーマルな場面においては、「昇降調」に代わって、「強調」が出現する可能性について指摘している。佐々木(原)(2004)は「強調」について、「上村(1989)の「つよめ音調」にほぼ対応する(佐々木(原) 2004:160)」と述べていることから、佐々木(原)(2004)の「強調」は、本研究における「段状上昇調」と同類型として見て良いと考えられる。こうした発話場面における種類の使い分けが日本語母語話者の句末イントネーションにおいて見られる場合、学習者の句末イントネーションの生成を母語話者と比較し、発話場面を考慮した適切な句末イントネーションの使用を行っているかに対し、検討を行う必要があると考えられる。

さらに、句末イントネーションの各類型がどの文法形式に出現しやすいかを明らかにする必要がある。李恵蓮(2001)は、接続助詞の「て形」「から」において、学習者の句末イントネーションの出現数が多かったと指摘されているが、その結果をイントネーションの類型別を示しておらず、どの類型が文法形式と出現しやすいかは明らかにされていない。一方、学習者の句末イントネーションは「特定の助詞との共起は見られなかった(北野2017a:39)」との報告もあり、研究により異なる見解が得られている。さらに、北野(2017a; 2017b)においても、「上昇したままの「上昇調」、またはいったんピッチが上昇した後に下降に転ずる「上昇下降調」(北野2017b:22)」の二つの類型について指摘しながらも、分析においてはその「いずれかを示していること(北野2017b:22)」とし、句末イントネーションを類型別を示していないことから、どの類型がどの文法形式に出現したかについては、十分に明らかにされていない。

以上を受け、本章では、韓国語と日本語の先行研究を参考に、韓国人日本語学習者の句末イントネーション類型を再考した分類案(表 2-3)をもとに、学習者の韓国語と日本語、母語話者の日本語に見られた句末イントネーションを対照し、母語の影響を再検討する。さらに、発話場面の異なる 2 つの自発音声データから、句末イントネーションに対する発話場面の影響、また各類型が出現する文法形式について検討し、母語の影響と発話場面、各類型の文法形式による出現傾向に焦点を当て、韓国人日本語学習者の句

末イントネーション生成における実態を明らかにする。

## 3.2 方法

### 3.2.1 調査協力者

調査協力者の韓国人日本語学習者（以下 KL、表 3-1）は、ソウル及び京畿道にある 3 つの大学で日本語を専攻・副専攻している大学生 10 名（男性 1 名、女性 9 名）で、調査時（2016 年 3 月時点）の学習歴は 2～3 年であり、平均学習歴は 2.4 年（SD=0.52）である。KL は全員、日本滞在歴を持たないソウル方言話者であり、日本語能力試験など日本語レベルを測定するテストを受験したことがない。年齢は 18～23 歳、平均年齢は 20.2 歳（SD=1.48）である。

また、KL の句末イントネーション生成の特徴について、日本語母語話者（以下 NS）との比較を通してより詳細に知るため、NS 10 名（男性 1 名、女性 9 名）にも協力を求めた。NS は、全員東京方言話者であり、平均年齢は 24.6 歳（SD=4.03）である。NS の属性は、日本語教師 3 名、言語学や外国語教育を専門とする大学生（3 名）・大学院生（2 名）5 名、社会人 2 名である。

表 3-1 KL10 名の性別・年齢・学習歴

調査協力者	性別	年齢	学習歴
KL1	女	20	2 年
KL2	女	20	2 年
KL3	女	18	2 年
KL4	女	22	2 年
KL5	男	23	2 年
KL6	女	19	2 年
KL7	女	21	3 年
KL8	女	20	3 年
KL9	女	19	3 年
KL10	女	20	3 年

### 3.2.2 発話データの収集

発話データの収集は、できるだけ自発音声に近い発話データを収集すべく、読み上げではなく、ロールプレイ形式により行った。NS の「昇降調」については、「間投助詞の「ねえ、さあ、よお」のように、構文上の大きな切れ目を表示することで非完結性を示

し、話順を保持する（佐々木（原）2004:165）」機能を持ち、「いわゆる「尻上がり」イントネーション（昇降調）がフォーマルな場面での使用を制限され、これを避けたいという心理が働いたため、その代替形式として強調を使用したという事情がある（佐々木（原）2004:161）」との指摘がある。佐々木（原）（2004）の「強調」は本研究の「段状上昇調」と同一の類型であるが、この指摘は、改まった場面においては「昇降調」が出現し難く、フォーマルな場面においては、「昇降調」に代替し「段状上昇調」が出現する可能性を示唆していると言える。こうした発話場面の改まり度により、NSの発話において出現する句末イントネーションの類型が異なる場合、NSは発話場面に応じて句末イントネーションの類型を使い分けていると言える。一方、KLの句末イントネーションについては、「上昇下降調」が多く見られ（李恵蓮 2002:52）」るとの指摘があるが、発話場面により出現する類型については検討が行われていない。以上を受け、本研究では「友人」と「上司」という改まり度が異なる発話の相手に対する発話場面におけるロールプレイを行った。

KLの母語である韓国語についても、改まり度とイントネーションの出現についての指摘がある。韓国語の句末イントネーションの出現について発話機能の面から分析した Park (2003)<sup>24</sup>は、「women use LHL% more frequently during the same-gender casual chatting（女性話者はLHL%を同性のカジュアルな雑談においてより頻繁に使用する）（Park 2003:233（）は本論筆者訳）」とし、親密な話者間のインフォーマルな会話においてLHL%が出現しやすく、LHL%は「a special emphasis to the main points of the story（話の重要なポイントを特に強調）（Park2003:272（）は本論筆者訳）」する機能を持つと指摘している。Park（2003）は、K-ToBI（Jun 2000）の分類に基づき分析を行っていることから、Park（2003）のLHL%は、本研究の「ゆすり調」に対応すると言える。LHL%は、X-JToBI（五十嵐他 2006）や郡（2003）における日本語の句末イントネーションの分類においては見られない類型であるため、KLの日本語に見られる場合、母語の影響である可能性が高い。したがって、KLの日本語に母語の影響が見られる場合、友人関係のような親密な話者間のインフォーマルな会話における強調を示す発

---

<sup>24</sup> Park（2003）は、男性話者に比べ女性話者においてLHL%の多用が見られたと指摘しているが、本研究におけるKLの男性話者においては「ゆすり調」（LHL%）が確認され、また韓国語だけでなく日本語においても出現が確認された。しかし、本研究における男性話者が1名のみであったことから、「ゆすり調」の出現に対する話者の性別の影響については、今後さらに追試を行っていく必要がある。



話場面において「ゆすり調」が出現する可能性が高い。一方、NSは改まり度が低い場面において「昇降調」が見られる可能性が高く、NSの「昇降調」は「相手に念を押し感じ（井上 1994:11）」であることから、発話内容に対し強調を示す際現れる可能性が高い。そこで、本章では親密な話者間の強調を示す発話場面にKLの「ゆすり調」の出現を中心とした母語の影響について検討を行うべく、発話場面①（以下場面①）（図 3-1）として、KLの日本語に「ゆすり調」が出現しやすい「ヘビースモーカーの友達にたばこをやめるように説得する」ロールプレイを設定した。








<p>あなたは親友のAさんと、同じアパートで一緒に住んでいます。Aさんは、ヘビースモーカーですが、あなたはたばこを吸わないし、たばこのにおいがとても苦手です。</p> 	<p>Aさんからは、いつもたばこのにおいがするので、話す時は、気持ちが悪くなります。</p> 	<p>Aさんは部屋でたばこを吸うので、いつの間にかあなたの洋服や体にたばこのにおいがするようになりました。</p> <p>この前は、友達と家族にまで、「あなたからたばこのにおいがするよ」と言われました。</p>
<p>最近、目のどが痛くなって、咳も出るようになったので、病院にも行きました。 お医者さんは、たばこの煙が原因だと言いました。</p> 	<p>またAさんは、時々ベランダでたばこを吸います。この前は、Aさんが家にいないとき、あなたはお隣さんから「うちのベランダにまでたばこのにおいがするのでやめてほしい」と苦情を言われました。</p> <p>あなたは自分が吸ってもないたばこのせいで、注意されたことで、とてもイライラしました。</p> 	<p>また、Aさんは横になってたばこを吸うことがあります。この前は、寝たばこをして火事になることでした。</p> 
<p>それから何よりも、あなたはAさんの健康が心配なのです。 Aさんはいつも咳をしています、あなたは、たばこが原因じゃないかと思っています。</p> 	<p>Aさんは、これまで何度もたばこをやめると約束しましたが、なかなか守ってくれません。 あなたは、今度こそAさんにたばこをやめてもらいたいです。</p> 	<p>この状況をAさんによく説明して、たばこをやめるよう、強く説得してください。</p> <p>ロールプレイの最初は、「ちょっと話があるんだけど」で始めてください。</p> <p>ロールプレイは友達との会話ですから、です・ます体ではなく普通体で話してください。</p>

図 3-1 場面①におけるロールカード

一方、韓国語において、上昇調である H%は継起の「て形」の意味を持つ「-ko」（고）等と共起し、発話が継続することを示す（Park 2003）。Park（2003）は、「H% signals relatively high correlation between the current and the subsequent utterance（H%は現在話している発話と後続の発話が相対的に密接な関係であることを示す）」（Park

2003:130、() は本論筆者訳)」としている。Park (2003) の H%は、K-ToBI (Jun2000) の分類に基づいたものであるが、K-ToBI における H%は、LH%と対照した際、「A rising boundary tone that begins to rise before the IP-final syllable (最終音節の前から上昇が始まる上昇調) (Jun 2000:156、() は本論筆者訳)」と述べ、最終音節から上昇するという特徴については指摘があるが、その上昇の仕方についての具体的な指摘は見られない。一方、KL の「上昇調」は「必要以上に上がったたり、また、最後の音節が長くなりすぎ (大坪監修 1987:114)」るとの指摘があり、上昇の仕方が連続的である可能性がある。NS の場合、「段状上昇調」が「昇降調」同様、「非完結性を示し、文が続くことを聞き手に知らせ注意を引きつける (佐々木 (原) 2004:161)」機能を持つが、改まり度が高い場面においては「段状上昇調」が出現しやすいことが指摘されている (佐々木 (原) 2004)。したがって、比較的フォーマルな目上の会話相手との会話場面において、発話の継起を示す「て形」などを用い、発話を継続する際、NS には「段状上昇調」が見られ、KL には「連続的上昇調」が現れる可能性が高い。そこで、本章では KL の「連続的上昇調」の出現を中心とした母語の影響について検討を行うべく、発話場面② (以下場面②) (図 3-2) として、KL の日本語に「連続的上昇調」が出現しやすい、時系列で発話が進む「上司に出張の日程を報告する」ロールプレイを設定した。また、出現すると予想した類型以外の結果についても、得られた結果を整理し、その結果を踏まえ考察を述べることにする。

	一日目(9月20日 土曜日)	二日目(9月21日 日曜日)
<p>あなたは 職場の上司と大阪へ1泊2日間出張に行くことになりました。出張の前、上司は出張の日程を立て、自分に報告するよう言いました。</p> <p>今日、あなたは、上司に自分が立てた出張のスケジュールについて報告します。次の日程表をもとに、大阪出張のスケジュールについて時系列で上司にプレゼンテーションをしてください。</p>	9:00 仁川空港集合, 飛行機チェックイン	9:00 ホテルロビー集合
	11:00 関西空港到着	9:30 大阪から新幹線で広島へ移動
	12:00 大阪心斎橋で昼食	11:00 取引先B社工場訪問、昼食
	14:00 ホテルへ移動、ウメダホテルチェックイン	15:00 広島から大阪へ移動
	16:00 取引先A社 訪問およびミーティング	16:00 取引先C社訪問およびミーティング
	20:00 A社 鈴木社長と夕食	19:00 関西空港へ移動
	21:00 ホテルへ戻る	21:00 仁川空港到着

図 3-2 場面②におけるロールカード

なお、発話データの録音については、ロールプレイを 1 対 1 で行い、相手役は筆者が担当した。録音の順番は、ロールプレイの内容に対する調査協力者の理解を促進すべく、

母語である韓国語で実施した後、日本語でもう一度実施した。録音機材は、Zoom 社の Handy Recorder H4n を使用し、wav ファイル形式で録音した。録音は KL の場合、調査協力者が所属する大学構内の静かな教室で行い、NS についても会議室や大学構内の教室で行った。なお、ロールプレイの開始部と終了部、および「なんか」「まあ」「えーと」などフィラーや言い淀みなどについては、各発話場面の特徴が出ない可能性が高いことから、分析対象から除外した。発話データ収集における所要時間は、説明の時間を含め KL は約 40 分、NS は日本語のみで行ったことから約 20 分であった。

### 3.2.3 句末イントネーションの判定と類型の再考

発話データは音響分析ソフト Praat (version 6.0.15) で分析し、聴覚的判断とピッチ曲線の目視により判定を行った。判定は、KL の句末イントネーションにおける類型について、韓国語と日本語の先行研究を再考し提案した分類案(表 2-3)に基づき行った。以下、各類型のピッチ曲線とともに特徴を述べる。

まず、上昇下降調について 2 分類を行った。表 2-3 の分類案で区別した、急激な上昇下降が早く生じる「昇降調」(図 3-3)<sup>25</sup>と上昇のタイミングが遅れて上昇した後下降する「ゆすり調」(図 3-4)が、本研究の発話データでもともに出現したため、2 分類を行った。

第二に、上昇調について 3 分類を行った。表 2-3 の分類案で区別した 4 分類中、持続時間とともに上昇が高くなる「連続的上昇調」<sup>26</sup>(図 3-5)(郡 2014)、上昇幅が大きく、強さを伴いアクセント的上昇をする「段状上昇調」(図 3-6)(郡 2014)、上昇が遅れて生じる「遅れ上昇調」(図 3-7)(X-JToBI)の 3 つの類型が本研究の発話データにおいて出現したため、分類を行った。しかし、表 2-3 の分類案の類型中、「上昇下降上昇調」は、本研究の発話データに、はじめの上昇が見られる類型と見られない類型とも

---

<sup>25</sup> 図 3-3～図 3-10 のピッチ曲線は本研究で収集した KL の発話データから抽出した。各類型は図の中央線以降の部分に該当する。

<sup>26</sup> 「連続的上昇調」の中には、上昇の仕方が連続的なピッチの上昇が見られるが、ピッチの上昇が急であり、疑問の発話意図が感じられない例が示された。金瑜眞(2017)においては、この類型が KL にのみ見られ、NS にはあまり見られないとし、「韓国上昇調」と「連続的上昇調」と区別して分類した。しかし、ピッチの上昇の仕方において、持続時間とともに連続的な上昇が見られるという点で、「連続的上昇調」とピッチ変化を基準にする場合、区別が困難であると考えられることから、本稿ではこれらを区別せず、「連続的上昇調」とする。

に 1 例も出現しなかったことから、分析対象から除外した。

第三に、「自然下降調」(図 3-8) が、本研究の発話データで確認された。「自然下降調」は、自然下降のみが生じる類型であり、NS によく見られるため、類型全体の中で「自然下降調」が占める割合を把握することは KL の習得状況を知る上で重要である。また、下降とともに母音延伸が起き、音圧の弱化が見られる「弱伸ばし下降調」(図 3-9) が本研究の発話データに見られたため、類型として含めた。「弱伸ばし下降調」は「顕著な下降調」(郡 2003) と母音延伸や音圧の減少を共通する特徴とするが、本研究の発話データでは急激なピッチの下降はあまり見られなかったため、母音延伸が起き、音圧の減少とともに下降が見られれば「弱伸ばし下降調」として、判定を行った。なお、ピッチ変化が無く平らに伸ばす「平らな引き伸ばし調」(図 3-10) が発話データに現れたことから、これも分類に含めた。

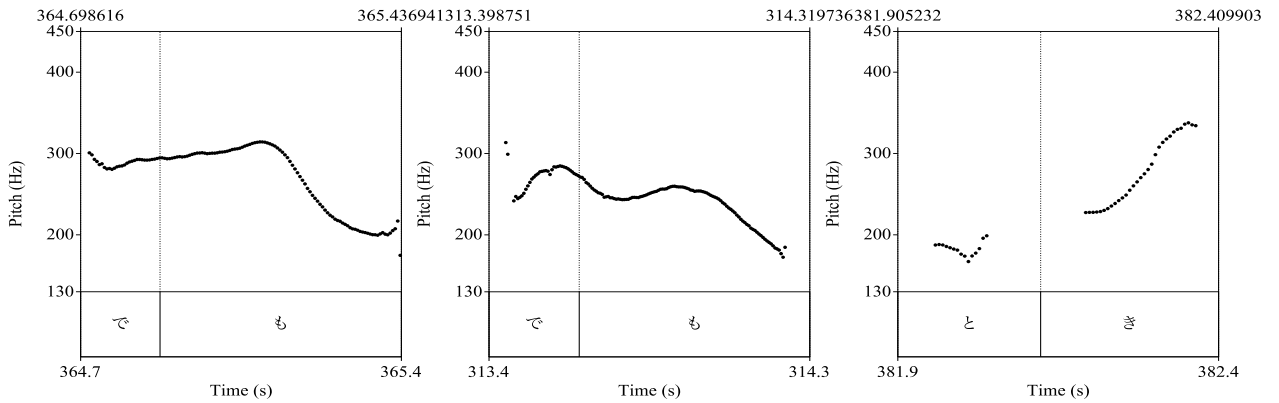


図 3-3 「昇降調」

図 3-4 「ゆすり調」

図 3-5 「連続的上昇調」

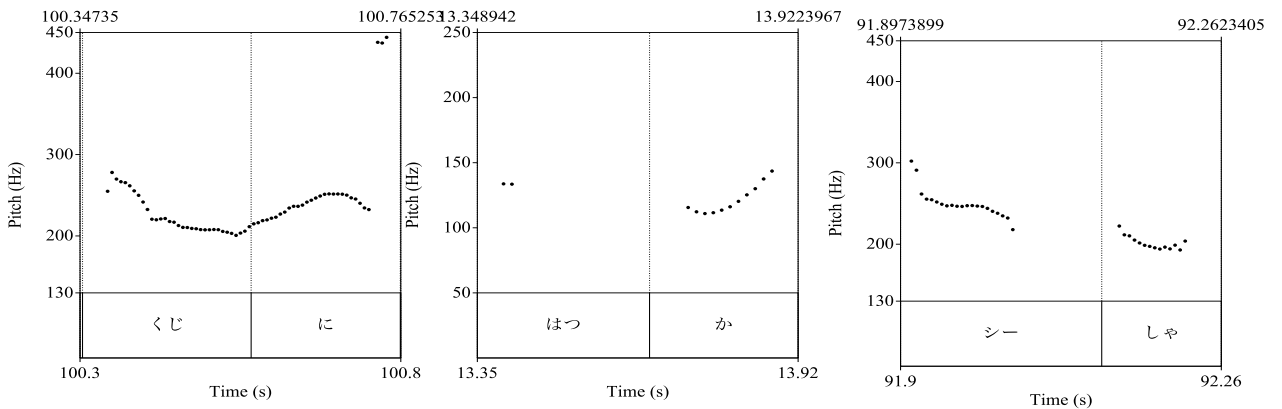


図 3-6 「段状上昇調」

図 3-7 「遅れ上昇調」

図 3-8 「自然下降調」

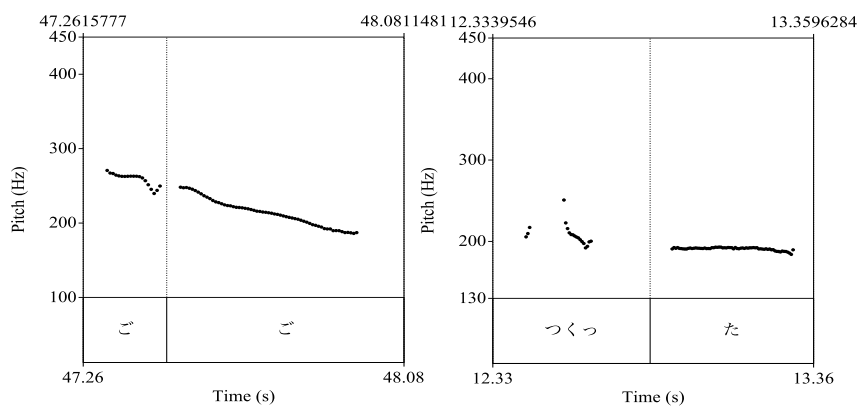


図 3-9 「弱伸ばし下降調」

図 3-10 「平らな引き伸ばし調」

### 3.3 結果

#### 3.3.1 判定の一致度検定

句末イントネーションの判定は、筆者と音声学を専門とする日本語母語話者1名で行った。2名の判定結果の一致度を検討すべくカッパ係数を求めた結果、高い水準で一致したため ( $k=.938, p<.01$ )、筆者の判定を分析に採用した。統計処理は全て SPSS 24.0 for mac を用いた。以下、表 3-2～表 3-4 に調査協力者の発話時間、発話文の数を示す。

表 3-2 KL の発話時間・発話文数（日本語）

場面①	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	平均
発話時間	404.	355.	293.	645.	497.	543.	333.	354.	383	482.	429.
(秒)	80	15	60	65	47	33	33	98	.63	37	43
発話文数	20	23	16	28	22	16	22	12	19	13	19. 10
場面②	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	平均
発話時間	136.	166.	120.	210.	179.	172.	118.	171.	129.	182.	158.
(秒)	78	08	26	89	24	21	85	91	64	82	87
発話文数	13	15	10	17	13	12	11	7	13	9	12. 00

表 3-3 KL の発話時間・発話文数（韓国語）

場面①	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	平均
発話時間	319.	342.	242.	307.	263.	251.	232.	237.	318.	301.	281.
(秒)	43	13	80	08	21	92	49	96	85	48	74
発話文数	25	43	32	32	30	23	19	16	20	37	27. 70
場面②	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	平均
発話時間	85.	108.	76.	76.	87.	82.	70.	75.	78.	82.	82.
(秒)	92	28	54	27	47	38	75	02	30	94	39
発話文数	10	17	6	12	10	7	10	3	10	7	9.20

表 3-4 NS の発話時間・発話文数（日本語）

場面①	NS1	NS2	NS3	NS4	NS5	NS6	NS7	NS8	NS9	NS10	平均
発話時間	240.	409.	330.	343.	390.	297.	408.	376.	298.	422.	351.
(秒)	05	52	38	15	41	17	87	57	08	77	70
発話文数	13	51	66	50	70	30	68	72	42	25	48.70
場面②	NS1	NS2	NS3	NS4	NS5	NS6	NS7	NS8	NS9	NS10	平均
発話時間	101.	150.	121.	86.	82.	136.	134.	110.	77.	104.	110.
(秒)	52	76	36	33	91	56	52	55	72	18	64
発話文数	19	13	23	11	18	20	12	12	11	12	15.10

### 3.3.2 母語の影響

母語の影響が見られるか否かについて、KL の日本語と韓国語に見られた類型別の出現数に対し  $\chi^2$  検定を行った結果、まず場面①の出現数に有意な偏りが見られた ( $\chi^2(6)=312.16, p<.01$ )。そこで残差分析 (表 3-5<sup>27</sup>) を実施した結果、日本語では「自然下降調」「昇降調」「弱伸ばし下降調」「連続的上昇調」「段状上昇調」が韓国語の発話より有意に多いことが示された。また、韓国語では「ゆすり調」が日本語の発話より有意に多いことが示された。したがって、場面①において、KL の母語である韓国語と目標言語の日本語間に相違があることが確認された。

場面②も出現数に有意な偏りが見られた ( $\chi^2(6)=128.11, p<.01$ )。そこで、残差分析 (表 3-6) を行ったところ、日本語では「昇降調」「自然下降調」「弱伸ばし下降調」が有意に多く、韓国語では「連続的上昇調」「ゆすり調」が多いことが示された。以上から、場面②においても、韓国人学習者の日本語に現れる句末イントネーションは韓国語に現れる類型と出現数に相違が見られることが示された。

表 3-5 場面①における KL の日韓両言語句末イントネーションの類型別出現数 (%)

類型	KL 日本語			KL 韓国語		
「自然下降調」	330	(36.18%)	▲	107	(29.64%)	▽
「昇降調」	244	(26.75%)	▲	14	(3.88%)	▽
「弱伸ばし下降調」	129	(14.14%)	▲	8	(2.22%)	▽
「連続的上昇調」	43	(4.71%)	▲	7	(1.94%)	▽
「段状上昇調」	16	(1.75%)	▲	0	(0.00%)	▽
「平らな引き伸ばし調」	18	(1.97%)		8	(2.22%)	
「ゆすり調」	132	(14.47%)	▽	217	(60.11%)	▲
計	912	(100.00%)		361	(100.00%)	

<sup>27</sup> 表 3-5～表 3-26 には、各類型の出現度数を示した。▲は残差分析の結果、有意水準  $p<.05$  レベルで期待値より有意に大きいもの、▽は有意に小さいものである。 $\chi^2$  検定において期待度数が 5 以下のセルは「小度数のセルどうしを併合する、または、「その他」というカテゴリーをつくる」(田中・山際 2003: 265) ことで、 $\chi^2$  検定の制約を回避することが可能になる。そこで本研究では、期待度数が 5 以下のセルを統合し、「その他」とした上で再度  $\chi^2$  検定を行った。「その他」については有意な残差が見られた場合であっても、どの類型における有意差であるかを明らかにすることが困難であるため、結果や考察の検討に含めない。「その他」に含まれず各表に記載のない類型は 1 例も現れなかった類型である。「遅れ上昇調」は本章の発話データ全体を通して 6 例のみ(日本語 2 例 (KL5)、韓国語 4 例 (KL9)) であったことから、分析対象に含めていない。

表 3-6 場面②における KL の日韓両言語句末イントネーションの類型別出現数 (%)

類型	KL 日本語			KL 韓国語		
「昇降調」	202	(37.69%)	▲	42	(22.46%)	▽
「自然下降調」	164	(30.60%)	▲	38	(20.32%)	▽
「弱伸ばし下降調」	30	(5.60%)	▲	2	(1.07%)	▽
「段状上昇調」	26	(4.85%)		7	(3.74%)	
「平らな引き伸ばし調」	23	(4.29%)		3	(1.60%)	
「連続的上昇調」	91	(16.98%)	▽	67	(35.83%)	▲
「ゆすり調」	0	(0.00%)	▽	28	(14.97%)	▲
計	536	(100.00%)		187	(100.00%)	

### 3.3.3 日本語母語話者との相違

KL と NS 間で句末イントネーションの出現に相違が見られるか否かについて、KL と NS の日本語に見られた類型別出現数に対し  $\chi^2$  検定を行った結果、場面①について出現数の偏りが有意であった ( $\chi^2(6)=174.87, p<.01$ )。そこで残差分析 (表 3-7) を行った結果、KL の発話においては、「ゆすり調」「弱伸ばし下降調」が NS より有意に多いことが示されたが、NS の発話においては、「自然下降調」と「昇降調」が KL より有意に多いことが示された。したがって、場面①の発話において、KL の日本語に現れる類型は NS とは異なることが示された。KL は場面①の句末イントネーション中、「自然下降調」が最も多く、その次に「昇降調」が多かったが、NS はさらにそれ以上に 2 つの類型を場面①においてよく使用していることから、KL と NS の間に有意差が示されたと考えられる。「連続的上昇調」「段状上昇調」「平らな引き伸ばし調」については、KL と NS 間に有意な残差が見られなかった。

場面②<sup>28</sup>でも出現数の偏りは有意であった ( $\chi^2(5)=296.24, p<.01$ )。残差分析 (表 3-8) を行った結果、KL の発話においては、「昇降調」「連続的上昇調」「弱伸ばし下降調」「平らな引き伸ばし調」が NS より有意に多いことが示されたが、NS の発話においては、「自然下降調」と「段状上昇調」が KL より有意に多いことが示された。したがって、場面②の発話においても、KL の日本語に現れる類型は NS とは異なることが示された。

<sup>28</sup> 場面②における「ゆすり調」の分析については、KL に 1 例のみ、NS には 1 例も見られなかったことから、分析対象に含めていない。



表 3-7 場面①における KL・NS の句末イントネーションの類型別出現数 (%)

類型	KL 日本語			NS 日本語		
「ゆすり調」	132	(14.47%)	▲	0	(0.00%)	▽
「弱伸ばし下降調」	129	(14.14%)	▲	8	(1.48%)	▽
「連続的上昇調」	43	(4.71%)		19	(3.52%)	
「平らな引き伸ばし調」	18	(1.97%)		18	(3.33%)	
「段状上昇調」	16	(1.75%)		7	(1.30%)	
「自然下降調」	330	(36.18%)	▽	277	(51.30%)	▲
「昇降調」	244	(26.75%)	▽	211	(39.07%)	▲
計	912	(100.00%)		540	(100.00%)	

表 3-8 場面②における KL・NS の句末イントネーションの類型別出現数 (%)

類型	KL 日本語			NS 日本語		
「昇降調」	202	(37.69%)	▲	40	(10.58%)	▽
「連続的上昇調」	91	(16.98%)	▲	0	(0.00%)	▽
「弱伸ばし下降調」	30	(5.60%)	▲	1	(0.26%)	▽
「平らな引き伸ばし調」	23	(4.29%)	▲	0	(0.00%)	▽
「自然下降調」	164	(30.60%)	▽	219	(57.94%)	▲
「段状上昇調」	26	(4.85%)	▽	118	(31.22%)	▲
計	536	(100.00%)		378	(100.00%)	

### 3.3.4 発話場面による影響

発話場面による影響を検討するため、場面①と場面②の間に相違が見られるか否かについて  $\chi^2$  検定を行った。その結果、KL の日本語における出現数の偏りは有意であった ( $\chi^2(6)=186.32, p<.01$ )。そこで、残差分析 (表 3-9) を行った結果、KL は場面①の発話において、「自然下降調」「ゆすり調」「弱伸ばし下降調」が場面②より有意に多いことが示された。一方、KL の場面②の発話においては、「昇降調」「連続的上昇調」「平らな引き伸ばし調」「段状上昇調」が場面①より有意に多いことが示された。したがって、KL の日本語は、場面により出現する類型に相違が見られることが示唆された。

一方、NS の出現数の偏りも有意であった ( $\chi^2(5)=243.29, p<.01$ )。残差分析 (表 3-10) の結果、NS は場面①の発話において、「昇降調」「連続的上昇調」「平らな引き伸ばし調」が場面②より有意に多いことが示された。一方、NS の場面②の発話においては、「自然下降調」「段状上昇調」が場面①より有意に多いことが示された。しかし、KL で場面①②の間に有意差が見られた「弱伸ばし下降調」については、NS では場面①②の間で有意差が認められなかった。以上のことから、KL と NS とともに、場面①と場面②間のイ

ントネーションの出現傾向に相違が示されたが、その類型は KL と NS で異なることが示された。

他方、KL の韓国語にも発話場面の有意な偏りが見られた( $\chi^2(6)=221.21, p<.01$ )。残差分析の結果(表 3-11)、KL の韓国語においては、場面①で「ゆすり調」と「自然下降調」が場面②より有意に多いことが示された。また、場面②では「連続的上昇調」と「昇降調」が場面①より有意に多いことが示された。したがって、KL は韓国語においても発話場面による類型の相違が確認され、さらに、場面①で「ゆすり調」が、場面②で「連続的上昇調」が、場面①②間において有意差が見られた結果については、KL の日本語における場面①②間の有意差が示された結果と同様であることが確認された。

表 3-9 日本語における KL の句末イントネーションの類型別出現数 (%)

類型	KL 場面①			KL 場面②		
「自然下降調」	330	(36.18%)	▲	164	(30.60%)	▽
「ゆすり調」	132	(14.47%)	▲	0	(0.00%)	▽
「弱伸ばし下降調」	129	(14.14%)	▲	30	(5.60%)	▽
「昇降調」	244	(26.75%)	▽	202	(37.69%)	▲
「連続的上昇調」	43	(4.71%)	▽	91	(16.98%)	▲
「平らな引き伸ばし調」	18	(1.97%)	▽	23	(4.29%)	▲
「段状上昇調」	16	(1.75%)	▽	26	(4.85%)	▲
計	912	(100.00%)		536	(100.00%)	

表 3-10 日本語における NS の句末イントネーションの類型別出現数 (%)

類型	NS 場面①			NS 場面②		
「昇降調」	211	(39.07%)	▲	40	(10.58%)	▽
「連続的上昇調」	19	(3.52%)	▲	0	(0.00%)	▽
「平らな引き伸ばし調」	18	(3.33%)	▲	0	(0.00%)	▽
「弱伸ばし下降調」	8	(1.48%)		1	(0.26%)	
「自然下降調」	277	(51.30%)	▽	219	(57.94%)	▲
「段状上昇調」	7	(1.30%)	▽	118	(31.22%)	▲
計	540	(100.00%)		378	(100.00%)	

表 3-11 韓国語における KL の句末イントネーションの類型別出現数 (%)

類型	KL 場面①			KL 場面②		
「ゆすり調」	217	(60.11%)	▲	28	(14.97%)	▽
「自然下降調」	107	(29.64%)	▲	38	(20.32%)	▽
「平らな引き伸ばし調」	8	(2.22%)		3	(1.60%)	
「弱伸ばし下降調」	8	(2.22%)		2	(1.07%)	
「段状上昇調」	0	(0.00%)		7	(3.74%)	
「昇降調」	14	(3.88%)	▽	42	(22.46%)	▲
「連続的上昇調」	7	(1.94%)	▽	67	(35.83%)	▲
計	361	(100.00%)		187	(100.00%)	

### 3.3.5 文法形式別の句末イントネーション出現数

3.3.3 において、KL と NS の日本語に見られた句末イントネーションを KL と NS 間について  $\chi^2$  検定および残差分析を行った結果、KL と NS 間に類型別の出現数の相違が示された。したがって、調査協力者の母語により出現数に相違が見られることが確認されたと考えられる。

一方、句末イントネーションの各類型がどのような文法形式に出現し、またその出現傾向が調査協力者の母語により異なる可能性についても、検討を行う必要がある。そこで、表 3-12 (場面①) と表 3-13 (場面②) に句末イントネーションの各類型における出現数を文法形式別に整理した。文法形式の判定については、形態素解析ウェブアプリ UniDic-MeCab に、KL と NS の発話を文字化したデータを入力し、その結果を参考に筆者が表に整理した。KL・NS とともに、「助詞」、「接続助詞」、「接続詞」を中心に句末イントネーションの出現数が多かったことから、これらについては個別に示し、その他の「形容詞」「動詞」「副詞」「名詞」については、それぞれをまとめて示した。本章における文法形式は、厳密には「単語を文法的な性質の違いによる分類する (日本語記述文法研究会 2008a:83) 「品詞」に基づくものであるが、本章では「助詞」や「接続助詞」などにおいて「が」「は」「から」「て形」などを個別に示し、そこで得られた結果をもとに分析を行う。また、日本語教育研究において「文法形式」という用語が、比較的よく用いられている馴染みのある用語であることを踏まえ、採用した。

以下、3.3.5.1 より、句末イントネーションの各類型別に KL・NS 間の出現数について  $\chi^2$  検定を行った結果を述べる。

表 3-12 場面①における KL・NS の文法形式別句末イントネーションの出現数

母語	類型	文法形式																							計	
		けど	から	て形	し	に	も	と	名詞	副詞	形容詞	それで	は	が	を	でも	で	とか	動詞	の	か	たら	のに	そして		だから
KL	昇降調	12	41	21	0	24	14	16	7	5	0	1	38	28	17	0	8	2	1	0	0	3	2	3	1	244
	ゆすり調	4	13	12	1	8	5	6	10	2	2	2	9	32	2	12	8	0	1	2	0	0	1	0	0	132
	連続的上昇調	1	3	4	0	3	0	2	7	0	1	0	2	1	3	0	1	0	14	0	0	0	1	0	0	43
	段状上昇調	0	0	2	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	16
	自然下降調	3	9	14	0	21	14	9	62	22	7	4	15	47	27	10	10	4	24	21	0	0	1	5	1	330
	弱伸ばし下降調	1	1	5	0	10	4	6	30	14	4	0	2	8	11	3	0	1	17	11	0	0	0	1	0	129
	平らな引き伸ばし調	0	0	0	1	0	3	0	2	0	0	0	1	4	0	1	0	0	4	2	0	0	0	0	0	18
	計	21	67	58	2	68	40	40	118	43	14	7	67	120	66	26	27	7	62	40	0	3	5	9	2	912
NS	昇降調	46	31	29	24	19	8	7	7	4	0	5	5	2	2	5	5	3	1	1	0	4	1	0	2	211
	連続的上昇調	0	0	0	0	0	0	0	14	1	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	19
	段状上昇調	1	0	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	自然下降調	14	19	18	7	10	13	5	43	64	11	8	11	4	2	7	3	13	9	3	5	3	3	0	2	277
	弱伸ばし下降調	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	8
	平らな引き伸ばし調	0	0	0	0	0	0	0	6	5	0	4	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	18
	計	62	50	50	33	29	21	12	72	75	12	17	17	6	4	13	9	18	15	5	5	7	4	0	4	540

表 3-13 場面②における KL・NS の文法形式別句末イントネーションの出現数

母語	類型	文法形式																				計	
		て形	から	けれども	に	が	へ	と	で	の	を	は	名詞	動詞	副詞	たら	そして	～ですが	ので	また	まで		とか
KL	昇降調	43	3	0	55	0	0	12	21	9	2	39	17	1	0	0	0	0	0	0	0	0	202
	連続的上昇調	8	1	0	12	2	0	6	17	5	2	4	26	2	0	0	2	0	0	0	2	2	91
	段状上昇調	1	0	0	7	3	0	1	6	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	26
	自然下降調	2	1	0	15	5	0	2	18	8	4	11	83	4	2	0	6	0	0	0	3	0	164
	弱伸ばし下降調	0	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	25	1	0	0	0	0	0	0	0	0	30
	平らな引き伸ばし調	0	0	0	2	0	0	0	2	1	1	0	14	0	0	0	3	0	0	0	0	0	23
	計	54	5	0	92	10	0	22	64	26	12	56	165	8	2	0	11	0	0	0	5	4	536
NS	昇降調	13	2	4	11	0	0	1	0	0	0	2	2	0	0	2	1	1	1	0	0	0	40
	段状上昇調	30	7	4	33	0	5	3	6	5	1	2	12	3	0	1	3	1	1	1	0	0	118
	自然下降調	2	8	0	46	2	13	4	14	13	6	3	93	6	1	2	1	2	1	2	0	0	219
	弱伸ばし下降調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	計	45	17	8	90	2	18	8	20	18	7	7	108	9	1	5	5	4	3	3	0	0	378

### 3.3.5.1 昇降調

「昇降調」について、KL・NSの間に「昇降調」が見られる文法形式において相違が見られるか否かについて $\chi^2$ 検定を行った。まず、場面①（日本語）の発話において検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった( $\chi^2(12)=112.39, p<.01$ )。そこで、残差分析（表 3-14）を行った結果、KLは「は」「が」「を」において「昇降調」の出現数がNSより有意に多いことが示された。一方、NSは「けど」「し」において「昇降調」の出現数がKLより有意に多いことが示された。したがって、KLとNSの「昇降調」の出現形式について相違が見られることが示された。しかし、「から」「に」「て形」「と」「も」「で」「名詞」においてはKLとNSの間に有意差が認められなかった。

次に、場面②（日本語）の発話において $\chi^2$ 検定を行った結果、出現数の偏りが有意ではないという結果が示された( $\chi^2(4)=7.85, p=.115, n.s.$ )。KL・NSの間に統計的な有意差は示されなかったが、場面①におけるKL・NSの「昇降調」がどのような文法形式において出現しやすいかを明らかにすべく、文法形式別の「昇降調」の出現数をカウントした結果を整理した（表 3-15）。その結果、KL・NSともに「に」「て形」において「昇降調」の出現数が多く、KLは「は」「で」「名詞」「と」の順に出現数が多い傾向が見られた。

表 3-14 KL・NSの「昇降調」における文法形式別の出現数（%）（場面①）

文法形式	KL 日本語			NS 日本語		
は	38	(15.57%)	▲	5	(2.37%)	▽
が	28	(11.48%)	▲	2	(0.95%)	▽
を	17	(6.97%)	▲	2	(0.95%)	▽
から	41	(16.80%)		31	(14.69%)	
に	24	(9.84%)		19	(9.00%)	
て形	21	(8.61%)		29	(13.74%)	
と	16	(6.56%)		7	(3.32%)	
も	14	(5.74%)		8	(3.79%)	
で	8	(3.28%)		5	(2.37%)	
名詞	7	(2.87%)		7	(3.32%)	
けど	12	(4.92%)	▽	46	(21.80%)	▲
し	0	(0.00%)	▽	24	(11.37%)	▲
その他（副詞、それで、でも、とか、動詞等）	18	(7.38%)		26	(12.32%)	
計	244	(100.00%)		211	(100.00%)	

表 3-15 KL・NS の「昇降調」における文法形式別の出現数 (%) (場面②)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
に	55	(27.23%)	11	(27.50%)
て形	43	(21.29%)	13	(32.50%)
は	39	(19.31%)	2	(5.00%)
で	21	(10.40%)	0	(0.00%)
名詞	17	(8.42%)	2	(5.00%)
と	12	(5.94%)	1	(2.50%)
の	9	(4.46%)	0	(0.00%)
から	3	(1.49%)	2	(5.00%)
を	2	(0.99%)	0	(0.00%)
動詞	1	(0.50%)	0	(0.00%)
けれども	0	(0.00%)	4	(10.00%)
たら	0	(0.00%)	2	(5.00%)
そして	0	(0.00%)	1	(2.50%)
~ですが	0	(0.00%)	1	(2.50%)
ので	0	(0.00%)	1	(2.50%)
計	202	(100.00%)	40	(100.00%)

### 3.3.5.2 ゆすり調

次に、「ゆすり調」の結果を述べる。「ゆすり調」については、NS には 1 例も出現せず、KL のみに見られたことから、KL・NS 間の相違に対する  $\chi^2$  検定は行っていない。しかし、場面①における KL の「ゆすり調」がどのような文法形式において出現しやすいかを明らかにすべく、文法形式別の「ゆすり調」の出現数をカウントした結果を整理した (表 3-16)。その結果、「が」「から」「て形」「でも」「名詞」の順に出現数が多く、中でも「が」における出現数が最も多かった。「が」「から」「て形」は KL の「昇降調」(場面①) においても出現数が多かったが、「ゆすり調」においても出現数が多いという結果が示された。一方、場面②については、KL10 名を通して「ゆすり調」の出現数が 1 例のみであり、「とか」において見られた。

表 3-16 KL・NS の「ゆすり調」における文法形式別の出現数 (%) (場面①)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
が	32	(24.24%)	0	(0.00%)
から	13	(9.85%)	0	(0.00%)
て形	12	(9.09%)	0	(0.00%)
でも	12	(9.09%)	0	(0.00%)
名詞	10	(7.58%)	0	(0.00%)
は	9	(6.82%)	0	(0.00%)
に	8	(6.06%)	0	(0.00%)
で	8	(6.06%)	0	(0.00%)
と	6	(4.55%)	0	(0.00%)
も	5	(3.79%)	0	(0.00%)
けど	4	(3.03%)	0	(0.00%)
副詞	2	(1.52%)	0	(0.00%)
形容詞	2	(1.52%)	0	(0.00%)
それで	2	(1.52%)	0	(0.00%)
を	2	(1.52%)	0	(0.00%)
の	2	(1.52%)	0	(0.00%)
し	1	(0.76%)	0	(0.00%)
動詞	1	(0.76%)	0	(0.00%)
のに	1	(0.76%)	0	(0.00%)
計	132	(100.00%)	0	(0.00%)

### 3.3.5.3 連続的上昇調

「連続的上昇調」について、KL・NS の間に「連続的上昇調」が見られる文法形式において相違が見られるか否かについて  $\chi^2$  検定を行った。まず、場面① (日本語) の発話において検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった ( $\chi^2(2)=19.80, p<.01$ )。そこで、残差分析 (表 3-17) を行った結果、NS は「名詞」において「連続的上昇調」の出現数が KL より有意に多いことが示された。「動詞」については、KL が NS より出現数が多かったが、KL・NS 間に有意差は示されなかった。

場面②においては、「連続的上昇調」が NS には 1 例も出現せず、KL のみに見られたことから、KL・NS 間の相違に対する  $\chi^2$  検定は行っていない。しかし、場面②における KL の「連続的上昇調」がどのような文法形式において出現しやすいかを明らかにすべく、文法形式別の「連続的上昇調」の出現数をカウントした結果を整理した (表 3-18)。その結果、「名詞」「で」「に」「て形」の順に出現数が多く、中でも「名詞」における出現数が最も多かった。



表 3-17 KL・NS の「連続的上昇調」における文法形式別の出現数 (%) (場面①)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
動詞	14	(32.56%)	3	(15.79%)
名詞	7	(16.28%)	▽	14 (73.68%) ▲
その他 (けど、から、て形等)	22	(51.16%)	▲	2 (10.53%) ▽
計	43	(100.00%)	19	(100.00%)

表 3-18 KL・NS の「連続的上昇調」における文法形式別の出現数 (%) (場面②)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
名詞	26	(28.57%)	0	(0.00%)
で	17	(18.68%)	0	(0.00%)
に	12	(13.19%)	0	(0.00%)
て形	8	(8.79%)	0	(0.00%)
と	6	(6.59%)	0	(0.00%)
の	5	(5.49%)	0	(0.00%)
は	4	(4.40%)	0	(0.00%)
が	2	(2.20%)	0	(0.00%)
そして	2	(2.20%)	0	(0.00%)
とか	2	(2.20%)	0	(0.00%)
まで	2	(2.20%)	0	(0.00%)
を	2	(2.20%)	0	(0.00%)
動詞	2	(2.20%)	0	(0.00%)
から	1	(1.10%)	0	(0.00%)
計	91	(100.00%)	0	(0.00%)

#### 3.3.5.4 段状上昇調

「段状上昇調」について、KL・NS の間に「段状上昇調」が見られる文法形式において相違が見られるか否かについて  $\chi^2$  検定を行った。まず、場面①について  $\chi^2$  検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった ( $\chi^2(9)=18.28, p<.05$ )。しかし、出現数が KL・NS ともにあまり見られなかったことから、すべての形式において期待度数が 5 以下であった。そこで、KL・NS 間の相違に対する残差分析は行っていない。しかし、場面①における「連続的上昇調」がどのような文法形式において出現しやすいかを明らかにすべく、文法形式別の「連続的上昇調」の出現数をカウントした結果を整理した(表 3-19)。しかし、いずれの文法形式においても出現数が少ない。

次に、場面②(日本語)の発話において  $\chi^2$  検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった ( $\chi^2(2)=6.77, p<.05$ )。そこで、残差分析(表 3-20)を行った結果、NS は「て形」において「段状上昇調」の出現数が KL より有意に多いことが示された。「に」につ

いては、KL・NS間に有意差は示されなかった。

表 3-19 KL・NSの「段状上昇調」における文法形式別の出現数(%) (場面①)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
を	6	(37.50%)	0	(0.00%)
の	4	(25.00%)	0	(0.00%)
て形	2	(12.50%)	2	(28.57%)
に	2	(12.50%)	0	(0.00%)
と	1	(6.25%)	0	(0.00%)
動詞	1	(6.25%)	0	(0.00%)
名詞	0	(0.00%)	2	(28.57%)
とか	0	(0.00%)	1	(14.29%)
けど	0	(0.00%)	1	(14.29%)
し	0	(0.00%)	1	(14.29%)
計	16	(100.00%)	7	(100.00%)

表 3-20 KL・NSの「段状上昇調」における文法形式別の出現数(%) (場面②)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
に	7	(26.92%)	33	(27.97%)
て形	1	(3.85%)	30	(25.42%)
その他 (から、けれども、が等)	18	(69.23%)	55	(46.61%)
計	26	(100.00%)	118	(100.00%)

### 3.3.5.5 自然下降調

「自然下降調」について、KL・NSの間に「自然上昇調」が見られる文法形式において相違が見られるか否かについて $\chi^2$ 検定を行った。場面①(日本語)の発話において検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった( $\chi^2(18)=132.89, p<.01$ )。そこで、残差分析(表 3-21)を行った結果、KLは「が」「を」「動詞」「の」において「自然下降調」の出現数がNSより有意に多いことが示された。しかし、NSは「副詞」「から」「とか」「けど」において「自然下降調」の出現数がNSより有意に多いことが示された。一方、「名詞」「に」「は」「て形」「も」「でも」「で」「と」「形容詞」「それで」については、KL・NSの間に有意差は見られなかった。

場面②(日本語)の発話において検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった( $\chi^2(6)=29.26, p<.01$ )。そこで、残差分析(表 3-22)を行った結果、KLは、「は」において「自然下降調」の出現数がNSより有意に多いことが示された。しかし、NSは「に」

「へ」において「自然下降調」の出現数が KL より有意に多いことが示された。一方、「名詞」「で」「の」については、KL・NS の間に有意差は見られなかった。

表 3-21 KL・NS の「自然下降調」における文法形式別の出現数 (%) (場面①)

文法形式	KL 日本語			NS 日本語		
が	47	(14.24%)	▲	4	(1.44%)	▽
を	27	(8.18%)	▲	2	(0.72%)	▽
動詞	24	(7.27%)	▲	9	(3.25%)	▽
の	21	(6.36%)	▲	3	(1.08%)	▽
名詞	62	(18.79%)		43	(15.52%)	
に	21	(6.36%)		10	(3.61%)	
は	15	(4.55%)		11	(3.97%)	
て形	14	(4.24%)		18	(6.50%)	
も	14	(4.24%)		13	(4.69%)	
でも	10	(3.03%)		7	(2.53%)	
で	10	(3.03%)		3	(1.08%)	
と	9	(2.73%)		5	(1.81%)	
形容詞	7	(2.12%)		11	(3.97%)	
それで	4	(1.21%)		8	(2.89%)	
副詞	22	(6.67%)	▽	64	(23.10%)	▲
から	9	(2.73%)	▽	19	(6.86%)	▲
とか	4	(1.21%)	▽	13	(4.69%)	▲
けど	3	(0.91%)	▽	14	(5.05%)	▲
その他 (そして、だから等)	7	(2.12%)	▽	20	(7.22%)	▲
計	330	(100.00%)		277	(100.00%)	

表 3-22 KL・NS の「自然下降調」における文法形式別の出現数 (%) (場面②)

文法形式	KL 日本語			NS 日本語		
は	11	(6.71%)	▲	3	(1.37%)	▽
名詞	83	(50.61%)		93	(42.47%)	
で	18	(10.98%)		14	(6.39%)	
の	8	(4.88%)		13	(5.94%)	
に	15	(9.15%)	▽	46	(21.00%)	▲
へ	0	(0.00%)	▽	13	(5.94%)	▲
その他 (副詞、そして等)	29	(17.68%)		37	(16.89%)	
計	164	(100.00%)		219	(100.00%)	

### 3.3.5.6 弱伸ばし下降調

「弱伸ばし下降調」について、KL・NS の間に「弱伸ばし下降調」が見られる文法形式において相違が見られるか否かについて  $\chi^2$  検定を行った。場面① (日本語) の発話

において検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった( $\chi^2(9)=17.43, p<.05$ )。そこで、残差分析(表 3-23)を行った。しかし、「その他」の項目を除外したいずれの文法形式においても、KL・NS 間に有意な残差が認められなかった。NS における「弱伸ばし下降調」は 8 例のみであり、出現数が少なかったことから、両者間に有意差が認められなかったと考えられる。一方、KL の「弱伸ばし下降調」における出現数は「名詞」「動詞」「副詞」「を」「の」「に」の順に多いという結果が示された。

場面②(日本語)の発話において検定を行った結果、出現数の偏りが有意ではないという結果が示された( $\chi^2(1)=.20, p=.656, n.s.$ )。KL・NS の間に統計的な有意差は示されなかったが、場面①における KL・NS の「弱伸ばし下降調」がどのような文法形式において出現しやすいかを明らかにすべく、文法形式別の「弱伸ばし下降調」の出現数をカウントした結果を整理した(表 3-24)。その結果、KL は、「名詞」(30 例中 25 例)における出現数が最も多く、他の文法形式においてはほとんど見られなかった。NS は 1 例のみが「名詞」において見られた。

表 3-23 KL・NS の「弱伸ばし下降調」における文法形式別の出現数(%) (場面①)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
名詞	30	(23.26%)	0	(0.00%)
動詞	17	(13.18%)	1	(12.50%)
副詞	14	(10.85%)	1	(12.50%)
を	11	(8.53%)	0	(0.00%)
の	11	(8.53%)	0	(0.00%)
に	10	(7.75%)	0	(0.00%)
が	8	(6.20%)	0	(0.00%)
と	6	(4.65%)	0	(0.00%)
て形	5	(3.88%)	1	(12.50%)
その他(も、形容詞、は等)	17	(13.18%)	5	(62.50%) ▲
計	129	(100.00%)	8	(100.00%)

表 3-24 KL・NS の「弱伸ばし下降調」における文法形式別の出現数(%) (場面①)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
名詞	25	(83.33%)	1	(100.00%)
と	1	(3.33%)	0	(0.00%)
の	1	(3.33%)	0	(0.00%)
を	1	(3.33%)	0	(0.00%)
に	1	(3.33%)	0	(0.00%)
動詞	1	(3.33%)	0	(0.00%)
計	30	(100.00%)	1	(100.00%)

### 3.3.5.7 平らな引き伸ばし調

「平らな引き伸ばし調」について結果を述べる。KL・NSの間に「平らな引き伸ばし調」が見られる文法形式において相違が見られるか否かについて $\chi^2$ 検定を行った。まず、場面①について $\chi^2$ 検定を行った結果、出現数の偏りが有意であった( $\chi^2(9)=22.13$ ,  $p<.01$ )。しかし、出現数がKL・NSともにあまり見られなかったことから、すべての形式において期待度数が5以下であった。そこで、KL・NS間の相違に対する残差分析は行っていない。しかし、場面①における「平らな引き伸ばし調」がどのような文法形式において出現しやすいかを明らかにすべく、文法形式別の出現数をカウントした結果を整理した(表3-25)。しかし、いずれの文法形式においても出現数が少ない。

場面②においては、「平らな引き伸ばし調」がNSには1例も出現せず、KLのみに見られたことから、KL・NS間の相違に対する $\chi^2$ 検定は行っていない。しかし、場面②におけるKLの「平らな引き伸ばし調」がどのような文法形式において出現しやすいかを明らかにすべく、文法形式別の「平らな引き伸ばし調」の出現数をカウントした結果を整理した(表3-26)。その結果、KLは、「名詞」(23例中14例)における出現数が最も多く、他の文法形式においてはほとんど見られなかった。

表3-25 KL・NSの「平らな引き伸ばし調」における文法形式別の出現数(%) (場面①)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
が	4	(22.22%)	0	(0.00%)
動詞	4	(22.22%)	1	(5.56%)
も	3	(16.67%)	0	(0.00%)
名詞	2	(11.11%)	6	(33.33%)
の	2	(11.11%)	1	(5.56%)
し	1	(5.56%)	0	(0.00%)
は	1	(5.56%)	1	(5.56%)
でも	1	(5.56%)	0	(0.00%)
副詞	0	(0.00%)	5	(27.78%)
それで	0	(0.00%)	4	(22.22%)
計	18	(100.00%)	18	(100.00%)

表 3-26 KL・NS の「平らな引き伸ばし調」における文法形式別の出現数 (%) (場面②)

文法形式	KL 日本語		NS 日本語	
名詞	14	(60.87%)	0	(0.00%)
そして	3	(13.04%)	0	(0.00%)
に	2	(8.70%)	0	(0.00%)
で	2	(8.70%)	0	(0.00%)
の	1	(4.35%)	0	(0.00%)
を	1	(4.35%)	0	(0.00%)
計	23	(100.00%)	0	(0.00%)

### 3.4 考察

まず、KL の日本語と韓国語を対照した結果について述べる。「自然下降調」(場面①②)「昇降調」(場面①②)「弱伸ばし下降調」(場面①②)「連続的上昇調」(場面①)「段状上昇調」(場面①)の出現数が KL の韓国語より日本語で有意に多いことが示された。一方、「ゆすり調」(場面①②)「連続的上昇調」(場面②)の出現数が KL の韓国語より日本語で有意に多いことが示された。この結果は、先行研究において「有無やパターンは韓国語と日本語でほぼ一致」(李恵蓮 1999:72)したこととは異なると言えるが、その要因として以下の3点が考えられる。

第一に、李恵蓮(1999)の3分類を再考し、8分類による分析を行った結果、先行研究では一つの類型にまとめられ指摘されなかった類型の相違が浮き彫りとなり、学習者の韓国語と日本語が異なることが示されたと考えられる。特に、「昇降調」と「ゆすり調」は、先行研究では「上昇下降調」(李恵蓮 1999)や「昇降調」<sup>29</sup>(崔泰根 2005)として一つの類型とされ、区別されなかったが、本研究ではこれらを区別したことで、「昇降調」は KL の韓国語より日本語で出現数が多く、「ゆすり調」は KL の日本語より韓国語で出現数が多いという結果が示された。また、「連続的上昇調」と「段状上昇調」についても、先行研究においては「上昇調」(李恵蓮 1999、崔泰根 2005)として一つの類型とされ区別されなかったが、本研究では「連続的上昇調」と「段状上昇調」を区別したことで、「段状上昇調」は場面①において KL の韓国語より日本語で出現数が多く、「連続的上昇調」は場面②において KL の日本語より韓国語で出現数が多いという結果が示された。

<sup>29</sup> 崔泰根(2005)は、「フレーズ末音節のみが局所的・規則的に上昇後下降するパタン(崔泰根 2005:26)」を「昇降調」としているが、ピッチの上昇後下降のみに注目しており、本研究におけるピッチの上昇のタイミングにより「昇降調」と「ゆすり調」については区別していない。

したがって、KL の日本語と韓国語の間で出現する類型は相違しており、母語の影響は一律ではなく類型により異なると考えられ、先行研究とは異なる結果が得られたと言える。「母語の影響」である可能性が大きいと考えられる類型については、本研究の発話データにおける発話場面を設定する上で、KL の韓国語場面①においては「ゆすり調」が、場面②においては「連続的上昇調」が見られ、KL の日本語に母語の影響が見られる場合、「ゆすり調」と「連続的上昇調」が転移する可能性があると予想したが、「ゆすり調」と「連続的上昇調」が KL の日本語に見られたことから、予想した結果が示された。さらに、「ゆすり調」と「連続的上昇調」は KL の日本語より韓国語において出現数が有意に多く、NS の日本語より KL の日本語において有意に出現数が多いことが示された。したがって、この 2 つの類型については、母語の影響である可能性が高いと考えられる。

一方、「ゆすり調」(場面①)と「連続的上昇調」(場面②)が出現した文法形式を見ると、「ゆすり調」は、格助詞「が」<sup>30</sup>(132 例中 32 例, 24.24%)において最も出現数が多く、「あなたが」「私が」「君が」などの 32 例中 16 例が聞き手や話し手自身と格助詞「が」に出現していた。これは、場面①のロールプレイの発話内容が、親密な話者間で聞き手を責めたり、話し手が困っていることを積極的に伝えたりする発話内容であったことから、強調を示す「ゆすり調」と「あなた」や「私」に出現しやすいかたものと考えられる。その他、原因・理由を示す「から」<sup>31</sup>(132 例中 13 例, 9.85%)、原因・理由や継起的な関係を示す「て形」<sup>32</sup>(132 例中 12 例, 9.09%)、逆接の接続表現である「でも」<sup>33</sup>(132 例中 12 例, 9.09%)、「名詞」<sup>34</sup>(132 例中 10 例, 7.58%)等において出現することが示された。したがって、「ゆすり調」は、KL の韓国語だけでなく日本語においても見られ、韓国語において「a special emphasis to the main points of the story (話の重要なポイントを特に強調) (Park2003:272 ( ) は本論筆者訳)」する機能を持つ

<sup>30</sup> 「が」 KL の例：「あなたが(ゆすり調)たばこやめてほしい」「たばこの臭いが(ゆすり調)あがるって」「私が(ゆすり調)たばこの臭いが本当に嫌だ」

<sup>31</sup> 「から」 KL の例：「臭いが全部外で出るから(ゆすり調)だめだと思うよ」「健康が悪いになるから(ゆすり調)やめてください」

<sup>32</sup> 「て形」 KL の例：「部屋で吸って(ゆすり調)吸って寝て(ゆすり調)煙が」「人が私に言って(ゆすり調)あなたの部屋で」

<sup>33</sup> 「でも」 KL の例：「でも(ゆすり調)こんな誤解をもらって」「でも(ゆすり調)わたしは」

<sup>34</sup> 「名詞」 KL の例：「あなた(ゆすり調)たばこの臭いします」「病院(ゆすり調)行った」「窓開けても私(ゆすり調)目とか首でも痛くて」

ことが指摘されているように、原因・理由、継起的な関係、逆接などを示し強調されやすい助詞や接続表現等において出現しやすいと考えられる。

「連続的上昇調」については、場面②において「名詞<sup>35)</sup>」(91例中26例, 28.57%)における出現数が最も多かった。KLの「連続的上昇調」が「名詞」に出現数が多かったのは、日本語の「擬似疑問イントネーション」(井上1997)が聞き手に判断を委ねる(郡2003)機能を持つことと通じると考えられる。今回の調査協力者であるKLは日本語のレベルがあまり高いとは言えず、言いよどみや文法的な誤用、フィラーなどが頻出していた。そのため、日本語の語彙に対し「これで問題ないか」という不安や確認から、名詞に「連続的上昇調」を付けて発話したと考えられる。

さらに、「連続的上昇調」は、場所や手段を示す助詞「で<sup>36)</sup>」(91例中17例, 18.68%)や時間や場所を示す助詞「に<sup>37)</sup>」(91例中12例, 13.19%)継起的な関係を示す「て形<sup>38)</sup>」(91例中8例, 8.79%)等において出現することが示された。「連続的上昇調」は、韓国語において、発話が継続することを表し、「H% signals relatively high correlation between the current and the subsequent utterance (H%は現在話している発話と後続の発話が相対的に密接な関係であることを示す)(Park 2003:130、()は本論筆者訳)」ことが指摘されている。場面②の発話におけるKL9の発話例を見ると、「9時(自然下降調)半には(昇降調)大阪で(連続的上昇調)新幹線で(昇降調)広島に(連続的上昇調)移動します」のように、後続する文における「移動する」という動作と「新幹線で」という手段、「大阪で」という場所が密接に関係していることから、発話における動作の関係が密接である場合、手段や場所、継起的な関係を示す助詞に「連続的上昇調」が現れやすいと考えられる。

第二に、句末イントネーションを学習者が学習し使用している可能性が指摘できる。金瑜眞(2013)は、句末イントネーションに対する韓国人学習者の内省についてインタビュー調査を行った結果、「日本語らしい特徴」とのコメントが得られたことを報告し

---

<sup>35)</sup> 「名詞」KLの例:「集合(連続的上昇調)」「大阪(連続的上昇調)」「日曜日(連続的上昇調)」「11時(連続的上昇調)」

<sup>36)</sup> 「で」KLの例:「新幹線で(連続的上昇調)」「ホテルで(連続的上昇調)」「ロビーで(連続的上昇調)」「関西空港で(連続的上昇調)」

<sup>37)</sup> 「に」KLの例:「9時に(連続的上昇調)」「11時に(連続的上昇調)」「ホテルに(連続的上昇調)」「広島に(連続的上昇調)」

<sup>38)</sup> 「て形」KLの例:「工場に行って(連続的上昇調)」「訪問して(連続的上昇調)」「移動して(連続的上昇調)」



ている。本章の調査結果、KLの「自然下降調」「昇降調」「弱伸ばし下降調」「連続的上昇調」「段状上昇調」の出現数が韓国語より日本語において出現数が有意に多いという結果が示された。一方、このうち、「昇降調」「自然下降調」「段状上昇調」はKLの日本語よりNSの日本語において出現数が有意に多かったことから、学習者が「昇降調」「自然下降調」「段状上昇調」を日本語として学習し能動的に使用した場合、韓国語より日本語で出現数が多い結果も説明できる。

KLの場面①において「昇降調」が出現した文法形式を見ると、原因・理由を示す「から<sup>39)</sup>」(244例中41例, 16.80%)において最も出現数が多かったが、「から」については、KLとNSの間で出現数に有意差が示されなかった。また同様に、主体や相手を表す助詞「に<sup>40)</sup>」、原因・理由や継起的な関係を示す「て形<sup>41)</sup>」等においても、KL・NS間に有意差が見られなかった。したがって、KLの「昇降調」が「から」「に」「て形」において見られる場合は、NSも使用していることから、習得された状態として見なすことが可能だと考えられる。さらに、NSは逆接や前置きの「けど<sup>42)</sup>」と並列節の「し<sup>43)</sup>」についても「昇降調」をKLより有意に多用していたが、KLにはあまり見られなかった。「けど」「し」について、KL(「けど」912例中21例、「し」912例中2例)はNS(「けど」540例中62例、「し」540例中33例)より出現数自体が少ないことから、「昇降調」の習得より、「けど」「し」の表現の使用自体が習得されていないものと考えられる。

一方、KLの日本語においては、主題を表す「は<sup>44)</sup>」、主体を示す「が<sup>45)</sup>」、対象を示

---

<sup>39)</sup> 「から」 KLの例：「心配になるから(昇降調)」「たばこが原因だから(昇降調)」「友達だから(昇降調)」、NSの例：「言われちゃったから(昇降調)」「一緒に住んでるから(昇降調)」「言われたから(昇降調)」

<sup>40)</sup> 「に」 KLの例：「あなたに(昇降調)」「私に(昇降調)」、NSの例：「私に(昇降調)」「友達とか家族に(昇降調)」「お医者さんに(昇降調)」

<sup>41)</sup> 「て形」 KLの例：「たばこを吸って(昇降調)」「臭いがして(昇降調)」「よく咳をして(昇降調)」、NSの例：「臭いだけじゃなくて(昇降調)」「煙が届いちゃって(昇降調)」

<sup>42)</sup> 「けど」 NSの例：「部屋で別に吸ってもらうのは構わないけど(昇降調)」「寝たばことか」「気持ち悪くなっちゃったりするんだけど(昇降調)」「で前から思ってたんだけど(昇降調)ちよっと控えたらどうかなと思ってたばこ」

<sup>43)</sup> 「し」 NSの例：「私の服もたばこの臭いするし(昇降調)それを私の同僚に言われて」「体に影響してると思うし(昇降調)それがね一番心配なんだよ」

<sup>44)</sup> 「は」 KL例：「私は(昇降調)たばこを」「あなたは(昇降調)たばこ吸うときに」「今は(昇降調)今度は(昇降調)本当にたばこを吸わないと思うよ」

<sup>45)</sup> 「が」 KL例：「医者さんが(昇降調)タバコの煙が」「他の人が(昇降調)あなたに」

す「を<sup>46</sup>」において NS の日本語より出現数が有意に多いという結果が示された。「は」「が」「を」はいずれも助詞の直前名詞と接続することが多く、KL の発話例を見ると、「ですから(「昇降調」)、あなた一は(「昇降調」)、全部うーん(フィラー)、ぜんぶ(「自然下降調」)、ししまい(言いよどみ)、全部しま(言いよどみ)、約束を(「昇降調」) (KL7 場面①例) のように、「一文節ごとに区切って立て直し、たどたどしく話す学習者の発音の癖」(松崎 2001:239) に伴い、フィラーや言いよどみのような非流暢性を示す要素とともに「昇降調」が出現している。したがって、日本語のイントネーションを習得したことにより出現しているというより、目標言語である日本語の流暢性がまだ十分ではないために、「は」「が」「を」において「昇降調」が頻出したと言える。一方、NS は「昇降調」だけでなく、「は」「が」「を」の出現数そのものが KL より少なかった (NS 「は」 540 例中 17 例、「が」 540 例中 6 例、「を」 540 例中 4 例、KL 「は」 912 例中 67 例、「が」 912 例中 120 例、「を」 912 例中 66 例)。したがって、NS は「昇降調」に限らず、こうした文節ごとに区切りを入れ発話していないために、「は」「が」「を」の出現数そのものが少なかったと考えられる。場面②における「昇降調」の文法形式別の出現数については、KL・NS 間に有意差が示されなかったが、KL は場面①同様、時間や場所を示す「に<sup>47</sup>」(202 例中 55 例, 27.23%) 継起的な関係を示す「て形<sup>48</sup>」(202 例中 43 例, 21.29%) 主題を示す「は<sup>49</sup>」(202 例中 39 例, 19.31%) 等において出現数が多いことが示された。

「自然下降調」が出現した文法形式を見ると、場面①においては、主体を示す「が<sup>50</sup>」対象を示す「を<sup>51</sup>」、「動詞<sup>52</sup>」、名詞修飾節の主体である「の<sup>53</sup>」において、KL の「自

46 「を」 KL 例：「私はたばこを(昇降調)あなたに」「たばこを(昇降調)吸ってない」

47 「に」 KL 例：「午後 2 時に(昇降調)ホテルで」「4 時に(昇降調)取引先の A 社でミーティングがあります」

48 「て形」 KL 例：「工場に行って(昇降調)昼ごはんの約束があります」「関西空港へ到着して(昇降調)12 時には大阪心斎橋で昼ごはんがあります」

49 「は」 KL 例：「日曜日には(昇降調)9 時に」「土曜日は(昇降調)時から仁川空港で集合して」

50 「が」 KL 例：「火事が(自然下降調)ひいたんでしょ?」「火事が(自然下降調)あるかもしれない」「影響が(自然下降調)多い」

51 「を」 KL 例：「たばこを(自然下降調)吸わない?」「そんな注意を(自然下降調)される?」「たばこを(自然下降調)多い吸ってそんな誤解が出るんだと思う」

52 「動詞」 KL 例：「たばこ吸ってる(自然下降調)と思うよ」「吸わない(自然下降調)とほしい」「たばこやめる(自然下降調)言ったのに」「気を付けても発生している(自然下降調)のがあったあるんだと思うよ」

53 「の」 KL 例：「私の(自然下降調)健康がちょっと」「うちの(自然下降調)リビングル

然下降調」の出現数が NS より有意に多いことが示された。一方、NS の「自然下降調」の出現数は「副詞<sup>54)</sup>、原因・理由を示す「から<sup>55)</sup>、例を示す並列助詞の「とか<sup>56)</sup>、逆接や前置きを示す「けど<sup>57)</sup>」において、KL より有意に多い結果が示された。「自然下降調」は日本語における典型的な類型であり、NS は場面① (540 例中 277 例, 51.30%) 場面② (378 例中 219 例, 57.94%) とともに、句末イントネーションの出現数の 50%以上を「自然下降調」が占めている。したがって、「自然下降調」の使用そのものが NS とは区別される KL の特徴とは言えない。しかし、「から」「けど」の場合、名詞と直接接続するのではなく、「動詞・イ形容詞の非過去形・過去形、ナ形容詞の語幹・名詞+「だ/だった/である/であったに接続 (日本語記述文法研究会 2008c : 122, 258)」するのに対し、「が」「を」「の」の場合、その直前が名詞のみで接続することが多い。KL の場合、「それは多分(自然下降調)あなたが(自然下降調)たばこを(自然下降調)吸っているから (KL2 場面①例)」のように、NS も使用する「自然下降調」を用いるのにしても、イントネーション句末に「自然下降調」とともにポーズを伴っており、一文を何回も区切り話していることが多い。KL は「動詞」についても「自然下降調」が NS より有意に多かったが、「たばこ吸ってる(自然下降調)と思うよ (KL1 場面①例)」のように、一般に文節の切れ目とは言えないところで、「自然下降調」とポーズを伴い発話していた。一方、NS は「副詞」や並列助詞の「とか」においても KL より「自然下降調」が有意に多かった。しかし、「副詞」と「とか」については、句末イントネーションより表現の習得そのものが結果に影響した可能性がある。KL より NS の「副詞」(KL : 912 例中 43 例, 4.71%、NS : 540 例中 75 例, 13.89%)、「とか」(「KL : 912 例中 7 例, 0.77%、NS : 540 例中 18 例, 3.33%」)の表現そのものの使用数が多かったことから、KL・NS 間に有意差が見られたと考えられる。

また、場面②については、主題の「は<sup>58)</sup>」において KL の「自然下降調」の出現数が

---

ームでも」「あなたの(自然下降調)健康な問題でしょ？」

54 「副詞」NS 例：「やっぱり(自然下降調)」「けっこう(自然下降調)」「ちょっと(自然下降調)」

55 「から」NS 例：「ずっと吸ってるから(自然下降調)」「たばこの臭いすごい消えないから(自然下降調)」「たばこの臭い嫌いだから(自然下降調)」

56 「とか」NS 例：「だから服とか(自然下降調)」「体とか(自然下降調)」「臭いとか(自然下降調)」

57 「けど」NS 例：「何度も言ってるけど(自然下降調)」「すごい言い方悪いけど(自然下降調)」「やめるとか言ってたけど(自然下降調)」

58 「は」KL 例：「9時には(自然下降調)」「8時には(自然下降調)」「次は(自然下降

NSより有意に多く、時間や場所を示す「に<sup>59)</sup>」と場所を示す「へ<sup>60)</sup>」について、NSの「自然下降調」の出現数がKLより有意に多かった。「は」については、場面②においてNSが「は」の表現自体をあまり使用していないことが影響した可能性がある。KLの場面②における計536例の句末イントネーション中56例が「は」において見られたのに対し、NSは計378例中、「は」が見られたのは7例のみであった。KLは「は」を「9時には(自然下降調)」のように、出張の日程における時間を説明する上で多用していたが、NSは「9時に(自然下降調)」のように、「は」を使用せず、「に」で「自然下降調」を用いていた。その結果、「に」における「自然下降調」の出現数がKLよりNSで有意に多かったと考えられる。一方、KLは「に」において、92例中55例が「昇降調」であり、「昇降調」を多用している傾向が見られた。また、NSは「へ」においてKLより「自然下降調」の出現数が多かったが、KLには「へ」の使用そのものが句末イントネーションのいずれの類型においても1例も見られなかったことから、「へ」自体をあまり習得していないと考えられる。

したがって、KLは「自然下降調」の出現数が韓国語より日本語で多いことから、日本語として自然な類型として習得している可能性はあるものの、「は」「が」「を」「の」のような名詞と接続する助詞に多く用いており、一文をNSに比べ細かく区切って発話していることから出現数が多くなっていると言える。

「段状上昇調」においては、場面①においてKLの日本語より韓国語で出現数が有意に多いことが示されたが、KLの場面①における計912例の句末イントネーション中16例のみであった。また、場面①で出現した文法形式を見ると、いずれの文法形式においても出現数が少なかったことから、NSとの有意差が示されなかったが、場面①においてNS(540例中7例)も「段状上昇調」があまり見られなかったためだと考えられる。なお、場面②においては、KLの日本語と韓国語の間で「段状上昇調」の出現数に有意差が示されなかった。したがって、「段状上昇調」については、場面①においてKLの韓国語より日本語で出現数が多かったものの、その出現数が少なく、NSも場面①であまり「段状上昇調」を使用していないことから、日本語のイントネーションを習得し使用し

---

調)」

<sup>59)</sup> 「に」 NS例：「9時に(自然下降調)」 「11時に(自然下降調)」 「A社に(自然下降調)」

<sup>60)</sup> 「へ」 NS例：「広島へ(自然下降調)」 「大阪へ(自然下降調)」 「関西空港へ(自然下降調)」

ているとは言えない。

以上から、「昇降調」「自然下降調」については、KL の韓国語より日本語で出現数が有意に多く、NS も使用する類型であることから習得によりイントネーションを日本語で多用している可能性がある。特に、「昇降調」の場合、「から」や「て形」において KL・NS 間の出現数に有意差が見られず、NS も使用する形式であることから、習得されたものだと見なすことができる。しかし、KL は、「は」「が」「を」「の」のような格助詞において「昇降調」「自然下降調」の出現数が NS より有意に多く、一文を細かく区切って発話していた。したがって、KL はまだ「昇降調」「自然下降調」を十分に習得しているとは言えず、日本語に対する非流暢性から NS が使用しない文法形式においても句末イントネーションを多用していると言える。

第三に、「弱伸ばし下降調」「ゆすり調」の出現について KL の日本語に対する非流暢性と関わっている可能性が考えられる。「弱伸ばし下降調」は、場面①②ともに KL の韓国語より日本語において出現数が有意に多かったが、NS (540 例中 8 例) にはほとんど見られなかった。「弱伸ばし下降調」は持続時間とともにピッチが減少し、音圧が弱い聴覚印象があった。また、「弱伸ばし下降調」が KL の日本語に見られた文法形式を見ると、場面① (129 例中 30 例, 23.26%) 場面② (30 例中 25 例, 83.33%) ともに「名詞<sup>61</sup>」が最も多かった。また、場面①においては「動詞<sup>62</sup>」「副詞<sup>63</sup>」について「名詞」の次に出現数が多く、他の類型に比べ助詞や接続表現についてはあまり見られなかった。「弱伸ばし下降調」が「名詞」「動詞」「副詞」などを中心に出現することは、KL の日本語に対する非流暢性が関与していると考えられる。「名詞」「動詞」「副詞」など、日本語の表現における KL の自信の欠如から、ピッチと声の大きさがともに減少する「弱伸ばし下降調」を使用した可能性が高い。その点「連続的上昇調」が KL の場面②において「名詞」に出現数が最も多かった結果と共通すると言える。KL の日本語に対するこうした自身の欠如から考えると、母語話者である NS には「弱伸ばし下降調」があまり見られなかった結果も説明できる。

---

<sup>61</sup> 「名詞」KL 例：「このせい(弱伸ばし下降調)ではないか」「私今(弱伸ばし下降調)のどと」「臭い(弱伸ばし下降調)するから」「関西(弱伸ばし下降調)空港で」

<sup>62</sup> 「動詞」KL 例：「あなたを痛くする(弱伸ばし下降調)から」「家まで入る(弱伸ばし下降調)から」

<sup>63</sup> 「副詞」KL 例：「とても(弱伸ばし下降調)うん危ないです」「ちょっと(弱伸ばし下降調)誤解だったから」「全然(弱伸ばし下降調)約束を」

一方、KLの「ゆすり調」は、韓国語より日本語で出現数が有意に少なかったが、「ゆすり調」はNSの日本語には見られない類型であることから、KLが日本語のイントネーションを習得したことにより、使用しなかった可能性がある。しかし、たどたどしく話す学習者なら、目標言語で母語のように自身の感情や発話意図を示し、強調を意図する「ゆすり調」を多用することが困難であった可能性もある。したがって、日本語における「ゆすり調」の出現にも目標言語の習得や非流暢性が関与している可能性があると考えられる。

次に、KLとNSの日本語を対照した結果を考察する。まず、KLは「弱伸ばし下降調」(場面①②)、「ゆすり調」(場面①)、「昇降調」(場面②)、「連続的上昇調」(場面②)、「平らな引き伸ばし調」(場面②)がNSより有意に多く現れた。「弱伸ばし下降調」は上述の通り非流暢性が関わる可能性があるが、「平らな引き伸ばし調」も延伸を伴う点で非流暢性が関与していると推測できる。しかし、「平らな引き伸ばし調」は、上村(1989)が指摘するように、音声的・機能的に「えー」「えーと」などの日本語のフィラーと類似し、NSも使用するものである。したがって、「平らな引き伸ばし調」についてはKLが日本語のイントネーションを習得し使用している可能性もある。一方、場面①ではKL(912例中18例, 1.97%)・NS(540例中18例, 3.33%)ともに「平らな引き伸ばし調」の出現数が少なく、見られた文法形式についても出現数が少なかったために、有意差が見られなかった。また、場面②ではNSには「平らな引き伸ばし調」が1例も見られなかった。一方、KL(536例中23例, 4.29%)には、「平らな引き伸ばし調」が23例見られたが、その多くが名詞(23例中14例, 60.87%)であった。「弱伸ばし下降調」においても、名詞における出現数が最も多かったことを考えると、延伸を伴う「弱伸ばし下降調」「平らな引き伸ばし調」とともに、目標言語である日本語に対する非流暢性が出現の原因になってると考えられる。その他、「ゆすり調」「連続的上昇調」はKLの日本語と韓国語の対照において韓国語で有意に出現数が多かったが、NSにはほとんど見られず、KLの出現数がNSより有意に多かったことから、母語の影響である可能性が高いと言える。

一方、KLは、「自然下降調」(場面①②)、「昇降調」(場面①)、「段状上昇調」(場面②)の出現数がNSより有意に少なかった。NSは、場面①②(場面①: 540例中277例, 51.30% 場面②: 378例中219例, 57.94%)とともに、句末イントネーションの出現数の50%以上を「自然下降調」が占めており、「自然下降調」の出現数が最も多かった。

これに対し、KLは場面①(912例中330例, 36.18%)、場面②(536例中164例, 30.60%)ともに「自然下降調」が占める割合がNSより低く、場面②においては「昇降調」(536例中202例, 37.69%)より「自然下降調」(536例中164例, 30.60%)の出現数が少なかった。したがって、この点においてKLにおける「自然下降調」の習得はまだ十分であるとは言えない。

「段状上昇調」が出現した文法形式については、場面①では、KL(912例中16例)・NS(540例中7例)ともに出現数が少なかったため、残差分析を行っていない。一方、場面②では、継起的な関係を示す「て形<sup>64</sup>」における「段状上昇調」の出現数がKLよりNSで有意に多かった。「段状上昇調」は、母語話者の発話において改まり度が高い場面において出現しやすいと指摘されているが(佐々木(原)2004)、それが本調査においても確認されたと言える。一方、上司との会話という比較的改まり度が高い場面において、KLは、「て形」を「昇降調」(54例中43例)で発話しており、「段状上昇調」(54例中1例)をまだ十分に習得できていない。

「昇降調」については、場面①②で異なる結果が示された。場面①ではKLがNSより「昇降調」の出現数が有意に少なかったが、場面②ではKLがNSより「昇降調」の出現数が有意に多かった。つまり、KLはNSが「昇降調」を多用する場面①において、「昇降調」ではなく「ゆすり調」や「弱伸ばし下降調」が見られたことから、NSと比較し「昇降調」の出現数が有意に低かったと言える。一方、場面②では、NSは上司との会話という発話場面を考慮し「昇降調」ではなく「段状上昇調」を使用していたが、KLは「段状上昇調」の習得がまだ不十分であるために「昇降調」を多用していたと言える。この点、KLの「昇降調」の出現には、発話場面を考慮してイントネーションを使用する能力がまだ不十分と言えるため、以下発話場面間の比較を踏まえ、考察を述べる。

最後に、発話場面による影響について分析した結果を考察する。まず、KLの日本語においては、場面①で「自然下降調」「ゆすり調」「弱伸ばし下降調」が場面②より有意に多く、場面②で「昇降調」「連続的上昇調」「平らな引き伸ばし調」「段状上昇調」が場面①より有意に多かった。一方、NSの日本語においては、場面①で「昇降調」「連続的上昇調」「平らな引き伸ばし調」が有意に多く、場面②では「自然下降調」「段状上昇調」

---

<sup>64</sup> 「て形」NS例：「一緒に昼食取らせていただいて(段状上昇調) えと 14時にホテルへ」「広島へ移動しまして(段状上昇調) 11時に取引先 B社」

が有意に多かった。したがって、KL は発話場面により出現する類型が異なるが、しかし、発話場面による類型の出現傾向は NS と相違することが示された。

まず、「ゆすり調」と「連続的上昇調」について、「ゆすり調」は KL の日本語場面①の出現数が場面②より有意に多く、「連続的上昇調」は場面②の出現数が場面①より有意に多く現れた。なお、こうした発話場面による出現数の相違は、KL の韓国語においても同様に確認された。KL の日本語場面②の発話例を見ると「関西空港で移動して」という発話の継起的な関係を示す「て形」で「連続的上昇調」が出現し、また韓国語の同一の発話内容部分においても「連続的上昇調」が見られた<sup>65</sup>。アンビョンソプ(2010)が指摘するように、韓国語における上昇調は発話の継続や列挙を示す機能を持つことから、日程を時系列に沿って述べる場面②で母語の影響により出現数が多くなったと考えられる。また、NS の日本語において「ゆすり調」は場面①で、「連続的上昇調」は場面②で1例も見られなかった。したがって、この二つの類型については、母語の転移により生じる可能性が高い。

「自然下降調」と「昇降調」についても発話場面による使用傾向は、KL と NS で異なることが示された。KL は「自然下降調」の日本語場面①の出現数が場面②より有意に多く、「昇降調」の場面②の出現数が場面①より有意に多く現れた。しかし、NS は「自然下降調」の日本語場面②の出現数が場面①より有意に多く、「昇降調」は場面①の出現数が場面②より有意に多かった。場面②が上司との会話であることを考慮すれば、友人との会話である場面①より、比較的淡々と話すことになり、激しく話者の感情を表すことはあまり考えられない。その場合、意図的なピッチの変化がない「自然下降調」が増え、「昇降調」が減ることが自然であり、NS はこうした発話場面の使い分けを行っている。しかし、KL は上司との会話において「昇降調」を多く用い、「自然下降調」が占める割合が低くなっている。したがって、KL は「自然下降調」と「昇降調」の使用において、NS のように発話場面の改まり度を考慮し発話する能力の習得は、まだ十分ではないと言える。

---

<sup>65</sup> KL10 名中 4 名にこの傾向が確認された (KL3 : 「関西空港で移動して (連続的上昇調)」、KL5 : 「関西空港で移動して (連続的上昇調)」 KL7 : 「関西空港で (連続的上昇調)」 KL8 : 「関西空港まで移動して (連続的上昇調)」)。また、4 名中 3 名は韓国語でも「連続的上昇調」が確認された (KL3 : 「칸사이공항을 이동을 한 다음에 (連続的上昇調)」 (訳 : 関西空港を移動した後)、KL5 : 「칸사이공항으로 이동하여 (連続的上昇調)」 (訳 : 関西空港へ移動し)、KL8 : 「칸사이공항으로 이동한 뒤에 (連続的上昇調)」 (訳 : 関西空港へ移動した後) )。



一方、「段状上昇調」については、KL・NSともに場面①より場面②で出現数が有意に多かった。NSは改まり度の高い発話で「段状上昇調」が出現しやすい(佐々木(原)2004)ことから、「段状上昇調」についてはKLも場面を適切に考慮し使用していると言える。しかし、NSに比べKLの「段状上昇調」の出現数が有意に低かったことから、まだ「段状上昇調」を十分に習得しているとは言えない。

「平らな引き伸ばし調」については、KLは日本語場面①より場面②の出現数が有意に多かったが、NSは場面②より場面①の出現数が有意に多く、NSの場面②において「平らな引き伸ばし調」は1例も見られなかった。しかし、「平らな引き伸ばし調」は、フィルターと類似した機能(上村1989)を持ち、NSも使用する類型であるため、上司である改まり度の高い場面であっても、使用に問題はないと考えられる。したがって、NSが発話場面を考慮し「平らな引き伸ばし調」を使用しなかったのではなく、場面②のロールプレイの内容が影響した可能性がある。場面②は、すでに決まった出張の日程を組み立て話す課題であったが、NSの場合、淡々と決まった日程を問題なく発話できていたために、「平らな引き伸ばし調」を使う必要がなかったと考えられる。しかし、KLの場合、日本語がまだ流暢ではないことから、場面②においても「平らな引き伸ばし調」が見られたと考えられる。また、「弱伸ばし下降調」については、KLは日本語場面②より場面①の出現数が有意に多かったが、NSにはあまり見られなかったため、場面による有意差は見られなかった。また、KLの韓国語においても、「弱伸ばし下降調」はほとんど見られなかった。したがって、「弱伸ばし下降調」についてもKLが意図的に発話場面を考慮した使用をしているのではなく、場面①のロールプレイの内容が影響した可能性がある。淡々と出張の日程を報告する場面②に比べ、相手に不満を表し、タバコをやめるように説得する場面①の場合、発話内容を考える上でKLにとっては課題の負担が多少大きかった可能性がある。負担の大きさから、日本語の発話に対する自信が欠如し、ピッチの減少とともに音圧が低くなる「弱伸ばし下降調」を場面②より場面①の出現数が多くなかった可能性がある。

### 3.5 まとめ

本章では、韓国人学習者の日本語句末イントネーションについて、母語の影響と発話場面による影響、各類型の文法形式による出現傾向に焦点を当て検討を行った。その結果、先行研究の指摘のとおり、母語の影響だと考えられる結果もあったが、母語と比較

した場合、句末イントネーションの出現数に相違が見られ、母語の影響だけでは説明できない結果が示された。本章の調査結果をまとめると、以下の通りである。

第一に、KLの「自然下降調」「昇降調」「弱伸ばし下降調」は韓国語に比べ出現数が多く、母語と日本語の句末イントネーションが一致した先行研究と異なる結果が示された。異なる結果が得られた理由としては、類型の再考を行ったことや目標言語の習得、非流暢性などが影響したと考えられる。

第二に、今回の調査結果を見る限り、KLは「自然下降調」の習得がまだ十分とは言えない。場面①②ともにNSに比べ「自然下降調」の出現数が少なく、自然なイントネーションとして「自然下降調」を使用できていない。

第三に、KLの「ゆすり調」と「連続的上昇調」は、発話場面による出現数に相違が見られ、KLは場面による類型の使い分けを行っていた。しかし、使い分けを行っている類型はNSとは異なり、母語の影響の可能性が高い。さらに、KLは場面①②ともに「昇降調」を多用したが、NSは場面②では「昇降調」をあまり使用しない。このように、KLは場面による類型の出現傾向がNSと異なり、発話場面を考慮した句末イントネーションの習得は、まだ不十分だと言える。

第四に、NSの「自然下降調」と「昇降調」は、「けど」「し」のような、動詞・形容詞や名詞+だ/だったのような表現に接続する接続助詞レベルで出現することが多いが、KLは、「は」「が」「を」「の」のような名詞のみに接続することが多い助詞に出現することが多く、「一文節ごとに区切って立て直し、たどたどしく話す学習者の発音の癖」(松崎 2001:239)に伴い、「自然下降調」と「昇降調」が出現していると考えられる。また、「連続的上昇調」「弱伸ばし下降調」「平らな伸ばし調」は助詞や接続助詞より「名詞」「動詞」「副詞」などによく出現し、目標言語に対する自信の欠如から出現している可能性が高い。さらに、「ゆすり調」は、「が」「から」「て形」「でも」などに頻出し、強調されやすい助詞や接続表現に出現しやすいと考えられる。

以上の結果をまとめると、本研究で明らかになった最も重要な点は、イントネーションの類型により出現の理由が異なる可能性があることである。本研究では、類型の再考を行ったことから『上昇下降調』が多く見られた(李惠蓮 1999:74)とした李惠蓮(1999)とは異なり、学習者の句末イントネーションは多様であり、出現理由もそれぞれ異なることが示された。さらに、句末イントネーションの出現の要因は、母語転移の度合いとも関わる部分があると考えられる。「ゆすり調」や「連続的上昇調」のような母語転

移が強いと思われる類型がある一方、「昇降調」や「弱伸ばし下降調」のように目標言語の習得や非流暢性が関与している可能性がある類型もある。以上の結果は、教師が指導を行う際、学習者の発音に対し母語の影響と断定せず、類型により指導の方針を考える判断材料になり得る。また、イントネーションの発音練習だけではなく、発話場面による適切な使用を促す指導が求められる。

一方、得られた知見をより確かなものにするための課題も残されている。本研究ではロールプレイの発話データを使用し新たな知見を得ることができたが、自発音声であることから分析対象を制限する必要があった。そのため、対象者別に統計処理を行う上で十分な数が得られず、KL・NS 各 10 名分のデータを合算し統計処理を行った。対象者別の類型の総数が異なるため一概には言えないが、資料 3-1～3-6 に示した調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差を見ると、KL の「昇降調」、「ゆすり調」、「自然下降調」の標準偏差（資料 3-1 KL 場面①日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差、p.176）が大きいことから、結果に個人差すなわち習得の度合いによる差異が見られた可能性もある。

また、本研究では、調査対象者の KL についてロールプレイのロールカード内容に対する理解を促すために、学習者の母語である韓国語でロールプレイを先に実施し、次に目標言語である日本語のロールプレイを実施した。本研究に見られた句末イントネーションを分析した結果、母語の影響であると考えられる学習者の特徴が見られたが、ロールプレイの順番で韓国語を先にしたこと母語の影響を強く受けた可能性もある。さらに、場面①の課題が場面②より KL にとって負担が大きかった可能性も考えられることから、課題の難易度による影響を考慮し、再調査を行う必要がある。また、ロールプレイにおける場面①②の間には発話場面の改まり度とともに「説得」と「報告」という発話内容の相違が共存していた。類型の出現については、改まり度と発話内容の両方が影響していると考えられるが、どの要因がより強く出現に影響を与えているか、厳密な判断が困難な部分も残る。そのため、発話場面の改まり度と発話内容の性質を統制した追試を行い、KL・NS の句末イントネーション生成に、より強く影響を与えている要因はどれかさらに検証する必要がある。今後は、こうした調査結果に影響を与える可能性がある諸要因を改善することで、本研究で得られた知見のさらなる一般化を目指していく必要があるだろう。

## 第4章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの知覚【研究2】

第4章では、異なる4つの類型（「昇降調」、「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」）の句末イントネーションに対する自然さの評価を通して、韓国人学習者の知覚と日本語母語話者の評価についてその実態を明らかにする。

### 4.1 背景と目的

韓国人日本語学習者の句末イントネーション習得においては、第3章の調査結果、生成において母語の影響や学習者の意図的な使用、さらには目標言語における非流暢性などが関与している可能性が示唆された。しかし、句末イントネーションに対する学習者の知覚については、まだ十分な研究が行われていない。正しく発音する能力は「自分自身の発音を聞いた時に基準どおりに発音ができているかどうか自分で聴覚的に判定できる（小河原 1997:90）」自己モニター能力が重要である。したがって、生成との関係を考慮すれば、イントネーションを聞き自然かどうか評価できる能力は、句末イントネーションの発音にも影響を及ぼす可能性がある。

学習者の句末イントネーションに対する知覚の実態を検討する上では、生成に見られた特徴との関係を考慮する必要がある。第3章のKLの句末イントネーションの生成について、先行研究の「上昇下降調」「上昇調」「長呼調」の3分類（李惠蓮 1999 ; 2002）を見直し、8分類（「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「段状上昇調」「遅れ上昇調」「自然下降調」「弱伸ばし下降調」「平らな引き伸ばし調」）に基づき分析を行った。その結果、KLに見られた句末イントネーションの類型中、従来の研究において一つの類型にされてきた可能性がある「上昇下降調」（李惠蓮 1999 ; 2002）が、ピッチが急激に上昇下降する「昇降調」と上昇のタイミングが遅れて生じた後上昇下降する「ゆすり調」の2類型に分けられ、どちらもKLの日本語に出現していた。特に、「ゆすり調」は、KLのみに見られ、NSに1例も見られなかったことから、「ゆすり調」の生成には母語の影響が関与している可能性が高い。一方、NSは「ゆすり調」は見られなかったが、「昇降調」を使用しており、友人との会話である場面①において、KLよりNSの「昇降調」が有意に多いことが示された。したがって、「昇降調」はNSも使用できる類型であり、発話場面によってNSも多用する類型である。

こうした生成の結果を受け、まず、KLが「昇降調」と「ゆすり調」を区別して知覚できるかを検討する必要がある。KLの知覚の実態を明らかにする上で、その目安として、NSが「昇降調」と「ゆすり調」をどのように評価するかを検討し、KLの結果と比較する必要がある。李恵蓮(2002)は韓国入学者の「上昇下降調」に対し母語話者評価を求めた結果、不自然であるとの評価が得られたことを報告している。しかし、「上昇下降調」は「昇降調」と「ゆすり調」に分けられ、2類型はピッチが上昇するタイミングが異なる韻律的特徴を持つことから聴覚印象が異なるために、NSの評価において相違が見られると推測される。第3章に見られたNSの生成における結果を考えると、NSには「ゆすり調」の出現が見られなかったが、「ゆすり調」は韓国語の韻律ラベリング方式であるK-ToBI(Jun2000)の「LHL%」と同一の類型であり、日本語のX-JToBI(五十嵐他2006)には見られない。一方、「昇降調」の場合、K-ToBI(Jun2000)とX-JToBI(五十嵐他2006)に共通して見られる「HL%」と同一の類型であり、韻律的特徴も両言語間で類似する。またKL・NSともに第3章の発話データにおいて「昇降調」が出現することが確認された。「昇降調」が出現した文法形式は、継起的な関係や原因・理由を示す「て形」や「から」においてKL・NS間に有意差が見られずKL・NSともに多用していた。また「ゆすり調」もKLの日本語において「て形」や「から」に出現したことから、「て形」や「から」において、NSには「昇降調」が、KLには「昇降調」または「ゆすり調」が出現しやすいと言える。したがって、「て形」や「から」のような継起的な関係や原因・理由を示し強調されやすい接続助詞においてKLの日本語に「昇降調」が出現した場合、KL・NS両方に出現する類型であるため、出現する文法形式及び韻律的特徴から不自然と評価される可能性は低いと考えられる。しかし、「ゆすり調」の場合、「て形」や「から」のような接続助詞に「ゆすり調」が見られたとしても、X-JToBI(五十嵐他2006)と第3章のNSの発話データに「ゆすり調」が見られないことから、NSは「ゆすり調」を日本語から逸脱した類型として不自然であると評価する可能性が高い。しかし、KLの場合、「ゆすり調」が生成に見られたことを考えると、知覚においても「ゆすり調」に対し不自然だと評価せず、厳しい評価にならないことが予想される。

KLの知覚について優先的に検討が必要なもう一つの類型は「連続的上昇調」である。第3章では、従来の研究で一つの類型にされてきた可能性がある「上昇調」(李恵蓮1999;2002)を、持続時間とともに上昇が高くなる「連続的上昇調」(郡2014)と強さ

を伴いアクセント的上昇をする「段状上昇調」(郡 2014) に区別した結果、どちらも KL の日本語に出現することが確認された。しかし、「段状上昇調」は KL より NS に有意に多く、「連続的上昇調」は NS より KL の日本語に有意に多かったことから、KL に有意に多かった「連続的上昇調」を優先的に検討する必要がある。

KL の「連続的上昇調」は、第 3 章の発話データにおいて「名詞」に出現することが多かったが、発話内容が正しいか確認したいという意図から出現したと考えられる。一方 NS も「名詞」に対し「連続的上昇調」を使用していた。「連続的上昇調」は社会言語学的には「擬似疑問イントネーション」(井上 1997) とされるが、「対話者がその言葉や事柄を知っているかどうかを確認しつつ、中断せずに話しつつけるという「聞き手の理解を確かめるモニター機能」(佐々木(原) 2004:166)」を持つことを考えると、KL の名詞に見られる「連続的上昇調」の機能と同一であると考えられる。

しかし、KL は、原因・理由を示す「て形」や「から」においても、「最近咳がよくして(連続的上昇調) これ大変じゃない?(KL4 例)」「私はたばこを吸ってないから(連続的上昇調)」「一番吸う友達はあるただから(KL6 例)」「健康が心配するから(連続的上昇調) たばこをやめる(KL6 例)」のように、「連続的上昇調」が見られた。しかし、NS には「から」や「て形」において「連続的上昇調」は見られず、「昇降調」や「自然下降調」を多用していた。KL の場合、強調されやすい原因・理由を示す接続助詞においても日本語に対する非流暢性から「連続的上昇調」が出現し得ると言える。こうした原因・理由を示す接続助詞において「連続的上昇調」が見られる場合、NS は、日本語としての逸脱からくる不自然さではなく、機能的に不自然であると評価する可能性が高い。一方、KL は日本語の非流暢性が知覚に影響する場合、原因・理由を示す接続助詞に「連続的上昇調」が見られても、機能的に不自然であると評価できないと推測される。

最後に、「自然下降調」に対する学習者の知覚についても検討を行う。「自然下降調」はピッチが緩やかに自然下降する類型であり、KL に特徴的な類型ではないが、日本語母語話者に典型的な型であるため、学習者の習得の現状を知る上で「自然下降調」に対する評価能力を明らかにする必要がある。「自然下降調」は、K-ToBI (Jun2000) と X-JToBI<sup>66</sup> (五十嵐他 2006) の「L%」に対応し、両言語で共通する。しかしながら、

---

<sup>66</sup> 厳密には X-JToBI では下降が見られれば「L%」を付与していることから、急な下降が生じる場合も含まれる可能性があるが、本稿では、「弱伸ばし下降調」を区別したため、自然下降のみが見られる「自然下降調」を評価の対象とする。

第3章の発話においてNSは「自然下降調」の出現数が8類型中最も多く、全類型中50%以上(NS:場面①51.30%、場面②57.94%)であるのに対し、KLは「自然下降調」の出現率がNSより有意に低く(KL:場面①36.18%、場面②30.60%)、生成において日本語の典型的なイントネーションとして「自然下降調」をまだ十分に習得できていない。文法形式においても、「て形」「から」とともにNSはKLより「自然下降調」の出現数が多かった。こうしたKL・NS間の生成に見られた相違が知覚にも見られるとすれば、強調されやすい文法形式に「自然下降調」が出現する場合、NSは自然だと評価するのにに対し、KLは「自然下降調」をNSのように自然だと評価できない可能性がある。

以上の課題を踏まえ、本章では、KLとNSを対象に句末イントネーションの4つの類型(「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」)に対する評価傾向を比較し、両者の評価の共通点と相違点を検討することで、KLの知覚とNS評価における現状を明らかにする。また、4つの類型に対する評価とともにフォローアップインタビューを行い、句末イントネーションにおけるKL・NSの評価基準についても検討を行う。

## 4.2 方法

### 4.2.1 調査協力者

調査協力者のKLは、ソウル及び京畿道にある3つの大学で日本語を専攻・副専攻している大学生28名<sup>67</sup>(男性3名、女性25名)である。KL28名中10名は、第3章の調査協力者と共通する。この10名については、第3章における生成の調査を行ってから、第4章の知覚の調査を行った。その理由は、知覚の実験を先に遂行することにより、句末イントネーションに対し過剰に意識してしまい、普段とは異なる発話をしてしまう恐れを防ぐためである。

調査時(2016年3月時点)の学年は、1年生1名、2年生2名、3年生16名、4年

---

<sup>67</sup> 調査協力を求めたKLは39名であったが、比較する集団の数が異なると有意差に影響を与える可能性があることから、データを収集した39名からNSと同数の28名を無作為抽出し分析対象とした。本研究では、母語×イントネーションの2元配置分散分析を行ったが、このKL28名と39名の効果量( $\eta p^2$ )については殆ど差が見られなかったため、28名を分析対象とすることに問題はないと考えられる。以下39名と28名における効果量を示す(母語の主効果(N=39,  $\eta p^2=.009$ )(N=28,  $\eta p^2=.011$ )、イントネーションの主効果(N=39,  $\eta p^2=.765$ )(N=28,  $\eta p^2=.762$ )、交互作用(N=39,  $\eta p^2=.129$ )(N=28,  $\eta p^2=.142$ )、イントネーションの単純主効果(N=39,  $\eta p^2=.745$ )(N=28,  $\eta p^2=.734$ )、母語の単純主効果(N=39,  $\eta p^2=.000$ )(N=28,  $\eta p^2=.000$ )。)

生 9 名で、3~4 年生が多数を占め、平均学習歴は 2.8 年 (SD=1.00) である。本研究では、実験文の内容が理解可能なレベルであるように、初級の学習が終わった学習者を調査対象とし、1~2 年生の場合は、2 年以上の学習歴を持つ者を対象とした。KL の日本語レベルについては、日本語能力試験の N1 が 2 名、N2 が 6 名、N3 が 3 名であり、残り 17 名は、日本語能力試験を受けたことがないと回答した。KL28 名のイントネーションに対する評価得点から  $\alpha$  係数を算出した結果、 $\alpha = .987$  であり、調査対象者間において .90 以上の高い信頼性が得られたことから、1 つのグループとして扱った。KL は全員ソウル方言話者であり、平均年齢は 21 歳 (SD=1.34) である。

また本研究では、日本語母語話者 (以下 NS) にも調査を依頼した。NS は 28 名 (男性 6 名、女性 22 名) であり、平均年齢は 33 歳 (SD=11.31) である。NS の属性は、日本語教師 11 名、言語学や外国語教育を専門とする大学生 (2 名)・大学院生 (7 名) 9 名、他専攻の大学院生 2 名、主婦 3 名、社会人 3 名である。NS の出身地は、東京 6 名、神奈川 5 名、茨城 4 名、千葉 3 名、埼玉 1 名、福島 1 名、長野 1 名、愛知 1 名、兵庫 1 名、奈良 1 名、広島 1 名、山口 1 名、愛媛 1 名、長崎 1 名である。新田 (1987) によれば、日本語においても北陸地方においては句末に「ゆすり調」に近いイントネーションが見られることが報告されていることから、北陸地方出身者は調査対象に含めなかった。また、NS の属性は日本語教師が 11 名、大学院生・大学生が 11 名、一般社会人が 6 名である。NS28 名の  $\alpha$  係数を算出した結果、調査対象者間において  $\alpha = .991$  であり、.90 以上の高い信頼性が得られたことから、区別せず 1 つのグループとして扱った。

#### 4.2.2 評価音声

評価対象の句末イントネーションは、「昇降調」(図 4-1)、「ゆすり調」(図 4-2)、「連続的上昇調」(図 4-3) と「自然下降調」(図 4-4) の 4 種である。図 4-1~図 4-4 におけるイントネーションは、最終拍の /ra/ (「ら」) の部分に該当する。以下、各型の特徴を述べる。「昇降調」(図 4-1) は、上昇が一気に急激に生じた後下降する類型である。「ゆすり調」(図 4-2) は、ピッチの低い部分が続き上昇が遅れて生じた後下降する類型である。「連続的上昇調」(図 4-3) は、ピッチが持続時間とともに高く上昇する類型である。「自然下降調」(図 4-4) はピッチが緩やかに自然下降する類型である。



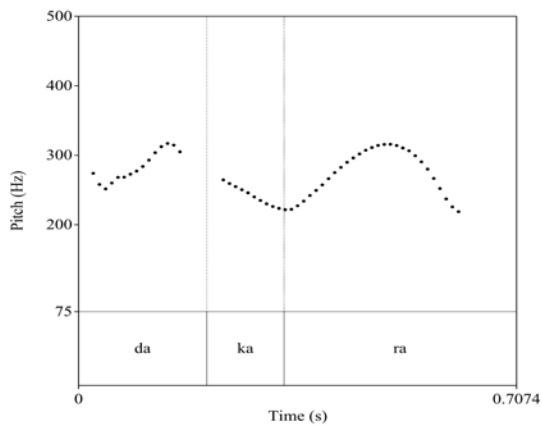


図 4-1 昇降調

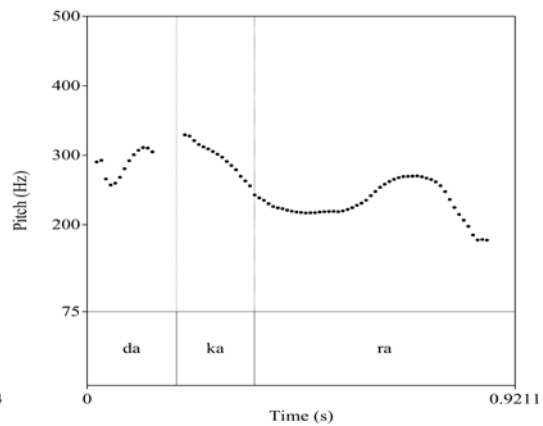


図 4-2 ゆすり調

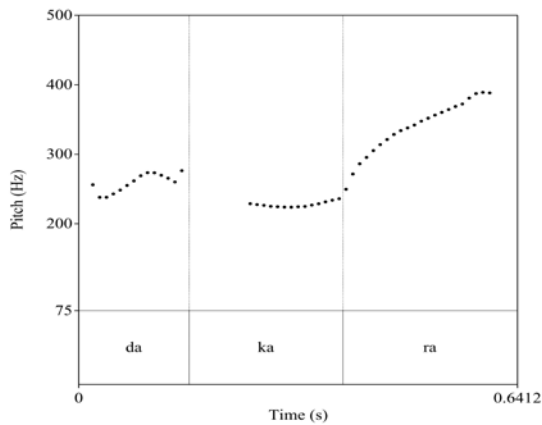


図 4-3 連続的上昇調

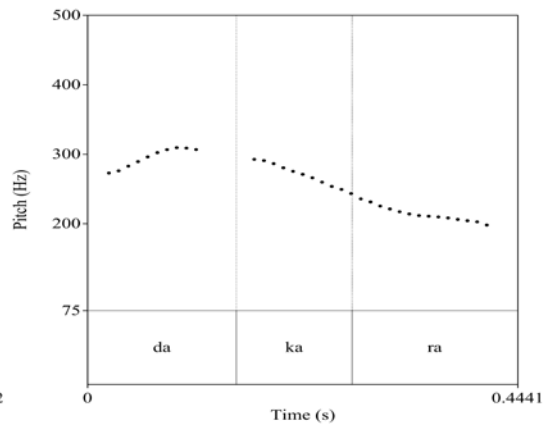


図 4-4 自然下降調

#### 4.2.3 評価刺激の作成と調査手順

本研究の目的は、韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する KL の知覚と NS の評価の詳細を明らかにすることである。そのために実験文の作成において、韓国人学習者の日本語に句末イントネーションが出現する可能性が高い文法形式と発話場面を考慮した。第3章における KL の日本語には、原因・理由を示す「て形」や「から」において「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」が出現することが確認された。先行研究においても、韓国人学習者の句末イントネーションは、理由を表す「ので」「から」によく現れ、「相手に訴えるような強調の役割 (李恵蓮 2003:28)」を果たす発話機能を持つことが報告されている。そこで、句末イントネーションが置かれる実験語として、強調されて発話されやすい接続表現の「だから」を選定した。「だから」は、

「から」「ので」「て形」と同様、原因・理由を示し、「後続部が先行部によって引き起こされた事態や、先行部が前提となつて行われた判断であることを表す（日本語記述文法研究会 2008d:63）」機能を持つ。さらに、「すでに行つた発言が「だから」の後で再び繰り返されることが多く、当然理解可能なことが聞き手に理解されていないことに対する話し手の強い苛立ちが表明され（蓮沼 1991:144）」る談話的機能を持ち、「自分の意見を強く主張する様子を伴つて用いられる（日本語記述文法研究会 2008d:63）」ことが指摘されている。こうした「だから」の発話機能を考慮すれば、「から」「て形」のように強調されて発話されやすいため、KL の発話において「昇降調」や「ゆすり調」などの句末イントネーションが比較的出現しやすいと考えられる。

一方、実験文の示し方についても再考の必要がある。韓国人学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価を行つた李恵蓮（2002）や北野（2016）は、会話の相手が想定されていない韓国人学習者 1 名の独話を評価文に使用している。しかし、句末イントネーションが「相手への働きかけ（李恵蓮 2003:27）」の機能を持つことを考慮すれば、発話の相手がいる対話の方が独話より、句末イントネーションが出現する場面として自然であると考えられる。そこで、女性同士の話者 A と話者 B の会話を実験文とし、話者 B が話者 A に以前答えた話を再度言わされ、「だから」を用いて、苛立ちを示しながら説明する以下の 7 つの文を作成した。

(1) A : ごめん。レポートの提出、来週？

B : もう…。だから、来週じゃなくて、明日。

(2) A : 生命保険を是非…

B : もう…。だから、うちは要らないですって。

(3) A : このラーメン、2 番のお客さん？

B : もう…。だから、2 番じゃなくて 3 番。

(4) A : お願い。もう一度考えてくれない？

B : もう…。だから、無理だよ。

(5) A : このざるそば、26 番？

B : もう…。だから、23 番。

(6) A : バナナはおやつでしょ。

B : もう…。だから、おやつじゃないって。

(7) A : まだ終わんないの？

B : もう…。だから、 まだって何回も言ったでしょ。

実験文の録音は、話者 A の音声を日本語母語話者の女性 2 名に依頼し、話者 B の音声を韓国人日本語学習者でソウル方言話者である筆者（女性）が録音した。録音の際には、評価対象となる「だから」の最終拍である「ら」に 4 つの句末イントネーション（「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」）が出現するように録音した。また、録音した音声は、各イントネーションが十分に実現されているか筆者と音声学を専門とする東京方言話者の日本語母語話者 1 名が聴覚印象と音響分析ソフト Praat (version 6.0.15) のピッチ曲線の目視から確認し、評価対象の句末イントネーションを除く単音やアクセント、イントネーションの誤用が見られないと確認されたものを調査に使用した。評価刺激の録音はすべて、筑波大学人文社会科学研究棟の音声実験室（防音・無響室）で行った。録音機材は、Marantz 社の Solid State Recorder PMD661 モデルに、マイク（Audio-technica 社 BP4025 モデル）に接続し、wav ファイル形式で録音した。

KL の知覚と NS の評価における調査は、Praat の実験プログラム ExperimentMFC を使用し行った。評価刺激は、順序効果を考慮し、実験文および 4 つの句末イントネーションをランダム順に配列し聞かせた。調査協力者には、まずプログラムの操作方法や調査における教示内容を示した画面（図 4-5）を見てもらい、筆者が口頭で説明を補った。調査協力者には、最初に話す話者 A は日本人、次に話す話者 B は韓国人であると伝え、話者 B の「だから」<sup>68</sup>のイントネーションに注目して評価を行うように教示を与えた。次に、音声の自然さに対する 6 段階評定（1 自然じゃない—6 自然）を行うようにし、流れる音声が日本語のイントネーションとして自然かどうかを評価基準として用いるように教示を与えた。3 から 1 までは不自然であり 1 に近いほど不自然、4 から 6 までは自然であり 6 に近いほど自然という基準で評価するよう指示した。また、調査協力者が聞く音声刺激を統一すべく、音声は最後まで聞いた上で評価を行うようにした。また、音声はすべてイヤホン（Sony MDR-EX140LP）を通して聞いている。調査に入

---

<sup>68</sup> 調査においては、「だから」の他に、接続詞「なのに」と「だけど」を含めた実験文についても評価を求めたが、「なのに」「だけど」における音声の音圧が一部において問題があったことから、本研究の分析対象から除外し、フォローアップインタビューを行った「だから」を含めた実験文に見られた結果について報告する。

る前に練習問題（3問）を使い操作方法について確認した。評価後は実験文の1番の音声を使用し4つのイントネーションを「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」の順にもう一度聞かせ、各類型を聞き「「自然」または「不自然」のどちらに評価したか」また「自然だと評価した場合、そのように評価した理由は何か」「不自然だと評価した場合、そのように評価した理由は何か」に対し、フォローアップインタビューを行った。フォローアップインタビューは各調査協力者において個別に行い録音した。句末イントネーションの評価に所要された時間は約25分、フォローアップインタビューにかかった時間は約5分程度であった。フォローアップインタビューについては、調査対象者のKL・NS各28名中NS16名、KL18名からフォローアップインタビューに協力を得ることができた。調査協力者の同意が得られた場合に行ったため、時間の制約上、協力が得られなかった協力者もいる。NSのフォローアップインタビューは日本語で行ったが、KLの場合、韓国語で行ったため、筆者が訳して示した。

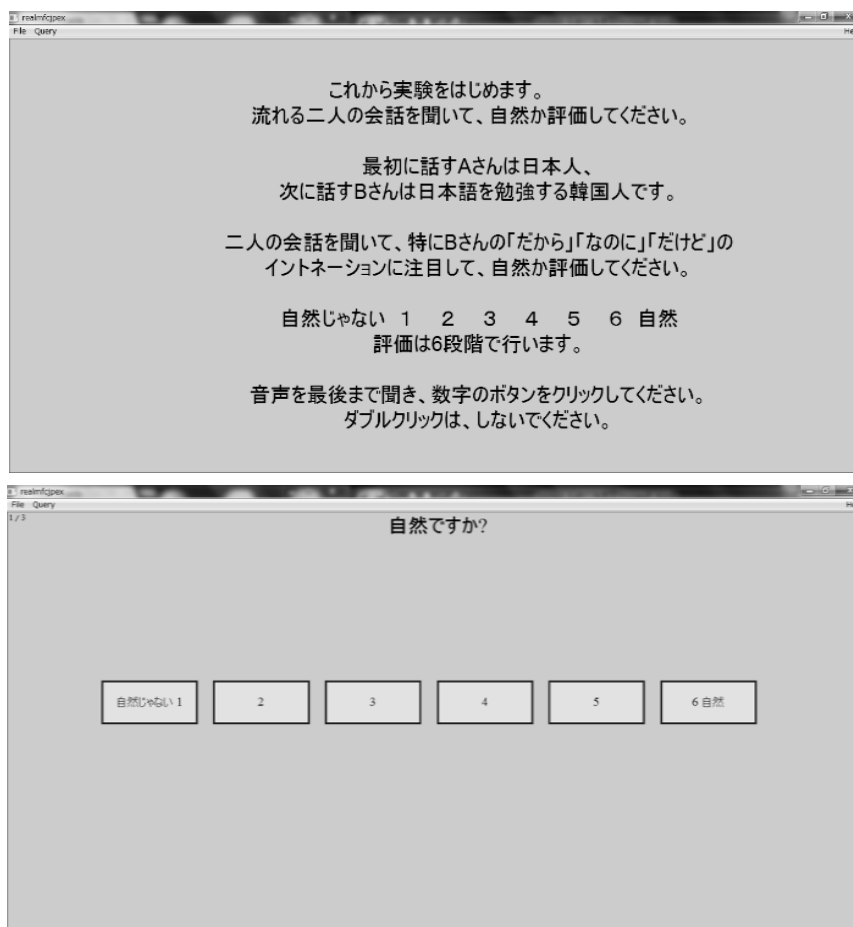


図 4-5 調査協力者への教示及び調査に用いた画面

## 4.3 結果

### 4.3.1 信頼性の検討

本章では統計的検定に必要な評価数を得るため、各イントネーションに対し7文を使い、評価を求めている。そこで、各イントネーションにおける評価の内的整合性を確認するため、分析に使用されたNS28名とKL28名の計56名の各イントネーションの評定値を用いて $\alpha$ 係数を算出した。その結果、「昇降調」は $\alpha=.754$ 、「ゆすり調」は $\alpha=.912$ 、「連続的上昇調」は $\alpha=.894$ 、「自然下降調」は $\alpha=.784$ といずれも.70以上の高い信頼性が得られた。そこで、本章では各イントネーションにおける加算平均を算出し、その値を利用して2元配置分散分析を行った。統計処理は全てSPSS 24.0 for macを用いた。

### 4.3.2 句末イントネーションの自然さに対する評価

句末イントネーションの自然さの評価において、イントネーションの種類の相違と調査協力者の母語の相違との関連を検討すべく、評価得点の平均点を使い、母語（対応なし：KL・NS）とイントネーション（対応あり：「昇降調」・「ゆすり調」・「連続的上昇調」・「自然下降調」）の2元配置分散分析を行った。その結果、母語の主効果は有意ではなかったが( $F(1, 54) = .58, p = .449, n.s.$ )、イントネーションの主効果( $F(2.40, 129.56) = 172.63, p < .001$ )と交互作用( $F(2.40, 129.56) = 8.92, p < .001$ )は有意であった。そこで、交互作用を解釈するために、それぞれの要因の下位検定の検定を行った。表4-1にKL・NSの型別評価平均値と標準偏差を、表4-2にイントネーションの下位検定(ボンフェローニの多重比較)を行った結果を示す。

表 4-1 KL・NSの類型別評価平均値と標準偏差

類型	平均 (標準偏差)	KL n=28	NS n=28
自然下降調	M (SD)	5.21 (0.57)	5.32 (0.67)
昇降調	M (SD)	4.66 (0.64)	5.38 (0.69)
ゆすり調	M (SD)	3.22 (1.05)	2.54 (1.27)
連続的上昇調	M (SD)	2.65 (0.93)	3.04 (1.23)

表 4-2 イントネーションの下位検定における有意確率

イントネーション	Sig. of F	
	KL	NS
「昇降調」・「ゆすり調」間	.000**	.000**
「昇降調」・「連続的上昇調」間	.000**	.000**
「昇降調」・「自然下降調」間	.002*	1.000 n.s.
「ゆすり調」・「連続的上昇調」間	.044 n.s.	.461 n.s.
「ゆすり調」・「自然下降調」間	.000**	.000**
「連続的上昇調」・「自然下降調」間	.000**	.000**
下位検定結果	自然下降調 > 昇降調 > 連続的上昇調、ゆすり調	昇降調、自然下降調 > 連続的上昇調、ゆすり調

注) \* $p < .008$ , \*\* $p < .001$

4つの句末イントネーションに対するKLの評価を見ると、「自然下降調」(5.21点)と「昇降調」(4.66点)が「ゆすり調」(3.22点)と「連続的上昇調」(2.65点)より有意に評価得点が高かった(すべて $F(3, 25) = 41.16, p < .001$ )。また、「自然下降調」の得点が「昇降調」より有意に高かった( $F(3, 25) = 41.16, p < .008^{69}$ )。しかし、「ゆすり調」と「連続的上昇調」の評価得点の間には、有意な差が認められなかった( $F(3, 25) = 41.16, p = .044, n.s.$ )。したがって、KLは「自然下降調」 > 「昇降調」 > 「ゆすり調」、「連続的上昇調」の順に自然であると評価していることが示された。

NSの評価結果を述べる。NSは、「昇降調」(5.38点)と「自然下降調」(5.32点)が「連続的上昇調」(3.04点)と「ゆすり調」(2.54点)より有意に評価得点が高かった(すべて $F(3, 25) = 107.17, p < .001$ )。しかし、「昇降調」と「自然下降調」の間( $F(3, 25) = 107.17, p = 1.000, n.s.$ )、「連続的上昇調」と「ゆすり調」の間( $F(3, 25) = 107.17, p = .461, n.s.$ )には有意差が認められなかった。したがって、NSは「昇降調」、「自然下降調」 > 「連続的上昇調」、「ゆすり調」の順に自然であると評価していることが示された。

次に、母語(KL・NS)について下位検定(Tukeyの多重比較)を行った結果を表4-3に示した。図4-6はKLとNSの評価得点の平均値を比較したものである。

<sup>69</sup>イントネーションの単純主効果の下位検定の多重比較については、ボンフェローニの検定を行った。ボンフェローニの検定については、同じ対応ありデータを6回繰り返して検定をしているため、ボンフェローニによる調整方法を使って有意水準を下げた上で有意かどうかを判定する必要があることから、 $p < .008 (= 0.05 \div 6)$ を有意確率とした。

表 4-3 母語の下位検定における有意確率

母語	Sig. of F			
	昇降調	自然下降調	連続的上昇調	ゆすり調
KL・NS 間	.000**	.373	.155	.021*
下位検定結果	KL<NS	n.s.	n.s.	KL>NS

注) \* $p < .05$ , \*\* $p < .001$

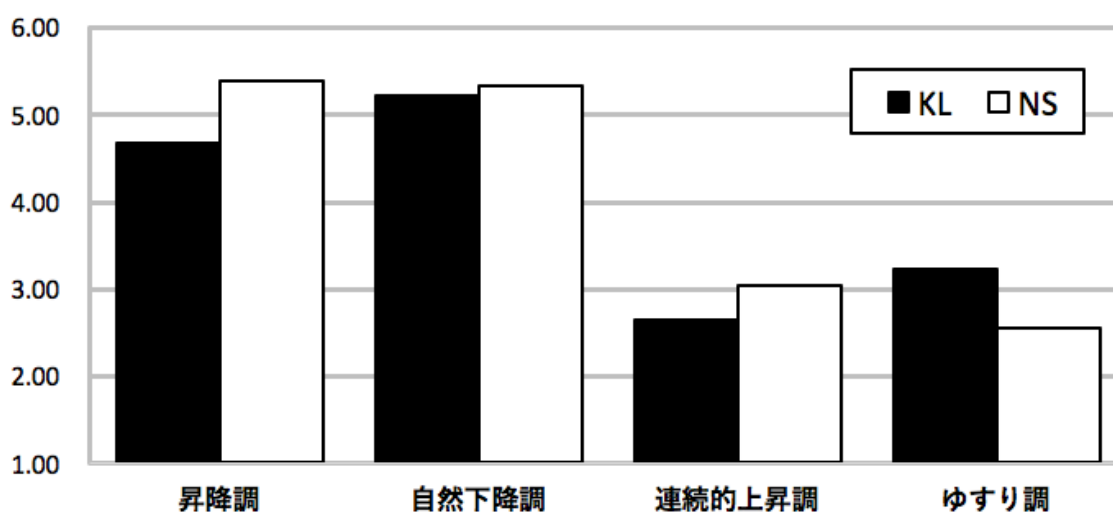


図 4-6 KL と NS の評価得点の平均値の比較

まず、「昇降調」について、KL は NS より有意に評価得点が低かった ( $F(1, 54) = 16.48, p < .001$ )。「自然下降調」と「連続的上昇調」についても KL は NS より低く評価しているが、KL・NS 間に有意差は見られなかった ( $F(1, 54) = 1.81$ , 「自然下降調」:  $p = .373, n.s.$ 。「連続的上昇調」:  $p = .155, n.s.$ )。しかし、「ゆすり調」については KL のほうが NS より有意に評価得点が高いことが示された ( $F(1, 54) = 4.80, p < .05$ )。したがって、「ゆすり調」と他の 3 つの類型と異なる結果が示された。

以上のことから、KL の評価は NS と類似しており、「昇降調」と「自然下降調」の評価得点が「連続的上昇調」と「ゆすり調」より有意に高いことが KL・NS に共通する結果として示された。しかし、KL は「自然下降調」と「昇降調」の間に有意差が見られ、「自然下降調」の評価得点が「昇降調」より有意に高いのに対し、NS は「自然下降調」と「昇降調」の間に有意差が示されなかった。NS の「昇降調」の評価得点が KL より

有意に高いことも、NSがKLより「昇降調」を自然な類型として評価することを示す。KLの「昇降調」における評価得点は4.66点であり、6段階評価の中央値である3.5点よりは高いが、NS（「昇降調」：5.38点）のほうがより自然だと評価している。NSの「昇降調」に対する高い評価は、4種類の句末イントネーションが見られるように作成した実験文の接続詞「だから」の機能と発話場面が関与している可能性がある。第3章の発話データにおいてNSは、原因・理由を示し強調されやすい「から」「て型」で「昇降調」の出現数が多いことが示されたが、「から」「て形」同様、「だから」も因果関係を示し、さらに、一度話した内容を再度聞かれ、苛立ちを示しながら話しているという実験文の発話場面で「だから」は「自分の意見を強く主張する様子を伴って用いられ（日本語記述文法研究会 2008d:63）」るため、こうした発話場面を考慮すれば、「昇降調」が出現しやすいと考えられる。したがって、NSはこうした「昇降調」が出現した文法形式と発話場面を考慮し、自然だと評価していると考えられる。一方、KLも原因・理由を示し強調されやすい「から」「て型」で「昇降調」の出現数が多いことが示されたが、NSよりは評価得点が低いという結果が示された。この点については、第3章のKLの発話データに見られた「昇降調」の出現が非流暢性と関わっている可能性があると考えられるが、フォローアップインタビューの結果を踏まえ、4.4で考察を述べる。

「ゆすり調」についても、KLとNSの評価に相違が見られ、NSがKLより「ゆすり調」を不自然であると評価することが示された。KLの「ゆすり調」の得点は3.22点であり、6段階評価の中央値である3.5点よりやや低い。一方、NS（「ゆすり調」：2.54点）はKLより「ゆすり調」をさらに不自然であると評価した。「ゆすり調」は、韓国語のラベリング方式であるK-ToBI（Jun2000）のLHL%と同一の類型であり、第3章の発話データにおいてもNSには見られず、KLのみに出現していたことを考えると母語の影響からKLの日本語に見られる可能性が高い類型である。したがって、KLの日本語の発話データに見られたように、生成において「ゆすり調」が出現しているKLは、知覚においても、「ゆすり調」をNSのように十分に不自然だと評価できなかった可能性がある。以上のように、KLとNSの句末イントネーションに対する評価については、「昇降調」と「ゆすり調」において相違が見られることが示された。

一方、「連続的上昇調」については、KL・NSの評価得点の間に有意差が示されなかった。また、KL（連続的上昇調：2.65点、「ゆすり調」3.22点）・NS（連続的上昇調：3.04点、「ゆすり調」2.54点）ともに「連続的上昇調」と「ゆすり調」の間に有意差が



見られず、ともに評価得点が低かった。「連続的上昇調」は、日本語において「擬似疑問イントネーション」(井上 1997)として出現する類型であり、韻律的特徴から不自然だと評価される可能性は低い。しかし、第3章のNSの発話データにおいて「連続的上昇調」は、「名詞」に出現することが多く、本章の実験文の「だから」のような原因・理由を示す「から」「て形」において「連続的上昇調」は見られなかったために、機能的に不自然であると評価されやすいと言える。したがって、日本語のイントネーションから逸脱した韻律的特徴を持つために不自然だと評価される可能性が高い「ゆすり調」と有意差が見られない程度に、機能的に不自然だと評価される可能性が高い「連続的上昇調」もNSに低く評価されると言える。一方、NSだけでなく、KLも「連続的上昇調」と「ゆすり調」の間に有意差が示されず、両類型ともに6段階評価の中央値である3.5点より低い。これについては、KLがNS同様「連続的上昇調」を機能的に不自然だと知覚できる能力を習得した可能性もあるが、フォローアップインタビューで見られたコメントを踏まえ4.4で考察を述べる。

最後に、「自然下降調」についても、KL・NS間に評価得点の有意差が見られなかった。第3章の発話データにおいてNSは全8類型中、「自然下降調」が占める割合が50%以上であり、NSの日本語において最も基本となる典型的な類型であることから、NSは「自然下降調」を高く評価していたと言える。一方、KLは、NSに比べ全8類型中、「自然下降調」が占める割合(場面①36.18%、場面②30.60%)が約30%を超える程度であり、NSより低かった。また、本章の実験文における「だから」と類似した理由・原因を示す「から」「て形」においても、KLとNSの間に「自然下降調」の出現数に相違がみられ、NSのほうがKLより有意に出現数が多かった。したがって、これらの点から、こうした生成の特徴がKLの知覚にも見られ、「自然下降調」を十分に自然だと評価できないと予想したにも関わらず、KLはNSと有意差が見られない程度に、「自然下降調」を高く評価していた。これについては、KLが「自然下降調」を自然だと知覚できる能力を習得した可能性があるが、フォローアップインタビューの結果を踏まえ4.4で考察を述べる。

#### 4.3.3 フォローアップインタビュー

音声刺激に対する評価を行った後、KLとNSに句末イントネーションの4つの類型(「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」)に対し、自然と不自然どちらに

評価したか、またそのように評価した理由についてフォローアップインタビューを行った。フォローアップインタビューから得られたコメントの例と数を表 4-4 (KL) と表 4-5 (NS) に示し、コメントから得られた KL と NS の評価基準について結果を述べる。

表 4-4 KL のイントネーションの類型別コメント例

類型	評価得点 (SD)	評価	コメント例 (数)
昇降調	4.66 (0.64)	自然	日本人が使うのをよく聞いた/日本人が使いそう。自分もそういう風に日本人の真似をして使う時もある/日本のドラマとかアニメを見るとそういう風に話す/アニメとかドラマで日本人が使いそうな感じ(8) 聞くのに楽(1)/自然。何となく(1)/聞いてたら自然(1)/授業で勉強するときこういう風に習うから自然(1)/自然。聞こえた通りボタンを押した(1)/それがもとの発音だと思った(1)/自然(3)
		不自然	上げると変(1)
ゆすり調	3.22 (1.05)	自然	言ったことをもう一度説明する感じ/もう本当やめての感じだから合ってる/話が通じない相手に「だから」という感じに聞こえるから自然 (5) 日本人の友達が話すのをよく聞いた/日本人の友達が使うのを聞いたことがある(2)
		不自然	長く伸ばすとちょっと不自然/「ら」を無理やり伸ばす感じ/あまりにも上げる感じが不自然(8) 韓国人が使いそう/韓国抑揚に合わせた感じ(2)/不自然(1)
連続的上昇調	2.65 (0.93)	自然	状況による(2)/早く話して上げたり下げたりするのが自然(1)/自然。日本人らしい感じ(1)/自然(1)
		不自然	急に上がるのはすごく不自然/上がるからちょっと変(3) 韓国人がこういう風に言いそう/韓国人っぽい(3) 何となく聞いた時不自然(1)/わざと変に話す感じ(1)/あまり聞いたことがない(2)/不自然(3)
自然下降調	5.21 (0.57)	自然	下げた時が自然/低いのは全部自然/下がれば自然(6) 日本人が使いそう/日本人とすごく似てると思った(2) 日常的な何も考えずに言葉をつなげる時(1)/馴染みがある(1)/一番自然(2)/自然(2)/状況によって判断(2)
		不自然	不自然。速すぎる(1)/ちょっと違うと思う(1)

表 4-5 NS のイントネーションの類型別コメント例

類型	評価得点 (SD)	評価	コメント例 (数)
昇降調	5.38 (0.69)	自然	前後の文脈的にもう一みたいな感じで怒ってて/怒ってるみたいに聞こえる。大体 4 か 5 を付けてる/このシチュエーションだと大丈夫。不機嫌な時のイントネーション/感情が入れば別に自然の方に近いかな/強調した言い方だから言うかな。/自然な感じ。念押しとというか、語調が強くなる感じ/一度言った内容を繰り返してると思ったので(11)
		不自然	自然な感じ。日本人っぽい(1)/ネイティブ並(1)/幅とか長さが僕の中では的確(1)/若者ことばですけど大丈夫(1)/何もないの(自然下降調)とそんなに区別がなかった(1)(0)
ゆすり調	2.54 (1.27)	自然	怒って「またかよ」みたいな感じで使う時は言う。でもシリアスな場面なのに「だから～」とか言ったら「何だこいつ」はと思うかもしれない/「しつこいな」みたいな感じの気持ちがあれば場面によって言わくない/ 駄々をこねる人たちなら使えるかな(5)
		不自然	若者言葉もあるしという感じで OK(1) 抑揚が最後伸ばしすぎ/語尾が長さというか、伸びが不自然かな/こういう上がるような言い方はしないんじゃないかな/「ら」の音が揺れる/ 波打つ感じ(10)
連続的上昇調	3.04 (1.23)	自然	指導というか年長者と年少者みたいな感じ/上から小さい子に教えてる感じ/諭すように/状況によってそういうこともあるかな。軽くいさめるような感じ。(6) ぶりっ子とか、語尾を上げて言う子は言う(1)
		不自然	文脈で判断して 1。「この前言ったでしょ」の文脈で楽しそうに上に上がることはない/トーンが明るいから、あまり怒ってるように聞こえない(4) 語尾が上がってるのはちょっと違う/急激にぴゅっと上がる(2)/「ら」が短すぎる(1)/日本人は使わないかな(1)/フランス人とか言いそう(1)
自然下降調	5.32 (0.67)	自然	日本人も普通に言うかな/日本人も使う/もうほとんどネイティブ(8) 何でもないやつが一番汎用性が高い(1)/このトーンが私にとって一番自然(1)/たぶん自然の方(1)/すごく自然(1)/ちょっと速いから怒ってるみたいに聞こえる(1)/つながってるので自然(1)/もう言ったでしょ。おしまいな感じ(1)/好きなんですね。がっかりした感が(1)
		不自然	(0)

まず、「昇降調」の評価得点は KL が 4.66 点、NS が 5.38 点であり、KL・NS とともに 6 段階評価の中央値である 3.5 点以上であったが、NS のほうが KL より有意に評価得点が高かった。KL は「昇降調」を自然だと評価した理由について日本人らしさに関するコメントが 18 例中 8 例に見られた。KL は「日本人が使うのをよく聞いた」「日本人が使いそう。自分もそういう風に日本人の真似をして使う時もある」「日本のドラマとかアニメを見るとそういう風に話す」などのコメントから「昇降調」を日本人・日本語らしい特徴として認識している。さらに KL は「昇降調」に対し自然だと評価するものの「聞くのに楽」「自然。何となく」のように評価理由について具体的に特定できず、「上げると変」のように不自然だと評価している KL も見られた。

NS は「昇降調」を自然だと評価した理由について、発話場面に着目したコメントが 16 例中 11 例に見られた。「前後の文脈的にもう一みたいな感じで怒ってて」「怒ってる

みたいに聞こえる。大体 4 か 5 を付けてる」「このシチュエーションだと大丈夫。不機嫌な時のイントネーション」などのコメントから、NS は、すでに答えたことを再度聞かれ、苛立ちを示しているという実験文の発話場面を考慮し「昇降調」を自然だと評価すると言える。

次に、「ゆすり調」の評価得点は KL が 3.22 点、NS が 2.54 点であり、KL・NS ともに 6 段階評価の中央値である 3.5 点より低かったが、KL のほうが NS より評価得点が有意に高かった。KL は、不自然だと評価した理由について、韻律に着目したコメントが 18 例中 8 例に見られた。「長く伸ばすとちょっと不自然」「ら」を無理やり伸ばす感じ」「あまりにも上げる感じが不自然」などのコメントから、長さや高さの変化が不自然だと評価していることが分かる。NS も、不自然だと評価した理由について、韻律に着目したコメントが 16 例中 10 例に見られ、「抑揚が最後伸ばしすぎ」「ら」の音が揺れる」「波打つ感じ」などのコメントから分かるように、KL 同様、長さや高さの変化が不自然だと評価している。

しかし、KL・NS 両方において、発話場面から「ゆすり調」を自然だと評価するコメントも見られた (KL : 18 例中 5 例、NS : 16 例中 5 例)。KL は「言ったことをもう一度説明する感じ」「もう本当やめでの感じだから合ってる」のように、場面を考慮し自然だと評価している。NS も「怒って「またかよ」みたいな感じで使う時は言う」「しつこいな」みたいな感じの気持ちがあれば場面によって言わなくない」のように、発話場面を考慮すれば許容できるとコメントしている。この結果から、KL と NS はともに、「ゆすり調」を韻律的特徴により不自然だとする評価と発話場面により自然だとする評価に分かれると言える。さらに KL は「韓国人が使いそう」「韓国抑揚に合わせた感じ」のように韓国人・韓国語らしさ (18 例中 2 例) から不自然だと評価するケースも見られた。また「日本人の友達が話すのをよく聞いた」(18 例中 2 例) のように、日本人らしさから自然だと評価する KL も見られた。

「連続的上昇調」の評価得点は KL が 2.65 点、NS が 3.04 点であり、KL・NS ともに 6 段階評価の中央値である 3.5 点より低かったが、KL と NS の評価得点の間に有意差は示されなかった。KL は「急に上がるのはすごく不自然」「上がるからちょっと変」のようなピッチが上昇する韻律的特徴 (18 例中 3 例) と、「韓国人がこういう風に言いそう」「韓国人っぽい」のような韓国人らしさ (18 例中 3 例) から不自然だと評価しており、発話場面に注目したコメントはあまり見られなかった。

一方、NS は「語尾が上がってるのはちょっと違う」のようにピッチの上昇に関する指摘（18 例中 2 例）も見られたが、発話場面に関するコメントがより多かった。NS は発話場面に注目し不自然とするコメントが 16 例中 4 例に見られ、「文脈で判断して 1。

「この前言ったでしょ」の文脈で楽しそうに上に上がることはない」「トーンが明るいから、あまり怒ってるように聞こえない」など、実験文の発話場面において「上昇調」は不自然だと評価している。しかし、発話場面により「上昇調」を自然だと評価（16 例中 6 例）している NS も存在し、「指導というか年長者と年少者みたいな感じ」「上から小さい子に教えてる感じ」のように、上下関係の場面を想定すれば自然だと評価できるとしている。したがって、NS は「上昇調」を発話場面により不自然だとする評価と自然だとする評価に分かれると言える。

しかし、KL からは場面について具体的なコメントは得られず、韻律的特徴や韓国人らしさから不自然だと評価している。また、KL は「連続的上昇調」に対し不自然だと評価しているものの、「何となく聞いた時不自然」のように評価理由について具体的に特定できない学習者も見られた。さらに、「速く話して上げたり下げたりするのが自然」や「自然。日本人らしい感じ」のように、韻律的特徴や日本人らしさから自然だとのコメントも得られた。

最後に、「自然下降調」の評価得点は KL が 5.21 点、NS が 5.32 点とともに高く評価し、KL・NS とともに 6 段階評価の中央値である 3.5 点以上であったが、KL と NS の評価得点の間に有意差は示されなかった。KL は韻律的特徴に注目したコメントが 18 例中 6 例に見られ、「下げた時が自然」「低いのは全部自然」のように、ピッチの下降や低さを手掛かりにし、自然だと評価していることが示された。また「日本人が使いそう」「日本人とすごく似てると思った」のように、日本人らしさに関するコメント（18 例中 2 例）が見られ、自然だと評価していた。一方、KL の中には「不自然。速すぎる」「ちょっと違うと思う」とのコメントも見られ、「自然下降調」を不自然だと評価する KL も見られた。一方、NS は「自然下降調」を自然だと評価した理由について、日本人らしさを基準としたコメントが 16 例中 8 例に見られ、「日本人も普通に言うかな」「日本人も使う」など、母語話者が使う類型であることから自然であると評価していた。

#### 4.4 考察

以下、4 類型の評価得点に対する KL・NS の二元配置分散分析の結果と第 3 章の発話

データに見られた KL・NS の句末イントネーションの出現数の傾向とフォローアップインタビューから得られたコメントを踏まえ、KL の句末イントネーションに対する知覚と NS の評価について考察を述べる。

まず、「昇降調」について、KL と NS はともに高く評価したが (KL : 4.66 点、NS : 5.38 点)、母語の単純主効果に対する下位検定の結果、NS が KL より「昇降調」を有意に自然だと評価した。さらに、イントネーションの単純主効果における下位検定の結果、NS は「昇降調」と「自然下降調」の評価得点に有意差が見られず、「自然下降調」同様に「昇降調」を高く評価していたが、KL は「自然下降調」を「昇降調」より有意に高く評価した。

こうした KL と NS の評価の相違を、第 3 章の発話データに見られた「昇降調」の出現数の傾向から考えると、KL・NS はともに原因・理由を示す「て形」「から」において KL・NS とともに「昇降調」を多用しており、有意差が見られなかった。したがって、「て形」「から」同様、原因・理由を示し、「自分の意見を強く主張する様子を伴って用いられる (日本語記述文法研究会 2008d:63)」本章の実験文の「だから」においても、日本語において「昇降調」が比較的出現しやすいと言える。そのため、NS は、こうした「だから」の機能を考慮し、母語話者の日本語において典型的な類型である「自然下降調」と有意差が見られない程度に「昇降調」を高く評価していると考えられる。フォローアップインタビューのコメントを見ても、NS は「前後の文脈的にもうーみたいな感じで怒って」「怒ってるみたいに聞こえる。大体 4 か 5 を付けてる」「このシチュエーションだと大丈夫。不機嫌な時のイントネーション」など、発話場面に着目した評価が多く見られ、「だから」が見られる苛立ちを示す発話場面であることを考慮すれば自然だと評価できるとしている。

一方、KL は、第 3 章の発話データにおいて、原因・理由を示す「て形」「から」において NS 同様「昇降調」を多用していたことから、「昇降調」について十分に自然に評価できると予想したが、予想とは異なる結果が示された。第 3 章の発話データに見られた「昇降調」の出現数の傾向から考えると、KL は「て形」「から」だけでなく、「は」「が」「を」において NS より「昇降調」の出現数が有意に多かった。「は」「が」「を」は、助詞の直前に名詞と接続することが多く、「一文節ごとに区切って立て直し、たどたどしく話す学習者の発音の癖」(松崎 2001:239)に伴い、目標言語における非流暢性から「昇降調」が出現していると考えられる。フォローアップインタビューのコメントを見ると

KL は、「聞くのに楽」「自然。何となく」のように評価理由について具体的に特定できず、「上げると変」のように不自然だとコメント見られた。生成において日本語における非流暢性が見られたように、知覚においても「昇降調」が出現する発話場面を考慮し、自然かどうかを知覚する能力の習得は、まだ十分ではないと考えられる。

さらに KL は、第 3 章の発話データにおいて、NS があまり「昇降調」を用いず比較的改まりの度合いが高い上司との会話においても「昇降調」を多用していた。こうした KL の「昇降調」の多用については、上記の非流暢性ととも、母語話者の日本語を真似し学習により使用している可能性（金瑜眞 2013）が指摘される。フォローアップインタビューから、KL は「日本人が使うのをよく聞いた」「日本のドラマとかアニメを見るとそういう風に話す」など日本語らしさに着目したコメントが見られた。このことから、本研究の KL は日本語の「昇降調」に対する聴覚的なインプットを受けた経験があるようである。その経験から KL は「昇降調」を日本語においてよく見られる類型として捉え、日本語のイントネーションとして自然な類型だと評価していると考えられる。本研究の実験文は以前答えた話を再度言わせられ、苛立つ気持ちを示す発話場面であり、日本語において「昇降調」の使用が比較的許容される場面である。したがって、NS はこうした場面なら「昇降調」を許容できると評価しているが、KL は発話場面をあまり考慮せず、「昇降調」に対する聴覚的なインプットを受けた経験から、日本語らしい型だと評価したと考えられる。

本研究のような発話場面では「昇降調」が NS に自然だと評価されやすいため、一見 KL も NS と同レベルの評価能力を持っているように見える。しかし、「昇降調」が許容され難い場面においても、KL は日本語らしさという基準の過剰般化により「昇降調」を自然だと評価する可能性がある。井上（1997）は、社会言語学的観点から日本語母語話者の「昇降調」を「尻上がりイントネーション」として指摘し、「軽薄」「甘えた」「幼い」のような印象を与えることを報告している。したがって、「昇降調」の過剰な使用はフォーマルな場面では許容され難いため、使用場面に注意を払う必要がある。第 3 章の発話データの場面②上司との会話において、友人との会話である場面①より、NS の「昇降調」の出現数が有意に少なかったことも、場面のフォーマルさが影響したと言える。さらに KL は「昇降調」に対し自然だと評価するも評価理由について具体的に特定できない場合や不自然だと評価するコメントも見られた。こうした評価基準に対する相違が、KL が NS より「昇降調」の評価得点が有意に低かった理由ではないかと考えられる。

次に、「ゆすり調」について、KL と NS はともに評価得点が低かったが (NS : 2.54 点, KL : 3.22 点)、母語の単純主効果の下位検定結果、KL が NS より「ゆすり調」を有意に高く評価した。こうした KL と NS の評価の相違を、第 3 章の発話データに見られた「ゆすり調」の出現数の傾向から考えると、KL には「ゆすり調」の出現が確認されたが、NS には見られなかった。また、KL の「ゆすり調」は、本調査における「だから」と機能的に類似した原因・理由を示す「て形」「から」において多く現れた。したがって、KL は生成において「ゆすり調」出現が見られたように、知覚においても NS より「ゆすり調」を自然だと評価していると言える。

しかし、「ゆすり調」における KL の評価得点は、6 段階評価の中央値である 3.5 点を下回り、高いとは言えない。フォローアップインタビューからも、KL・NS ともに「ゆすり調」の韻律に着目し長さや高さの変化が不自然だとするコメントが見られた。同時に、KL・NS ともに発話場面から「ゆすり調」を自然だと評価するコメントが見られ、調査対象者によっては発話場面を考慮すれば、自然だと評価していた。この結果から、KL と NS はともに、「ゆすり調」を韻律に着目し不自然だとする評価と発話場面により自然だとする評価に分かれていた。さらに、KL は韓国人・韓国語らしさから不自然だと評価するケースも見られたが、韓国語らしいとの評価は「ゆすり調」を不自然な類型として指摘することはできるが、長さや高さのような韻律的特徴に注目することができず、類型のどのような特徴が不自然かを明確に特定できないことを示していると考えられる。また日本人らしさから「ゆすり調」を自然だと評価する KL も見られた。こうした評価基準の相違が、「ゆすり調」を KL が NS より高い得点で評価した一因となったのではないかと考えられる。一方、「ゆすり調」の評価得点の標準偏差は KL・NS ともに 4 つの型で最も大きかったが (KL : 1.05、NS : 1.27)、これには上述の KL と NS 内の評価の相違が関係していると考えられる。さらにこれは、評価者の母語が評価に影響を及ぼし、母語に「ゆすり調」を持つ KL は自然だと評価し、母語に「ゆすり調」を持たない NS は不自然だと評価するとした予想に反する結果である。

まず、「ゆすり調」を不自然だと評価した KL は、日本語において「ゆすり調」が不自然だと評価される類型であることを習得した可能性がある。特に長さや高さに着目したコメントをしている KL については、NS のように「ゆすり調」の韻律的特徴が日本語のイントネーションから逸脱していると評価できていると言える。一方、「ゆすり調」を自然だと評価した KL に関しては、「母語の影響」と「日本語としての「ゆすり調」の



習得」という2つの面から考察する必要がある。本章の実験文の場面は話者の苛立ちを示すものであり、「ゆすり調」が見られる「だから」は、「自分の意見を強く主張する様子を伴って用いられる（日本語記述文法研究会 2008d:63）」機能を持つ。KLの母語である韓国語において「ゆすり調」は「a special emphasis to the main points of the story（話の重要なポイントを特に強調）（Park2003:272（）は本論筆者訳）」する機能を持つことが指摘されているが、この指摘から考えると、苛立ちを示すということは、発話者が自身の発話を強調しているとも言える。したがって、話者自身の意見を強調して示している実験文の発話場面において、KLが母語で「ゆすり調」が使えることを、日本語においても同様に捉え、「ゆすり調」を自然だと評価した可能性がある。つまり、母語の影響によりKLが「ゆすり調」を自然だと評価するという予想を一部支持しているとも言える。しかし、NSでも発話場面により「ゆすり調」も自然となるというコメントが見られたことから、KLもNSのように、日本語でも発話場面次第では「ゆすり調」も自然となるという評価基準を習得した可能性もある。こうしたKL内の評価の相違は、習得レベルが関与している可能性があることから、今後、学習者のレベルと評価基準の習得に対するさらなる検討が必要である。

NSが「ゆすり調」を自然だと評価したことは、「昇降調」が許容されたように、ピッチが上昇下降するという点で「昇降調」と韻律的に類似した「ゆすり調」も、発話場面から許容されたと考えられる。しかし、イントネーションの単純主効果の下位検定結果、NSの評価得点は「昇降調」より「ゆすり調」の方が有意に低かった。このことから、苛立ちを示し話者の意見を強調するような発話場面であっても「ゆすり調」は日本語として許容できないと評価するNSも見られることから、今後、評価者の属性や評価対象の場面を考慮した追試を行い、NSの「ゆすり調」の評価の詳細をさらに解明する必要がある。一方、イントネーションの単純主効果の下位検定の結果、KLも「昇降調」より「ゆすり調」の評価得点が有意に低いという結果が示された。したがって、KLも「昇降調」と「ゆすり調」を区別して知覚する能力の習得はある程度行われていると言える。しかし、上述のように、KL内に評価の相違が見られ、評価得点における標準偏差が他の類型と比較し大きかったことから、今後、「昇降調」と「ゆすり調」を区別して知覚する能力の習得が、学習者の習得レベルに応じてどのように見られるかについても、引き続き検討を行う必要があると考えられる。

続いて、「連続的上昇調」について考察を述べる。母語の単純主効果の下位検定結果、

KL・NS 間に有意差は認められず、6 段階評価の中央値である 3.5 点より低く評価していた (NS : 3.04 点、KL : 2.65 点)。第 3 章の発話データに見られた出現数の傾向から考えると、KL・NS ともに「連続的上昇調」は名詞に出現することが多かったことから、「聞き手の理解を確かめるモニター機能」(佐々木(原) 2004:166)を持つ「擬似疑問イントネーション」(井上 1997) であると言える。しかし、KL の場合、目標言語における非流暢性から「名詞」だけでなく、実験文の「だから」と機能的に類似した、理由・原因を示す「て形」「から」でも「連続的上昇調」が見られたことから、「連続的上昇調」が実験文に見られても不自然だと評価できないと予想したが、予想とは異なる結果が示された。

しかし、フォローアップインタビューから、KL が実験文の発話場面に注目したコメントはあまり見られず、韻律的特徴と韓国人らしさから不自然だと評価していた。その反面、NS は発話場面に注目した評価をしており、「この前言ったでしょ」の文脈で楽しそうに上に上がることはない」のように、話者の苛立ちを示す実験文の発話場面において「連続的上昇調」は不自然だとするコメントが見られた。これらのコメントは、強調を示す「だから」に「連続的上昇調」が見られる場合、NS は、韻律的特徴より機能的に不自然であると評価するという予想を一部支持しているとも言える。しかし、NS には発話場面により「連続的上昇調」を自然だとする評価が同時に見られ、想定する発話場面により、自然との評価と、不自然との評価が同時に示された。NS の評価得点の標準偏差は「ゆすり調」に続き高かったが(「連続的上昇調」: 1.23)、こうした NS 内の評価の相違が影響したと考えられる。

「連続的上昇調」を不自然だと評価した KL については、日本語において「連続的上昇調」が機能的に不自然と評価されうる類型であるということを、まだ十分に習得できていないと考えられる。しかし、韻律的特徴により不自然だと評価されうる類型であるという点は、習得した可能性がある。特に高さに注目したコメントをしている KL については、NS の一部からも「連続的上昇調」の高さが急激であることから不自然だとの指摘があり、韻律的特徴が日本語のイントネーションから逸脱していると評価できると言える。持続時間とともにピッチが連続的に上昇する「連続的上昇調」は母語話者の日本語にも見られる類型である。しかし、韓国人学習者の「連続的上昇調」については、「必要以上に上がったたり、また、最後の音節が長くなりすぎ (大坪監修 1987:114)」のような、ピッチの上昇や持続時間が著しく見られる場合もある。本章の調査に用いた

「連続的上昇調」については、NS の評価が分かれ、機能的に不自然であるとの評価と韻律的特徴が不自然である評価が両方見られたことから、一概にピッチと持続時間が著しいとは言えないが、今後、「連続的上昇調」が母語話者に韻律的に日本語から逸脱した類型であると評価され始める閾値について、さらなる追試が必要だと考えられる。

このように、「連続的上昇調」を不自然だと評価する NS は、韻律的特徴を評価基準とする例も見られたものの、発話場面に対するコメントが多く、苛立ちを示し強調されやすい「だから」が見られた実験文の発話場面を考慮した際、「連続的上昇調」が不自然だと評価していると言える。その反面、KL には場面における具体的なコメントは得られなかったことから、発話場面を考慮して「連続的上昇調」を評価する能力の習得はまだ十分ではないと考えられる。また、KL の「韓国人っぽい」「何となく聞いた時不自然」というコメントも、「連続的上昇調」が不自然だとは評価できるものの、類型のどのような特徴が不自然かを明確に特定できない可能性を示すと考えられる。

一方、「連続的上昇調」を自然だと評価した NS に関しても、実験文の発話場面が影響した可能性がある。実験文の場面は発話者の苛立ちを示すものであるが、「連続的上昇調」における NS の「指導というか年長者と年少者みたいな感じ」などのコメントから、上下関係という発話場面を想定し、許容された可能性がある。

まとめると、KL と NS は「連続的上昇調」の評価得点に有意差が見られなかったが、評価の基準は異なるということである。NS のコメントからは、発話場面に関するコメントが多く、発話場面によっては「連続的上昇調」を許容できるとしており、場面さえ適切であれば日本語において「連続的上昇調」が自然だと評価される可能性が示された。しかし、KL は場面に対する具体的なコメントはあまり見られず、韻律的特徴や韓国人らしさから不自然だと評価しており、評価理由を具体的に特定できないというコメントも見られ、中には韻律的特徴から自然とのコメントや日本人らしいというコメントも見られた。

このように、NS とは異なる基準で、KL が「連続的上昇調」を不自然だと評価する場合、「連続的上昇調」が見られても比較的許容される場面においても、「連続的上昇調」を誤用として過剰に捉えてしまう可能性がある。また、場面を考慮せず、韻律的特徴や日本語らしさにより KL が「連続的上昇調」を自然だと捉え多用する場合、NS に低い評価を受ける可能性がある。こうした KL と NS の評価の相違については、発話場面におけるコメントが得られたことから、上下関係と友人関係など場面を考慮した追試を行

い、KL・NS 間に評価の相違が見られるかを明らかにしていく必要があると考えられる。

最後に、「自然下降調」は母語の単純主効果の下位検定の結果、KL・NS 間に有意差は認められず、KL・NS ともに高く評価していた (NS : 5.32 点、KL : 5.21 点)。また、イントネーションの単純主効果の下位検定の結果、KL は、「昇降調」「ゆすり調」「連続の上昇調」と比較し「自然下降調」の評価得点が有意に高く、4 つの類型中「自然下降調」を最も自然であると評価している。第 3 章の発話データにおいては、「自然下降調」の出現数が発話データ全体だけでなく、理由・原因を示す「て形」「から」においても、KL が NS より出現数が少なかったことから、KL は「自然下降調」を十分に自然だと評価できないと予想した。しかし、予想とは異なり、KL の評価得点は NS と有意な差が認められなかった。

一方、フォローアップインタビューに見られたコメントにおいて、KL は、ピッチの低さや下降のような、韻律的特徴に注目していた。また、「日本人が使いそう」のような、日本人らしさに関するコメントも見られ、「自然下降調」が母語話者の典型的な型であることを学習している KL も見られた。NS は「日本人も普通に言うかな」のような、日本人らしさに関するコメントが多く、「自然下降調」が母語話者に典型的な型であることを認知していることから、自然だと評価していると考えられる。

したがって、KL は生成においては「自然下降調」の出現率が NS と比べて低く、まだ日本語における典型的な類型として「自然下降調」を習得できていないが、知覚においては、ピッチの下降や日本人らしさを基準として「自然下降調」を日本語として自然な類型であると知覚できていると言える。「自然下降調」は日本語において最もよく現れる類型であり、著しい上昇や下降、延伸などを持たないことから発話場面に影響されず使用できる型である。しかし、KL の一部には、「自然下降調」を不自然だとする評価も見られ、「不自然。速すぎる」「ちょっと違うと思う」など、NS とは異なる基準で不自然だとする評価を行っている KL も見られた。KL が「自然下降調」に対し NS とは異なる評価基準を用いる場合、生成だけでなく、知覚についても日本語において典型的な類型として「自然下降調」を習得することが困難である可能性があることから、優先的に指導が必要であると考えられる。

#### 4.5 まとめ

本章では、韓国人学習者の日本語句末イントネーションについて、KL の知覚と NS

の評価に焦点を当て検討を行った。本研究の調査結果をまとめると、以下の通りである。

第一に、KL の評価は NS と類似することが示された。KL・NS とともに「自然下降調」と「昇降調」の評価得点が「ゆすり調」と「連続的上昇調」より有意に高いことが示された。評価が類似した理由は、KL が「ゆすり調」と「連続的上昇調」が日本語のイントネーションとして不自然だと評価されうることを習得している可能性が考えられ、このことが KL と NS の評価の類似につながっていると言える。韓国人日本語学習者の音声評価基準の習得について調査を行った佐藤（2001）は、高さ、長さ、強さを操作した合成音声を用い、大学生の韓国人日本語学習者の音声評価能力を調査した結果、2・3年生には「音声評価基準が日本人被験者のそれに近づいた者が多く見られるのに対し、1年生にはほとんど見られない（佐藤 2001:144）」結果が示されたことを報告している。この結果は、学習が進むに連れ、KL が日本語音声の評価基準を習得する可能性を示すものと言える。本研究の KL についても 3、4年生が多かったことを考えると、今回の KL の一部については、「ゆすり調」や「連続的上昇調」について不自然と評価できる音声評価基準を習得している可能性がある。しかし、いつごろ習得されうるものであるのか、また個人的な属性や学習方法による違いがあるのか等に関しては、今後さらに検討を行う必要がある。

第二に、KL と NS が評価に使用した基準の相違が示された。「昇降調」と「連続的上昇調」の評価において、KL は高さや長さの変化などの韻律的特徴や、日本人・日本語らしさ、韓国人・韓国語らしさに注目するが、NS は発話場面により注目する傾向が見られた。KL と NS の評価得点は類似したが、評価に用いた基準は KL・NS 間で異なると言える。なお、こうした評価基準の相違から、KL は発話場면을十分に考慮することができず、発話場면을考慮した評価を行った NS のように「昇降調」を自然だと評価できなかつたことから、結果として「昇降調」における KL の評価得点が NS より有意に低かつたのではないかと考えられる。

第三に、NS の「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」に対する自然さの評価は発話場面により異なる可能性が示された。NS は評価において発話場면을重視しており、発話場面により許容できる場合と許容が困難な場合があると考えられる。

第四に、NS の評価において、「ゆすり調」と「昇降調」の間に評価の相違が示された。先行研究では「昇降調」と「ゆすり調」が区別されず「上昇下降調」として不自然だと評価されてきたが（李恵蓮 2002）、本研究における NS の評価では「昇降調」が「ゆす

り調」より有意に自然だと評価されることが示された。また KL の評価にも「昇降調」と「ゆすり調」間に有意差が見られ、2つの型を弁別できる能力を持っていることが示された。

しかし、「ゆすり調」については、KL・NS ともに低く評価しているものの、NS が KL より有意に低く評価している結果が示された。この結果については、NS の中には、苛立ちを示す実験文の場面を考慮しても「ゆすり調」は日本語として許容できないとする評価が存在し、その許容範囲が KL より狭いことから、NS の得点が有意に低かったのではないかと考えられる。「ゆすり調」は始めの低いピッチが続く部分が、ピッチが上昇下降するという点で類似した「昇降調」と韻律的に異なる点であるが、「昇降調」が NS に自然だと評価されたことを考えると、このピッチの低い部分が上昇開始点に至るまでの長さや高さの変化が、「ゆすり調」の評価に影響する可能性があると考えられる。これまでの研究においては、特に疑問文において、疑いと問い返し（李宝瓊 2007）や平静の問いと非難の問い（田渕 2008）のような、発話意図が明確に区別される文に対し、合成音声を使った知覚実験が行われ、学習者と母語話者の知覚に相違が見られたことが報告されている。「ゆすり調」の評価についても、今後、上昇開始点に至るまでの部分の長さや高さ进行操作した合成音声を使った追試を行い、KL と NS の評価の詳細をさらに解明していくことが求められるだろう。

以上の結果をまとめると、本章で明らかになった最も重要な点は、KL と NS が用いる評価基準が異なる可能性があることである。従来の研究では、母語話者が句末イントネーションを否定的に評価することに焦点が置かれ、これらは一括して矯正すべき誤用とされてきた。それに対し、本章では、日本語のイントネーションとしての自然さの評価とともに各類型における評価基準を調査したことによって、同じイントネーションであっても発話場面を考慮し適切に使用すれば、許容される可能性があることが示された。しかし、「ゆすり調」や「連続的上昇調」の場合、韻律的に不自然であると評価する NS も見られたことから、過剰な使用には注意する必要があると考えられる。

一方、KL は、韻律的特徴や日本語らしさ・韓国語らしさを手掛かりに評価することが多く、発話場面を考慮し自然さを判断する能力はまだ十分とは言えない。KL が NS とは異なる基準で「昇降調」を使用しても良いと判断した場合、相手への苛立ちを示す場面では許容されたとしても、学会発表やビジネス場面のようなフォーマルな発話場面で許容されない可能性が高い。李惠蓮（2002）は、日本語母語話者に韓国人学習者の句

末イントネーションを聞かせインタビューを行った結果、「学会などの場面では、落ち着いていない印象を与える（李恵蓮 2002:105）」との指摘が見られたことを報告し、「場面による許容度の差異が窺える（李恵蓮 2002:105）」と指摘している。この指摘は、本研究の実験文のように、苛立ちを示す発話場面では NS が「昇降調」を日本語のイントネーションとして自然だと評価しても、フォーマルな場面においては、問題があると評価され、低く評価される可能性を示すものと考えられる。また、第3章の上司との会話場面において、NS の「昇降調」の出現数が友人との会話場面と比較し有意に少なかったことも、「昇降調」の評価にフォーマルさが影響することを示唆するものである。

一方、李恵蓮（2002）ではインタビューを行った際に聞かせた句末イントネーションの韻律的特徴について示されていない。本研究では「ゆすり調」や「連続的上昇調」よりも、特に「昇降調」において、発話場面によっては NS の評価において「自然下降調」と有意差が見られない程度に、高い評価を受けるという結果が示された。このことから、類型別の具体的な NS の評価の実態を明らかにすることができたと考える。

さらに、こうした発話場面を考慮してイントネーションの自然さを評価する能力は、KL がイントネーションを適切に発音できるかどうかの生成面の習得にも影響を及ぼす可能性がある。小河原（1997）は、韓国人学習者の発音と聞き取り能力の相関を検討し、「自分自身が明確にそれぞれの発音基準を意識して発音し、その自分自身の発音を聞いた際、それぞれの基準どおりに発音できているかどうか自分で聴覚的に知覚できる学習者ほど発音も良い（小河原 1997:92-93）」結果が示されたと指摘している。第二言語の発音習得において、「正確な基準を持っていなければ、妥当な自己修正が行われず、いつまでたっても同じ発音の問題を抱えつづける（佐藤 2001:135）」可能性が高いことを考えれば、本研究の結論は、教師が発音指導を行う際、学習者が自身の句末イントネーションに対し、韻律的特徴だけでなく、出現する発話場面とイントネーションの韻律的特徴の双方を考慮し適切に使用できているかどうかを、学習者自身が自己モニターを働かせ、発音できるように支援するための発音指導が求められることを示唆する。

また、「ゆすり調」に対する KL の評価は、自然だとする評価と不自然だとする評価に分かれる結果が示された。自然だと評価したグループについては、母語の影響を受けている可能性もあるが、日本語としての「ゆすり調」を習得した可能性もある。また、不自然だと評価したグループも日本語を習得し、「ゆすり調」を不自然な型として知覚できるようになった可能性がある。本研究の KL は学習歴（SD=1.00）にややばらつき

があったことから、習得レベルが結果に影響を与えた可能性があり、今後、習得レベルを統制し、レベルの異なるグループを比較することで、知覚の習得過程を明らかにする必要がある。さらに、生成との関係を踏まえた句末イントネーションの習得過程についても、続けてその実態を解明していく必要があるだろう。

加えて、KL が句末イントネーションの評価において、発話場面を全く考慮せず評価を行っていたかについては、さらに追試を行う必要がある。フォローアップインタビューでは、各類型に対し「自然」「不自然」どちらに評価したか、その理由は何かに対し調査協力者に回答を求め、発話場面という基準を用いたか否かについて、さらに詳細な回答は求めなかった。したがって、KL が発話場面を一切考慮していないかは、本章のフォローアップインタビューの結果だけでは、判断しかねるという問題が残る。今後、KL に異なる発話場面に対する評価を求め、場面を考慮した知覚ができるかについて追試を行う必要がある。また、フォローアップインタビューについて、調査協力者全員に協力を得ることはできなかったために、コメントが得られなかった調査協力者の評価基準を十分に検討できなかったのは本章の限界である。今後、協力者全員の評価基準の追試を行うことにより、評価基準と評価得点の関係を続けて検討する必要がある。

なお、本章では「連続的上昇調」について、NS から上下関係を想定すれば自然であるとのコメントが得られた。松崎（2005）は、従来の聴解問題における問題点として、「設問を聞いてから遡って会話の状況を想像しなければならない（松崎 2005:129）」としている。本章の調査も、実験文から発話場面を推測し評価を行うことが求められるため、評価者によって想定する発話場面が異なった可能性がある。今後、具体的な発話場面を評価者に提示し再調査を行うことで、得られた知見をさらに検証する必要があるだろう。さらに、本章では1つの発話場面を取り上げたが、発話場面に相違による評価傾向の詳細を知るためには、複数の発話場面を評価材料とする必要があると考えられる。加えて、本章では、母語の影響である可能性が高いと考えられる「ゆすり調」について、母語の影響により不自然さに気づかないため、自然だと評価すると予想した。しかし、明示的知識として不自然だとわかっているにもかかわらず、文中にイントネーションを含めて聞かせた場合、不自然だと評価できない可能性もある。したがって、学習者の知覚の実態を、知識のレベルと運用レベルでさらに調査していくことで、学習者に必要な支援を考えることができるだろう。こうした改善点を踏まえ、句末イントネーションに対する学習者の知覚について、引き続きその実態を明らかにしていくことが求められる。



## 第 5 章 韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価【研究 3】

第 5 章では、第 3 章の KL の発話データに見られた句末イントネーションの中から「昇降調」と「ゆすり調」に注目し、イントネーションが出現する助詞の拍数、文法形式、発話場面による母語話者評価への影響を検討する。また、「昇降調」と「ゆすり調」の持続時間とピッチレベルを操作した合成音声を評価の刺激とし、母語話者評価に見られる両類型の韻律的特徴の影響を明らかにする。

### 5.1 背景と目的

第 4 章では、韓国人日本語学習者の句末イントネーションの自然さについて NS に評価を求めた。その結果、「昇降調」の評価得点が「ゆすり調」より有意に高く、「昇降調」と「自然下降調」の評価得点の間には有意差が見られなかった。したがって、NS は「昇降調」と「ゆすり調」を区別しており、「昇降調」が「ゆすり調」より日本語のイントネーションとして許容され得る類型であることと、発話場面によっては「自然下降調」と有意差が見られない程度に、「昇降調」が NS に日本語として自然な類型として評価されることが示唆された。

第 4 章で NS が評価を行った実験文については、第 3 章の発話データにおいて、KL が理由・原因を示す「て形」「から」に「昇降調」と「ゆすり調」を多用していたことから、同様に理由・原因が強調されやすい接続詞の「だから」を評価対象とした。一方、韓国人日本語学習者の「上昇下降調」について母語話者評価を行った李恵蓮（2002）では、因果関係を示す「て形<sup>70</sup>」「から」を評価対象とし評価を求めた結果、「て形」（6 段階評価：1.83 点）より「から」（6 段階評価：4.37 点）の評価得点が高い結果が示されたことを報告している。この結果を受け、李恵蓮（2002）は、1 拍の助詞である「て形」が 2 拍の「から」より低く評価され、「助詞 1 拍の中で激しく上昇して下降する「上昇下降調」が最も不自然（李恵蓮 2002:123）」であるとし、拍数の相違が評価に影響したと指摘している。

しかし、本研究の第 3 章の発話データにおいて NS は、理由・原因を示す「て形」「か

---

<sup>70</sup> 李恵蓮（2002）の実験文は以下の通りであり、下線部分にイントネーションが出現している。「て形」：しごとがあって、おくれました。「から」：しごとがあったから、おくれました。

ら」においてともに「昇降調」を多用していた。したがって、NSの「昇降調」に対する評価において、「て形」と「から」間に評価の相違が見られるとは考え難い。李惠蓮(2002)は「上昇下降調」の特徴を「ピッチが上がってから下がる(李惠蓮2002:48)」とし、ピッチは上昇後下降する類型であることは指摘するが、上昇の前の低いピッチが持続する部分については言及が見られない。李惠蓮(2002)の「て形」に見られた類型が「ゆすり調」であり、「から」に見られた類型が「昇降調」であった場合、「て形」が「から」より低い評価になったことも説明できるが、現時点では、李惠蓮(2002)の「上昇下降調」が「昇降調」と「ゆすり調」のどちらであるか判断できない。以上を受け、「昇降調」と「ゆすり調」の評価に、助詞の拍数による影響が見られるかを明らかにすべく、両類型において因果関係を示す「て形」と「から」間の評価得点に有意差が見られるかについて再検討を行う必要がある。

また、第3章の発話データの分析結果、KLの「昇降調」は「て形」と「から」だけでなく、主体を示す「が」においても出現数が多かった。しかし、NSの「昇降調」は、「従属節の最後に来て、従属節と主節の関係を示す(鈴木2015:118)」接続助詞を中心に出現数が多く、「名詞に付いて述語との関係を示す(鈴木2015:115)」格助詞「が」にはKLより出現数が有意に少なかった。こうしたNSの発話データに見られた特徴を考慮すると、格助詞の「が」に「昇降調」が出現する場合、接続助詞の「て形」「から」よりNSに低く評価される可能性が高いと考えられる。一方、KLのみに見られた「ゆすり調」も、格助詞「が」に最も出現数が多く、さらに助詞だけでなく「名詞」にも見られた。第4章のNSの評価において「ゆすり調」は「昇降調」より低く評価されることが示されたが、因果関係を示す「て形」「から」だけでなく、KLに「ゆすり調」の出現数が多かった「が」や「名詞」に出現する場合、NSにどのように評価されるかについても検討する必要がある。「名詞」の場合、一般に接続助詞や格助詞より文節の切れ目となり難いことを考えると、NSに接続助詞や格助詞より低く評価される可能性が高い。したがって、KLの「昇降調」と「ゆすり調」に対するNSの評価の実態を明らかにするためには、イントネーションが出現する文法形式による母語話者評価への影響についての検討が求められる。

一方、第4章の実験文については、すでに話した内容を再度聞かれたために話者の苛立ちを示す発話場面において評価を求めた。しかし、「ゆすり調」に対する評価において、NSの一部からは、「しつこいな」みたいな感じの気持ちがあれば場面によって言わ

なくない」や「怒って「またかよ」みたいな感じで使う時は言う。でもシリアスな場面なのに「だから～」とか言ったら「何だこいつ」はと思うかもしれない」のようなコメントが見られ、発話場面を考慮すれば許容できるが、発話場面における改まり度が高い場合は許容できないというコメントが得られた。「昇降調」についても、発話場面の改まり度が影響する可能性がある。第3章の発話データでは、上司との会話におけるNSの「昇降調」の出現数が、友人との会話と比較し、有意に少ないことが示された。したがって、改まり度が高い場面においてNSの「昇降調」は、出現数が少ないと言え、NSは「非常に改まった場面では、当該イントネーションが嫌われていることを知る者は使わないように気を付ける（佐々木（原）2004:90）」傾向が確認されたと言える。このことから、NSの「昇降調」に対する評価は、改まり度の高い場面において、評価得点が低くなる可能性がある。

しかしながら、第4章では単一の発話場面に対する評価を求めており、発話場面による評価の相違について量的に検討することは不十分であった。この点についてさらに検討するため、発話場面の改まり度に差異を設けた二つの発話場面におけるNSの評価を比較する必要がある。発話場面の改まり度を構成する一つの重要な要素は発話の相手である。友人同士の会話であるか、目上と目下の上下関係の会話であるかに応じ、発話場面の性質が異なることは必然的である。したがって、発話の相手の上下関係に差異を設けた二つの場面に対し、「昇降調」と「ゆすり調」の評価得点における発話場面の影響を検討する必要があると考えられる。

さらに、第4章のNSの評価においては、「昇降調」より「ゆすり調」の評価得点が有意に低かった。「昇降調」と「ゆすり調」はピッチが上昇後下降する点で韻律的に類似しているものの、「ゆすり調」はピッチの上昇開始前の低いピッチが持続する区間（図5-2「↓」の部分）があるのに対し、「昇降調」（図5-1）はこの区間が見られない。

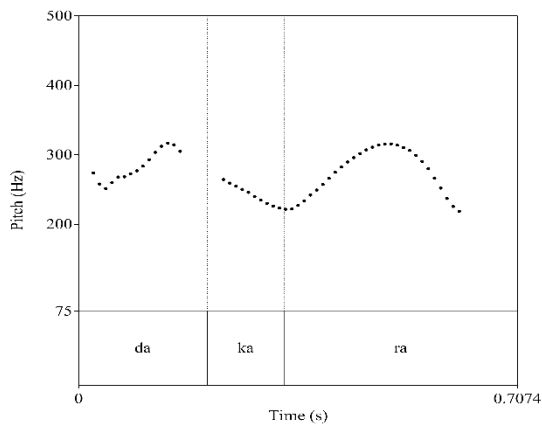


図 5-1 昇降調(図 4-1 再掲)

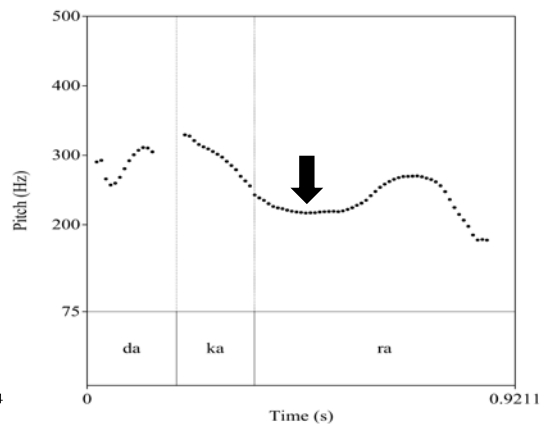


図 5-2 ゆすり調(図 4-2 再掲)

したがって、この上昇開始前の低いピッチが持続する区間の有無が評価の相違に影響していると言える。しかし、この区間のピッチの低さが評価を下げているのか、この区間の持続時間の長さが評価を下げているのかは、不明である。第 4 章のフォローアップインタビューでは、NS から「「ら」の音が揺れる」「波打つ感じ」のため「ゆすり調」が不自然だとのコメントが得られた。これは、上昇開始前に低いピッチから上昇下降と続くピッチの変化を指摘していると言える。したがって、低いピッチが持続する区間のピッチが高くなる場合、ピッチの上昇部に至るピッチの高低幅が小さくなり、「昇降調」のピッチパターンに近づくことから、評価得点が上がると予想される。反対に、低いピッチが持続する区間のピッチが低くなるほど、上昇部に至るピッチの高低幅は大きくなり、評価得点が下がると予想される。

また、第 4 章のフォローアップインタビューでは、「ゆすり調」に対し「抑揚が最後伸ばしすぎ」「語尾が長さというか、伸びが不自然」との NS のコメントが得られた。これらは、持続時間の長さに関する指摘だと言える。上昇開始前の低いピッチが持続する区間における持続時間が短くなる場合、上昇開始前の低いピッチが持続する区間がない「昇降調」のピッチパターンに近づくことから、評価得点が上がると予想される。反対に、この区間における持続時間が長くなるほど、評価得点が下がると予想される。以上のように、ピッチと持続時間の変化が NS の評価に及ぼす影響を検討し、評価を下げる要因と評価を上げる特徴を明らかにする必要がある。そこで、本章では、「ゆすり調」のピッチの高低と持続時間の長短を操作した合成音声を使い、評価得点の変化が見られるかについて検討する。

さらに「昇降調」においても、低いピッチが持続する区間が無ければ、ピッチの高さや持続時間の長さが著しい場合でも、評価得点が「ゆすり調」より高いかは明らかではない。つまり、低いピッチが持続する区間が無く、ピッチが上昇後下降するピッチ変化のみが見られたとしても、ピッチの上下変化が大きい場合や持続時間が長い場合は、「ゆすり調」同様、韻律的特徴が著しくなることから評価を下げると予想される。したがって、「昇降調」のピッチの上昇が開始され下降が終わるまでのイントネーション全体にかけてのピッチと持続時間の変化がNSの評価にどのように影響するかについても検討を行う必要がある。

以上の課題を踏まえ、本章では、以下の4点について、KLの「昇降調」と「ゆすり調」に対するNSの評価の実態を明らかにすることを目的とする。第一に、助詞の拍数による評価の相違について再検討を行う。李惠蓮(2002)では、韓国人学習者の「上昇下降調」が1拍助詞の「て形」で2拍助詞の「から」より不自然だと評価され、拍数の相違が評価に影響すると指摘した。しかし、本研究の第3章において、NSは「て形」と「から」でともに「昇降調」の出現数が多かったことから、「昇降調」内で拍数による評価の相違は見られないと予想される。拍数による評価への影響が見られない場合、「ゆすり調」も同様に、「て形」と「から」間に評価の相違は見られないと予想される。

第二に、文法形式による評価の相違を明らかにする。第3章のNSの発話データに見られた「昇降調」は、従属節の最後に付く接続助詞「て形」や「から」を中心に出現数が多く、名詞の末尾に付くことが多い格助詞「が」においてはあまり見られず、KLより出現数が有意に少なかった。さらに、KLのみに見られた「ゆすり調」は、格助詞「が」に出現数が最も多く、「名詞」においても見られた。したがって、「て形」「から」「が」「名詞」の文法形式の相違が、NSの評価に影響が見られるかについて検討を行う。

第三に、発話場面の相違による母語話者評価を明らかにする。第4章の「ゆすり調」の評価基準に対するNSのフォローアップインタビューにおいて、「苛立ちを示す発話場面であることを考慮すれば許容できるが、場面の改まり度が高い場合は許容できない」とのコメントが得られた。また、「昇降調」も、改まり度の高い場面においてNSは「使わないように気を付ける(佐々木(原)2004:90)」との指摘があることから、「昇降調」「ゆすり調」ともに改まり度の高い場面において厳しい評価を受ける可能性がある。以上を受け、発話場面の改まり度に差異を設けた二つの場面に対しNSの評価を求め、両類型の評価における発話場面の影響を検討する。

第四に、ピッチと持続時間の変化による NS の評価を明らかにする。「昇降調」と「ゆすり調」の韻律的相違は、上昇開始前の低いピッチが持続する区間の有無にある。第 4 章のフォローアップインタビューからも、「ゆすり調」のピッチの変化と持続時間の長さについて指摘があったが、この区間のピッチの低さと、持続時間の長さとはどのように「ゆすり調」の評価を下げているのかは不明である。また、第 4 章で NS に高く評価された「昇降調」も、「持続時間」や「ピッチ」の変化によらず、一貫して自然だと評価されるかについても検討の余地がある。このように、「昇降調」と「ゆすり調」のピッチと持続時間の変化がどのように評価に影響するかは十分に明らかにされていない。本章では、ピッチの高低と持続時間の長短を操作した合成音声を用い、ピッチと持続時間の変化が、NS の評価に与える影響について検討する。

## 5.2 方法

### 5.2.1 調査協力者

調査協力者の NS は 28 名（男性 14 名、女性 14 名）であり、調査時（2017 年 9 月時点）の平均年齢は 32.21 歳（SD=16.28）である。NS の属性は、大学生（10 名）、大学院生（5 名）、会社員（4 名）、研究員（3 名）、公務員（3 名）、主婦（3 名）である。NS の出身地は、東京（9 名）、埼玉（5 名）、茨城（2 名）、北海道（1 名）、宮城（1 名）、栃木（1 名）、群馬（1 名）、静岡（1 名）、愛知（1 名）、奈良（1 名）、兵庫（1 名）、岡山（1 名）、福岡（1 名）、佐賀（1 名）、長崎（1 名）である。第 4 章と同様、北陸地方出身者は、母方言からの影響を考慮し、調査対象に含めなかった。NS28 名の  $\alpha$  係数を算出した結果、調査対象者間において、 $\alpha = .882$ （調査 1<sup>71</sup>）、 $\alpha = .971$ （調査 2）であり、どちらも .80 以上の高い信頼性が得られたことから、区別せず 1 つのグループとして扱った。

### 5.2.2 評価音声

#### 5.2.2.1 調査 1 助詞の拍数・文法形式・発話場面による NS 評価

調査 1 においては、本章の研究目的のうち、NS の評価における助詞の拍数による影

---

<sup>71</sup> 本章では、調査 1 において、助詞の拍数による影響、文法形式による影響、発話場面による影響を検討し、場面 2 においてはピッチと持続時間の変化による影響について検討を行った。各調査の詳細については 5.2.2 に記す。

響、文法形式の相違による影響、発話場面の相違による影響について検討を行う。

まず、先行研究で指摘された助詞の拍数による NS 評価への影響について再検討すべく、李恵蓮（2002）における実験文と同様、因果関係を示す 1 拍の接続助詞である「て形」と 2 拍の接続助詞である「から」を評価対象とした。具体的には、「て形」と「から」における「昇降調」と「ゆすり調」を評価対象とする。

次に、第 3 章の発話データに見られた文法形式による NS 評価への影響を検討すべく、KL・NS とともに「昇降調」の出現数が多かった「て形」「から」に加え、KL の「昇降調」が NS より有意に多く、主体を示す格助詞「が」を評価対象とした。また、「が」は、KL の「ゆすり調」の出現数が最も多かった形式である。加えて、KL は「名詞」においても、「ゆすり調」の出現数が多かったことから、以上の「て形」「から」「が」「名詞」の 4 つの文法形式を評価対象とした。「名詞」は、名詞のアクセントの影響が見られる可能性を考え、頭高型である「毎日」と平板型の「わたし」の 2 つの評価対象とした。実験文は以下の 2 文であり、下線が評価対象である。

- ・ゆうこが 毎日 電話してて わたし 寝られないんです（寝られないんだよ）
- ・ゆうこが 毎日 電話してるから わたし 寝られないんです（寝られないんだよ）

実験文における発話場面は、韓国人日本語学習者（金さん）と日本語母語話者（発話場面①鈴木先生（以下場面①、図 5-3）、発話場面②佐藤さん（以下場面②、図 5-4））の会話である。発話場面は、因果関係を示す「て形」と「から」、主体を示す「が」と「名詞」の「毎日」「わたし」が出現しやすいよう、場面①②ともに、「金さんと同じ指導教員のゼミ生であり、ルームメイトでもある佐藤さん（日本語母語話者）が毎日遅くまで大声で彼氏と電話をするために、金さんが迷惑を受けている」ことから、上記の実験文を発話するような場面とした。

なお、発話場面の相違による NS の評価への影響を検討すべく、発話相手が異なる二つの場面を作成した。第 3 章の NS の発話データを分析した結果、「昇降調」の出現については場面の改まり度が影響していると考えられ、比較的改まり度が高い上司との会話においては「昇降調」の出現数が友人との会話に比べ有意に少なかった。また、「ゆすり調」についても、第 4 章の NS のフォローアップインタビューから、苛立ちを示す発話場面を考慮すれば許容できるが、改まり度が高い場合は許容できないというコメント

が得られたことから、発話場面の改まり度により評価が異なる可能性が示された。以上を受け、本章では、場面①は、改まり度が高い場面における NS の評価を検討すべく、話者間に上下関係を持つ、指導教員と指導学生の会話とした。また、上下関係による改まり度が高い場面が想定されやすいよう、厳しい指導教員に「最近研究に集中できないみたいだけど、どうした？」と質問され、その理由を答えている場面とした。

また、場面②は、比較的改まり度が低い場面における NS の評価を検討すべく、友人である佐藤さんとの会話とした。さらに、苛立ちを示す場面なら許容できるとのコメントが第 4 章で見られたことから、金さんに迷惑をかけている当事者である佐藤さんから「最近研究に集中できないみたいだけど、どうしたの？」と聞かれ、金さんがその理由を答えている場面とした。以上から、調査 1 では「昇降調」「ゆすり調」の 2 類型に、場面①②の改まり度の異なる 2 場面、5 つの実験語（「て形」「から」「が」「毎日」「わたし」）の合計 20 種の音声を作成した。また、「から」を除く「が」「毎日」「わたし」に句末イントネーションが置かれる評価音声は、「て形」の実験文をもとに作成した。

金さんと佐藤さん（ゆうこ）は同じゼミに所属する仲のいい友達で、同じ部屋に住むルームメートです（他のルームメートはいません）。しかし、最近、金さんは 1 つ困っていることがあります。それは、佐藤さんが毎日夜遅くまで彼氏と大声で電話をするということです。この前は、佐藤さんの電話する声がうるさくて、全然眠れませんでした。それで、金さんは最近はなかなか研究に集中できていません。以下は、指導教員の鈴木先生と金さんの会話です。鈴木先生は、金さんと佐藤さんの指導教員で、金さんと佐藤さんは鈴木先生のゼミ生です。鈴木先生は、大変厳しく、厳めしいことで有名な先生です。

鈴木先生：最近研究に集中できないみたいだけど、どうした？

金さん：ゆうこが 毎日 電話してて わたし 寝られないんです。

（または、「ゆうこが 毎日 電話してるから わたし 寝られないんです。」）

図 5-3 調査 1 における場面①の実験文

金さんと佐藤さん（ゆうこ）は鈴木先生のゼミに所属する仲のいい友達で、同じ部屋に住むルームメートです（他のルームメートはいません）。しかし、最近、金さんは 1 つ困っていることがあります。それは、佐藤さんが毎日夜遅くまで彼氏と大声で電話をするということです。この前は、佐藤さんの電話する声がうるさくて、全然眠れませんでした。それで、最近なかなか研究に集中できていません。以下は、佐藤さん（ゆうこ）と金さんの会話です。金さんは、これまで何度も佐藤さんに遅い時間に電話するのをやめてほしいと話しましたが、佐藤さんはなかなか聞いてくれませんでした。

佐藤さん（ゆうこ）：最近研究に集中できないみたいだけど、どうしたの？

金さん：ゆうこが 毎日 電話してて わたし 寝られないんだよ。

（または、「ゆうこが 毎日 電話してるから わたし 寝られないんだよ。」）

図 5-4 調査 1 における場面②の実験文



### 5.2.2.2 調査2 持続時間とピッチの変化による評価の相違

本章におけるもう1つの目的は、「昇降調」と「ゆすり調」の持続時間とピッチの変化がNSの評価に与える影響を明らかにすることである。そこで、「昇降調」と「ゆすり調」の持続時間とピッチを操作した合成音声を作成した。合成音声の作成に際しては、調査1同様、韓国語母語話者である本論筆者が、実験文を「昇降調」と「ゆすり調」が出現するように発話した音声を録音した上で、音響分析ソフトPraat (version 6.0.15)を使い、評価対象の「昇降調」と「ゆすり調」の部分の持続時間とピッチを操作した。

まず、「昇降調」は、第4章のNSの評価において「ゆすり調」より有意に高く評価されたが、「持続時間」や「ピッチ」の変化によらず、一貫して自然だと評価されるかについては検討の余地がある。そこで、「昇降調」のピッチの上昇が生じ下降が終わるまでの母音部における持続時間(図5-5)とピッチ(図5-6)を操作した合成音声を作成した。「昇降調」の元音声の持続時間は0.336msである。「昇降調」における持続時間の操作については、元音声の0.5倍、0.7倍に短く操作した音声と、持続時間の操作を行っていない元音声、元音声の1.25倍、1.5倍に持続時間を長く操作した5レベルを評価刺激とした。また、ピッチの操作については、ピッチの上昇が生じる部分から下降までの区間におけるピッチ(Hz)を操作し、元音声から-40Hz、-20Hzにピッチを低く操作した音声と、ピッチの操作を行っていない元音声(開始点:247Hz、最高点:393Hz、終了点:246Hz)、元音声から+20Hz、+40Hzにピッチを高く操作した5レベルを評価刺激とした。以上のように、持続時間の操作を行った5レベル(0.5倍、0.7倍、元音声、1.25倍、1.5倍)の音声に対し、さらにピッチの操作を5レベル(-40Hz、-20Hz、元音声、+20Hz、+40Hz)で行い、「昇降調」について、合計25種の音声を作成した。「昇降調」の持続時間とピッチの変化によるNSの評価については、持続時間が長く、ピッチの幅が大きくなるほど、韻律的特徴が著しくなることから、評価得点が低くなると予想される。

次に、「ゆすり調」の持続時間とピッチの操作について述べる。「ゆすり調」は、ピッチの上昇が開始する前の低いピッチが続く区間が見られることが「昇降調」と区別される特徴であり、この区間の有無がNSの評価に影響すると考えられることから、この低いピッチが続く区間に対し、持続時間(図5-7)とピッチ(図5-8)を操作した。「ゆすり調」の元音声における低いピッチが続く部分の持続時間は0.150ms、「ゆすり調」全体の持続時間は、0.593msである。持続時間の操作については、「昇降調」同様、元音

声の 0.5 倍、0.7 倍に持続時間を短く操作した音声と、操作を行っていない元音声、元音声の 1.25 倍、1.5 倍に持続時間を長く操作した 5 レベルを評価刺激とした。持続時間による NS の評価は、上昇が開始する前の低いピッチが続く区間が短くなれば、韻律的に「昇降調」に近くなるため、高く評価されると予想され、反対に低いピッチの区間が長くなる場合、低く評価されると予想される。「ゆすり調」のピッチの操作についても、「昇降調」同様、-40Hz、-20Hz、元音声（開始点:263Hz、終了点:242Hz）、+20Hz、+40Hz の 5 レベルとした。以上のことから、持続時間の操作を行った 5 レベル（0.5 倍、0.7 倍、元音声、1.25 倍、1.5 倍）の音声に対し、さらにピッチを 5 レベル（-40Hz、-20Hz、元音声、+20Hz、+40Hz）に操作し、「ゆすり調」について、合計 25 種の音声を作成した。「ゆすり調」のピッチの変化による NS の評価については、ピッチを低く操作した -20Hz、-40Hz の場合、上昇が生じている部分とのピッチの差が更に開くことになるため、イントネーションの高低変化が大きくなる。一方、ピッチを高く操作した +20Hz、+40Hz の場合、上昇が生じている部分とのピッチの差が減ることになるため、イントネーションの高低変化は小さくなる。高低変化が大きくなる場合、韻律的特徴が著しくなることから評価得点が低くなると予想され、高低変化が小さくなる場合、評価得点が高くなると予想される。

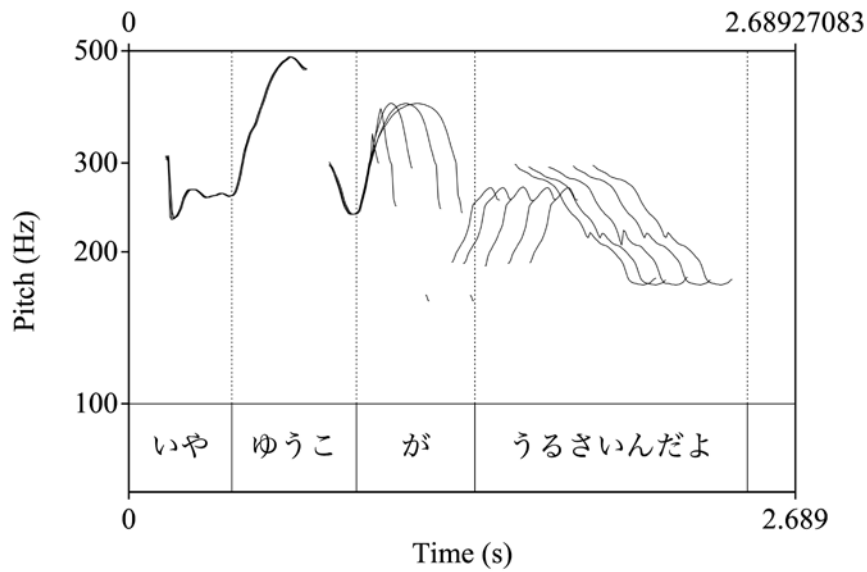


図 5-5 調査 2 の「昇降調」の持続時間を操作した合成音声（「が」の部分）

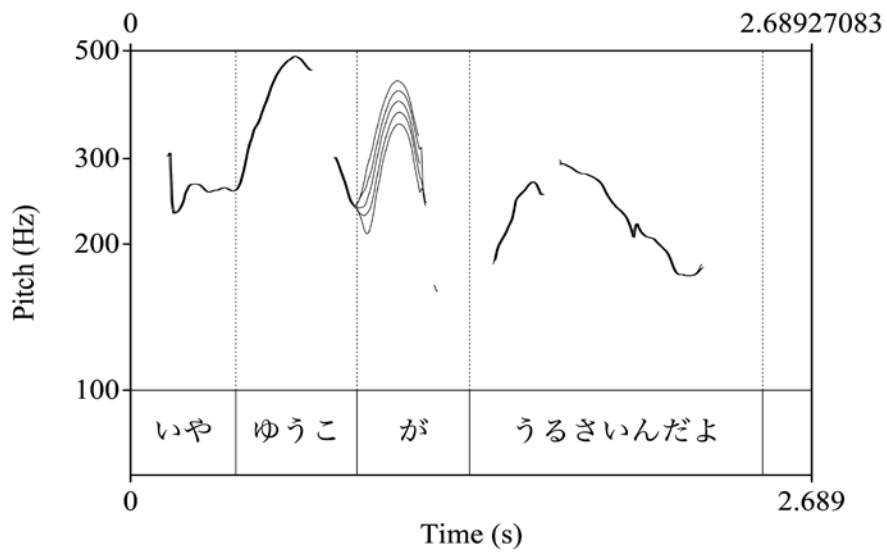


図 5-6 調査 2 の「昇降調」のピッチを操作した合成音声（「が」の部分）

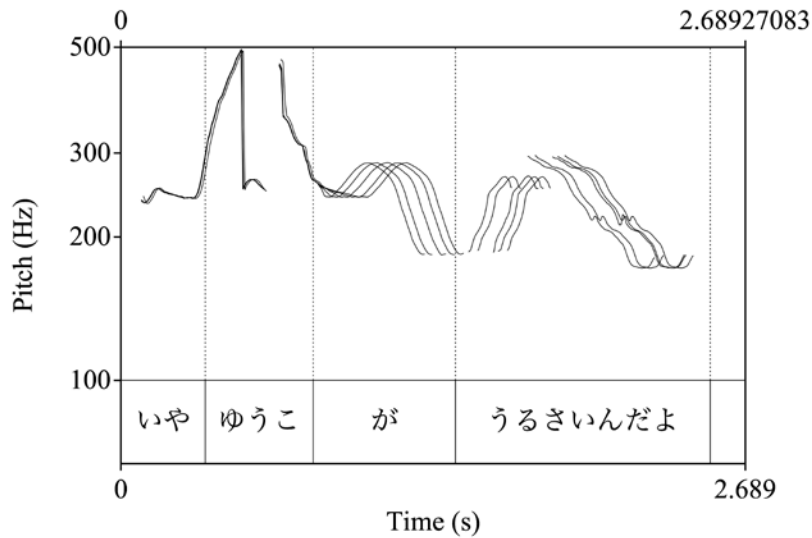


図 5-7 調査 2 の「ゆすり調」の持続時間を操作した合成音声（「が」の部分）

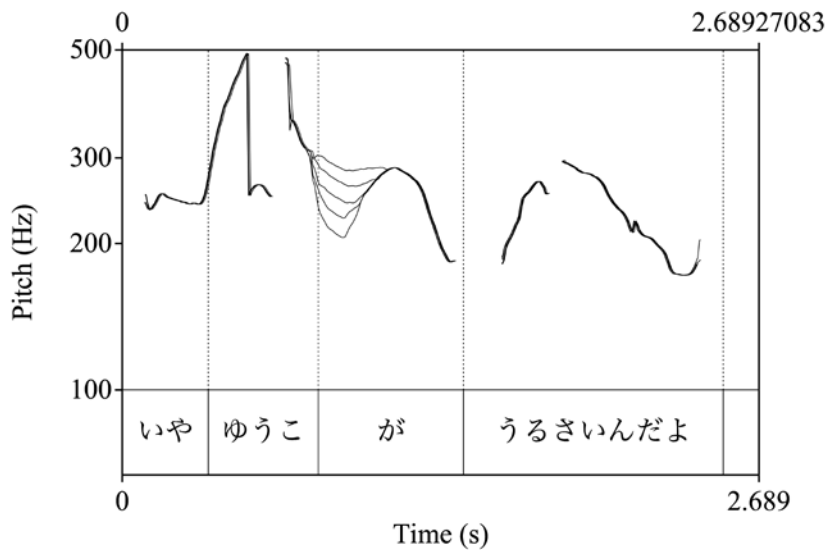


図 5-8 調査 2 の「ゆすり調」のピッチを操作した合成音声（「が」の部分）

調査 2 の実験文（図 5-9）と発話場面については、KL の「昇降調」「ゆすり調」が出現しやすい場面であるよう、調査 1 の場面②同様、佐藤さん（日本語母語話者）と金さん（韓国人日本語学習者）との会話の続きとして、友人である佐藤さんに金さんが迷惑を受けていることについて話している発話場面とした。

一方、KL の「昇降調」と「ゆすり調」は主体を示す格助詞「が」において出現数が NS より有意に多いことが示された。しかし、格助詞「が」の用法においては、「A「ど

の映画を見よう」B「佐藤監督の新作がいいな（日本語記述文法研究会 2008b:81-82）」のような会話において、「数ある映画の中で、他の映画ではなく、佐藤監督の新作がいい（見たい）」というように、「が」で提示される「佐藤監督の新作」が排他的に取り立てられ、限定されているという意味が（日本語記述文法研究会 2008b:82）」ある。さらに、こうした「とりたての表現のあるところ（井上 1994:11-12）」には、母語話者の日本語において「昇降調」が使われることが指摘されている（井上 1994）。したがって、格助詞「が」であっても、取り立てられ限定的な意味を持つ場合は、「昇降調」が見られても NS に許容される可能性がある。そこで、調査 2 の実験文として、佐藤さんに「え？うるさいのはそっちでしょう？」と聞かれたために、金さんが「いや、ゆうこがうるさいんだよ」と、うるさいのは他の人ではなく、ゆうこであることを取り立ての「が」を用い、苛立ちを示している発話場面とした。

<会話の場面 2>の続き
佐藤さん（ゆうこ）：最近研究に集中できないみたいだけど、どうしたの？
金さん：ゆうこが 毎日 電話してるから わたし 寝られないんだよ。
佐藤さん（ゆうこ）：え？うるさいのは そっちでしょう？
金さん：いや、ゆうこ <u>が</u> うるさいんだよ。

図 5-9 調査 2 の実験文

### 5.2.3 評価刺激の作成

評価刺激の作成における実験文の録音に際しては、日本語母語話者の音声を、場面①（鈴木先生）は東京方言話者の 50 代男性 1 名、場面②（佐藤さん）は東京方言話者の 20 代女性 1 名の協力を得た。また、評価対象である韓国人日本語学習者（金さん）の音声は、本論筆者が録音した。録音した音声は、各イントネーションが実現されているか本論筆者と音声学を専門とする日本語母語話者 1 名が聴覚印象と音響分析ソフト Praat のピッチ曲線の目視から確認し、評価対象の句末イントネーションを除く単音やアクセント、イントネーションの誤用が見られないと確認されたものを調査に使用した。評価刺激の録音はすべて、筑波大学人文社会科学研究所棟の音声実験室（防音・無響室）で行った。録音機材は、Marantz 社の Solid State Recorder PMD661 モデルに、マイク（Audio-technica 社 BP4025 モデル）に接続し、wav ファイル形式で録音した。

録音した音声ファイルについては、まず、調査 1 の場面①において、2 種類のイントネーション（「昇降調」「ゆすり調」）が 5 つの実験語（「て形」「から」「が」「毎日」「わ

たし)に出現するように音声を作成したことから、10種の音声が評価対象となる。この10種の音声が3回繰り返し入るように、調査1の場面①について評価刺激の音声ファイルを作成した。評価刺激は、順序効果を考慮し、ランダム順に配列している。したがって、場面①では計30問について判定を求めた。また、場面②についても同様に、10種の音声をランダムに配列し、3回繰り返し、判定を求めた。調査2においては、2種類のイントネーション(「昇降調」「ゆすり調」)の持続時間(0.5倍、0.7倍、元音声、1.25倍、1.5倍)とピッチ(-40Hz、-20Hz、元音声、+20Hz、+40Hz)をそれぞれ5レベルに操作したことから、計50種の音声が評価対象となる。50種の音声が2回繰り返し入るように、評価刺激の音声ファイルを作成した。また、調査時は、同じ音声を繰り返し聴くことから、調査協力者の疲れを軽減すべく、調査1の場面①と場面②の間に休憩を入れ、また調査2は、4回に分け実施し、各回の間約1~2分の休憩を入れた。調査1・2に所要された時間は、説明の時間を含め、合計約45分である。

#### 5.2.4 調査手順

調査協力者には、まず、最初に話す話者の鈴木先生(場面①)と佐藤さん(場面②)は日本語母語話者、次に話す話者の金さんは韓国人日本語学習者であると伝え、韓国人学習者のイントネーションに注目して評価を行うように教示を与えた。また、調査1・調査2において、四角(□)で囲まれている部分のイントネーションに注目して評価を行うように求めた。イントネーションについては、「話し手の感情を示す声の高さと長さの変化」と説明し、語に恣意的に付与されるアクセントと混乱しないように教示を与えた。次に、音声の日本語らしさに対する6段階評定(1日本人は言わない<sup>72</sup>—6日本人も使う)をするように教示を与えた。調査協力者の回答は、印刷した回答シートを渡し、手書きで記入してもらった形式で判定を求めた。回答シートの例を図5-10に

---

<sup>72</sup> 本章の調査においては、評価刺激について日本人も使うものであるか否かを評価基準としてNSに評価を求めた。その理由は、第4章において「自然さ」を評価基準として評価を求めた際、不自然だと評価したNSからイントネーションのタイプは日本人も使用するものであるが、場面が適切ではないという理由から評価得点が低い場合が見られた。こうした場合、評価得点が低いことが日本語から逸脱したタイプであるためか、発話場面や機能が適切ではなかったためかについて、評価得点のみでは十分に結果を示すことができなかった。そこで、本章の調査では、日本語らしさ(日本人も使うか否か)を評価基準として評価を行ったことから、日本語から逸脱したタイプである場合、低い評価得点が見られると解釈できると考えられる。

示す。また、調査の順番は、調査 1 場面①→調査 1 場面②→調査 2 の順番に実施した。

評価を行った場所は、筑波大学構内の教室の一室および事務室など静かな場所で行い、音声はスピーカーを通して流した。調査に入る前に練習問題（3 問）を使い、回答方法や音の大きさが適切か確認を行った。調査協力者には、調査における教示内容を示した質問紙を読んでもらい、本論筆者が口頭で説明を補った。

<調査 I 本問題>

Q1 ゆうこが 毎日 電話してて わたし 寝られないんです。

日本人は言わない 日本人も使う

1——2——3——4——5——6

Q2 ゆうこが 毎日 電話してて わたし 寝られないんです。

日本人は言わない 日本人も使う

1——2——3——4——5——6

Q3 ゆうこが 毎日 電話してる から わたし 寝られないんです。

日本人は言わない 日本人も使う

1——2——3——4——5——6

図 5-10 調査に使用した回答シートの例（調査 1 場面①）

## 5.3 結果

### 5.3.1 信頼性の検討

本章では統計的検定に必要な評価数を得るため、調査 1 では一つの評価対象に対し 3 回繰り返し評価を求めている。そこで、評価の内的整合性を確認するため、分析に使用された NS 28 名の評定値を用いて  $\alpha$  係数を算出した。その結果、調査 1 は、評価対象の 20 項目の  $\alpha$  係数が  $\alpha = .661$  から  $\alpha = .938$  の範囲で見られ、再検討の目安とされている  $\alpha = .50$  以上（小塩 2004）の十分な信頼性が得られた。調査 2 は、評価対象の 50 項目中 46 の項目の  $\alpha$  係数が  $\alpha = .510$  から  $\alpha = .949$  の範囲で見られ、検討を行う上で十分な信頼性が得られたが、4 つの項目（ $\alpha = .286$ （昇降調-40Hz、0.7 倍）、 $\alpha = .420$ （ゆすり調-20Hz、0.5 倍）、 $\alpha = .465$ （昇降調-40Hz）、 $\alpha = .471$ （昇降調-40Hz、1.5 倍））において  $\alpha = .50$  以下の値が得られた。調査 2 では項目数が 50 と多かったために、一つの評価対象に対し 2 回しか繰り返し評価を求めていなかったことから、値が低くなっている

と考えられる。この 4 項目の削除を検討する上で、修正済み項目合計相関を算出した。修正済み項目合計相関は、「その項目の得点と、その項目「以外の」項目の合計得点の相関関係（小塩 2004:146）」である。本章の調査結果では、2 回繰り返し評価を行ったうちの 1 回の得点と残り 1 回の得点の相関関係を示すものとなる。算出の結果、全体的にやや低いもののいずれにおいても正の値が示された（.186（昇降調・40Hz、0.7 倍）、.274（ゆすり調・20Hz、0.5 倍）、.307（昇降調・40Hz）、.309（昇降調・40Hz、1.5 倍））。評価の繰り返しの回数が 2 回のみであることを考慮すれば、全体的な内的一貫性は許容範囲内であると考えられる。そこで、本章ではこれらの 4 項目を含むすべての項目について、各項目の加算平均を算出し、その値を利用して 3 元配置分散分析を行った。統計処理は全て SPSS 24.0 for mac を用いた。

### 5.3.2 調査 1 助詞の拍数・文法形式・発話場面による NS 評価

まず、調査 1 について、助詞の拍数・文法形式・発話場面と NS の評価との関連を検討すべく、評価得点の平均点を使い、イントネーションの種類（対応あり：「昇降調」「ゆすり調」）×文法形式（対応あり：「て形」、「から」、「が」、「毎日」、「わたし」）×場面（対応あり：場面①（指導教員）、場面②（友人））の繰り返しのある 3 つの要因に対し、3 元配置分散分析を行った。基本的な有意水準は、0.05 としている。

分析の結果、2 次の交互作用「場面×イントネーション×項目」（ $F(3.48, 94.07) = 3.74, p < .05$ ）と 1 次の交互作用中「場面×イントネーション」（ $F(1, 27.00) = 12.58, p < .01$ ）、「場面×文法形式」（ $F(2.95, 79.56) = 5.07, p < .01$ ）について有意であるとの結果が得られたが、「イントネーション×文法形式」（ $F(3.14, 84.78) = 2.29, p = .081, n.s.$ ）は有意でないという結果が示された。また、場面（1, 27.00 = 16.67,  $p < .001$ ）、イントネーション（1, 27.00 = 371.40,  $p < .001$ ）、文法形式（2.58, 69.49 = 21.53,  $p < .001$ ）の主効果はすべて有意であった。そこで、交互作用を解釈するために下位検定（ボンフェローニの多重比較<sup>73</sup>）を行った。以下に、その結果を報告する。

---

<sup>73</sup> 単純・単純主効果の下位検定の多重比較については、ボンフェローニの検定を行った。ボンフェローニの検定については、同じ対応ありデータを、繰り返して検定をしているため、ボンフェローニによる調整方法を使って有意水準を下げた上で有意かどうかを判定する必要がある（竹原 2010）。したがって、各要因における要因の水準数だけ、有意確率の補正を行った。「場面」と「イントネーション」は  $p < .025 (= 0.05 \div 2)$  を有意確率とし、「文法形式」は、 $p < .01 (0.05 \div 5)$  とした。



### 5.3.2.1 イントネーションの類型による NS 評価

まず、イントネーションの類型について下位検定（表 5-1<sup>74</sup>）を行った結果、助詞の拍数、文法形式、発話場面によらず、いずれにおいても「昇降調」と「ゆすり調」の評価得点の間に有意差が認められた（すべて  $p < .001$ ）。また、有意差が見られたすべての項目において「昇降調」が「ゆすり調」より有意に評価得点が高いという結果が示された（図 5-11、表 5-2）。この結果は、「昇降調」と「ゆすり調」の評価において、イントネーションが出現する助詞の拍数、文法形式、発話場面よりも、「昇降調」であるか「ゆすり調」であるかのイントネーションの類型が評価に大きく影響しており、「ゆすり調」は「昇降調」に比べ、母語話者は使用しないような、日本語から逸脱した類型であると評価されることを示すと言える。

表 5-1 イントネーションの類型の下位検定における有意確率

場面	文法形式	Sig. of F
場面①先生	から	0.000**
	て形	0.000**
	が	0.000**
	毎日	0.000**
	わたし	0.000**
場面②友人	から	0.000**
	て形	0.000**
	が	0.000**
	毎日	0.000**
	わたし	0.000**

注)  $p < 0.001^{**}$

<sup>74</sup> 以下、表 5-1～表 5-9 において、有意確率が有意であった項目についてはアスタリスクとともに網掛けをして示す。

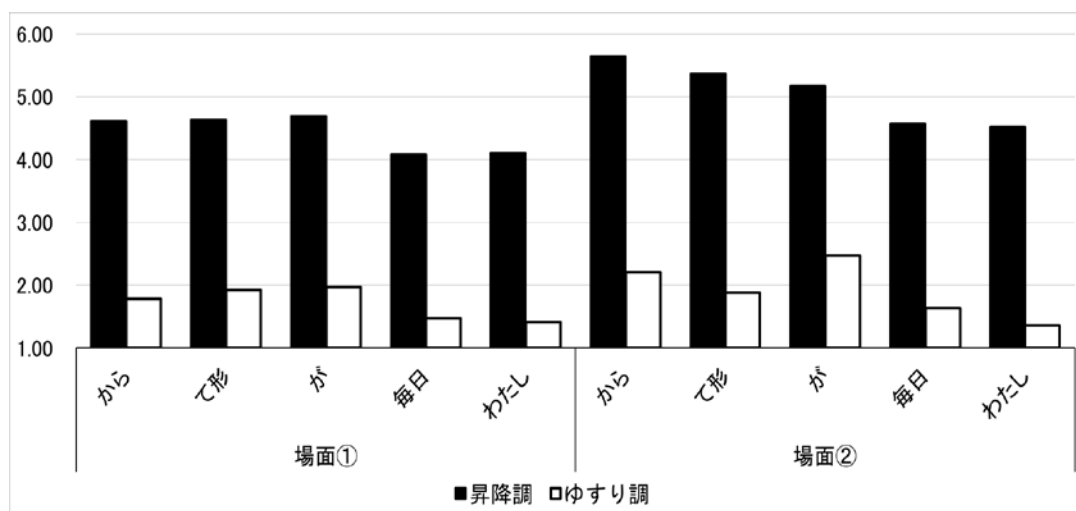


図 5-11 イントネーションの種類による NS の評価得点の平均値の比較

表 5-2 調査 1 における NS の評価得点の平均値・標準偏差

場面	文法形式	昇降調		ゆすり調	
		平均値	標準偏差 (SD)	平均値	標準偏差 (SD)
場面① 先生	から	4.61	0.96	1.78	0.75
	て形	4.63	0.83	1.92	0.86
	が	4.69	0.93	1.97	0.85
	毎日	4.08	1.12	1.47	0.56
	わたし	4.10	0.93	1.41	0.68
場面② 友人	から	5.64	0.60	2.21	1.11
	て形	5.37	0.77	1.88	0.99
	が	5.17	0.87	2.47	1.27
	毎日	4.57	1.25	1.63	0.65
	わたし	4.52	1.11	1.36	0.58

### 5.3.2.2 助詞の拍数と文法形式による NS 評価

次に、文法形式について下位検定を行った結果、場面① (表 5-3) において「昇降調」の「が」と「毎日」の間 ( $p < .01$ )、「ゆすり調」の「が」と「わたし」の間 ( $p < .01$ )、「ゆすり調」の「て形」と「毎日」の間 ( $p < .01$ ) のみに有意差が見られ、その他の形式の間においては有意差が示されなかった。有意差が見られた文法形式の間においては、格助詞の「が」と接続助詞の「て形」が、名詞の「毎日」「わたし」より評価得点が高いという結果が示された (図 5-12)。

一方、場面② (表 5-4) においては、「昇降調」の「が」と「毎日」の間 ( $p < .01$ )、「て形」と「わたし」の間 ( $p < .001$ )、「から」と「毎日」の間 ( $p < .001$ )、「から」と

「わたし」の間 ( $p < .001$ ) の間において、有意差が示された。また、場面②の「ゆすり調」については、「が」と「毎日」の間 ( $p < .01$ )、「が」と「わたし」の間 ( $p < .001$ )、「から」と「わたし」の間 ( $p < .001$ ) において有意差が示された。場面②についても、有意差が見られた項目間については、格助詞の「が」と接続助詞の「て形」「から」が、名詞の「毎日」「わたし」より評価得点が高いという結果が示された。

以上から、場面①と場面②、「昇降調」と「ゆすり調」に共通して見られた結果として、接続助詞の「て形」「から」、格助詞の「が」は、名詞の「毎日」「わたし」より有意に高く評価されたことである。さらに、「て形」と「から」の間、「て形」と「が」の間、「から」と「が」の間においては、場面①②、「昇降調」「ゆすり調」ともに有意差が示されなかった。したがって、李惠蓮 (2002) が指摘した、1 拍助詞の「て形」が 2 拍助詞の「から」より不自然だと評価され、拍数の相違が評価に影響するとの結果は、本章の調査では確認されなかった。

文法形式による NS の評価については、接続助詞の「て形」「から」が「名詞」より高く評価されると予想し、予想通りの結果が示された。さらに、文法形式中、評価得点が最も低かったのは、「名詞」の「毎日」と「わたし」に「ゆすり調」が見られる場合であった。したがって、「昇降調」と「ゆすり調」ともに「名詞」において出現する際、「て形」「から」「が」より低く評価されるが、「ゆすり調」の場合、「昇降調」に見られる場合よりさらに日本語から逸脱した類型として厳しく評価されると言える。一方、第 3 章の NS の発話データにおいて、因果を示す「て形」「から」より格助詞の「が」の出現数が少なかったことから、「が」の評価得点が「て形」「から」より低いと予想したが、予想とは異なり、「て形」「から」と「が」間に有意差は示されなかった。

表 5-3 文法形式の下位検定における有意確率（場面①指導教員）

場面	類型	文法形式		Sig. of F
場面① 先生	昇降調	から	て形	1.000 n.s.
			が	1.000 n.s.
			毎日	0.068 n.s.
			わたし	0.080 n.s.
		て形	が	1.000 n.s.
			毎日	0.061 n.s.
			わたし	0.121 n.s.
			が	0.001*
	が	毎日	0.056 n.s.	
		わたし	1.000 n.s.	
		毎日	1.000 n.s.	
		わたし	1.000 n.s.	
	ゆすり調	から	て形	1.000 n.s.
			が	1.000 n.s.
			毎日	0.044 n.s.
			わたし	0.050 n.s.
て形		が	1.000 n.s.	
		毎日	0.005*	
		わたし	0.012 n.s.	
		が	0.011 n.s.	
が	毎日	0.011 n.s.		
	わたし	0.007*		
	毎日	1.000 n.s.		
	わたし	1.000 n.s.		

注)  $p < 0.01$ \*  $p < 0.001$ \*\*

表 5-4 文法形式の下位検定における有意確率（場面②友人）

場面	類型	文法形式		Sig. of F
場面② 友人	昇降調	から	て形	0.048 n.s.
			が	0.067 n.s.
			毎日	0.000**
			わたし	0.000**
		て形	が	1.000 n.s.
			毎日	0.014 n.s.
			わたし	0.000**
			が	0.002*
	が	毎日	0.086 n.s.	
		わたし	1.000 n.s.	
		毎日	1.000 n.s.	
		わたし	1.000 n.s.	
	ゆすり調	から	て形	0.467 n.s.
			が	1.000 n.s.
			毎日	0.018 n.s.
			わたし	0.000**
て形		が	0.014 n.s.	
		毎日	0.567 n.s.	
		わたし	0.013 n.s.	
		が	0.003*	
が	毎日	0.000**		
	わたし	0.000**		
	毎日	0.050 n.s.		
	わたし	0.050 n.s.		

注)  $p < 0.01$ \*  $p < 0.001$ \*\*

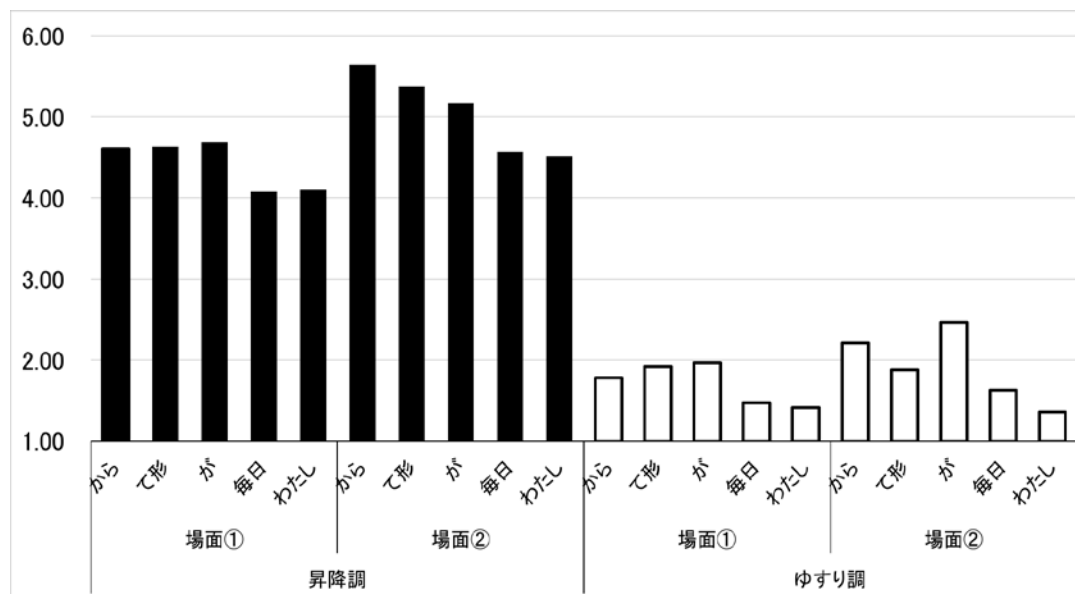


図 5-12 文法形式による NS の評価得点の平均値の比較

### 5.3.2.3 発話場面の相違による NS 評価

発話場面について、下位検定 (表 5-5) を行った結果、「昇降調」の 5 つの文法形式中 4 項目の「から」 ( $p < .001$ )、「て形」 ( $p < .001$ )、「が」 ( $p < .025$ )、「毎日」 ( $p < .025$ ) において、場面① (指導教員) と場面② (友人) の間に有意差が見られた。一方、「ゆすり調」においては、「が」 ( $p < .025$ ) を除き、いずれの項目においても有意差が認められなかった。また、「昇降調」と「ゆすり調」ともに、有意差が見られたいずれの項目についても場面①より場面②の得点が高いという結果が示された (図 5-13)。したがって、「昇降調」は「ゆすり調」より場面の改まり度により NS の評価に影響が見られやすく、改まり度が高い指導教員との会話より友人との会話において、母語話者も使用できる自然な類型として評価されると言える。

一方、有意差が見られた項目中、「昇降調」の「て形」と「から」においては、 $p < .001$  という有意確率となり、他よりも有意差が大きいという結果が示された。「昇降調」の「て形」は、場面①において 4.63 点であったが、場面②では 5.37 点であり、「昇降調」の「から」も、場面①では 4.61 点であったが、場面② 5.64 点となっている。場面②における昇降調の「から」は分析対象である全 20 項目のうち、評価得点が最も高く、「て形」がその次に高かった。これは、因果関係を示す「て形」と「から」において、上下関係が存在する場面①より友人同士の場面②に「昇降調」が見られた場合、母語話者も

使用する自然な類型として捉えられたためだと考えられる。

一方、「ゆすり調」については、「が」のみに場面間における有意差が示された。「が」における「ゆすり調」は、場面①で 1.97 点であったのに対し、場面②では、2.47 点であり、他の項目に見られた「ゆすり調」より得点が高かった。しかし、評価得点が 2 点台であることを考えると、「昇降調」のように、母語話者も使用する自然な型であると評価されるとは考え難いと言える。

表 5-5 発話場面の下位検定における有意確率

類型	文法形式	Sig. of F	類型	文法形式	Sig. of F
昇降調	から	0.000**	ゆすり調	から	0.029 n.s.
	て形	0.000**		て形	0.745 n.s.
	が	0.006*		が	0.011*
	毎日	0.011*		毎日	0.177 n.s.
	わたし	0.046 n.s.		わたし	0.719 n.s.

注)  $p < .025$ \*  $p < .001$ \*\*

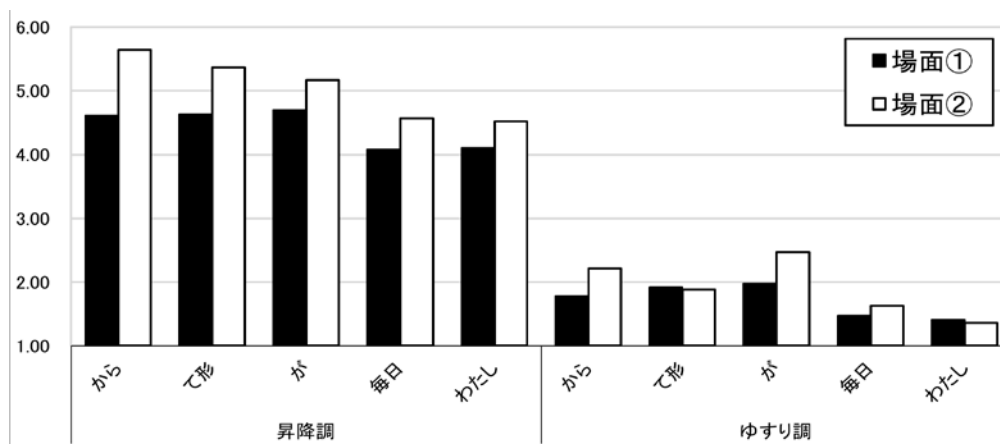


図 5-13 発話場面による NS の評価得点の平均値の比較

### 5.3.3 調査 2 持続時間とピッチの変化による NS 評価

調査 2 では、「昇降調」と「ゆすり調」の持続時間とピッチの変化と NS の評価との関連を検討すべく、評価得点の平均点を使い、イントネーション（対応あり：「昇降調」、「ゆすり調」）×持続時間（対応あり：0.5 倍、0.7 倍、操作なし、1.25 倍、1.5 倍）×ピッチ（対応あり：-40Hz、-20Hz、操作なし、+20Hz、+40Hz）の繰り返しのある 3 つの要因に対し、3 元配置分散分析を行った。基本的な有意水準は、0.05 としている。その

結果、2 次の交互作用「イントネーション×ピッチ×持続時間」( $F(8.10, 218.90)=5.09$ ,  $p<.001$ ) と 1 次の交互作用がすべて有意であった（「イントネーション×ピッチ」( $F(3.30, 89.10)=2.65$ ,  $p<.05$ )、「イントネーション×持続時間」( $F(1.42, 38.29)=13.89$ ,  $p<.001$ )、「ピッチ×持続時間」( $F(7.41, 200.12)=2.42$ ,  $p<.05$ ))。

各要因の主効果については、イントネーション (1, 27.00=148.33,  $p<.001$ ) と持続時間 (2.09, 56.30=147.52,  $p<.001$ ) における主効果は有意であったが、ピッチ (3.15, 84.97=1.52,  $p=.213$ , n.s.) の主効果は有意な結果が見られなかった。以上の結果から、交互作用を解釈するために下位検定（ボンフェローニの多重比較）を行った。以下に、その結果を報告する。

### 5.3.3.1 イントネーションの類型による NS 評価

イントネーションの類型について下位検定（表 5-6）を行った結果、5 レベルのピッチ×5 レベルの持続時間の 25 項目すべてにおいて、「昇降調」と「ゆすり調」の間に有意な差<sup>75</sup>が示された（いずれも  $p<.001$ ）。また、いずれも「昇降調」の評価得点が「ゆすり調」より有意に高いことが示された（図 5-14、表 5-7）。

したがって、「昇降調」と「ゆすり調」の評価において、ピッチの変化や持続時間の変化よりもイントネーションの類型による相違が NS の評価に大きく影響しており、「ゆすり調」は「昇降調」に比べ、母語話者は使用しないような、日本語から逸脱した類型であると評価されることが示された。

---

<sup>75</sup> 調査 2 においても、単純・単純主効果の下位検定の多重比較については、ボンフェローニの検定を行ったことから、各要因における要因の水準数だけ、有意確率の補正を行った。「イントネーション」は  $p<.025$  ( $=0.05 \div 2$ ) を有意確率とし、「持続時間」と「ピッチ」の有意確率については  $p<.01$  ( $=0.05 \div 5$ ) とした。

表 5-6 イントネーションの類型の下位検定における有意確率

ピッチ	持続時間	Sig. of F
-40Hz	「昇降調」 0.5 倍_「ゆすり調」 0.5 倍	0.000**
	「昇降調」 0.7 倍_「ゆすり調」 0.7 倍	0.000**
	「昇降調」 操作なし_「ゆすり調」 操作なし	0.000**
	「昇降調」 1.25 倍_「ゆすり調」 1.25 倍	0.000**
	「昇降調」 1.5 倍_「ゆすり調」 1.5 倍	0.000**
-20Hz	「昇降調」 0.5 倍_「ゆすり調」 0.5 倍	0.000**
	「昇降調」 0.7 倍_「ゆすり調」 0.7 倍	0.000**
	「昇降調」 操作なし_「ゆすり調」 操作なし	0.000**
	「昇降調」 1.25 倍_「ゆすり調」 1.25 倍	0.000**
	「昇降調」 1.5 倍_「ゆすり調」 1.5 倍	0.000**
操作なし	「昇降調」 0.5 倍_「ゆすり調」 0.5 倍	0.000**
	「昇降調」 0.7 倍_「ゆすり調」 0.7 倍	0.000**
	「昇降調」 操作なし_「ゆすり調」 操作なし	0.000**
	「昇降調」 1.25 倍_「ゆすり調」 1.25 倍	0.000**
	「昇降調」 1.5 倍_「ゆすり調」 1.5 倍	0.000**
+20Hz	「昇降調」 0.5 倍_「ゆすり調」 0.5 倍	0.000**
	「昇降調」 0.7 倍_「ゆすり調」 0.7 倍	0.000**
	「昇降調」 操作なし_「ゆすり調」 操作なし	0.000**
	「昇降調」 1.25 倍_「ゆすり調」 1.25 倍	0.000**
	「昇降調」 1.5 倍_「ゆすり調」 1.5 倍	0.000**
+40Hz	「昇降調」 0.5 倍_「ゆすり調」 0.5 倍	0.000**
	「昇降調」 0.7 倍_「ゆすり調」 0.7 倍	0.000**
	「昇降調」 操作なし_「ゆすり調」 操作なし	0.000**
	「昇降調」 1.25 倍_「ゆすり調」 1.25 倍	0.000**
	「昇降調」 1.5 倍_「ゆすり調」 1.5 倍	0.000**

注)  $p < .001^{**}$

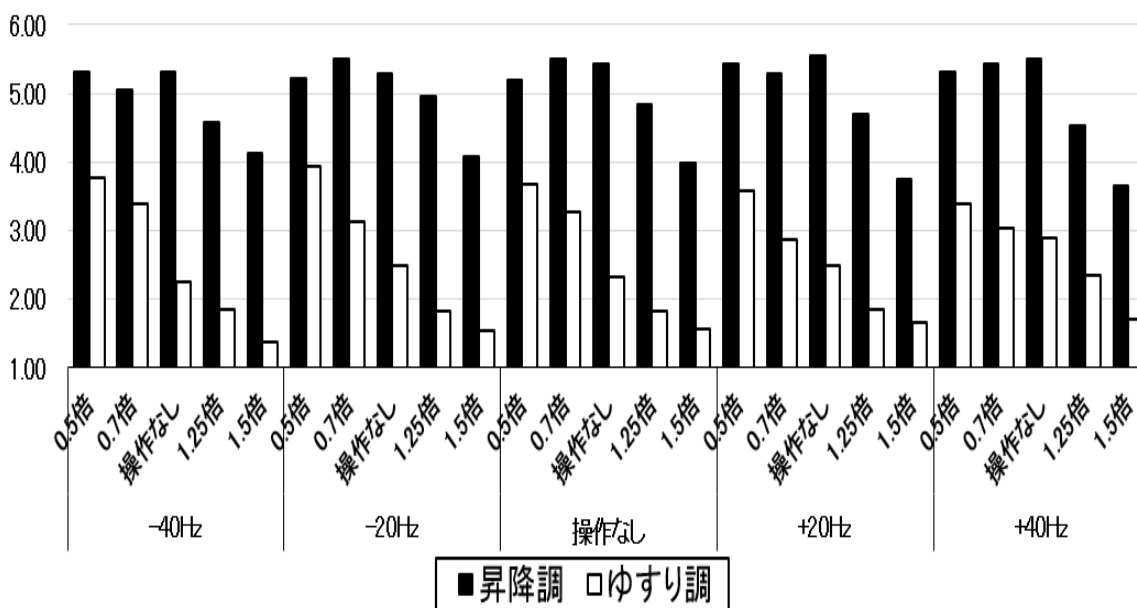


図 5-14 イントネーションのタイプによる NS の評価得点の平均値



表 5-7 調査 2 における NS の評価得点の平均値・標準偏差

昇降調				ゆすり調			
ピッチ	持続時間	平均値	標準偏差 (SD)	ピッチ	持続時間	平均値	標準偏差 (SD)
-40Hz	0.5 倍	5.30	0.90	-40Hz	0.5 倍	3.77	1.27
	0.7 倍	5.04	0.83		0.7 倍	3.38	1.49
	操作なし	5.30	0.60		操作なし	2.26	1.05
	1.25 倍	4.58	0.94		1.25 倍	1.84	1.08
	1.5 倍	4.12	1.11		1.5 倍	1.38	0.61
-20Hz	0.5 倍	5.22	0.89	-20Hz	0.5 倍	3.93	1.18
	0.7 倍	5.50	0.64		0.7 倍	3.12	1.41
	操作なし	5.28	0.71		操作なし	2.50	1.50
	1.25 倍	4.96	0.85		1.25 倍	1.82	1.12
	1.5 倍	4.08	1.11		1.5 倍	1.54	0.87
操作なし	0.5 倍	5.20	0.89	操作なし	0.5 倍	3.68	1.46
	0.7 倍	5.50	0.58		0.7 倍	3.28	1.54
	操作なし	5.44	0.52		操作なし	2.32	1.23
	1.25 倍	4.84	0.93		1.25 倍	1.82	1.08
	1.5 倍	3.98	1.29		1.5 倍	1.56	0.92
+20Hz	0.5 倍	5.42	0.79	+20Hz	0.5 倍	3.59	1.40
	0.7 倍	5.28	0.69		0.7 倍	2.88	1.58
	操作なし	5.54	0.61		操作なし	2.50	1.40
	1.25 倍	4.70	1.07		1.25 倍	1.86	1.26
	1.5 倍	3.74	1.38		1.5 倍	1.66	1.10
+40Hz	0.5 倍	5.30	0.67	+40Hz	0.5 倍	3.38	1.46
	0.7 倍	5.44	0.69		0.7 倍	3.04	1.36
	操作なし	5.50	0.69		操作なし	2.90	1.40
	1.25 倍	4.54	1.11		1.25 倍	2.36	1.17
	1.5 倍	3.64	1.21		1.5 倍	1.70	0.99

### 5.3.3.2 持続時間の変化による NS 評価

持続時間の変化について下位検定 (表 5-8) を行った結果、「昇降調」は、50 項目中 28 項目において、持続時間の変化により有意差が示され、いずれも持続時間の長いほうが短いほうより得点が低かった (図 5-15)。したがって、「昇降調」の持続時間が長いほど NS は低く評価すると言える。「ゆすり調」も、50 項目中 39 項目において、持続時間の変化による有意差が示され、いずれも持続時間の長いほうが短いほうより得点が低かった (図 5-16)。したがって、「ゆすり調」も持続時間が長いほど NS は低く評価すると言える。

一方、「昇降調」が持続時間により変化が見られた項目が、50 項目中 28 項目である

のに対し、「ゆすり調」は 50 項目中 39 項目において有意差が示されたことを考えると、「昇降調」より「ゆすり調」のほうが、より持続時間が NS の評価に影響しており、「ゆすり調」の上昇が生じる前の低いピッチが持続する区間の持続時間が長いほど、日本語から逸脱していると評価され、この区間を短くすることが、母語話者も使用する日本語らしいイントネーションとして評価される上で、重要だと考えられる。

NS の評価得点の平均値を示した図 5-15 (昇降調) と図 5-16 (ゆすり調) を比較すると、「昇降調」「ゆすり調」ともに持続時間が長くなるにつれ評価得点が低くなっているが、「昇降調」は 1.25 倍から評価得点の下がり方が大きくなっている。有意差が見られた項目においても、「昇降調」は、1.25 倍、1.5 倍との間に有意差が見られることが多く、0.5 倍と 0.7 倍の間、0.5 倍と操作なしの元音声の間、0.7 倍と操作なしの元音声の間にはいずれのピッチレベルにおいても有意差が示されなかった。

一方、「ゆすり調」は 0.7 倍から段階的に評価得点が低くなっている。有意差が見られた項目においても、「昇降調」では有意差が示されなかった 0.5 倍と操作なしの元音声の間に、いずれのピッチレベルにおいても有意差が示された。また、0.5 倍と 0.7 倍の間においても、-20Hz とピッチ操作なしの元音声、+20Hz の 3 つのピッチレベルにおいて有意差が示され、0.7 倍と操作なしの元音声の間においても、-40Hz とピッチ操作なしの元音声の 2 つのピッチレベルにおいて有意差が認められた。図 5-15 (昇降調) と図 5-16 (ゆすり調) を比較しても、「ゆすり調」の評価得点の下がり方が「昇降調」より急激であり、持続時間を長く操作した 1.25 倍、1.5 倍においては、+40Hz の 1.25 倍を除き、評価得点が 1 点台となっている。

以上から、「持続時間」の変化について、「昇降調」は、持続時間を元音声から長く操作した 1.25 倍から少しずつ評価得点の下がり始めるが、「ゆすり調」は、持続時間を短く操作した 0.5 倍と 0.7 倍の間から評価得点の下がり始め、元音声から持続時間がさらに長くなった場合、NS から著しく低く評価されることが示された。

表 5-8 持続時間の下位検定における有意確率

ピッチ	持続時間		類型	
			昇降調	ゆすり調
-40Hz	0.5 倍	0.7 倍	1.000 n.s.	0.074 n.s.
		操作なし	1.000 n.s.	0.000**
		1.25 倍	0.261 n.s.	0.000**
		1.5 倍	0.002*	0.000**
	0.7 倍	操作なし	0.103 n.s.	0.000**
		1.25 倍	0.111 n.s.	0.000**
		1.5 倍	0.002*	0.000**
	操作なし	1.25 倍	0.000**	0.004*
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	1.25 倍	1.5 倍	0.025 n.s.	0.080 n.s.
-20Hz	0.5 倍	0.7 倍	1.000 n.s.	0.001*
		操作なし	1.000 n.s.	0.000**
		1.25 倍	1.000 n.s.	0.000**
		1.5 倍	0.004*	0.000**
	0.7 倍	操作なし	0.204 n.s.	0.017 n.s.
		1.25 倍	0.007*	0.000**
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	操作なし	1.25 倍	0.297 n.s.	0.043 n.s.
		1.5 倍	0.000**	0.001*
	1.25 倍	1.5 倍	0.000**	0.409 n.s.
元音声	0.5 倍	0.7 倍	0.368 n.s.	0.002*
		操作なし	0.850 n.s.	0.000**
		1.25 倍	1.000 n.s.	0.000**
		1.5 倍	0.002*	0.000**
	0.7 倍	操作なし	1.000 n.s.	0.001*
		1.25 倍	0.004*	0.000**
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	操作なし	1.25 倍	0.001*	0.005*
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	1.25 倍	1.5 倍	0.002*	0.105 n.s.
+20Hz	0.5 倍	0.7 倍	1.000 n.s.	0.000**
		操作なし	1.000 n.s.	0.000**
		1.25 倍	0.019 n.s.	0.000**
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	0.7 倍	操作なし	0.129 n.s.	0.188 n.s.
		1.25 倍	0.005*	0.000**
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	操作なし	1.25 倍	0.001*	0.017 n.s.
		1.5 倍	0.000**	0.001*
	1.25 倍	1.5 倍	0.000**	0.863 n.s.
+40Hz	0.5 倍	0.7 倍	1.000 n.s.	0.401 n.s.
		操作なし	1.000 n.s.	0.003*
		1.25 倍	0.005*	0.000**
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	0.7 倍	操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		1.25 倍	0.000**	0.002*
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	操作なし	1.25 倍	0.000**	0.000**
		1.5 倍	0.000**	0.000**
	1.25 倍	1.5 倍	0.000**	0.002*

注)  $p < .01$ \*  $p < .001$ \*\*

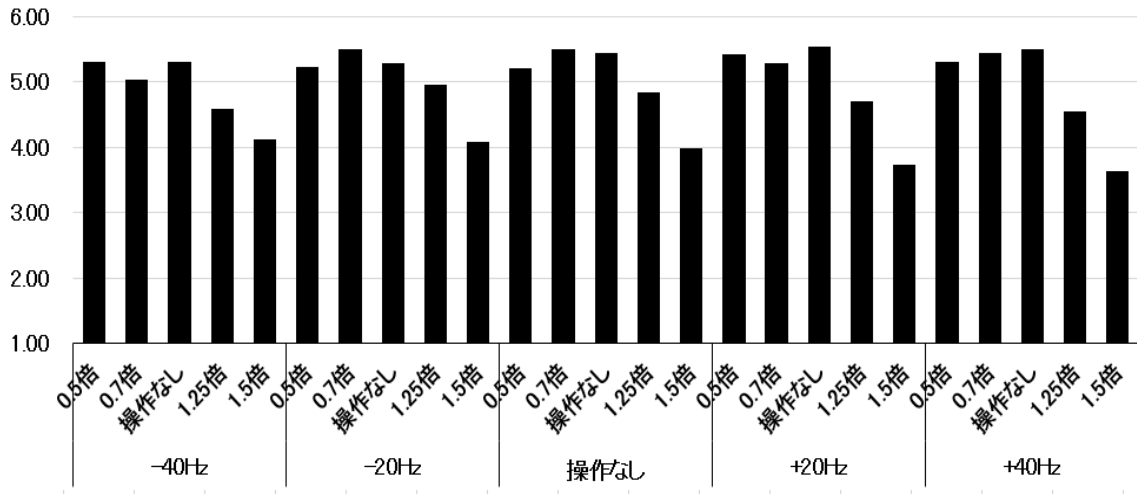


図 5-15 持続時間による NS の評価得点の平均値（昇降調）

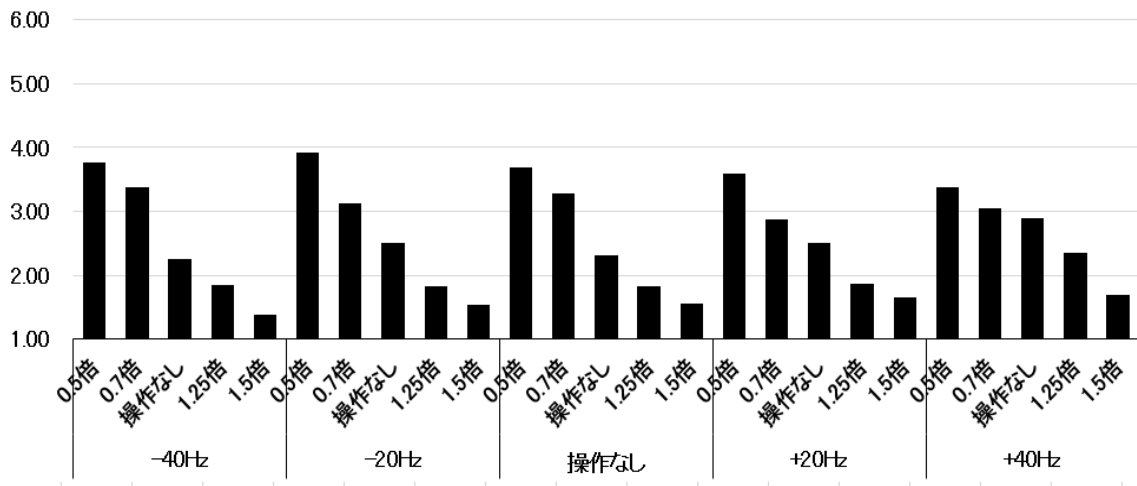


図 5-16 持続時間による NS の評価得点の平均値（ゆすり調）

### 5.3.3.3 ピッチの変化による NS 評価

ピッチの変化について下位検定（表 5-9）を行った結果、ほとんど有意差が見られないという結果となった。有意差が見られたのは、「昇降調」においては、0.7 倍の-40Hz と-20Hz の間 ( $p < .001$ ) 0.7 倍の-40Hz とピッチの操作なしの元音声の間 ( $p < .01$ ) のみであり、分析対象の 50 項目中、2 例のみである。この 2 例については、ピッチが高い-20Hz と元音声が高い-40Hz より高く評価され（図 5-17）、ピッチが高いほうが評価得点も高いという結果となったが、その他の項目においては有意差が示されなかった。

また、「ゆすり調」においても、有意差が見られたのは、持続時間の操作なし元音声に

において、-40Hz と+40Hz の間 ( $p < .01$ )、ピッチの操作なしの元音声と+40Hz の間 ( $p < .01$ )、1.25 倍のピッチの操作なし音声と+40Hz の間 ( $p < .01$ ) であり、50 項目中 3 例のみである。この 3 例についても、ピッチが高いほうが評価得点も高いという結果となった (図 5-18)。しかし、その他には有意差が見られず、「昇降調」と「ゆすり調」の分析対象の計 100 項目中、95 項目においてピッチの変化による評価得点の有意差が示されなかった。したがって、NS はピッチの変化により「昇降調」や「ゆすり調」に対する評価を変える傾向は、ほとんど見られないと考えられる。

一方、「ゆすり調」の有意差が示された 3 つの項目は、いずれも+40Hz との間であり、+40 Hz が-40Hz と操作なしの元音声より高く評価された。したがって、「ゆすり調」において+40Hz のようにピッチが高くなり、上昇が見られる部分とのピッチの高低差がほとんど見られない場合、高く評価される可能性があると言える。しかし、有意差が見られた項目が一部であったことから、今後さらに検討が必要であると考えられる。

表 5-9 ピッチの下位検定における有意確率

持続時間	ピッチ		類型	
			昇降調	ゆすり調
0.5 倍	-40Hz	-20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	0.174 n.s.
	-20Hz	操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	1.000 n.s.	0.948 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	0.035 n.s.
	操作なし	+20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	0.573 n.s.
		+20Hz	+40Hz	1.000 n.s.
0.7 倍	-40Hz	-20Hz	0.000**	1.000 n.s.
		操作なし	0.005*	1.000 n.s.
		+20Hz	0.409 n.s.	0.031 n.s.
		+40Hz	0.011 n.s.	1.000 n.s.
	-20Hz	操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	0.830 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
	操作なし	+20Hz	0.079 n.s.	0.875 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	+40Hz	0.710 n.s.
操作なし	-40Hz	-20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		操作なし	0.698 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	0.129 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	0.003*
	-20Hz	操作なし	0.572 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	0.154 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	0.089 n.s.
	操作なし	+20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	0.003*
		+20Hz	+40Hz	1.000 n.s.
1.25 倍	-40Hz	-20Hz	0.062 n.s.	1.000 n.s.
		操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	1.000 n.s.	0.028 n.s.
	-20Hz	操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	0.124 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	0.010 n.s.	0.056 n.s.
	操作なし	+20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	0.337 n.s.	0.008*
		+20Hz	+40Hz	1.000 n.s.
1.5 倍	-40Hz	-20Hz	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	0.368 n.s.	0.698 n.s.
		+40Hz	0.040 n.s.	0.397 n.s.
	-20Hz	操作なし	1.000 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	0.680 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	0.127 n.s.	1.000 n.s.
	操作なし	+20Hz	0.677 n.s.	1.000 n.s.
		+40Hz	0.620 n.s.	1.000 n.s.
		+20Hz	+40Hz	1.000 n.s.

注)  $p < .01^*$   $p < .001^{**}$

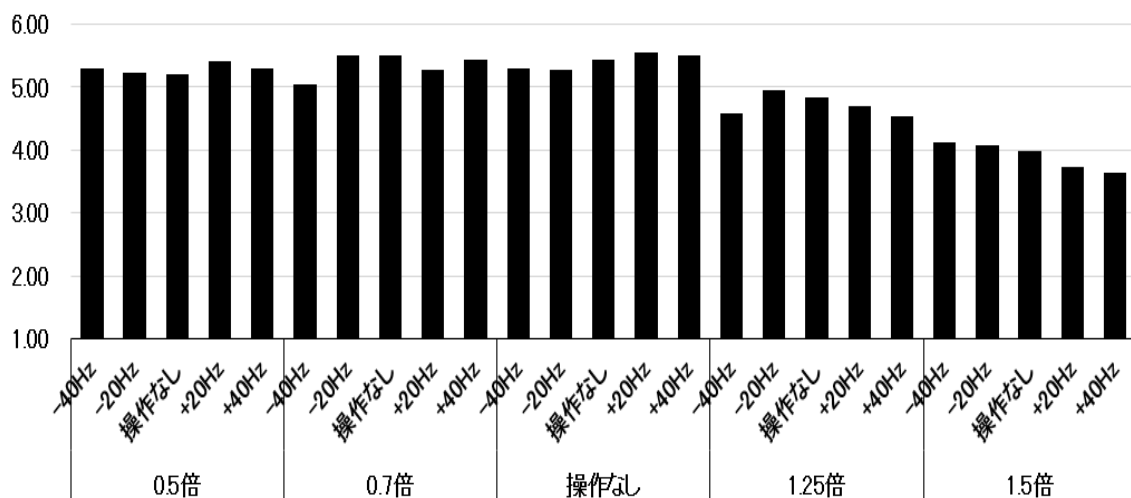


図 5-17 ピッチによる NS の評価得点の平均値（昇降調）

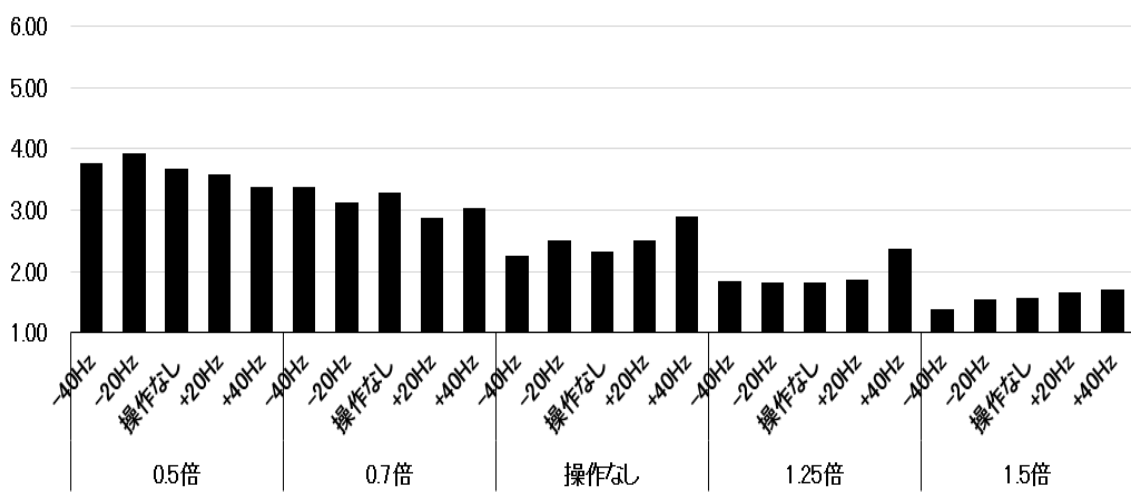


図 5-18 ピッチによる NS の評価得点の平均値（ゆすり調）

#### 5.4 考察

本章では、韓国人日本語学習者の句末イントネーションのうち、「昇降調」と「ゆすり調」に注目し、NS の評価の実態を明らかにすることを目的とした。まず、調査 1 から得られた結果について考察を述べる。

調査 1 においては、イントネーションの種類、文法形式、発話場面の 3 つの要因について 3 元配置分散分析を行った。第一に、イントネーションの種類の下位検定の結果、分析対象の 5 つの文法形式（「から」「て」「が」「毎日」「わたし」）、2 つの発話場面（場面①指導教員、場面②友人）のいずれにおいても「昇降調」の評価得点が「ゆすり調」より有意に高いことが示された。第 4 章においても KL の「昇降調」と「ゆすり調」に

対する NS の評価を調査したが、話者の苛立ちを示す発話場面で「だから」という実験語において「昇降調」のほうが「ゆすり調」より有意に評価得点が高いという結果が示された。本章の調査 1 の結果からは、さらに、出現する文法形式と発話場面の改まり度によらず、「昇降調」が「ゆすり調」より NS が使用するイントネーションとして許容されやすく、「ゆすり調」は日本語から逸脱した類型として許容されにくいことが示唆されたと言える。第 4 章において NS の一部からは「「しっこいな」みたいな感じの気持ちがあれば場面によって言わなくない」というコメントが見られたことを考えると、友人との会話において苛立ちを示す場面②は比較的「ゆすり調」が許容されやすいと考えられるが、こうした場面においても、「ゆすり調」は「昇降調」のように高く評価されない結果が示された。したがって、KL が「ゆすり調」を多用する場合、発話場面の改まり度が低く、話者の苛立ちを示す、比較的「ゆすり調」が許容されやすい場面であっても、日本語のイントネーションから逸脱した特徴として不自然であると評価される可能性が高い。このことから、「ゆすり調」は、音声教育において優先的に指導が必要な類型であると考えられる。

第二に、文法形式の下位検定の結果、「昇降調」「ゆすり調」ともに、「て形」と「から」の間においては、評価得点に有意差が認められなかった。したがって、李恵蓮（2002）の「上昇下降調」に対する NS の評価において「て形」より「から」の評価得点が高く、助詞の拍数が評価に影響しているという結果は、本章では確認されなかった。母語話者の発話データについて、「昇降調」の出現箇所を分析した佐々木（原）（2004）は、「昇降調」は接続助詞類に多く出現し、そのうち「て形」の出現数が最も多く、次に「し」「から」の順に出現数が多かった結果を示している（図 5-19）。

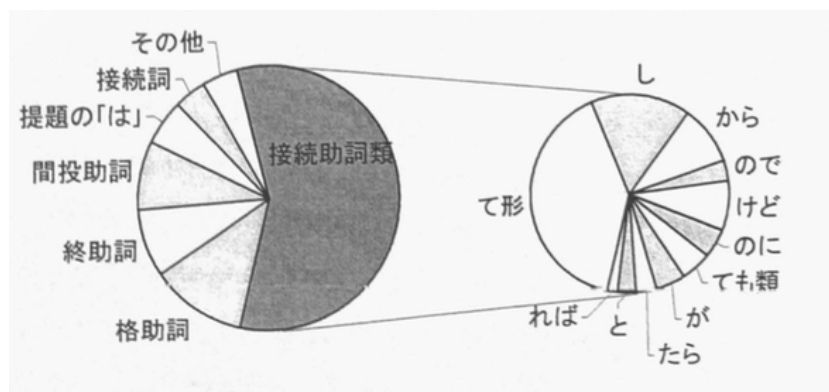


図 5-19 「昇降調」の出現箇所（佐々木（原）2004:166）



また、本研究の第3章のNSの発話データにおいても、NSは「て形」と「から」ともに「昇降調」が多く出現していた。これらの結果を考慮すれば、「て形」と「から」に対するNSの評価得点に、相違が現れるとは考え難い。李惠蓮(2002)と調査1に異なる結果が示された理由としては、李惠蓮(2002)の「上昇下降調」は「昇降調」と「ゆすり調」を区別していなかったことから、評価刺激の音声は「て形」は「ゆすり調」であり、「から」は「昇降調」であった場合、「て形」と「から」の評価に相違が示された可能性があると考えられる。さらに、「て形」と「が」の間、「から」と「が」の間においても、「昇降調」と「ゆすり調」ともに有意差が示されなかったことから、「て形」同様1拍である「が」も2拍助詞である「から」と評価に相違が見られなかった。したがって、KLの「昇降調」と「ゆすり調」に対するNSの評価において、助詞の拍数が影響しているとは言えないと考えられる。

一方、本章では、第3章のNSの発話データにおいて、格助詞の「が」における「昇降調」の出現数がKLより有意に少なく、あまり見られなかったことから、因果関係を示す「て形」「から」より「が」のほうが低く評価されると予想した。しかし、「が」と「て形」「から」の間において、「昇降調」「ゆすり調」ともに有意差は示されなかった。こうした結果が見られた理由について、第3章のNSの発話データに見られた類型別の出現数から考えると、NSは、「て形」「から」のような接続助詞で「昇降調」を多用するが、「が」においても出現数が少ないものの、出現することは確認された。母語話者の「昇降調」の出現箇所を分析した佐々木(原)(2004)でも、接続助詞よりは出現数が少ないが、格助詞にも「昇降調」が見られた結果を示している。さらに、調査1の評価刺激においては、実験文の音声のうち、評価対象の1箇所だけにイントネーションが出現するようにした音声を使用していたことから、実験文において、格助詞「が」の1箇所に「昇降調」が出現したとしても、比較的母語話者も使用でき、許容されるものとして評価したと考えられる。

文法形式の間に有意差が見られたのは、「昇降調」「ゆすり調」ともに「て形」「から」「が」と「名詞」の「毎日」「わたし」の間であった。また、「て形」「から」「が」の評価得点が、「毎日」「わたし」より有意に高いことが示された。したがって、KLの日本語において「名詞」に「昇降調」と「ゆすり調」が出現する場合、接続助詞や格助詞に出現する場合より低く評価される可能性が高いと言える。こうした結果が示された理由として、第3章の発話データにおいてNSは接続助詞を中心に「昇降調」が多く、次に

格助詞に出現しており、「名詞」にはあまり出現しなかったことが挙げられる。そのため、評価においても「名詞」に「昇降調」が出現する場合、接続助詞の「て形」「から」と格助詞の「が」に見られた場合より低く評価したと考えられる。したがって、比較的許容される類型である「昇降調」であっても、一般的に「文を区切ったときに意味を通じる最小の単位(鈴木 2015:30)」である文節の切れ目になりにくい「名詞」に「昇降調」が出現した場合、NS に低く評価されると言える。さらに、第 3 章の NS の発話データには「ゆすり調」が見られなかったが、「ゆすり調」も「昇降調」同様、「名詞」に出現した場合、「て形」「から」「が」に見られた場合より低く評価したと考えられる。「名詞」に見られた「ゆすり調」の評価得点は、場面①(「毎日」1.47 点、「わたし」1.41 点) 場面②(「毎日」1.63 点、「わたし」1.36 点) とともに 1 点台であり、分析対象中最も低かった。したがって、「ゆすり調」も、文節の切れ目になりにくい「名詞」において見られる場合、NS に最も日本語から逸脱した特徴として不自然であると評価される可能性が高いため、音声教育において優先的に指導が必要であると考えられる。

第三に、発話場面の下位検定の結果、「昇降調」について、5 つの文法形式中 4 項目の「から」「て形」「が」「毎日」において、場面①(指導教員)より場面②(友人)の評価得点が有意に高いことが示された。したがって、「昇降調」は発話場面の改まり度により NS の評価に相違が見られ、発話場面の改まり度が低い場合、NS に高く評価されると言える。反対に、指導教員との会話のように改まり度が高い発話場面である場合、改まり度が低い場面より低く評価されると言える。「わたし」においても、有意差は見られなかったが、場面②(4.52 点)の評価得点が場面①(4.10 点)より高かった。「昇降調」は、X-JToBI(五十嵐他 2006)の HL%と同一の類型であり、母語話者も使用する類型である。そのため、KL が発話場面の改まり度を考慮せず、改まり度の高い場面で「昇降調」を多用する場合、NS に日本語から逸脱した類型であるとの理由で低く評価されるとは考え難い。それよりも、目上の相手に対して失礼であるなどとの理由から、感情的に厳しく評価される可能性が高いと考えられる。その場合、「発話者の能力や人格の評価にまで影を落としかねない(土岐 1989:113)」重い誤りとして評価される可能性が高い。第 3 章の発話データにおいて NS は、友人との会話より、目上の発話相手である上司に報告を行う場面において「昇降調」の出現数が有意に少なかった。しかし、第 3 章の発話データにおいて KL は、友人との会話だけでなく、上司に報告を行う場面においても「昇降調」を多用していることが見られた。このことから KL は、発話場面

を考慮せず「昇降調」を多用し、母語話者とのコミュニケーションにおいて感情的に否定的な評価を受ける可能性が高いと言える。したがって、音声教育においては「昇降調」の発話場面の改まり度を考慮した使用を促す指導が必要であると考えられる。

一方、「ゆすり調」は「が」のみに有意差が見られた。「が」の評価得点は、場面①で 1.97 点であったが、場面②では 2.47 点であり、友人との会話である場面②の評価得点がやや高くなっている。しかし、場面①②の評価得点ともに、6 段階評価の中央値である 3.5 点以下であり、発話場面の改まり度が低い場面②においても、母語話者も使用する自然な類型として許容されると言い難い。また、他の「から」「て形」「が」「毎日」においては発話場面による有意差は示されなかった。この結果から「ゆすり調」は、発話場面の改まり度によらず、日本語のイントネーションから逸脱する特徴であるために、NS に許容されない類型であると考えられる。したがって、音声教育における「ゆすり調」の指導は、場面の改まり度に注意させるより、日本語のイントネーションとして許容され難い類型であるために、積極的な使用は望ましくないことを教える必要がある。

次に、調査 2 の結果について考察を述べる。調査 2 では、持続時間とピッチを操作した合成音声を用い NS に評価を求め、イントネーションの類型、ピッチ、持続時間の 3 つの要因について 3 元配置分散分析を行った。

第一に、イントネーションの類型の下位検定の結果からは、5 つの持続時間レベル(0.5 倍、0.7 倍、操作なし、1.25 倍、1.5 倍)と 5 つのピッチレベル (-40Hz、-20Hz、操作なし、+20Hz、+40Hz) のいずれにおいても「昇降調」が「ゆすり調」の評価得点より有意に高いという結果が示された。したがって、「ゆすり調」の持続時間を 0.5 倍、0.7 倍のように短く操作したとしても、「昇降調」と有意差がない程度に高く評価されるには、不十分であったと言える。また、「ゆすり調」のピッチを+20Hz、+40Hz のように高く操作し、ピッチの上昇が見られる部分との高低差が小さくなったとしても、「昇降調」と有意差がない程度に高く評価されるには、不十分であったと言える。

第二に、持続時間の下位検定においては、「昇降調」「ゆすり調」ともに、持続時間の長いほうが短いほうより評価得点が有意に低いとの結果が示された。したがって、NS は「昇降調」「ゆすり調」の評価には、持続時間が影響しており、持続時間が長いほど評価が低くなると言える。一方、持続時間の相違により有意差が見られた項目の数は、「昇降調」(50 項目中 28 項目)より「ゆすり調」(50 項目中 39 項目)のほうが多いことが示された。さらに、「昇降調」は、持続時間を長く操作した 1.25 倍から評価得点の下が

り方が大きくなっているのに対し、「ゆすり調」は、持続時間を短く操作した 0.7 倍から段階的に評価得点が低くなっており、評価得点の下がり方が「昇降調」より急激であった。特に、「ゆすり調」の持続時間を長く操作した 1.25 倍、1.5 倍は、評価得点が 1 例を除き、評価得点が 1 点台となっていたが、「昇降調」は、評価得点が最も低い場合でも 3.64 点（「昇降調」+40Hz 1.5 倍）であった。こうした結果から、「昇降調」と「ゆすり調」ともに、持続時間により NS の評価が厳しくなるが、「ゆすり調」のほうが「昇降調」より、持続時間の長短により NS の評価が大きく影響を受けている。したがって、「昇降調」は持続時間が長くても、日本語のイントネーションとして許容される可能性が「ゆすり調」より高いが、「ゆすり調」は、上昇前の低いピッチが続く区間の持続時間が長くなるほど、日本語から逸脱したものとして評価されると考えられる。そのため、「ゆすり調」の低いピッチが続く区間の持続時間を短くすることが、NS に高く評価される上で重要であると言える。また、「昇降調」と「ゆすり調」を区別する重要な部分が、低いピッチが続く区間の有無であることを考慮すると、この区間の持続時間が短くなることは、典型的に「ゆすり調」ではなく、「昇降調」に近づくことでもある。持続時間を短くし、可能な限り「昇降調」に近い類型で発音することで日本語のイントネーションから逸脱しているという評価は避けられると言える。しかし、「昇降調」であっても、持続時間を長く操作した合成音声で段階的に評価が下がることも確認されたことから、「昇降調」を発音する際に、持続時間が長すぎないか注意する必要がある。

第三に、ピッチの下位検定においては、「昇降調」（50 項目中 2 項目）と「ゆすり調」（50 項目中 3 項目）ともにほとんどピッチの変化による有意差が見られなかった。したがって、「昇降調」「ゆすり調」ともに、ピッチの高低変化による NS 評価への影響はあまり見られないと言える。「ゆすり調」の場合、上昇前の低いピッチが続く区間を操作したが、この区間のピッチが長くなれば、典型的には「昇降調」に近づくと言える。「ゆすり調」において、有意差が見られた項目中、+40 Hz が-40Hz と操作なしの元音声より高く評価されたことから、+40Hz のようにピッチが高くなり、上昇が見られる部分とのピッチの高低差があまり見られず、「昇降調」のピッチパターンに近づく場合、評価得点が高くなる可能性がある。しかし、「ゆすり調」で有意差が見られたのは 3 例のみであり、有意差が認められなかった項目のほうが多かった。つまり、低いピッチが続く区間の持続時間が短くならなければ、この区間のピッチが高くなっても NS に高く評価され難いと言える。

## 5.5 まとめ

本章では、KLの日本語句末イントネーション中、「昇降調」と「ゆすり調」に注目し、イントネーションが出現する助詞の拍数、文法形式、発話場面によるNS評価への影響と、持続時間とピッチの変化によるNSの評価への影響を検討した。本研究の調査結果をまとめると、以下の通りである。

第一に、分析対象とした文法形式、発話場面によらず、「ゆすり調」は「昇降調」より有意に低く評価された。NSは本章の評価刺激の「ゆすり調」が出現した文法形式が「て形」「から」のような因果関係を示し、強調されやすい接続助詞であり、比較的改まり度が低く苛立ちを示すことから「ゆすり調」が許容されやすい発話場面においても、「昇降調」に比べ日本語らしさが低いと評価している。したがって、「ゆすり調」は、日本語のイントネーションから逸脱した類型として低く評価される可能性が高いことから、音声教育において優先的に指導が必要な類型であると考えられる。

第二に、助詞の拍数によるNS評価への影響は見受けられなかった。李恵蓮(2002)では、因果関係を示す「て形」と「から」に「上昇下降調」が出現した評価刺激を用いNSの評価を求めた結果、「て形」の評価得点が「から」より低かったことから、「助詞1拍の中での激しく上昇して下降する「上昇下降調」が最も不自然(李恵蓮2002:123)」であり、助詞の拍数がNSの評価に影響していると指摘した。しかし、文法形式の下位検定を行った結果、評価対象の「昇降調」「ゆすり調」、発話場面①②のいずれにおいても「て形」と「から」の評価得点に有意差は示されなかった。李恵蓮(2002)と本章の調査で異なる結果が示された理由としては、李恵蓮(2002)の「上昇下降調」が「昇降調」と「ゆすり調」を区別していなかったためだと考えられ、「昇降調」と「ゆすり調」に対するNSの評価において、助詞の拍数が影響しているとは考えられない。

第三に、「昇降調」と「ゆすり調」が「名詞」に出現した場合、NSに低く評価されることが示された。「昇降調」と「ゆすり調」が出現する文法形式によるNS評価への影響を検討した結果、接続助詞「て形」「から」と格助詞「が」の間には有意差は見られなかったが、「て形」と「名詞」(「毎日」「わたし」)の間、「から」と「名詞」の間、「が」と「名詞」の間において、有意差が見られた。したがって、比較的許容される類型である「昇降調」であっても、一般に文節の切れ目になり難い「名詞」に「昇降調」が出現した場合、低く評価されると言える。さらに、日本語から逸脱した類型として不自然と評価される「ゆすり調」が「名詞」に出現した場合、接続助詞の「て形」「から」、格助詞

「が」に出現した場合よりも、さらに低く評価されることから、音声教育においても、「名詞」における「ゆすり調」の出現については、最も優先的な指導が求められると考えられる。

第四に、「昇降調」は、発話場面の改まり度により評価得点の相違が示された。NSは改まり度が高い場面①（指導教員）と比較し場面②（友人）において「昇降調」を高く評価していた。「昇降調」は、第3章のNSの発話データにおいても、上司との会話より友人との会話において出現数が多かったことを考えると、生成に見られた結果と同一の結果となったと言える。一方、第3章の発話データにおいてKLは、上司との会話においても「昇降調」を多用していたことから、発話場面の改まり度を考慮せず「昇降調」を多用する可能性がある。したがって、音声教育における「昇降調」の指導の際には、発話場面の改まり度に対する注意を促す指導が求められる。

第五に、「昇降調」と「ゆすり調」に対するNSの評価には、ピッチより持続時間のほうが大きく影響している。ピッチの高低と持続時間の長短を操作した合成音声を用いNSの評価を求めた結果、「昇降調」と「ゆすり調」ともに、ピッチの高低による評価得点の有意差はほとんど見られなかった。しかし、持続時間の下位検定の結果、「昇降調」と「ゆすり調」ともに、持続時間が短い音声と長い音声の間に有意差が見られる項目が多く、持続時間が長いほど評価得点が低い結果が示された。したがって、NSは持続時間が長いほど、「昇降調」と「ゆすり調」を低く評価すると言える。一方、「ゆすり調」は「昇降調」より持続時間の長短により有意差が見られる項目が多く、持続時間が長いほど評価得点が著しく下がっていた。以上から、「昇降調」より「ゆすり調」のほうが、持続時間の長短によるNS評価への影響が大きいことから、教師が音声教育を行う際には、KLが「ゆすり調」を使用した場合、低いピッチが続く区間の持続時間が長くないよう留意させる必要があると言える。

以上の結果をまとめると、本章で明らかになった最も重要な点は、「昇降調」に対するNS評価には発話場面の改まり度が大きく関与しており、「ゆすり調」は発話場面の改まり度によらず、一貫して低い評価を受ける可能性が大きいことである。さらに、出現する文法形式について、「昇降調」「ゆすり調」ともに、接続助詞の「て形」「から」と格助詞「が」より名詞（「毎日」・「わたし」）に出現する場合、NSに低く評価されやすいことが示された。従来の研究では、韓国人学習者の句末イントネーションは誤用としての見方が強く、発話場面や出現する文法形式によりNSの評価に相違が見られる可能

性については焦点が当てられてこなかった。しかし、本章では、第3章のKLの発話データに見られた「昇降調」と「ゆすり調」の生成における発話場面と出現する文法形式の特徴がNSにどのように評価され、さらに発話場面と文法形式によりNS評価に相違が見られる可能性を示したことに研究の意義があると考えられる。一方、本章では調査1において調査協力者全員に場面①（指導教員）を先に実施し、次に場面②（友人）の順で評価を求めたことから、順序効果を十分に相殺できていない。今後は、場面②（友人）→場面①（指導教員）の順に追試を行い、本章で得られた知見をさらに検証することが必要だと考えられる。

## 第6章 結論

第6章では、本研究における調査の結果を整理し、本研究で得られた結果に基づき、日本語教育の観点からイントネーション教育への示唆と今後の課題を述べる。

### 6.1 検討課題の振り返りと結果のまとめ

本研究では、韓国人日本語学習者の句末イントネーションにおける生成と知覚の実態を明らかにすることを目的とし、以下の3つの課題について検討を行った。

【研究1】韓国語と日本語の先行研究を参考に、韓国人日本語学習者の句末イントネーション類型の分類を再考した新しい分類案に基づき、母語の影響と発話場面の相違、各類型の文法形式による出現傾向に焦点を当て、韓国人学習者の韓国語と日本語、母語話者の日本語に見られた句末イントネーションを対照し、韓国人学習者の句末イントネーションの生成におけるその特徴を明らかにする。

【研究2】韓国人学習者の句末イントネーション中、「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」について、句末イントネーションに対する学習者の知覚の実態を明らかにする。また、韓国人学習者の知覚の特徴をさらに詳細に知るべく、母語話者にも同調査を行い、韓国人学習者の結果と比較する。

【研究3】韓国人学習者の句末イントネーション中、「昇降調」と「ゆすり調」に注目し、イントネーションが出現する助詞の拍数、文法形式、発話場面による母語話者評価への影響を検討する。また、「昇降調」と「ゆすり調」の持続時間とピッチの変化による母語話者評価への影響を明らかにする。

以下、研究ごとに本研究で得られた結果をまとめる。

#### 6.1.1 KLにおける句末イントネーションの生成

第3章【研究1】では、KLの句末イントネーション生成の実態について、母語の影響と発話場面による影響、各類型の文法形式による出現傾向に焦点を当て、検討を行った。KLの発話データに見られた句末イントネーションを分析する上で、先行研究の3分類（李恵蓮 1999:2002「上昇下降調」「上昇調」「長呼調」、崔泰根 2005「昇降調」「上昇調」「平板調」）では、上昇のタイミングや上昇の仕方が連続的か段状かなど、各類型



の特徴が詳細に反映されていないと考えられることから、本研究では、日本語と韓国語の先行研究における句末イントネーションの種類の記述を検討し、新しい 8 分類（「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「段状上昇調」「遅れ上昇調」「自然下降調」「弱伸ばし下降調」「平らな引き伸ばし調」）の分類案に基づき分析を行った。さらに、発話場面による影響について検討すべく、異なる 2 つの発話場面について検討を行った。韓国語と日本語の先行研究を概観した結果、発話場面の改まり度と発話機能により KL と NS に異なる類型が出現する可能性が考えられた。KL は親密な話者間のカジュアルな会話において、「a special emphasis to the main points of the story（話の重要なポイントを特に強調）（Park2003:272（）は本論筆者訳）」する際、「ゆすり調」が出現しやすいことが指摘されている。しかし、同じく改まり度が低い場面において NS は「「尻上がり」イントネーション（昇降調）がフォーマルな場面での使用を制限され、これを避けたいという心理が働いたため、その代替形式として強調を使用（佐々木（原）2004:161）」するとの指摘から、第 3 章では、発話場面の改まり度に差異を設けた、場面①（「ヘビースモーカーの友達にたばこをやめるように説得する」）と場面②（「上司に出張の日程を報告する」）におけるロールプレイを行い、KL の場面①②の発話データを比較するとともに、NS とも比較を行った。また、KL には、母語の影響について検討すべく、韓国語と日本語両言語の発話データを収集した。

まず、母語の影響に焦点を当て、KL の日本語と韓国語に現れた句末イントネーションの類型別の出現数を対照した結果、日本語と韓国語の間に相違が示された。KL は、場面①②ともに、日本語では「自然下降調」「昇降調」「弱伸ばし下降調」が有意に多く現れ、韓国語では「ゆすり調」が有意に多いことが示された。この結果から、これまで李恵蓮（1999）において KL の日本語と韓国語に出現する類型が類似することから、KL の句末イントネーションは母語の影響による特徴との指摘とは、異なる結果となった。したがって、KL の「句末イントネーション」の出現理由については、母語の影響だけでは説明できない可能性が示された。こうした結果が得られた理由の一つに、従来の研究における句末イントネーションの種類の 3 分類を見直し、韓国語と日本語の先行研究に基づき 8 分類としたことが挙げられる。また、分類の再考は、KL の句末イントネーションをより丁寧に記述することが出来たという点においても、意義があると考えられる。

次に、場面①と場面②の発話データを比較した結果、KL の日本語では、場面①②の

類型別の出現数に有意差が見られ、場面①では「自然下降調」「ゆすり調」「弱伸ばし下降調」が、場面②では「昇降調」「連続的上昇調」「平らな引き伸ばし調」「段状上昇調」が多かった。しかし、NS は、場面①では「昇降調」「連続的上昇調」「平らな引き伸ばし調」が、場面②では「自然下降調」「段状上昇調」が多かった。したがって、KL は発話場面により見られる類型は異なるが、その出現傾向が KL と NS で異なっていた。特に、NS は「昇降調」の出現数が友人との会話である場面①より、上司との会話である場面②において、有意に少なく、発話場面の改まり度を考慮していると考えられる。しかし、KL は、上司との会話である場面②の「昇降調」の出現数が、友人との会話の場面①より有意に多く、発話場面の改まり度を考慮し、句末イントネーションを使用できていない。また NS は場面②において「段状上昇調」を多用していたが、KL にはこうした特徴が示されなかったことから、改まり度の高い発話場面における「段状上昇調」の習得も、まだ十分でないと考えられる。さらに、KL は、場面①では「ゆすり調」を多用し、場面②では「連続的上昇調」を多用していたが、この 2 類型については母語である韓国語でも同一の場面において多用していた。一方、NS は場面①②ともに「ゆすり調」が、場面②では「連続的上昇調」が 1 例も見られなかったことから、KL の「ゆすり調」「連続的上昇調」については、母語の影響が関与している可能性がある。

さらに、各類型が出現する文法形式について検討した結果、「昇降調」において、NS は「けど」「し」「て形」「から」のような接続助詞レベルで出現することが多かった。一方、KL も「て形」「から」のような接続助詞において「昇降調」の出現数が多かったことから、KL が「昇降調」を日本語のイントネーションとして学習し、使用している可能性もある。しかし、KL は NS に比べ「は」「が」「を」のような直前に名詞のみと接続することが多い助詞に出現することが多かった。したがって、KL の「昇降調」は「一文節ごとに区切って立て直し、たどたどしく話す学習者の発音の癖」(松崎 2001:239)に伴い出現され、目標言語における非流暢性が関与していると考えられる。また、「連続的上昇調」は「名詞」「動詞」によく出現していたが、発話内容を確認したいという意図や、目標言語に対する自信の欠如から出現している可能性が高い。「平らな伸ばし調」も、助詞や接続助詞より「名詞」によく出現し、「弱伸ばし下降調」も「名詞」「動詞」「副詞」によく出現していたが、これらの類型も発話内容に対する確認や自信の欠如から出現していると考えられる。しかし、「連続的上昇調」は、「で」「に」「て形」などの手段や場所、継起的な関係を示す助詞や接続助詞にも見られ、さらに韓国語においても

同じ意味を持つ表現で出現していたことから、出現する文法形式によっては母語の影響から出現しているという可能性も残る。さらに、「ゆすり調」は、「が」「から」「て形」「でも」などに出現数が多いことが示され、強調されやすい助詞や接続助詞類に出現しやすと考えられる。

以上から、第3章では、これまで「上昇下降調」や「上昇調」が細かく分類されていなかったために指摘されてこなかった「ゆすり調」「連続的上昇調」の存在が浮き彫りとなった。さらに類型の出現要因が、母語の転移だけでなく、KLの意図的な学習、目標言語における非流暢性が関与しており、発話場面により出現する類型に相違が見られる可能性が示唆された。このように、第3章は、KLの句末イントネーションにおける生成の特徴や各類型の出現要因をより多角的に捉え、これまで指摘されてこなかった類型が学習者の音声に出現する可能性を指摘したことに大きな意義があると考えられる。

### 6.1.2 KLにおける句末イントネーションの知覚

第4章【研究2】では、句末イントネーションに対するKLの知覚の実態を明らかにすべく、4つの類型（「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」）が見られる評価刺激に対し6段階評価を求めた。実験文と評価刺激については、第3章のKLの日本語発話データにおいて、原因・理由を示す「て形」や「から」に「昇降調」「ゆすり調」「連続的上昇調」「自然下降調」が出現することが確認されたことから、評価対象の実験文として同様に因果関係を示し、強調され発話されやすい「だから」に4つの類型が見られる評価刺激に対する6段階評定（1自然じゃない—6自然）を求めた。また、KLの知覚の実態をより詳細に明らかにすべく、NSにも同調査を依頼した。

その結果、4つの類型に対するKLとNSの評価傾向は概ね類似しており、「昇降調」と「自然下降調」の評価得点が「連続的上昇調」と「ゆすり調」より有意に高いことが示された。しかし、「昇降調」と「ゆすり調」の評価得点において、KL・NS間に有意差が示された。KLは「昇降調」の評価得点がNSより有意に低く、「ゆすり調」の評価得点がNSより有意に高かった。さらに、イントネーションの類型における下位検定の結果、KLは「自然下降調」の評価得点が「昇降調」より有意に高かったのに対し、NSは「自然下降調」と「昇降調」の評価得点の間に有意差が示されなかった。したがって、KLの4つの類型に対する知覚はNSと相違が見られることが示され、特に、NSは「昇降調」をNSに典型的な類型である「自然下降調」と有意差がない程度に自然だと評価

しているのに対し、KLは「自然下降調」と「昇降調」の間に有意差が示され、NSの評価とは相違が示された。また、母語の影響である可能性が高い「ゆすり調」についてもKLはNSより高く評価し、NSのように「ゆすり調」を日本語から逸脱した類型として十分に知覚できていない可能性が示唆された。

さらに、KLとNSに各類型に対する評価基準についてフォローアップインタビューを行った結果、NSは、調査に用いた実験文の発話場面が、以前答えた話を再度言われ、苛立つ気持ちを示すものであることを考慮し、「昇降調」を高く評価しているのに対し、KLにはこうした発話場面に関するコメントはあまり得られず、「日本語らしさ」や「日本人らしさ」から「昇降調」を自然であると評価している傾向が示された。「ゆすり調」については、KL・NSともに、ピッチの変化や持続時間の長さなど韻律的特徴に注目し不自然だとするコメントと、イントネーションが使用される発話場面を考慮すれば許容できるとするコメントが得られた。したがって、NSはKLより「ゆすり調」に対する評価得点は低かったが、一部においては「ゆすり調」を自然だとする評価も見られることが示された。さらに、KLは「韓国語・韓国人らしさ」から不自然とのコメントや「日本語・日本人らしさ」から自然だとのコメントも得られ、NSとは異なる評価基準を使い、「ゆすり調」を評価している傾向も確認された。「連続的上昇調」も、KL・NSともに、韻律的特徴に注目し不自然だとするコメントが共通して得られたが、イントネーションが使用される発話場面を考慮し評価したとのコメントはNSに多く見られた。NSは「この前言ったでしょ」の文脈で楽しそうに上に上がることはない」との理由から不自然だとする評価とともに、上下関係など発話場面によっては、「連続的上昇調」も許容できるとするコメントが見られた。したがって、「ゆすり調」と「連続的上昇調」について、これまで韓国人日本語学習者の句末イントネーションが、使うべきではない誤用として捉えられてきたこととは異なり、適切な発話場面において使用すれば、許容される可能性が示された。また、KLは「連続的上昇調」に対し、「韓国語・韓国人らしさ」から不自然とのコメントや「日本語・日本人らしさ」から自然だとのコメントも確認され、NSとは異なる評価基準を用いていることも確認された。

以上のことから、KLは「昇降調」と「ゆすり調」の評価得点においてNSと有意差が見られたが、評価基準においても各類型の韻律的特徴や「韓国語・韓国人らしさ」「日本語・日本人らしさ」に注目し類型を知覚しており、句末イントネーションが出現した発話場面を考慮した知覚はまだ十分ではないことが示された。一方、NSは句末イント

ネーションが出現する発話場面を考慮した評価を行っていた。このように、第4章では、句末イントネーションに対するKLの知覚について、NSとは異なる評価基準で句末イントネーションを知覚している可能性を指摘したことに意義があると考えられる。

### 6.1.3 KLの句末イントネーションに対するNSの評価

第5章【研究3】では、第3章に見られたKLの生成の特徴、第4章に見られたKLの句末イントネーションに対するNSの評価結果を踏まえ、「昇降調」と「ゆすり調」に焦点を当て、イントネーションが出現する助詞の拍数、文法形式、発話場面、持続時間とピッチの変化によるNS評価への影響を検討した。

第一に、「助詞の拍数」における結果を述べる。李惠蓮(2002)は、KLの「上昇下降調」についてNSの評価を求めた結果、2拍助詞の「から」より1拍の接続助詞の「て形」の評価得点(6段階評定、1不自然-自然6)が低かったことから、句末イントネーションが出現する助詞の「拍」がNSの評価に影響したと指摘している。しかし、第3章でNSの句末イントネーションの文法形式別の出現数を検討した結果、NSは因果関係を示す「て形」「から」ともに「昇降調」を多用していた。こうしたNSの生成に見られた特徴から考えると、KLの日本語の「て形」と「から」に「昇降調」が見られた際、「て形」と「から」の間に評価に相違が見られるとは考え難い。李惠蓮(2002)は、本研究における「昇降調」と「ゆすり調」を区別していないことから、イントネーションの類型が評価に影響した可能性がある。また、第3章においてKLの日本語発話データを分析した結果、KLは「て形」「から」に「昇降調」とともに「ゆすり調」を多用していた。

以上を受け、「ゆうこが毎日電話しててわたし寝られないんです(寝られないんだよ)」「ゆうこが毎日電話してるからわたし寝られないんです(寝られないんだよ)」の2つの実験文における「て形」と「から」に「昇降調」「ゆすり調」が出現するようにした評価刺激に対しNSに評価(6段階評定、1日本人は言わない-6日本人も使う)を求めた。その結果、「昇降調」「ゆすり調」ともに「て形」「から」の評価得点の間に有意差は示されず、「昇降調」と「ゆすり調」の間にのみ有意差が示された。以上のことから、KLの「昇降調」と「ゆすり調」に対するNS評価に、助詞の拍数はあまり影響しておらず、句末イントネーションのタイプのほうがより評価に影響を及ぼしていると考えられる。

第二に、「文法形式」における結果を述べる。第3章におけるKLの日本語発話デー

タを分析した結果、KLは「て形」「から」だけでなく、格助詞の「が」においても「昇降調」が見られた。しかし、NSは「て形」「から」においては「昇降調」を多用したが、「が」にはKLより「昇降調」の出現数が有意に少なかった。また、KLは「て形」「から」だけでなく「名詞」にも「ゆすり調」が出現していた。そこで、イントネーションが出現する文法形式の相違がNS評価に影響を及ぼす可能性について検討すべく、上記の実験文において「て形」「から」とともに、格助詞の「が」と「名詞」の「毎日」「わたし」に「昇降調」と「ゆすり調」を出現させた評価刺激に対しNSに評価を求めた。

その結果、「昇降調」と「ゆすり調」とともに、「て形」と「が」の間、「から」と「が」の間には評価得点に有意差が見られず、「て形」と「名詞」の間、「から」と「名詞」の間、「が」と「名詞」の間には有意差が見られ、接続助詞や格助詞レベルで「昇降調」と「ゆすり調」が出現するより「名詞」で出現する場合、低く評価されることが示された。したがって、「て形」「から」のような接続助詞や格助詞の「が」の場合、文節の切れ目となりやすいことから「昇降調」が見られても低く評価されないが、「名詞」の場合、文節の切れ目となりにくいことから、低く評価されたと考えられる、一方、「が」の場合、第3章のNSの発話データに「昇降調」の出現数がKLより有意に少なかったことから、低く評価されると予想したが、実験文において「昇降調」が1箇所のみであったため、許容されたのではないかと考えられる。一方、「ゆすり調」の場合、文法形式による有意差は示されたものの、全体的に評価得点が低い傾向が示され、さらに「名詞」に出現する場合、最も評価得点が低かった。このことから、「名詞」に出現する「ゆすり調」は、音声教育においては優先的に指導が求められる項目であると考えられる。

第三に、「発話場面」における結果を述べる。第3章のKL日本語発話データでは、友人との会話だけでなく、上司との会話においても「昇降調」が多用され、KLは改まり度が高い場面でも「昇降調」の出現数が多いことが示された。しかしNSは、友人との会話では「昇降調」を多用していたが、上司との会話においては友人との会話より有意に出現数が少なかった。また、第4章のNSのフォローアップインタビューから、「昇降調」について、苛立ちを示す発話場面を考慮すれば、許容できるとのコメントが得られた。「ゆすり調」についても、第4章のNSのフォローアップインタビューから、「怒って「またかよ」みたいな感じで使う時は言う。でもシリアスな場面なのに「だから～」とか言ったら「何だこいつは」と思うかもしれない」とのコメントが見られ、「ゆすり調」に対するNS評価に改まり度が関与している可能性が示された。そこで、発話場面

の改まり度が異なるように作成した、指導教員との会話である場面①と友人との会話である場面②における上記の実験文について、NS の評価を求めた。

その結果、「昇降調」は、評価刺激の「わたし」を除く「て形」「から」「が」「毎日」に場面間の有意差が示され、場面①（指導教員）より場面②（友人）の評価得点が有意に高かった。一方、「ゆすり調」は、5つの文法形式中「が」のみに有意差が見られ、場面②（友人）の評価得点（2.47点）は、中央値の3.5以下であった。したがって、「ゆすり調」より「昇降調」のほうが、発話場面の改まり度によるNS評価への影響が大きいと考えられ、「昇降調」は改まり度が低い発話場面では高く評価されるが、改まり度が高い発話場面では低く評価されると言える。しかし、「ゆすり調」は改まり度が低い場面であってもあまり許容されず、日本語から逸脱した類型とされ、低く評価されると言える。

第四に、「持続時間とピッチの変化」における結果を述べる。第4章におけるNSの評価では、「昇降調」の評価得点が「ゆすり調」より有意に高いことが示された。一方で、「昇降調」と「ゆすり調」は、ピッチが上昇後下降する点で韻律的に類似するが、「ゆすり調」は上昇の開始前に低いピッチが持続する区間があり、上昇が遅れて生じるという点で「昇降調」と区別される。しかし、「ゆすり調」の評価を下げる特徴を明らかにするためには、評価を下げる特徴が、この低いピッチが続く区間の持続時間が長いことにあるか、この区間のピッチが低いためかを、明らかにする必要がある。また「昇降調」についても、「昇降調」に対するNS評価の実態をより明らかにするために、持続時間とピッチの変化が見られる場合、評価に影響が見られるかを検討する必要があると考えられることから、持続時間の長短とピッチの高低を操作した合成音声を用い、「昇降調」と「ゆすり調」に対するNSの評価を求めた。

その結果、「昇降調」と「ゆすり調」ともにピッチによる評価得点の有意差はほとんど示されなかった。つまり、ピッチの高低変化は、「昇降調」と「ゆすり調」のNS評価に対しあまり影響が見られないと言える。一方、持続時間の長短については、「昇降調」「ゆすり調」ともに、持続時間が長くなるほど評価得点が有意に低くなり、さらに「昇降調」より「ゆすり調」のほうが、有意差が見られる項目が多かった。以上のことから、「昇降調」と「ゆすり調」ともにピッチの変化より持続時間の長さが評価を下げ、さらに、「ゆすり調」の場合、「昇降調」より持続時間が評価に及ぼす影響が大きいと言える。

## 6.2 日本語教育への示唆

本研究では、韓国人日本語学習者の句末イントネーションについて、生成と知覚の両面から分析を行い、学習者の音声に見られる特徴を新たな視点から捉えた。句末イントネーションが日本語において発話意図を示す重要な道具であることを考えると、日本語音声教育の現場での指導は不可欠である。しかしながら、これまで韓国人学習者の句末イントネーションは誤用としての見方が強く、「失礼な感じを与える」「聞いていて疲れる」(李惠蓮 2004) などの否定的評価を受ける特徴として取り上げられてきた。しかし、学習者の句末イントネーションの生成において、どのような類型が、どのような発話場面で、どのような文法形式に出現しやすいかが明らかにされてこなかったことから、こうした学習者の生成の特徴を踏まえた母語話者評価研究も十分に行われてこなかった。本研究では、学習者の生成における新しい知見を得ることができたこととともに、その知見を踏まえ、母語話者評価の一端を明らかにしたことに意義があると考えられる。

特に、ピッチの上昇後下降が見られる類型は、「上昇下降調」(李惠蓮 1999) や「昇降調」(関光準 1989、崔泰根 2005) などと指摘されてきたが、ピッチ上昇のタイミングにより K-ToBI (Jun2000) が「HL%」と「LHL%」を区別していることを、韓国人日本語学習者の音声において指摘したのは、近年の研究(金瑜眞 2013;2014、禹昭娟 2014) である。しかし、金瑜眞 (2013;2014) や禹昭娟 (2014) は発話場面による影響と出現する文法形式について十分に検討できていない。本研究では、発話場面の改まり度に差異を設けた 2 場面について、「昇降調」と「ゆすり調」の文法形式別の出現数について検討を行った。その結果、KL は、友人との会話だけでなく、改まり度が高い上司との会話においても KL は「昇降調」を多用していた。この結果を踏まえ、場面の改まり度が異なる 2 場面について、NS 評価を求めた結果、NS は場面の改まり度が高い場合、「昇降調」を厳しく評価することが示唆された。一方、「ゆすり調」はこうした発話場面の相違が「昇降調」よりあまり見られず、比較的 low に評価されていた。また、KL の「昇降調」と「ゆすり調」は接続助詞や格助詞だけでなく、名詞にも出現していた。この結果を踏まえ、「昇降調」と「ゆすり調」が「て形」「から」「が」「名詞」に出現した音声について NS 評価を求めた結果、接続助詞の「て形」「から」と格助詞「が」より「名詞」において、有意に評価得点が低いことが示された。

以上のことから、「昇降調」の評価については、韻律的な特徴よりも発話場面の改まり度が影響しており、さらに出現する位置が文節の切れ目となりにくい「名詞」である



場合、評価が低くなる可能性がある。したがって、学習者が「昇降調」を使用したとしても、母語の影響(李恵蓮 1999、崔泰根 2005)による誤用だと断定することはできず、発音指導の際には、使用可能な発話場面や文法形式、また評価を下げやすい発話場面や文法形式に関する情報を学習者に提供することが求められる。一方、「ゆすり調」については、第4章においてNSの一部から苛立ちを示す発話場面であれば許容できるとのコメントが見られたが、しかし「昇降調」と比較すると、発話場面に関わらず評価得点が低かったために、日本語から逸脱した特徴とされ、日本語のイントネーションとして許容され難いと言える。

一方、第4章においてKLに「昇降調」と「ゆすり調」に対する知覚の実態を調査した結果、「昇降調」と「ゆすり調」の間に有意差は見られたものの、NSより「昇降調」を有意に低く、「ゆすり調」を有意に高く評価していた。したがって、KLによっては、「昇降調」と「ゆすり調」を区別できていない可能性がある。「昇降調」と「ゆすり調」における音声教育については、まず、この両類型を区別して知覚できるよう、聞き取りの練習を行うとともに、生成においても可能な限り「ゆすり調」を用いず、強調などの示す意図から使用が必要な場合は「昇降調」で代用するように促すという指導案が考えられる。しかし、上述したように「昇降調」の過剰な使用は、日本語から逸脱したために評価を下げるものではないが、「目上の相手に対して失礼である」や「シリアスな場面なのに失礼だ」のように発話場面の改まり度が影響する可能性が高いために、発話場面に注意した使用が求められる。

さらに、本研究では、NSの句末イントネーション生成において、KLとは異なる特徴を持っていることが示唆された。「自然下降調」は、日本語母語話者に典型的な類型であることが示唆され、第3章のNSの発話データにおいても、NSは全体の類型中50%以上を「自然下降調」が占めていた。したがって、KLの句末イントネーション習得において、「自然下降調」を最も基本的な類型として使用できるかの習得は重要である。しかし、生成におけるKLの「自然下降調」の出現率はNSより低かったが、知覚においてはNSと評価得点に有意差が示されなかった。したがって、KLは「自然下降調」を自然な類型として知覚することはできるが、生成において「自然下降調」を日本語の典型的な類型として使用できる能力の習得はまだ十分でないと言える。以上のことから、音声教育における「自然下降調」の指導については、学習者が知覚できることを生かし、生成の練習を行う指導が可能であると考えられる。「へ」の字型(中川 2001)や「ヤ

マ」(松崎 2001) を用いたイントネーション句の発音練習法は、句末を下げるのが基本となっている。イントネーション句の練習の際、句末を意図的に上げたり下げたりしない「自然下降調」を「昇降調」や「ゆすり調」などの対照から、日本語において最も典型的な類型として、学習者に示すことができると考えられる。

一方、NS は、発話者自身の発話意図を効果的に伝える道具として、「昇降調」や「段状上昇調」を有効に使用していることが確認された。特に、「昇降調」と「段状上昇調」には発話場面の改まり度が関与しており、NS は改まり度が低い場面では「昇降調」を、改まり度が高い場面では「段状上昇調」を多用していた。これまで、「上昇下降調」(李恵蓮 1999) や「句末上昇調」(大坪監修 1987) が学習者らしい特徴であるとされ、誤用として評価されてきたことを考えると、ピッチの上昇後下降が見られる類型や上昇のみが見られる類型であっても、発話場面と発話相手という条件が適切であれば、母語話者も使用できる類型として、許容される可能性が示された。したがって、音声教育においても、発話場面の改まり度により許容できる類型に関する情報を学習者に提供することが必要だと考えられる。また、NS の評価を検討した結果、「連続的上昇調」についても、上下関係という発話場面を想定すれば、許容できるとのコメントが得られたが、これは「連続的上昇調」を使用する側が目上である場面を想定したものであるため、「段状上昇調」に比べると、使用できる場面は限定的であると言える。また、KL が第 3 章の発話データにおいて、「連続的上昇調」を上司との会話においても多用していたことを考えると、上下関係で下の位置である場合でも KL は「連続的上昇調」を使用してしまう可能性があり、「連続的上昇調」が NS の一部において許容されるとは言え、積極的な使用を促す必要はあまりないと考えられる。

このように、句末イントネーションの類型により、NS がイントネーションを使用する発話場面は異なっており、特に本研究のような自発音声において NS は「自然下降調」だけでなく、「昇降調」や「段状上昇調」についても多用していることが示された。こうした結果から、これまでの音声教育のような「日本人にはこのように発音する人もいる」ということを説明してもいいかもしれませんが、そのようなイントネーションで発音させる必要は特にない(国際交流基金 2009:126)」とされ、指導の必要は無いという消極的な指導方針や、母語の影響であるから使わないほうが良いという一次元的な指導だけでは、学習者が教室外の生の日本語に接し、日本語母語話者が使用する句末イントネーションをインプットとして受けた際、教室で注意されたこととは異なるために、句

末イントネーションの使用について混乱してしまう恐れがある。その点で、本研究の結果は、「イントネーションならイントネーションの何をどのように間違えると評定が下がるのか（松崎 1999:33）」における具体的な教育的示唆を得ることができたという点で意義があると考えられる。

しかし、特定の句末イントネーションの使用を学習初期から積極的に促す必要があるかについては、熟考する必要がある。特に、「ゆすり調」と「連続的上昇調」については、日本語から逸脱した特徴として評価する母語話者も見られ、日本語において使用される発話場面が限定的である可能性が高い。そのため、学習初期において積極的に使用される可能性がある発話場면을提示するなどの指導を行う必要はないと考えられる。まずは、母語話者に典型的な類型である「自然下降調」の指導を中心に行い、その次に、使用される発話場면을提示した上で、「昇降調」や「段状上昇調」が日本語で使用可能であることを指導する方向が望ましいと考える。

しかしながら、指導時期が遅れることにも注意する必要がある。小河原（1993）は、あいまい文を読ませた日本語学習者の音声に対し日本語母語話者に評価を求めた結果、発音の誤りが少なかった学習者の発音に対し評価が高かったが、評価者が理解した発話意図が誤解であることに気づいた後は評価が大きく下がった結果を報告し、「日本語の発音がうまい外国人の発話ほど、誤解によって評価が下がる（小河原 1993:11）」と述べている。さらに、この結果から「発音が下手なうちは許容されるが、学習が進み発音がうまくなるにつれて評価は厳しくなる（小河原 1993:11）」と指摘している。

本研究の句末イントネーションについても同様の指摘が該当しそうである。他の発音の誤りが目立つ初級のうちは許されるが、学習が進み上級になってからは、日本語から逸脱した特徴として捉えられるだけでなく、シリアスな場面では許容され難い「ゆすり調」と、上下関係を連想させるような「連続的上昇調」を学習者が使用した場合、学習者が意図していない発話意図が伝わり、誤解を招いてしまう可能性がある。なお、「昇降調」の場合、学習者が日本語として自然な類型であると思い、上級になっても多用する場合、日本語母語話者の「昇降調」が「尻上がりイントネーション」（井上 1997）として「軽薄」「甘えた」「幼い」のような印象を与えると指摘と同様、学習者が意図していない印象を与えたり、感情的な誤解を招いたりする危険性が高いと考えられ、「発話者の能力や人格の評価にまで影を落としかねない（土岐 1989:113）」重い誤りへと発展する可能性がある。したがって、習得が進み中級や上級に至っても、継続して音声教

育を行い、誤解を招く恐れがある特徴であるという情報を学習者に与え、発音指導を行う必要がある。

以上のことから、本研究は、韓国人学習者の句末イントネーションの類型を見直し、発話場面と文法形式に焦点を当て、中間言語における句末イントネーション生成の特徴を明らかにしたことに、大きな意義があると考えられる。これまでの研究では、発話場面に對し特に教示を与えていない読み上げ音声や暗記音声、自発音声が材料とされ、発話場面により学習者の句末イントネーションの出現傾向が異なる可能性については焦点が置かれていなかった。しかし、本研究では異なる2つの場面において調査を行い、出現する類型が発話場面により異なることや、学習者は日本語母語話者に比べ発話場面を十分に考慮せず、句末イントネーション、特に「昇降調」の多用が見られることが示された。「昇降調」の多用については、母語話者の日本語を真似し学習により使っている可能性（金瑜眞 2013）や、名詞と直接接続する格助詞レベルで多用されたことから目標言語における非流暢性などが、出現の要因として考えられる。本研究の調査協力者の KL は、発話に言いよどみやフィラー、ポーズが多かったことを考えると、非流暢性の可能性が高いと考えられるが、指導を行う際は、学習者の使用にどのような背景があるかを教師が意識した上で、指導に臨むことが求められるだろう。

また、句末イントネーションにおける学習者の知覚について、有意義な示唆が得られた。これまで、韓国人学習者の句末イントネーションは生成を中心に議論され、管見の限り、学習者の知覚を検討した研究は見られない。本研究の KL は、知覚について「自然下降調」と「昇降調」を「ゆすり調」と「連続的上昇調」より有意に高く評価していたことから、知覚において一定の習得はなされていることが確認された。しかし、「昇降調」と「ゆすり調」に対する評価において、「昇降調」を NS より低く、「ゆすり調」を NS より高く評価していた。評価基準についても NS と異なる傾向が示され、NS は発話場面を考慮した評価を行うとのコメントが多いのに対し、KL にはこうしたコメントがあまり見られず、韻律的特徴や韓国人・日本人らしさなどに関するコメントが多かった。また、こうした NS とは異なる KL の評価基準が示されたことは、「昇降調」に対する KL の評価得点は NS より有意に低く、第3章の発話データにおいて、発話場面の改まり度によらず「昇降調」を多用していたこととも関係すると考えられる。また、「ゆすり調」についても、KL の一部から日本人らしい特徴であるとのコメントが見られたが、KL が「ゆすり調」を NS より高く評価し、第3章の発話データにおいて NS

には見られない「ゆすり調」が出現したことを考えると、本研究の KL においては、生成面と知覚面においてともに、句末イントネーションを十分に習得しているとは言い難い。

以上のことから、句末イントネーションの指導については、個々の類型に対する生成と知覚の両面における指導が求められると考えられる。そのためには、学習者の生成と知覚の実態をさらに明らかにし、その研究成果の蓄積を音声教材や教育現場に還元していくことで、イントネーションの韻律的特徴だけでなく、発話場面や出現する文法形式を意識させた音声教育を行う必要があると考えられる。

### 6.3 今後の課題

今後の課題として、以下の点が残る。まず、句末イントネーションの生成において、本研究の学習者は非流暢性に関わる要素が多く見られたことから、初・中級程度のレベルであると考えられる。今後、習得がさらに進んだ上級学習者と初・中級学習者を比べることで、句末イントネーションの習得過程を明らかにし、各類型の出現傾向がどのように変容していくのかを明らかにしていくことに意義があると考えられる。特に、「昇降調」については、学習により能動的に使用する可能性と非流暢性により出現する可能性があることが示唆されたが、今回の調査協力者がどちらの要因に強く影響を受けたか、十分に明らかにすることはできなかった。習得レベルの異なる学習者にさらに追試を行うことで、「昇降調」の出現理由について続けてその実態を解明していく必要があるだろう。

同時に、句末イントネーションの知覚についても、習得レベルを考慮した再調査が求められる。特に、「ゆすり調」に対する KL の知覚は、「ゆすり調」を高く評価した KL と低く評価した KL に分かれる結果が示された。生成において NS には「ゆすり調」が見られなかったことから、「ゆすり調」を高く評価した KL が母語の影響を受けていると考えれば、低く評価した KL は日本語を習得し、「ゆすり調」を不自然な類型として知覚できるようになった可能性がある。第 4 章における調査協力者の KL は学習歴 (SD=1.00) にややばらつきがあったことから、習得レベルが結果に影響を与えた可能性がある。しかし、NS の一部からは、発話場面を考慮すれば「ゆすり調」を日本語のイントネーションとして許容できるというコメントも得られたことから、自然だと評価した KL についても、母語の影響だけでなく、目標言語である日本語のイントネーションの学習により自然だと評価した可能性もある。今後は、母語の影響と意図的な学習と

いう習得に影響を及ぼす要因の実態を続けて検討するとともに、習得レベルの異なる学習者を比較し、句末イントネーションの知覚の習得過程を明らかにする必要がある。

最後に、先行研究では、自分の発音に対し自己モニターを行っている学習者は発音能力が高い（小河原 1997、スィリポンパイブーン 2008）ことが報告されているが、本研究では、KL の生成と知覚の関係について、十分に検討することができなかった。本研究では、句末イントネーションにおける KL の生成と知覚においてそれぞれ調査を行ったことから、生成と知覚の一端を明らかにすることはできたが、両者が有意な相関関係にあるかについては、十分に明らかにすることができなかった。両者の間に有意な相関関係が示される場合、音声教育の際にも、発音の練習とともに聞き取りの練習を同時に行うことの有効性をより明確に示すことができると考えられる。しかし、句末イントネーションに対する学習者の生成と知覚を明らかにすることは、生成と知覚に対し正誤判定を行い、点数化する必要があることから、今後は、学習者の句末イントネーションにおける学習者の生成と知覚をどのように測定することが妥当であるかについて方法を改善し、本研究で得られた知見を再検討していく必要があると考える。

## 参考文献

- 阿部新・嵐洋子・須藤潤（2016）「日本語音声教育の方向性の探索—音声教育に対する日本語教師のビリーフの自由回答をデータとして」『「評価」を持って街に出よう—教えたこと・学んだことの評価という発想を超えて』くろしお出版, pp.270-290
- 李惠蓮（1999）「韓国人日本語学習者の日本語発話の“end focus”における母語の影響—句末を中心に『日本語教育』103, pp.69-78
- 李惠蓮（2001）「ソウル方言話者の日本語発話における“end focus”—自然談話を材料に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』2-50, pp.235-242
- 李惠蓮（2002）『韓国人日本語学習者の日本語発話の“end focus”に関する研究』広島大学大学院教育学研究科博士論文.
- 李惠蓮（2003）「自然談話における日本語発話の“end focus”—ソウル方言話者を中心に」『日本學報』56(1), pp.19-32, 韓国日本学会.
- 李惠蓮（2004）「ソウル方言話者の日本語発話に対する日本語母語話者の評価—“end focus”を中心に」『日語日文學研究』48-1, pp.1-20, 韓国日語日文学会.
- 李宝瓊（2007）「韓国語を母語とする日本語学習者の「問い返し」と「疑い」の知覚について」龍谷大学国際センター研究年報16, pp.3-24
- 李範錫（2009）「韓国人日本語学習者の「そうですか」の発話意図とイントネーションの実相」『日本語學研究』25, pp.157-174 韓国日本語学会.
- 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄（2006）「第7章 韻律情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所報告 No.124, pp.347-454  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/csj/k-report-f/07.pdf](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/k-report-f/07.pdf)（閲覧日 2017年9月1日）
- 井上史雄（1994）「『尻上がり』イントネーションの社会言語学」佐藤喜代治（編）『国語論究第4集現代語・方言の研究』pp.1-29, 明治書院.
- 井上史雄（1997）「イントネーションの社会性」『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』pp.143-168, 三省堂.
- 禹昭絹（2014）「韓国人日本語学習者の自発音声の句末の韻律的特徴」『韓国日本語学会第29回学術発表会論文集』, pp.114-120
- 上村幸雄（1989）「日本語のイントネーション」『ことばの科学』3, pp.193-220, むぎ書房.

- 宇都木昭 (2004) 「韓国人日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的・音韻的特徴」『音声研究』 8-1, pp. 96-108
- 江田早苗・内藤由香・平野絵理香 (2009) 「学習者によるイントネーション知覚と意味理解のストラテジー—音声教育への応用と提言—」『日本語教育』 143, pp.48-59
- 大坪一夫監修, 王伸子・シリラック・ダーンワーニツチャクル・崔聖玉・原田哲男・関光準 (1987) 『NAFL Institute 日本語教師養成通信講座日本語の音声(II)』アルク
- 小河原義朗 (1993) 「外国人の日本語発音に対する日本人の評価」『東北大学文学部日本語学科論集』 3, pp.1-12, 東北大学.
- 小河原義朗 (1997) 「発音矯正場面における学習者の発音と聴き取りの関係について」『日本語教育』 92, pp.83-94
- 小河原義朗 (2009) 「—過去から現在へ—日本語音声教育を振り返る」水谷修監修『日本語教育の過去・現在・未来 第4巻音声』 pp.24-45, 凡人社.
- 小塩真司 (2004) 『SPSS と Amos による心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで』東京図書株式会社.
- 甲斐朋子・田渕咲子 (2003) 「日本語の感情を含む発話に対する韓国人日本語学習者の聞き取りと発話をめぐって」『ポリグロシア』 7, pp.53-63, 立命館アジア太平洋大学言語教育センター.
- 川上蕨 (1956) 「昇降調の三種」『音声学会会報』 92, pp.7-8/25.
- 川上蕨 (1963) 「文末などの上昇調について」『国語研究』 16, pp.25-46
- 河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛 (2004) 『1日10分の発音練習』くろしお出版.
- 北野孝志 (2015) 「韓国人日本語学習者の語尾上げ現象に関する考察—北関東方言との相似と相違を中心に—」『日語日文学研究』 94-1, pp.291-312
- 北野孝志 (2016) 「韓国人日本語学習者の語尾上げ現象の評価基準に関する考察」『日語日文学研究』 97-1, pp.3-19
- 北野孝志 (2017a) 「語尾上げ現象と助詞との共起に関する考察—日本語母語話者との対照を中心に—」『日語日文学研究』 100-1, pp.29-47
- 北野孝志 (2017b) 『ソウル方言話者の日本語発話に見られる語尾上げに関する研究』韓国外国語大学校日語日文学科博士論文.
- 金瑜眞 (2013) 「日本語句末イントネーション習得における韓国人学習者の内省」『2013



- 年冬季学術大会発表論文集』 pp.393-402, 韓国日語日文學會.
- 金瑜眞 (2014)「韓国人日本語学習者における句末伸ばし下げイントネーションの種類」  
『第 28 回日本音声学全国大会予稿集』, pp.129-134
- 金瑜眞 (2017)「韓国人日本語学習者による句末イントネーションの生成—母語の影響の再検討と発話場面による影響に注目して」『日本語/日本語教育研究』 8, pp.151-166
- 串田真知子・城生佰太郎・築地伸美・松崎寛・劉銘傑 (1995)「自然な日本語音声への効果的なアプローチ:プロソディグラフ—中国人学習者のための音声教育教材の開発—」『日本語教育』 86, pp.39-51
- クロード・ロベルジュ・木村匡康・川口義一 (1990)『日本語の発音指導—VT 法の理論と実際—』 凡人社.
- 郡史郎 (1997)「強調とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』 pp.316-342, 明治書院.
- 郡史郎 (2003)「イントネーション」『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』 pp.109-131, 朝倉書店.
- 郡史郎 (2011)「イントネーション」城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 (編)『音声学基本辞典』 pp.338-348, 勉誠出版.
- 郡史郎 (2012)「東京方言における文末の強調型上昇調の機能について」『音声言語の研究』 6, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.15-22
- 郡史郎 (2014)「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』 41, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.85-107
- 吳麗楠・磯村一弘・波多野博顕・金村久美・松田真希子 (2016)「JFL 環境下での発音学習ストラテジー使用と発音習得—中国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に」『音声研究』 20-1, pp.6-15
- 国際交流基金 (2009)『国際交流基金日本語教授法シリーズ 2 音声を教える』 ひつじ書房.
- 佐々木 (原) 香織 (2004)『日本語音声談話の韻律構造』 東京外国語大学地域文化研究科博士論文.
- 佐藤友則 (2001)「音声評価基準の習得過程に関する考察」『第二言語としての日本語の習得研究』 4, pp.134-149, 凡人社.

- 神保格 (1935) 『国語音声学』 明治図書株式会社.
- スィリポンパイブーン・ユパカー (2008) 「日本語アクセントの学習における自己モニターの有効性: タイ語母語話者に対するアンケートの分析から」 『音声研究』 12(2), pp.17-29
- 鈴木孝明 (2015) 『日本語文法ファイル: 日本語学と言語学からのアプローチ』 くろしお出版.
- 竹原卓真 (2010) 『SPSS のスズメ 2:3 要因の分散分析をすべてカバー』 北大路書房.
- 田中敏・山際勇一郎 (2003) 『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法—方法の理解から論文の書き方まで』 教育出版.
- 田中真一・窪菌晴夫 (1999) 『日本語の発音教室: 理論と練習』 くろしお出版.
- 谷口聡人 (1991) 「音声教育の現状と問題点—アンケート調査の結果について—」 水谷修・鮎澤孝子編 『シンポジウム日本語音声教育—韻律の研究と教育をめぐって—』 pp.20-25, 凡人社.
- 田淵咲子 (2008) 「日本語母語話者と韓国語母語話者である日本語学習者を対象とした日本語発話態度に関する研究—初級日本語学習者と上級日本語学習者の比較より—」 『日本語学研究』 22, pp.153-165, 韓国日本語学会.
- 崔泰根 (2005) 「韓国人日本語学習者の日本語音声に見られる「韓国語的イントネーション」について—「フレーズ末昇降調」と「発話リズム」による母語干渉を中心に—」 『第19回日本音声学会全国大会予稿集』 pp.25-30, 日本音声学会.
- 土岐哲 (1989) 「音声の指導」 『講座日本語と日本語教育 13』 pp.111-138, 明治書院.
- 土岐哲 (1998) 「アクセントの下げとイントネーションの下げ」 『阪大日本語研究』 10, pp.53-66
- 土岐哲・村田水恵 (1989) 『発音・聴解』 荒竹出版.
- 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク
- 轟木靖子 (2008) 「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—」 『音声言語VI』 pp.5-28, 近畿音声言語研究会.
- 轟木靖子・山下直子 (2009) 「日本語学習者に対する音声教育についての考え方—教師への質問紙調査より—」 『香川大学教育実践総合研究』 18, pp.45-51
- 中川千恵子 (2001) 「「へ」の字型イントネーションに注目したプロソディー指導の試

- み』『日本語教育』110, pp.140-149
- 中川千恵子・中村則子 (2010) 『初級文型でできるにほんご発音アクティビティ』アスク出版.
- 中川千恵子・木原侑子・赤木浩文・篠原亜紀 (2015) 『伝わる発音が身につく！にほんご話し方トレーニング』アスク出版.
- 新田哲夫 (1987) 「北陸地方の間投イントネーションについて」『金沢大学文学部論集文学科篇』7, pp.19-48, 金沢大学.
- 日本語記述文法研究会 (2008a) 『現代日本語文法 1 第 1 部総論・第 2 部形態論』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2008b) 『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて・第 10 部主題』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2008c) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2008d) 『現代日本語文法 7 第 12 部談話・第 13 部待遇表現』くろしお出版.
- 蓮沼昭子 (1991) 「対話における 「だから」 の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4, pp.137-153
- 福岡昌子 (2012) 「韻律の知覚習得における方言別中国人学習者の中間言語研究」『三重大学国際交流センター紀要』7, pp.13-26
- 前川喜久雄 (2004) 「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15, pp.111-133
- 松崎寛 (1999) 「韓国語話者の日本語音声一音声教育研究の観点から」『音声研究』3(3) pp.26-35, 日本音声学会.
- 松崎寛 (2001) 「日本語の音声教育」城生百太郎 (編) 『日本語教育学シリーズコンピュータ音声学 3』 pp.207-258, おうふう.
- 松崎寛 (2005) 「聞くための日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 pp.127-146, くろしお出版.
- 松崎寛 (2015) 「音声認識技術を取り入れた日本語発音自学システムの作成と試用」科学研究費助成事業 研究成果報告書：基盤研究 (B)2012-2014 <http://hdl.handle.net/2241/00141537> (閲覧日 2017 年 9 月 1 日)
- 松崎寛・河野俊之 (2010) 『日本語教育能力試験に合格するための音声 23』アルク
- 峯松信明・中村新芽・鈴木雅之・平野宏子・中川千恵子・中村則子・田川恭識・広瀬啓

- 吉・橋本浩弥 (2013) 「日本語アクセント・イントネーションの教育・学習を支援するオンラインインフラストラクチャの構築とその評価」電子情報通信学会論文誌 D, J96-D, No.10, pp.2496-2508
- 宮地裕 (1963) 「イントネーション」『話しことばの文型(2)』国立国語研究所, pp.178-208
- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』 68, pp.175-190
- 吉沢典男 (1960) 「イントネーション」『話しことばの文型(1)』 pp.249-288, 国立国語研究所.
- Beckman, Mary E. and Sun-Ah Jun (1996) *K-ToBI (Korean ToBI) labeling conventions (Version 2.1)*. Ms, Ohio State University and UCLA.
- Jun, Sun-Ah (1993) *The phonetics and phonology of Korean prosody*. Ph.D. dissertation. The Ohio State University, Columbus, Ohio, USA.
- Jun, Sun-Ah (2000) K-ToBI (KOREAN ToBI) labelling conventions. *UCLA working papers in phonetics* 99, pp.149-173.
- Kong, Eun-Jong (2010) The Role of Pitch Range Reset in Korean Sentence Processing. *Phonetics and Speech Sciences* 2-1, pp.33-39.
- Park, Mee-Jeong (2003) *The Meaning of Korean Prosodic Boundary Tones*. Ph.D. dissertation. Los Angeles: University of California.
- Pierrehumbert, Janet (1980) The phonology and phonetics of English intonation. Ph.D. dissertation, MIT.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10. pp.201-231
- Silverman, Kim, Mary E. Beckman, John Pitrelli, Mari Ostendorf, Colin Wightman, Patti Price, Janet Pierrehumbert, and Julia Hirschberg (1992) ToBI: a standard for labeling English prosody. *Proceedings of the 2nd International Conference on Spoken Language Processing*, pp.860-870.
- アンビョンソプ (2010) 『한국어 운율과 음운론 (韓国語韻律と音韻論)』 図書出版ウォルイン.
- イホヨン (이호영) (1999) 「국어핵억양의 음향음성학적 연구 (韓国語核抑揚の音響音声学的研究)」『マルソリ』 38, pp.25-39
- イホヨン (이호영) (2008) 『국어음성학 (国語音声学)』 太学社. 第6版

- チョミンハ (조민하) (2008) 『연결어미의 기능 변화에 나타난 억양의 문법표지성 (連結語尾の機能變化に現れた抑揚の文法表示性)』 『語文論集』 58, pp.93-125
- チョミンハ (조민하) (2011) 『연결어미의 종결기능과 억양의역할 (連結語尾の終結機能と抑揚の役割)』 高麗大学校大学院国語国文学科博士論文.
- チョンミョンスク (정명숙) (2002) 『현대국어 말소리의 통시적 변화 ; 1950 년 이후 방송자료를 중심으로 (現代国語言語音の通史的變化 ; 1950 年代以降放送資料を中心に)』 高麗大学校大学院国語国文学科博士論文.
- 한·索尼·오·미라 (한선희·오미라) (1999) 「한국어 억양구의 경계톤 (韓國語抑揚句の境界トーン)」 『マルソリと音声科学』 5(2), pp.109-129
- 밍그안쥬ン (민광준) (2004) 『한·일 양 언어 운율의 음향음성학적 대조 연구 (韓·日兩言語韻律の音響音声學的對照研究)』 株式会社 J&C.

## 各章と既発表論文および学会発表との関係

### 第1章 序論

新規執筆

### 第2章 先行研究と本研究の位置づけ

金瑜眞（2015）「日本語学習者のイントネーション研究の展望—韓国語と日本語の句末境界音調に注目して」『筑波応用言語学研究』22, pp.38-51

一部加筆および修正

### 第3章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの生成【研究1】

金瑜眞（2017）「韓国人日本語学習者による句末イントネーションの生成—母語の影響の再検討と発話場面による影響に注目して」『日本語/日本語教育研究』8 pp.151-166

一部加筆および修正

### 第4章 韓国人日本語学習者における句末イントネーションの知覚【研究2】

金瑜眞（2016）「韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する学習者の評価—発話場面による評価の相違」『日本教科教育学会第42回全国大会 日本語教科教育学会全国大会論文集』 pp.60-61

金瑜眞（2017）「韓国人日本語学習者の句末イントネーションにおける韓国人学習者と日本語母語話者の評価」『日本教科教育学会誌』（査読中）

### 第5章 韓国人日本語学習者の句末イントネーションに対する母語話者評価【研究3】

新規執筆

### 第6章 結論

新規執筆

## 資料

### 【資料 1】 第 3 章の調査で用いた韓国語のロールカード (場面①)

당신은 A라는 친한 친구와 현재 같이 살고 있습니다. 그런데 A는 담배를 많이 피는 골초입니다. 하지만 당신은 담배를 피우지 않기 때문에 실은 담배 냄새가 정말 싫고 괴롭습니다.



A에게는 항상 담배냄새가 많이 납니다. A는 거실에서 담배를 자주 피우는데 그래서 당신은 A와 이야기를 할 때 언제 부턴가 당신의 옷이나 몸에서도 담배냄새가 나게 되어버렸습니다.



요전에는 친구와 가족한테 까지 「너한테 담배 냄새 나」라는 말을 들었습니다. 당신은 담배를 피우지도 않는데 이런 오해를 받는 것이 매우 기분이 나쁠습니다.

요즘에는 눈이랑 목도 아프고 기침도 자주 해서 얼마 전에는 병원까지 다녀왔습니다.

의사 선생님은 담배연기가 원인이니까 담배를 피우지 말라고 말씀하셨습니다.



A는 때때로 베란다에서도 담배를 피웁니다. 얼마 전에는 당신이 혼자 집에 있을 때 옆집 사람이 찾아와 「우리집 베란다까지 담배 냄새가 나니까 베란다에서 담배를 피우지 말아주세요」라며 화까지 냈습니다.

당신은 자신이 피우지도 않은 담배때문에 주의를 받은 것 때문에 너무 화가 났습니다.



A는 누워서 담배를 피울 때가 있는데 얼마 전에는 담배꽂이를 제대로 끄지 않고 자다가 큰 불이 날 뻔 했습니다.



무엇보다도 당신은 A의 건강이 걱정됩니다. 요즘 자주 기침을 하고 있는데 당신은 담배를 너무 많이 피워서 그런 것 같다는 생각이 들었습니다.



A는 지금까지 당신에게 몇 번이나 담배를 끊겠다고 약속을 했지만 전혀 지키지 않고 있습니다.

당신은 이번에는 정말로 담배를 끊어줬으면 좋겠다고 생각하고 있습니다.



#### 부탁드립니다

★ 지금의 당신의 이러한 상황을 하나씩 친구에게 잘 설명해주세요. 그리고 반드시 담배를 끊을 수 있도록, 강하게 설득해주세요.

★ 처음은 「ちょっと話があるんだけど」(저기 할말이 있는데)로 시작해주세요.

★ 또 친구와의 대화이기 때문에 です・ます체가 아니라 보통체(반말)로 이야기해주세요.

### 【資料 2】 第 3 章の調査で用いた韓国語의 롤카드 (場面②)

#### 부탁드립니다

당신은 직장상사와 오사카로 1박 2일 동안 출장을 가게 되었습니다. 출장전 상사는 당신에게 출장 일정에 대해 보고하라고 하였습니다.

오늘 당신은 상사에게 자신이 세운 출장 일정표에 대해서 보고합니다. 다음 일정표를 참고로 해서 상사에게 오사카출장의 일정에 대해 시간 순대로 프레젠테이션을 해 주세요.

#### 첫째 날(9월20일 토요일)

9:00 인천공항 집합, 비행기 체크인  
11:00 칸사이 공항 도착  
12:00 오사카 신사바시에서 점심식사  
14:00 호텔로 이동, 우메다호텔 체크인  
16:00 거래쳐 A사 방문 및 미팅  
20:00 A사 스키사장과 저녁 식사  
21:00 호텔로 귀가

#### 둘째 날(9월21일 일요일)

9:00 호텔로비 집합  
9:30 오사카에서 신칸센으로 히로시마로 이동  
11:00 거래쳐 B사 공장 방문, 점심식사  
15:00 히로시마에서 오사카로 이동  
16:00 거래쳐 C사 방문 및 미팅  
19:00 칸사이 공항으로 이동  
21:00 인천공항 도착

**【資料3】 第3章の調査協力者別の類型別数と平均(M)および標準偏差(SD)**

資料3-1 KL 場面①日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	合計	M	SD
昇降調	45	21	7	16	24	26	33	34	3	35	244	24.40	13.12
ゆすり調	1	11	5	1	29	1	31	5	27	21	132	13.20	12.49
連続的上昇調	0	2	3	1	14	12	2	4	0	5	43	4.30	4.88
段状上昇調	1	4	0	0	1	8	2	0	0	0	16	1.60	2.59
遅れ上昇調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
自然下降調	29	55	25	22	53	41	30	35	25	15	330	33.00	13.12
弱伸ばし下降調	22	10	10	22	6	6	25	14	7	7	129	12.90	7.42
平らな引き伸ばし調	2	2	0	2	2	3	0	3	0	4	18	1.80	1.40
合計	100	105	50	64	129	97	123	95	62	87	912	91.20	25.96

資料3-2 KL 場面①韓国語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	合計	M	SD
昇降調	0	3	0	1	6	1	1	0	0	2	14	1.40	1.90
ゆすり調	32	37	16	9	29	22	26	9	20	17	217	21.70	9.38
連続的上昇調	0	5	1	0	0	0	0	0	0	1	7	0.70	1.57
段状上昇調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
遅れ上昇調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
自然下降調	3	19	9	1	6	28	4	8	25	4	107	10.70	9.71
弱伸ばし下降調	3	1	0	2	0	0	2	0	0	0	8	0.80	1.14
平らな引き伸ばし調	0	1	1	0	3	1	0	1	1	0	8	0.80	0.92
合計	38	66	27	13	44	52	33	18	46	24	361	36.10	16.37



資料 3-3 KL 場面②日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	合計	M	SD
昇降調	32	21	6	20	18	13	10	31	22	29	202	20.20	8.82
ゆすり調	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.10	0.32
連続的上昇調	0	12	3	1	22	14	15	9	7	8	91	9.10	6.87
段状上昇調	0	5	0	0	7	8	3	0	3	0	26	2.60	3.13
遅れ上昇調	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0.20	0.63
自然下降調	16	26	7	14	9	14	28	36	9	5	164	16.40	10.28
弱伸ばし下降調	4	1	7	2	1	2	5	2	0	6	30	3.00	2.36
平らな引き伸ばし調	1	0	7	0	5	4	0	2	1	3	23	2.30	2.41
合計	53	66	30	37	64	55	61	80	42	51	539	53.90	14.87

資料 3-4 KL 場面②韓国語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	合計	M	SD
昇降調	1	3	5	2	5	4	1	4	5	12	42	4.20	3.16
ゆすり調	10	5	0	0	2	5	3	0	2	1	28	2.80	3.16
連続的上昇調	0	8	8	4	19	4	5	10	3	6	67	6.70	5.19
段状上昇調	1	1	0	0	5	0	0	0	0	0	7	0.70	1.57
遅れ上昇調	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4	0.40	1.26
自然下降調	0	9	5	3	0	7	3	6	3	2	38	3.80	2.94
弱伸ばし下降調	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0.20	0.42
平らな引き伸ばし調	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	3	0.30	0.48
合計	13	26	19	10	31	20	13	20	18	21	191	19.10	6.26

資料 3-5 NS 場面①日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差

類型	NS1	NS2	NS3	NS4	NS5	NS6	NS7	NS8	NS9	NS10	合計	M	SD
昇降調	28	18	24	16	16	17	22	23	18	29	211	21.10	4.84
ゆすり調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
連続的上昇調	3	1	0	3	2	6	2	0	1	1	19	1.90	1.79
段状上昇調	0	1	2	1	0	2	1	0	0	0	7	0.70	0.82
遅れ上昇調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
自然下降調	23	41	28	19	19	24	23	27	17	56	277	27.70	12.03
弱伸ばし下降調	0	2	0	1	2	0	0	0	2	1	8	0.80	0.92
平らな引き伸ばし調	1	2	2	1	3	1	0	0	1	7	18	1.80	2.04
合計	55	65	56	41	42	50	48	50	39	94	540	54.00	16.10

資料 3-6 NS 場面②日本語における調査協力者別の類型別数と平均および標準偏差

類型	NS1	NS2	NS3	NS4	NS5	NS6	NS7	NS8	NS9	NS10	合計	M	SD
昇降調	1	0	1	2	1	1	6	16	3	9	40	4.00	5.06
ゆすり調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
連続的上昇調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
段状上昇調	16	14	5	9	7	11	14	14	7	21	118	11.80	4.92
遅れ上昇調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
自然下降調	12	40	31	19	4	21	23	29	14	26	219	21.90	10.38
弱伸ばし下降調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.10	0.32
平らな引き伸ばし調	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
合計	29	54	37	30	12	33	43	59	24	57	378	37.80	15.37